

JILPT 資料シリーズ

No. 251 2022年3月

職業レディネス・テストの 改訂に関する研究Ⅱ

—高等教育課程在学者の進路選択に関連した特性の理解—



独立行政法人 労働政策研究・研修機構
The Japan Institute for Labour Policy and Training

職業レディネス・テストの改訂に関する研究Ⅱ

—高等教育課程在学者の進路選択に関連した特性の理解—

独立行政法人 労働政策研究・研修機構

The Japan Institute for Labour Policy and Training

まえがき

本書は2020年に刊行された資料シリーズNo.230「職業レディネス・テストの改訂に関する研究—大学生等の就職支援のための尺度の開発—」において報告されている研究に続いて実施された調査結果を分析し、とりまとめたものである。

上記の資料シリーズにおいては、職業レディネス・テストの改訂を機に、大学生等の若年層を対象として、職業レディネス・テストでは捉えられていない働くことに関わる価値観や基礎的な性格特性、生活特性等が測定できるような新テストの開発の試みとその結果が報告された。本書では、新規に作成された各尺度を用いて、高等教育課程の在学者を対象として新たな調査を行い、2019年実施の調査結果との整合性、職業レディネス・テストとの関連性および尺度毎の信頼性、妥当性を再確認するとともに、尺度得点を用いた専攻学科による特徴や職業選択の考え方との関連性などが検討されている。そして、本研究で報告される内容は、新しいテストがこれまでの職業レディネス・テストでは把握されなかった別の特性を明らかにできる尺度で構成されていること、加えて、測定に関する信頼性や妥当性も保証されたものとして作成されていることを裏付ける結果となっている。

このように、本書で検討され、説明されていることはデータに基づいたテストの測定結果に即した内容が中心ではあるが、得られた結果を吟味していくことによって、高等教育課程の在学者が考える仕事に対する価値観や就労に関連する基礎的な性格特性、生活特性等の特徴を理解する手がかりも得ることができる。

新しく開発されたテストが今後公表されるにあたって、本書に記した内容がテスト利用者の方の理解を深める上で少しでも有益な情報となれば幸いである。

2022年3月

独立行政法人 労働政策研究・研修機構
理事長 樋口 美雄

執筆担当者（執筆順）

氏名	所属		執筆章
室山 晴美	労働政策研究・研修機構	特任研究員	第1～5章、第8～9章、終章
深町 珠由	労働政策研究・研修機構	主任研究員	第6章
秋山 史子	学習院大学	助教	第7章
安達 智子	大阪教育大学	教授	第10章
小菅 清香	学習院大学人文科学研究所	客員所員	第11章

研究会委員（執筆者以外）

氏名	所属		
本間 啓二	日本体育大学	教授	
田中 歩	労働政策研究・研修機構	統括研究員	
鎌倉 哲史	労働政策研究・研修機構	研究員	
石井 悠紀子	労働政策研究・研修機構	アシスタント・フェロー	
松原 亜矢子	労働政策研究・研修機構	元統括研究員（2021年4月まで）	

※上記の所属は2022年3月時点のもの

目 次

第1章 研究の背景と目的	1
1. 本研究の背景	1
2. 本研究の目的	2
3. 本書の構成と各章の概要	3
第2章 調査の目的と方法および回答者の属性についての基礎集計	6
1. 調査の目的	6
2. 方法	6
3. 回答者の属性についての基礎集計	8
4. まとめ	14
第I部 尺度の構造に関する基本分析	17
第3章 職業レディネス・テストの下位検査の構造に関する検討	19
1. 職業レディネス・テストの構成と内容	19
2. A検査とC検査の構造の妥当性・信頼性についての検討	21
3. B検査の構造の妥当性・信頼性についての検討	28
4. まとめ	33
第4章 職業レディネス・テストの3つの検査における平均値の検討	35
1. A検査とC検査における各領域の平均値	35
2. B検査の各志向性の平均値	40
3. 2013年公表の高等教育課程の在学者および高等学校在学生の平均値の参照	42
4. まとめ	46
第5章 仕事選び基準尺度の構造に関する検討	48
1. はじめに	48
2. 「仕事選び基準尺度」について	48
3. 自己成長尺度の検討	49
4. 社会貢献尺度の検討	50
5. 地位尺度の検討	51
6. 経済性尺度の検討	52
7. 仕事と生活のバランス尺度の検討	53
8. 主体的進路選択尺度の検討	54

9. まとめ	55
第6章 基礎的性格特性尺度の構造に関する検討	58
1. 「基礎的性格特性尺度」について	58
2. 気持ちの切り替え尺度の検討	58
3. 外界への積極性尺度の検討	59
4. 信頼性係数の検討と全体のまとめ	61
第7章 基礎的生活特性尺度の構造に関する検討	63
1. 基礎的生活特性尺度	63
2. 社会生活への心構え尺度の検討	63
3. 日常生活チェックリストの検討	66
4. まとめ	69
第8章 新規尺度に対する高等教育課程の在学者と若年在職者の平均値の水準の 検討	70
1. はじめに	70
2. 在職者を対象としたWEB調査データ（2021）を用いた分析	71
3. 「2019年調査」における在職者データを用いた新規尺度、各特性の平均値	77
4. 在職者データセットと在学者データセットによる平均値の比較	79
5. 大学生に対する紙筆検査により得られた回答傾向に関する検討	82
6. まとめ	87
第II部 尺度得点と諸特性との関連性の検討	89
第9章 新規尺度の特性間および新規尺度特性と職業レディネス・テストの下位検査 との関連性	91
1. 目的	91
2. 方法	91
3. 結果	92
4. まとめ	100
第10章 在学者の専攻と各特性との関連性	101
1. はじめに	101
2. A検査とC検査における各領域の平均値	102
3. B検査の各志向性の平均値	108

4. 新規尺度における各領域の平均値	109
5. 新規尺度と職業レディネス・テストの下位検査との関係	112
6. まとめ	115
第 11 章 職業選択の考え方と各特性との関連性	117
1. 目的	117
2. 方法	117
3. 回答者の属性についての基礎集計	118
4. 結果	122
5. まとめ	132
終章	134
1. 本研究で確認できたこと	134
2. 本研究で明らかになった問題点	136
3. 今後の課題	137
参 考 資 料	139
「働くことの特性に関する調査」(高等教育課程在学者調査) 調査票	141

第1章 研究の背景と目的

1. 本研究の背景

職業レディネス・テストは、主に中学生、高校生の職業意識の発達、準備の程度を総合的な視点で捉えるための心理検査として、1972年に公表されて以来、2回の改訂を経て今日に至っている。現在、活用されている第3版は2006年に公表されたものであり、それ以降、年月が経過したので、この度、改訂に関する研究を進めているところである。

その一環として、本検査はこれまでは中学生、高校生への適用を中心に進めてきたが、大学生等の高等教育課程に在学する学生や30代前半程度の若年の求職者に対しても適用ができないかという点が検討され、現行版に組み込まれている3つの下位検査のほかに、新たな尺度を組み込む方向での研究が進められた。その結果、高等教育課程の在学者等に対しては、仕事を選ぶ時の基準や考え方を測る尺度および就職後の職場や仕事への適応をみるという観点から基礎的な性格特性や生活態度のような特性を測る尺度を組み込むこととし、新しい尺度を作るためのデータ収集のための調査が実施された（これを「2019年調査」とする）。その経緯と結果については、当機構から資料シリーズとして発行された「職業レディネス・テストの改訂に関する研究—大学生等の就職支援のための尺度の開発—」（労働政策研究・研修機構,2020）にまとめられているが、本稿は、この調査結果に続くものとして位置づけられるため、最初に「2019年調査」で得られた結果を簡単に紹介しておきたい。

「2019年調査」では、職業レディネス・テストの現行版の検査項目のほかに、新たに追加する尺度作成のための項目として、働くことに関する考え方や基本的態度を調べるための項目、日常生活での行動・感じ方に関する特性を測るための項目、日常生活での基本的な生活態度を調べるための項目などを組み込んで調査票が作成され、WEBモニター調査でデータ収集が行われた。

調査の対象者は18歳から34歳の男女であり、回答者の学歴条件としては高等学校卒業以上とし、18歳から20歳、21歳から25歳、26歳から30歳、31歳から34歳という4つの年齢グループを作り、男女各300名の回答を集めた。この回答のうち、高等学校卒業以上という条件を満たしていない7名を除いた2393名（男性1198名、女性1195名）の回答を分析の対象とした。

調査の目的は新たな尺度作成のための項目分析を行い、信頼性の高い尺度を作成することであったが、それとあわせて職業レディネス・テストを高等教育課程の在学者や30代前半の若年者層に実施した時の回答傾向や、新たに作成した尺度に対する回答傾向についても検討された。その際に、男女別や在学者、在職者別に各尺度に対する平均値が算出されたが、全体として性別による違いはそれほど見られない一方で、いくつかの尺度によっては在学、在職の違いにより平均値に差が見られることがわかった。しかしながら、データの構成をみる

と、男女の数はほぼ同数で揃っているものの、「2019 年調査」ではデータ収集の条件として在学者、在職者の人数の割当てを行っていなかったことから、データに含まれる在学者は 492 名、在職者は 1330 人となり、在職者に比べて在学者が少なくなっていた。

尺度を作成し、その結果を解釈する時には、それぞれの属性に関する平均的な傾向がどの程度の水準であるかを示しておく必要がある。尺度構成にあたっては在学か在職かに関わらず、一つの基準で尺度をみていくことを想定していたが、もしも在学か在職かの条件により回答傾向が異なるとすれば基準を別々に考えなければならない。その一方で、回答傾向にみられた平均値の違いがサンプルサイズによる歪みを反映しているのであれば、基準を別々に考える必要はないことになる。そこで、その点を明らかにするために、本稿では「2019 年調査」とほぼ同じ項目を用いて、18 歳から 34 歳までの若年の高等教育課程在学者に限定したデータを集め、職業レディネス・テストおよび新たに作成された尺度における在学者のデータの回答傾向を分析、検討することとした。

以上が本研究の直接的な背景であるが、これに加えて本書をまとめるにあたってのもう一つの意図として、テストの開発に伴うテスト・スタンダードの考え方が背景にあることについても触れておきたい。

一般に、新しいテストを開発する過程では、テストを構成する各下位尺度について様々な観点からテストとしての適切さを検証する必要がある。そして、テスト開発や利用に関する基本的な留意点や一定の基準を示したテスト・スタンダードという考え方に照らせば (American Psychological Association, 2020 ; 日本テスト学会, 2007)、テストの開発過程および信頼性、妥当性に関する資料を公開することは、テストの開発者に求められる条項となっている。職業レディネス・テストの改訂に関する研究の一環として開発された新しいテストについての開発方法や検証のプロセスについても、それに関する資料をまとめて公表しておくことは、テスト・スタンダードの基準に従えば開発担当者に課せられる一つの責務であると考えられる。このような背景も踏まえて、本書および 2020 年に公表された資料シリーズは、新しいテスト開発に関する基礎資料としてまとめられている。

2. 本研究の目的

本研究の目的は、第 1 に、高等教育課程の在学者のデータを集め、「2019 年調査」によって得られた各尺度の在学者の平均値がサンプルサイズに影響を受けている可能性があるかどうかをみることである。

この手続きとしては、最初に新しく得られたデータによって各尺度の信頼性が保証されているかどうかを確認し、その後、各尺度の平均値を算出して、「2019 年調査」における在学者の回答傾向と比較する。2つの回答結果に大きな違いがみられなかった場合には、在学者

のデータをまとめて在職者のデータの平均値と比較し、傾向の違いをみることができるようになるが、その点も含めて検討する。

また、第2の目的として、職業レディネス・テストおよび新たに作成された尺度を用いて、高等教育課程の在学者における回答傾向の特徴を明らかにし、得られた結果を解釈する際に参照する基準を作成する。

さらに第3の目的として、調査では同じ対象者に複数の下位尺度に対して回答してもらっており、調査票には回答者の属性や職業選択に関する項目も含まれているので、尺度間の関連性や回答者の属性・職業意識等のその他の変数との関連についても検討したい。

職業レディネス・テストの既存尺度と新規尺度の特性間の関連については、「2019年調査」においても、全回答者のデータを用いて分析を行っており、職業レディネス・テストのA検査（職業興味）とC検査（職務遂行の自信度）のうち、職業興味領域の社会的領域（S）と企業的領域（E）が新規尺度のいくつかの特性と正の有意な相関を示す結果が得られた。また、B検査（基礎的志向性）の対情報志向（D）と対人志向（P）についても、新規尺度の多くの下位尺度と有意な正の相関が示されている。このような傾向が在学者に限定した「2020年調査」で集めた回答結果においても確認されるかどうかを検討したい。また、新規尺度や職業レディネス・テストの有効活用を考え、回答者の属性や職業意識等の変数との関連についても検討し、職業レディネス・テストとともに新規尺度を実施した時に総合的にどのような解釈ができるかを示す資料を提示することが本研究の目的である。

3. 本書の構成と各章の概要

本書は第1章から終章までの全12章で構成されている。

第1章では上記の通り、研究の背景、目的等が述べられている。すなわち、本書で扱う内容は職業レディネス・テストに追加する高等教育課程の在学者や若年求職者のための新規尺度の開発のために2019年に実施された調査に続くものであり、「2019年調査」でサンプルサイズが少なかった在学者のデータを補完するために実施された「2020年調査」の分析結果の報告である。あわせて、「2019年調査」を経て作成された新規尺度を用いて高等教育課程在学者の特性を把握するとともに他の変数との関連性についても検討することが目的とされている。

第2章では、「2020年調査」について具体的な調査方法、回答者の属性に関する基礎的な集計結果が述べられており、2つの調査の回答者の属性に関して比較した結果、居住地や専門分野に関しては2つの調査間で大きな傾向の違いはみられない事が確認された。ただし、男女別の年齢構成比に関して、「2019年調査」の方が「2020年調査」に比べて18-20歳の若年者の割合が多めであり、とくに高等教育課程での1年生と2年生の割合が2019年調査で多いことが示されている。

続く第3章から第8章までは、「第Ⅰ部 尺度の構造に関する基本分析」として大きなまとまりとした。ここでは、職業レディネス・テストの各検査および高等教育課程在学者等を対象として新規に開発した新しい尺度の信頼性や得られた平均値などに関する基本的な分析結果が報告される。

第3章と第4章では職業レディネス・テストを構成するA検査、B検査、C検査に関する分析結果が述べられている。第3章では各検査の尺度構成が「2020年調査」の回答者のデータでも維持されているかどうかを確認される。第4章では職業レディネス・テストの各検査によって測定された回答者の職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度の平均値が示される。結果として「2019年調査」と「2020年調査」を比べた時、全体の平均値の高さは「2020年調査」の方が全般に高いが、個々の特性に対する回答傾向は2つの調査で類似していることが確認された。他方、この傾向は従来の紙筆検査で収集された高等教育課程の在学者とは異なっており、WEBモニターという対象者の特徴が職業興味や職務遂行の自信度に反映されている可能性が示唆されている。

第5章、第6章、第7章では、「2019年調査」で作成された新規尺度である「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」の信頼性が、「2020年調査」のデータによっても再確認できるかどうか各章で個別に検討される。その結果、作成された新規尺度は「2020年調査」でも「2019年調査」と同様の高い信頼性を示すことが見いだされた。

第Ⅰ部の最後となる第8章では、新規尺度によって測定された高等教育課程の在学者の平均値と若年在職者の平均値、紙筆検査によって収集された大学生の平均値など複数のデータセットによる回答傾向が比較される。この章の目的は、新規尺度を構成する各下位尺度の標準的な得点水準を推測することであり、複数のデータセットによる平均値の比較の結果、「2020年調査」の在学者のデータセットから得られた平均値が基準として妥当であるという結論に到っている。

ここまでの第Ⅰ部に続き、第9章から第11章では「第Ⅱ部 尺度得点と諸特性との関連性の検討」として尺度間の関係や調査において集めた他の変数との関連が検討される。

第9章では、新規尺度により測定される特性間の関連性および新規尺度と職業レディネス・テストの下位尺度との関連性が検討される。この結果、新規に開発された「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」により測定される特性は、職業レディネス・テストが測定している職業興味や職務遂行の自信度とは関連が弱く、新規尺度を職業レディネス・テストに追加して補完的に実施することの意義が確認されている。

第10章では、在学者の所属学科の分野（理系・文系などの系と専攻・専門）により職業レディネス・テストの下位検査の既存尺度と新規尺度で測定される得点傾向がどのように異なるかが検証される。分析の結果、職業レディネス・テストの既存尺度の得点傾向は、在学者が大学で学ぶ専攻や専門を反映していることが改めて確認された。また新規尺度については「仕事選び基準尺度」の一部の尺度で系による差異が見られたが、「基礎的性格特性」と「基

礎的生活特性」については所属学科との関連性は見られなかった。

第 11 章については、調査において特性を測定するための尺度の他に回答してもらった希望する業種、職種、働き方、これまでの進路選択に関わる評価などの複数の変数と尺度得点との関連性が検討された。「仕事選び基準尺度」や「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」の得点がこれまでの進路選択や仕事選択についての自己評価（困難さ、適切さ、満足度）と関連していたのに対し、職業レディネス・テストの下位検査に関してはその関連がほとんどみられなかったことから、この章においても若年者の就職支援に向けて職業レディネス・テストに加えて新規尺度を実施する意味が確認されたといえる。

以上が本書を構成する 11 個の章の概要であるが、最後の終章においては、本書で得られた結果について研究の目的と照らして検討された後、総合的なまとめが 3 つの観点から述べられる。第 1 点は、職業レディネス・テストの改訂の研究として「2019 年調査」で作成された新規尺度の信頼性や内容的な妥当性が「2020 年調査」のデータでも確認されたこと、第 2 点は、新規尺度が職業レディネス・テストでは測定されていない新たな要素を捉える上で有効であること、第 3 点はこの資料で集められたデータは新規尺度の標準的な得点水準の検討や結果の解釈のための資料として活用できるということである。その上で、新規尺度の実用化をめざして、残されている今後の課題が提示されている。

引用文献

American Psychological Association (2020). APA Guidelines for Psychological assessment and evaluation. APA task force on psychological assessment and evaluation guidelines.

日本テスト学会 (2007). 「テスト・スタンダード ―日本のテストの将来に向けて―」 金子書房.

労働政策研究・研修機構 (2020). 「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 ―大学生等の就職支援のための尺度の開発―」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第2章 調査の目的と方法および回答者の属性についての基礎集計

1. 調査の目的

2020年に実施された調査は、「2019年調査」での在学者データのサンプルサイズの不足を補い、各尺度に対する回答傾向が「2019年調査」で示された結果と同じ傾向となるかどうかを確認するために実施された。以下、「2019年調査」との比較を行う場合には、2020年に実施された調査を「2020年調査」とする。

「2020年調査」の第一の目的は、「2019年調査」での在学者のデータの回答傾向が人数を増やしたデータでも確認できるかをみることである。そして第二の目的は、高等教育課程の在学者を対象として、職業レディネス・テストおよび新規に作成された「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」のそれぞれの回答および尺度間の相互の関連性を検討し、検査結果の解釈につなげるための基準となる資料を得ることである。

なお、各尺度の基準を作成するときには、基盤となるデータのサンプルサイズは大きい方がより安定した結果が得られる。そのような点から見ると、2つの調査データについては、可能であれば両方をあわせて分析できることが望ましいが、これらの調査は1年間の間隔をあけて別々に実施されたものであるため、データの構成などについての検討が必要となる。そこで本章では、回答者の属性に関して「2020年調査」の集計結果を示すとともに「2019年調査」における在学者のデータの属性に関する集計結果を示し、2つの調査の回答者の属性に関する特徴の一致について検討する。

2. 方法

(1) 調査対象者

「2020年調査」の調査対象者は18歳から34歳の男女各600名、合計1200名とした。なお、この調査は高等教育課程の在学者のみに限定してデータを収集するため、調査に参加できるのは大学院、四年制大学、短期大学、高等専門学校、専門学校に在学中の者という条件をつけた。加えて、2019年2月中旬に行った「2019年調査」への回答者は予め調査対象から除外した¹。

(2) 調査時期と方法

2020年2月～3月に調査会社のWEBモニターのうち、対象者に該当する者に調査票画面を配信してもらい、回答を収集した。調査項目の多くは3段階あるいは5段階の評定尺度の

¹ 「2019年調査」と同じ調査会社による実施であったため、「2019年調査」の調査対象者は予め調査票の配信先から除外してもらった。

形式をとっているため、すべての項目に同一の反応を示す回答、極端に回答時間が短いものなど回答の信頼性に疑いがもたれるサンプルについてはデータに含めないという条件とした。

(3) 調査項目の構成と内容

調査項目の内訳を図表 2-1 に示す。

「2020 年調査」の調査項目は「2019 年調査」とほぼ同じとしたが、違っているのは新規尺度の項目数が尺度確定に伴い、減少している点である。すなわち、「2019 年調査」では、新規尺度を作成するという目的のため新しい尺度の中に多数の項目を組み込んだが、「2020 年調査」ではそれぞれの尺度の項目数が固まったので、その項目数で調査を実施した。

図表 2-1 調査項目の内訳

構成	設問区分	内 容		項目数	
回答者のフェイスシート	1	I 回答者についての設問 (8 項目)		15	
		II 仕事や働き方についての設問 (7 項目)			
働くことの特性に関する設問	2	職業レディネス・テスト	既存	職業興味 (54 項目)	172
				基礎的志向性 (64 項目)	
				職務遂行の自信度 (54 項目)	
	3	働くことに関する考え方、基本的態度 (仕事選び基準尺度)	作成	社会貢献 (8 項目)	48
				自己成長 (8 項目)	
経済性 (8 項目)					
地位 (8 項目)					
仕事と生活のバランス (8 項目)					
4	日常生活での行動、感じ方に関する特性 (基礎的性格特性・生活特性・自尊感情・基本的生活態度)	作成	気持ちの切り替え (8 項目)	44	
			外界への積極性 (8 項目)		
			社会生活への心構え (8 項目)		
	既存	自尊感情尺度 (10 項目)			
	作成	日常生活チェックリスト (10 項目)			
5	キャリア・インサイト	既存	価値観評価 (25 項目)	79	
			能力評価 (54 項目)		
計				358	

※「既存」は既に公表されている尺度を用いたもの、「作成」は尺度構成のために本研究において作成された項目を示す。

たとえば、「2019 年調査」では「仕事選び基準尺度」として 94 項目を用いたが、「2020 年調査」時点では 6 つの下位尺度が完成しており、それぞれの項目数は 8 項目としたので項目数は全部で 48 項目である。同様に、「基礎的性格特性尺度」は 2 つの下位尺度で構成されるため、各 8 項目で計 16 項目、「基礎的生活特性尺度」は 1 尺度構成としたので 8 項目とした。また、「基礎的生活特性尺度」の一部は尺度とはせずに「日常生活チェックリスト」として 10 項目にし、これについては 3 段階評価にすることとした。このほか、「2019 年調査」で組み込まれている「キャリア・インサイト」の価値観評価と能力評価の項目および「自尊感情尺度」(Rosenberg,1965 ; 山本・松井・山成,1982) の項目はそのまま用いた。

なお、回答者のフェイスシート項目には「回答者についての設問」と「仕事や働き方についての設問」が用意されている。「回答者についての設問」は、属性に関する基礎集計のところで内容を示す。「仕事や働き方についての設問」は、「2019年調査」と同じものであり、7項目が用意されている。すなわち①今後就きたいと希望する職業のタイプ、②希望する業種、③希望する主な職種、④今後希望する働き方のパターン、⑤就職活動や仕事探し場面で困難さを感じた程度、⑥過去の進路選択や仕事選択についての適切さの認識、⑦過去の進路選択や仕事選択に対する満足度である。

3. 回答者の属性についての基礎集計

回答者自身については、年齢、性別、居住地、現在学生であるかどうか（否定の場合には調査終了）、今までに正社員・正規職員として働いた経験の有無とある場合の期間、現在の所属先、学年、専攻・専門分野をフェイスシート項目として尋ねた。

（1）就業経験の有無と分析対象者の絞り込み

「2020年調査」では在学者という特性で条件を絞っているため、最初に就業経験への回答をみることにした。「今までに正社員・正規職員として働いた経験」については、「ない」という回答が男性で576名、女性で585名であった。「ある」という回答の場合には、期間として「6か月未満」、「6か月以上1年未満」、「1年以上3年未満」、「3年以上5年未満」、「5年以上」を選択してもらったが、男性では、期間が短い順に8名、4名、7名、3名、2名の計24名、女性では順に6名、1名、6名、1名、1名の計15名が該当した。正社員としての就業経験がある者は、一度社会人として働いた後に学校へ戻ったかあるいは社会人学生として働きながら在学している可能性がある。回答ではその部分が区別できないため、今回の分析対象としては、正社員・正規職員として働いた経験がない者に限定することとした。したがって、分析に用いるデータは男性576名、女性585名の計1161名になった。

他方、「2019年調査」においては、既に在職者と在学者を合わせたデータによる分析結果を公表しているが、そこでは現在の状況を「学生」として回答した者を在学者とし、492名を対象として各尺度の平均値を算出した（労働政策研究・研修機構,2020）。ただ、「2020年調査」では、正社員としての就業経験がない者という条件を加えたため、「2019年調査」の在学者のうち正社員としての就業経験をもつ者の有無を調べたところ、492名中の男性2名がそれに該当した。そこで、今回は「2020年調査」の在学者と条件を揃えるため、「2019年調査」の在学者から正社員経験のある男性2名を除外し、新たに490名で分析をやり直すこととした。このようなことから、2020年に既刊の資料における各尺度の「在学者」の平均値と本書で示す平均値には若干のずれが生じているがそれは上記の理由によるものである。

(2) 年齢と性別

「2019年調査」では、18歳～34歳までを4つの年齢段階に分け、それぞれ男女300名ずつのデータを集めたが、「2020年調査」では年齢段階の区分と男女の構成割合については条件をつけなかった。そこで、年齢段階ごとの男女別の人数を図表2-2に示す。「2019年調査」については、全データのうち、調査時点で在学者であり、かつ正社員・正規職員として働いた経験がない者のサンプルを取り出して、年齢段階と男女でクロス集計した結果である。

「2020年調査」のデータでは31から34歳の年齢段階にはサンプルが含まれず、年齢段階は3つとなった。18～20歳は516名でやや女性の割合が多かった。21～25歳は全体で598名となり年齢区分では最も多かった。男女別構成比はやや女性が多かったが、18～20歳と同じような割合となった。26～30歳は全体で47名と少なく、男性が36名、女性が11名で男性の割合が多くなっていた。

なお、「2019年調査」の年齢段階別、男女別の構成比をみると、「2019年調査」の在学者では年齢段階で18歳から20歳が多くなっている。男女の構成比は全体としてみるとわずかに男性の割合が女性よりも多くなっている。

図表 2-2 各年齢段階における男女の人数(n)と割合(%)

年齢段階		2020年調査				2019年調査			
		18歳-20歳	21歳-25歳	26歳-30歳	合計	18歳-20歳	21歳-25歳	26歳-30歳	合計
男性	n	251	289	36	576	165	85	4	254
	%	48.6	48.3	76.6	49.6	50.5	53.5	66.7	51.8
女性	n	265	309	11	585	162	72	2	236
	%	51.4	51.7	23.4	50.4	49.5	45.3	33.3	48.2
合計	n	516	598	47	1161	327	157	6	490
	%	44.4	51.5	4.1	100	66.7	32.0	1.2	100

(3) 居住地域

データ収集の際、居住地域については特に限定せず、47都道府県を示して該当するものを選択してもらった。全国を北海道・東北、関東（東京除く）、東京、東海・中部・北陸、近畿、中国・四国、九州・沖縄の7つのブロックに分け、回答者の性別と年齢段階ごとに各ブロックの回答者割合を算出した。結果を図表2-3に示す。一番右の欄には、「2019年調査」のサンプルのうち在学者のデータ(490名分)を取り出して居住ブロック別構成を算出した結果を参考として示した。

男女、年齢段階を区別せず合計でみると、最も多かったのが関東（東京除く）で25.7%であった。次に近畿(20.9%)東京(15.7%)、東海・中部・北陸(13.5%)、北海道・東北(10.5%)、九州・沖縄(7.3%)、中国・四国(6.4%)となった。東京を含む関東近辺の居住者が全体の約4割を占めている。なお、「2019年調査」の在学者の居住地の割合はこれと同順位であり、

構成比も同程度であった。

図表 2-3 男女別年齢段階別にみた回答者の居住地(人数：n、割合%)

地域ブロック		男性			女性			合計	2019調査 (参考)
		18-20歳	21-25歳	26-30歳	18-20歳	21-25歳	26-30歳		
北海道・東北	n	24	25	7	34	31	1	122	49
	%	9.6	8.7	19.4	12.8	10.0	9.1	10.5	10.0
関東（東京除く）	n	66	75	9	71	73	4	298	130
	%	26.3	26.0	25.0	26.8	23.6	36.4	25.7	26.5
東京	n	34	47	5	42	51	3	182	78
	%	13.5	16.3	13.9	15.8	16.5	27.3	15.7	15.9
東海・中部・北陸	n	41	36	4	36	39	1	157	64
	%	16.3	12.5	11.1	13.6	12.6	9.1	13.5	13.1
近畿	n	43	62	9	59	68	2	243	96
	%	17.1	21.5	25.0	22.3	22.0	18.2	20.9	19.6
中国・四国	n	21	21	1	13	18	0	74	30
	%	8.4	7.3	2.8	4.9	5.8	0.0	6.4	6.1
九州・沖縄	n	22	23	1	10	29	0	85	33
	%	8.8	8.0	2.8	3.8	9.4	0.0	7.3	6.7
合計	n	251	289	36	265	309	11	1161	490

(4) 現在の所属先と学年

現在、所属している学校種と学年を回答してもらった結果を図表 2-4 に示す。

学校種で見ると男女ともに大学（四年制大学）が最も多く男性で 467 名（81.1%）、女性で 499 名（85.3%）となった。男女合わせると大学の在学者は 966 名（83.2%）である。大学の在学者のうち、20%以上となったのは、男性では 1 年と 4 年、女性では 1 年生、3 年生、4 年生となったが、1 年生から 4 年生までそれほど大きな偏りはなく、どの学年もおよそ 2 割前後となっている。

その他の学校種をみると、専門学校が男女ともに 40 人前後で、合わせると 78 名（6.7%）となった。次に大学院博士前期課程の在学者が 69 名（5.9%）であったが、男性が 50 名、女性が 19 名で男性が多く、これは博士後期課程も同様であった。大学院の在学者を博士前期課程、後期課程で合わせると男性が 63 名、女性が 24 名、合計 87 名となる。短期大学は女性 19 名、男性 5 名で女性の割合が多く、男女あわせた 24 名中 1 年生が 16 名であった。高等専門学校は最も少なく男性 5 名、女性 1 名の計 6 名だった。

男女あわせた表の学校計で学年構成をみると、1 年生が 334 名（28.8%）、2 年生が 289 名（24.9%）、4 年生が 259 名（22.3%）、3 年生が 237 名（20.4%）の順であった。そのほかの学年は少なかった。

なお、参考として、「2019年調査」の在学者のみのデータに絞って、男女計で所属先の学校種と学年をクロス集計した結果を図表2-5に示す。「2019年調査」においても大学生の割合が最も多く81.4%を占めた。ただ、学年をみると、全体として1年生と2年生がそれぞれ3割台で他よりも多くなっていた。「2020年調査」に比べて「2019年調査」での年齢段階と男女別のクロス集計において18-20歳代が多かったことを反映した結果となっている。

図表2-4 「2020年調査」の所属先と学年別の人数(n)と割合(%)

所属先		男性							男性計	女性						女性計
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1-6以外		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
大学	n	124	111	95	123	8	4	2	467	134	95	117	132	12	9	499
	%	21.5	19.3	16.5	21.4	1.4	0.7	0.3	81.1	22.9	16.2	20.0	22.6	2.1	1.5	85.3
短期大学	n	4	1	0	0	0	0	0	5	12	7	0	0	0	0	19
	%	0.7	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.9	2.1	1.2	0.0	0.0	0.0	0.0	3.3
専門学校	n	14	15	4	1	0	0	2	36	19	11	12	0	0	0	42
	%	2.4	2.6	0.7	0.2	0.0	0.0	0.3	6.3	3.3	1.9	2.1	0.0	0.0	0.0	7.2
高等専門学校	n	0	0	0	3	2	0	0	5	0	0	0	0	1	0	1
	%	0.0	0.0	0.0	0.5	0.3	0.0	0.0	0.9	0	0	0	0	0.2	0	0.2
大学院博士前期課程	n	20	29	1	0	0	0	0	50	4	14	1	0	0	0	19
	%	3.5	5.0	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	8.7	0.7	2.4	0.2	0.0	0.0	0.0	3.3
大学院博士後期課程	n	2	4	5	0	1	1	0	13	1	2	2	0	0	0	5
	%	0.3	0.7	0.9	0.0	0.2	0.2	0.0	2.3	0.2	0.3	0.3	0.0	0.0	0.0	0.9
学校計	n	164	160	105	127	11	5	4	576	170	129	132	132	13	9	585
	%	28.5	27.8	18.2	22.0	1.9	0.9	0.7	100.0	29.1	22.1	22.6	22.6	2.2	1.5	100.0

※男子、女子、男女計の人数に対して20%以上の数値を太字とした。

所属先		男女計							合計
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	1-6以外	
大学	n	258	206	212	255	20	13	2	966
	%	22.2	17.7	18.3	22.0	1.7	1.1	0.2	83.2
短期大学	n	16	8	0	0	0	0	0	24
	%	1.4	0.7	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	2.1
専門学校	n	33	26	16	1	0	0	2	78
	%	2.8	2.2	1.4	0.1	0.0	0.0	0.2	6.7
高等専門学校	n	0	0	0	3	3	0	0	6
	%	0	0	0	0.3	0.3	0	0	0.5
大学院博士前期課程	n	24	43	2	0	0	0	0	69
	%	2.1	3.7	0.2	0	0	0	0	5.9
大学院博士後期課程	n	3	6	7	0	1	1	0	18
	%	0.3	0.5	0.6	0.0	0.1	0.1	0.0	1.6
学校計	n	334	289	237	259	24	14	4	1161
	%	28.8	24.9	20.4	22.3	2.1	1.2	0.3	100.0

※男子、女子、男女計の人数に対して20%以上の数値を太字とした。

図表 2-5 「2019年調査」在学者の学校種別各学年の人数(n)と割合(%)

所属先		男女計						合計
		1年	2年	3年	4年	5年	6年	
大学	n	146	121	66	60	2	4	399
	%	29.8	24.7	13.5	12.2	0.4	0.8	81.4
短期大学	n	13	7	0	1	0	0	21
	%	2.7	1.4	0.0	0.2	0.0	0.0	4.3
専門学校	n	18	20	7	0	0	0	45
	%	3.7	4.1	1.4	0.0	0.0	0.0	9.2
高等専門学校	n	0	0	0	3	2	0	5
	%	0.0	0.0	0.0	0.6	0.4	0.0	1.0
大学院博士 前期課程	n	0	12	0	0	0	1	13
	%	0.0	2.4	0.0	0.0	0.0	0.2	2.7
大学院博士 後期課程	n	1	4	1	1	0	0	7
	%	0.2	0.8	0.2	0.2	0.0	0.0	1.4
学校計	n	178	164	74	65	4	5	490
	%	36.3	33.5	15.1	13.3	0.8	1.0	100.0

※男子、女子、男女計の人数に対して20%以上の数値を太字とした。

(5) 専攻・専門分野

1) 大学、短期大学、高等専門学校、大学院在学者の専攻・専門分野

「大学」「短期大学」「高等専門学校」「大学院博士前期課程」「大学院博士後期課程」の在学者については、共通の専攻・専門分野で回答してもらったので、学校種ごとに一つの表にまとめて専攻別に合計人数と割合を集計した(図表 2-6)。「専門学校」については、専攻・専門分野の選択肢として別のものを用意したため集計を分けているので合計は専門学校を除く人数となっている。

大学の専攻・専門分野をみると、社会科学が最も多く(25.2%)、次が保健(15.1%)、工学(14.9%)、人文科学(12.4%)、その他(10.8%)と続く。そのほかの理学、教育、芸術、農学、家政は10%未満であった。

一方で大学院をみると博士前期課程では、工学(34.8%)、理学(24.6%)、保健(13.0%)が多くなっており理系の専攻の割合が高い。博士後期課程では理学が最も多かった(33.3%)。

学校種をあわせてみると(学校計)、専攻者が多いのは社会科学(23.3%)、工学(16.7%)、保健(14.7%)、人文科学(11.9%)、その他(10.3%)、理学(8.4%)、教育(6.4%)、芸術(4.2%)、農学(2.8%)、家政(1.4%)の順になっている。

図表 2-6 「2020 年調査」の専攻・専門分野別の人数 (n) と割合 (%)

専攻、専門分野		人文科学	社会科学	理学	工学	農学	保健	家政	教育	芸術	その他	合計
大学	n	120	243	68	144	26	146	13	61	41	104	966
	%	12.4	25.2	7.0	14.9	2.7	15.1	1.4	6.3	4.2	10.8	89.2
短期大学	n	3	1	0	5	0	3	1	5	1	5	24
	%	12.5	4.2	0.0	20.8	0.0	12.5	4.2	20.8	4.2	20.8	2.2
高等専門学校	n	0	0	0	5	0	0	0	0	0	1	6
	%	0.0	0.0	0.0	83.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	16.7	0.6
大学院博士 前期課程	n	4	5	17	24	3	9	1	3	2	1	69
	%	5.8	7.3	24.6	34.8	4.4	13.0	1.5	4.4	2.9	1.5	6.4
大学院博士 後期課程	n	2	3	6	3	1	1	0	0	1	1	18
	%	11.1	16.7	33.3	16.7	5.6	5.6	0.0	0.0	5.6	5.6	1.7
学校計	n	129	252	91	181	30	159	15	69	45	112	1083
	%	11.9	23.3	8.4	16.7	2.8	14.7	1.4	6.4	4.2	10.3	100.0

※これ以外の専攻として「商船」を用意したが該当者がいなかったため集計からはずしている。

なお、「2019 年調査」で在学者のみのデータで専攻・専門分野を集計した結果を図表 2-7 に示す。学校計をみると社会科学(25.4%)、工学(18.0%)、保健(11.5%)、人文科学(10.1%)、理学(9.4%)、その他(8.3%)、教育(7.9%)等となっている。社会科学と人文科学までの順位は「2020 年調査」と「2019 年調査」では同じとなっており、全体として在学者の専攻・専門分野の構成比は両調査であまり変わらないといえる。

図表 2-7 「2019 年調査」在学者の専攻・専門分野別の人数 (n) と割合 (%)

専攻、専門分野		人文科学	社会科学	理学	工学	農学	保健	家政	教育	芸術	その他	合計
大学	n	43	105	34	70	17	50	6	30	11	33	399
	%	10.8	26.3	8.5	17.5	4.3	12.5	1.5	7.5	2.8	8.3	89.7
短期大学	n	1	4	1	2	0	0	3	5	3	2	21
	%	4.8	19.0	4.8	9.5	0.0	0.0	14.3	23.8	14.3	9.5	4.7
高等専門学校	n	0	0	1	4	0	0	0	0	0	0	5
	%	0.0	0.0	20.0	80.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	1.1
大学院博士 前期課程	n	1	2	5	3	0	0	0	0	0	2	13
	%	7.7	15.4	38.5	23.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	15.4	2.9
大学院博士 後期課程	n	0	2	1	1	1	1	0	0	1	0	7
	%	0.0	28.6	14.3	14.3	14.3	14.3	0.0	0.0	14.3	0.0	1.6
学校計	n	45	113	42	80	18	51	9	35	15	37	445
	%	10.1	25.4	9.4	18.0	4.0	11.5	2.0	7.9	3.4	8.3	100.0

※これ以外の専攻として「商船」を用意したが該当者がいなかったため集計からはずしている。

2) 専門学校在学者の専攻・専門分野

専門学校在学者の専攻・専門分野について集計した結果を図表 2-8 に示す。

図表 2-8 専門学校在学者の専門・専攻分野別の人数 (n) と割合 (%)

専攻、専門分野		工業関係	農業関係	医療関係	衛生関係	教育・社会	商業実務関	服飾・家政	文化・教養	各種学校の	合計
		(測量、土木・建築、電気・電子、無線・通信、自動車整備、機械、電子計算機、情報処理、その他)	(農業、園芸、その他)	(看護、歯科衛生、歯科技工、臨床検査、診療放射線、はり・きゅう・あんま、柔道整復、理学・作業療法、その他)	(栄養、調理、理容、美容、製菓・製パン、その他)	福祉関係(保育士養成、教員養成、介護福祉、社会福祉、その他)	係(商業、経理・簿記、タイピスト、秘書、経営、旅行、情報、ビジネス、その他)	関係(家政、家庭、和洋裁、料理、編物・手芸、ファッションビジネス、その他)	関係(音楽、美術、デザイン、茶華道、外国語、演劇・映画、写真、通訳・ガイド、受験・補習、動物、法律行政、スポーツ、その他)	のみにある課程(予備校、学習・補習、自動車操縦、外国人学校、その他)	
2020年調査	n	13	1	24	3	1	8	2	16	10	78
	%	16.7	1.3	30.8	3.9	1.3	10.3	2.6	20.5	12.8	100
2019年調査	n	9	1	13	4	4	3	2	7	2	45
	%	20.0	2.2	28.9	8.9	8.9	6.7	4.4	15.6	4.4	100

※10%以上の数値を太字表示

専門学校の在学者 78 名のうち、もっとも多かったのが医療関係の在学者で 24 名 (30.8%) であった。次が文化・教養関係で 16 名 (20.5%)、その次が工業関係 13 名 (16.7%)、各種学校のみにある課程 10 名 (12.8%)、商業実務関係 8 名 (10.3%) と続いた。それ以外の分野は 3 名以下と少数であった。なお「2019 年調査」の在学者のみで専門分野を集計した結果を同じ表の「2020 年調査」の下の欄に示している。専門学校在学者 45 名のうち、医療関係が最も高く 28.9% であった。次に工業関係が 20.0%、文化・教養関係が 15.6% であった。

「2020 年調査」と「2019 年調査」を比べてみると、医療関係、工業関係、文化・教養関係の割合が全体として高めのところは共通している。ただ、割合の数値には専門・専攻分野で若干の変化があり、「2020 年調査」は「2019 年調査」に比べて工業関係、衛生関係、教育・社会福祉関係の割合が低めになっており、一方で、文化・教養関係、商業実務関係と各種学校のみにある課程の割合が高くなっている。

4. まとめ

以上、回答者の属性に関する集計結果を示した。この後の分析で、「2019 年調査」のデータと「2020 年調査」のデータを合わせたり、数値を比較したりして分析することも想定されるため、「2019 年調査」のうち在学者のデータに絞って 2020 年度と同じように属性を集計した。その結果、居住地や専門分野に関しては 2 つの調査間で大きな傾向の違いはみられなかったと考える。

一方で、男女別の年齢構成比に関しては、「2019 年調査」において 18~20 歳の若年者の割合が「2020 年調査」に比べて若干多くなっており、それは高等教育課程での 1 年生と 2 年生の割合が「2019 年調査」の方が多いことにも示されている。「2019 年調査」は在学者に限定

せずに就業者も含めて 30 代前半までのデータを集めたので、21 歳以降の年齢段階において相対的に在学者のデータが少なくなった結果とみることができる。

なお、「2019 年調査」の在学者データ数は「2020 年調査」の半分ほどであり、2 つの年度を足し合わせた各年齢段階男女別のデータ数は、男性の場合、18～20 歳が 416 名、21～25 歳が 374 名、26～30 歳が 40 名となり、女性の場合は順に 427 名、381 名、13 名となった。26～30 歳で男性の割合が女性よりも多いが、これは大学院在学者に男性が多いことを反映しているものであり、データの約 8 割を占める大学の学部学生の 20 代半ばまでの男女別構成比としてはバランスがとれているとみられる。

以上、本章で検討した回答者の属性に関しては「2019 年調査」と「2020 年調査」の 2 つのデータセット間で特に大きな違いはみられなかったといえる。本章に続く各章の分析において「2020 年調査」データにおける尺度の構造の妥当性や信頼性が確認できれば、各尺度の平均値の傾向を 2 つの調査のデータセット間で比較することは可能であろう。また、必要に応じて 2 つのデータセットを合わせて得点などを算出することも可能かもしれないが、それについてもこの後の分析結果をみて判断することになるだろう。

引用文献

- 労働政策研究・研修機構 (2020). 「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 —大学生等の就職支援のための尺度の開発—」 JILPT 資料シリーズ No.230.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

第 I 部 尺度の構造に関する基本分析

第3章 職業レディネス・テストの下位検査の構造に関する検討

第3章では、職業レディネス・テストと諸変数との関連の検討に先立って、検査の概要を説明し、この検査を高等教育課程の在学者に実施した時の検査の妥当性や信頼性について調査データを用いて検討した結果を述べる²。

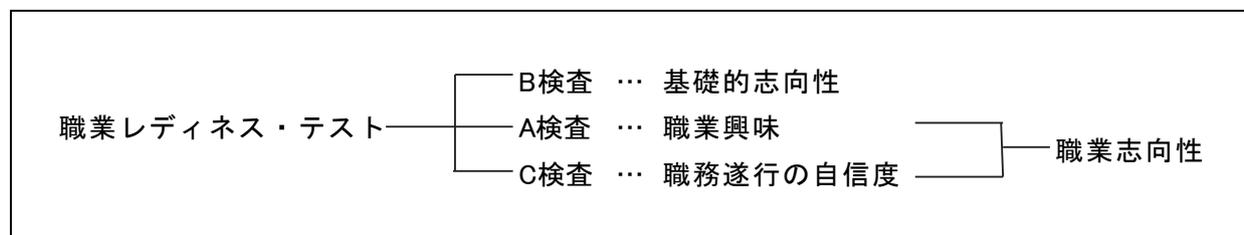
1. 職業レディネス・テストの構成と内容

(1) 全体の構成

職業レディネス・テストは3つの下位検査から構成されている(図表3-1)。A検査とC検査は職業志向性を測定する検査で、A検査、C検査ともに検査項目は同一の54項目であり、職務内容の記述となっている。各項目が示している職務内容についてA検査ではそれについてやってみたいかどうかを回答し(職業興味)、C検査ではそれについてうまくやる自信があるかどうかを回答する(職務遂行の自信度)。

B検査は基礎的志向性を測定する下位検査である。A検査とC検査が職業に関する記述であるのに対して、B検査には日常生活の行動や態度の傾向について尋ねる内容の64項目が用意されている。

図表3-1 職業レディネス・テストの構成



(2) A検査とC検査の構造

A検査とC検査はHolland,J.L.の理論に基づく6つの職業領域に対応する項目で構成されている。6つの領域の名称と内容を図表3-2に示す。A検査とC検査には54項目があるが、それぞれ6つの職業領域に該当する9項目をもっている。各領域に対する興味や自信度はそれぞれの9項目への回答により測定される。

A検査の場合、職業興味を測るので「やりたい」、「どちらともいえない」、「やりたくない」のいずれかで回答してもらうが、「やりたい」の場合には2点、「どちらともいえない」は1点、「やりたくない」は0点として採点する。9項目あるので各領域の得点の範囲は0点から

² 職業レディネス・テストの目的、開発経緯、実施手順等の詳細は「職業レディネス・テスト第3版手引」を参照されたい(労働政策研究・研修機構,2006)。

18点の間となる。

C検査の場合、職務遂行の自信度として「自信がある」、「どちらともいえない」、「自信がない」で回答してもらい、それぞれ2点～0点で採点するので、得点の範囲はA検査と同じく18点から0点の間となる。

職業レディネス・テストでは、各領域の合計点を求めた後、換算表を用いて各領域のパーセンタイル値との照合を行い、職業興味と職務遂行の自信度についてのプロフィールを作成する。換算表は中学生用と高校生以上用の2つがあり、換算基準は男女別に作られている。

図表 3-2 6つの職業領域の内容

各職業領域の名称	内 容
現実的領域 (R領域)	機械や物を対象とする具体的で実際的な仕事や活動の領域
研究的領域 (I領域)	研究や調査のような研究的、探索的な仕事や活動の領域
芸術的領域 (A領域)	音楽、美術、文学等を対象とするような仕事や活動の領域
社会的領域 (S領域)	人と接したり、人に奉仕したりする仕事や活動の領域
企業的領域 (E領域)	企画・立案したり、組織の運営や経営等の仕事や活動の領域
慣習的領域 (C領域)	定まった方式や規則、習慣を重視したり、それに従って行うような仕事や活動の領域

(3) B検査の構造

B検査は、対情報関係志向（以下、対情報志向あるいはD志向と表記）、対人関係志向（以下、対人志向あるいはP志向と表記）、対物関係志向（以下、対物志向あるいはT志向と表記）の3つの基礎的志向性を測定する（図表 3-3）。D志向とP志向にはそれぞれ24項目、T志向には18項目ある。どの項目にも「あてはまる」か「あてはまらない」かの2件法で回答する。「あてはまる」場合には1点、「あてはまらない」場合には0点で採点するためD志向とP志向の得点の範囲は24～0点、T志向は18～0点となる。得点の換算はD志向、P志向、T志向の各粗点の合計点を用いて、A検査、C検査と同じように換算表を用いて行ない、プロフィールを作成する。

図表 3-3 3つの基礎的志向性の内容

基礎的志向性の名称	内 容
対情報関係志向 (D志向)	各種の知識、情報、概念などを取り扱うことに対して、個人の諸特性が方向づけられていることを示す。
対人関係志向 (P志向)	主として人に直接関わっていくような活動に対して、個人の諸特性が方向づけられていることを示す。
対物関係志向 (T志向)	直接、機械や道具、装置などのいわゆる物を取り扱うことに対して、個人の諸特性が方向づけられていることを示す。

なお、換算の際は各志向性の粗点を合計した値を用いるが、詳しく結果を解釈したい場合には、各志向性の下位尺度の粗点によりそれぞれの特徴を検討することができる。3つの志

向性は複数の下位尺度で構成されており、D 志向には「D1:情報を集める」、「D2:好奇心を満たす」、「D3:情報を活用する」という3つの尺度があり、P 志向には「P1:自分を表現する」、「P2:みんなと行動する」、「P3:人の役にたつ」という3尺度、T 志向には「T1:物をつくる」、「T2:自然に親しむ」という2つの尺度がある（各8項目で構成）。「結果の見方・生かし方」というワークシートには、これらの下位尺度別に粗点を用いて表を作成し、それぞれの特徴を見ていくワークが用意されている。

2. A 検査と C 検査の構造の妥当性・信頼性についての検討

はじめに、職業レディネス・テストの下位検査の構造が高等教育課程の在学者を用いた調査データでも確認できるかを検討した。「2019年調査」と「2020年調査」のデータを結合しても差し支えないかという点の確認の目的もあり、各調査年のデータを用いて下位検査の構造を調べた。まずは職業志向性を調べるA検査とC検査の尺度の構造について検討した。データ数は「2019年調査」が男女計で490件、「2020年調査」が1161件である。

(1) A 検査の構造の妥当性と信頼性の検討

① 「2019年調査」データによる因子構造と信頼性の検討

A検査（職業興味）の54項目では6つの領域に関して各9項目で測定するが、それぞれの項目が想定通りの領域に分かれるかを探索的因子分析により検討した。各調査年のデータについて、それぞれ主因子解を求めた後、6因子を指定して Promax 法で回転させた。最初に「2019年調査」のデータを用いた結果を図表3-4に示す。表の一番左の欄から順に、職業レディネス・テストでの項目番号、本来の想定領域、項目内容、因子1から因子6までの因子負荷量となっている。

因子ごとにまとまった項目の領域名をみると、因子1にはA領域、因子2にはI領域、因子3にはC領域、因子4にはR領域、因子5にはS領域、因子6にはE領域の項目が多く集まった³。この中で、NO.29の「世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く」という新聞記者の職務を記述した項目については、本来想定されていた領域の因子6（E領域）とは異なり、因子1（A領域）の項目とまとまった。なお、NO.29の因子負荷量の値をみると因子1と同程度に因子6でも高くなっている。

³ 興味領域と職務遂行の自信度における6領域の表記については、因子分析の図表の領域名に対応させてR領域、I領域、A領域、S領域、E領域、C領域とする。

図表 3-4 A検査の因子分析の結果(2019年調査データ)

NO	領域	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
21	A	テレビドラマや映画のシナリオを書く	.749	.020	-.046	-.053	-.047	.085
51	A	雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	.703	.013	-.016	.133	.087	-.105
9	A	小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.680	.097	-.020	-.040	-.085	.000
27	A	マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.646	.004	.022	.163	.045	-.149
15	A	人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	.627	.019	.008	-.030	.077	.109
45	A	洋服やアクセサリーのデザインをする	.592	-.061	-.081	.084	.100	.066
33	A	インターネットのホームページのデザインをする	.544	-.060	.146	.132	-.140	.130
3	A	家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	.532	.005	-.062	.171	.020	-.013
39	A	曲を作ったり、編曲したりする	.462	.117	-.010	.162	.036	.055
29	E	世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.378	.045	.023	-.033	.103	.381
32	I	病原体を発見するための実験や研究をする	-.027	.852	-.052	-.106	.171	-.082
50	I	大学や研究所で、科学の研究をする	.009	.771	-.029	-.017	-.098	.118
38	I	新しい薬を開発する	-.093	.732	-.052	.057	.135	.061
20	I	海水の成分や海流について調査研究する	.087	.719	.039	.012	.007	.041
8	I	環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	-.028	.704	.113	.013	.036	.018
14	I	農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.056	.659	-.021	.154	.006	-.008
26	I	新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	-.016	.628	.026	.128	-.160	.234
2	I	古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.394	.531	.004	.006	-.088	-.184
44	I	博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.420	.493	.068	-.163	-.049	.042
18	C	文字や数字を、書類に正確に記入する	.048	-.034	.833	-.028	.028	-.150
36	C	ワープロやパソコンを使って、書類などを清書する	.144	-.011	.789	-.070	-.026	-.133
12	C	帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	-.123	.037	.776	.037	.059	-.048
6	C	文字や数字を、コンピュータに入力する	.008	-.008	.741	.040	-.055	-.122
54	C	従業員の毎月の給料を計算する	-.112	.034	.716	.017	-.018	.088
24	C	銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	-.084	-.003	.575	.069	.108	.182
30	C	依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.060	.081	.555	-.103	.128	.193
48	C	会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	.029	-.088	.551	-.015	.115	.204
42	C	コンピュータを使って、複雑な計算をする	-.139	.202	.418	.288	-.178	.110
37	R	自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	-.006	.056	.006	.750	.008	.026
25	R	工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.044	-.091	-.059	.721	.081	.153
13	R	木材を加工し、組み立てて、家を建てる	.181	.064	-.058	.687	-.106	-.004
43	R	飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	-.068	.159	.030	.628	.060	.090
31	R	トラックを運転して貨物を運ぶ	.069	-.150	.036	.622	.106	.020
1	R	部品を組み立てて機械を作る	.175	.143	.181	.571	-.144	-.231
19	R	火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	.047	.089	-.063	.423	.287	.074
49	R	船に乗って、魚や貝などの漁をする	.111	.131	-.054	.385	.076	.213
7	R	火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.202	.247	-.008	.311	.094	-.031
28	S	患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	-.138	.178	-.013	.066	.805	-.085
34	S	家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.010	.018	-.034	.081	.754	-.057
40	S	病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	-.150	.432	-.042	-.040	.685	-.097
4	S	保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	.054	-.161	.018	.096	.650	-.141
46	S	悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.087	.068	.076	-.096	.542	.048
22	S	ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	.115	-.158	.180	-.108	.447	.215
10	S	客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	.176	-.052	.026	.111	.430	.168
52	S	飛行機の中で、乗客にサービスをする	.097	-.116	.063	.063	.396	.345
16	S	ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	.208	-.106	.027	-.072	.387	.280
23	E	新しい組織を作ってリーダーになる	-.080	.105	-.057	.021	-.124	.804
41	E	社長として、会社の経営の仕事にあたる	-.114	.041	-.022	.163	-.122	.758
53	E	流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	.166	.075	.083	-.009	.000	.557
47	E	店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	.066	.046	.117	.140	.066	.555
5	E	自分の店を経営する	.030	.008	-.075	.143	.023	.509
17	E	客を集めるため、広告や催し物などを企画する	.421	.020	-.029	-.217	.042	.474
11	E	テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	.365	-.002	-.037	-.099	-.001	.419
35	E	ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	.242	-.037	-.082	-.031	.157	.396

因子間相関

	因子1(A)	因子2(I)	因子3(C)	因子4(R)	因子5(S)	因子6(E)
因子1(A)	1					
因子2(I)	.318	1				
因子3(C)	.228	.272	1			
因子4(R)	.307	.509	.273	1		
因子5(S)	.334	.177	.209	.178	1	
因子6(E)	.479	.312	.291	.279	.447	1

※.30以上の値を太字。

新聞記者の項目が職業興味に関して、もともと想定されている E 領域ではなく A 領域の因子に負荷量が高くなることは、高校生の回答を分析した別のデータでも確認されており、この項目については反応がやや不安定な傾向があることは過去にも確認されている（室山,2018）。ただ、自信度に関する因子分析では新聞記者の項目は想定通り E 領域の因子への負荷量が高くなっていたので特に差し替えは検討されていなかった。

このように 1 項目のみ、本来の想定領域とは異なる領域の項目とまとまったが、各項目の因子負荷量をみると最も小さいものでも.30 以上となった。また、因子間相関をみても、Holland の理論において特性として反対の傾向があるとされている A 領域と C 領域および R 領域と S 領域の因子間相関は他の領域間の関連性と比べて弱くなっており、納得できる結果となった。

さらに、各領域に含まれる本来の 9 項目で信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出した結果、R 領域では.87、I 領域では.91、A 領域では.88、S 領域では.85、E 領域では.87、C 領域では.89 となり、全体として.85～.91 の高い値が得られた。

②「2020 年調査」データによる因子構造と信頼性の検討

同様の分析を「2020 年調査」のデータについても行った。A 検査の 54 項目を用いた回転後の因子負荷量を図表 3-5 に示す。各因子に負荷量の高かった項目のまとまりをみると、因子 1 には I 領域の 9 項目が集まった。因子 2 には A 領域の 9 項目がまとまり、加えて「2019 年調査」と同様に、本来は E 領域の NO.29 もこの因子に含まれた。続いて、因子 3 には C 領域、因子 4 には R 領域、因子 5 には S 領域、因子 6 には NO.29 を除く E 領域の 8 項目が集まった。

また、領域ごとに含まれる本来の 9 項目で信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出した結果、R 領域では.88、I 領域では.90、A 領域では.87、S 領域では.82、E 領域では.85、C 領域では.88 となり、全体として.82～.90 の高い値が得られた。以上のことから「2020 年調査」のデータにおいても A 検査の尺度としての信頼性は確認されたとみることができる。

このように A 検査（職業興味）の因子構造の検討において、「2019 年調査」のデータでは E 領域に該当する 1 項目を除いてすべての項目が想定通りの領域に因子として抽出され、「2020 年調査」でも同様の結果となった。ただ、各領域に該当する 9 項目の信頼性係数は高かったため、どちらの調査のデータにおいても職業レディネス・テストの A 検査の妥当性と信頼性については満足できる水準に保たれていると解釈した。したがって A 検査については高等教育課程の在学者に実施した場合でも、6 つの興味領域の特徴を適切に測定しているともみることができるだろう。

図表 3-5 A検査の因子分析の結果(2020年調査データ)

NO	領域	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
32	I	病原体を発見するための実験や研究をする	.838	-.061	-.007	-.047	.144	-.022
38	I	新しい薬を開発する	.763	-.052	-.012	-.048	.115	.088
50	I	大学や研究所で、科学の研究をする	.752	.023	-.010	-.015	-.063	.071
20	I	海水の成分や海流について調査研究する	.697	.076	.064	.103	.029	-.033
26	I	新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.657	-.017	.033	-.010	-.201	.279
14	I	農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.594	.060	.038	.197	.019	.014
8	I	環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.554	.024	.139	.155	.020	-.022
2	I	古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.485	.310	-.001	.099	-.009	-.125
44	I	博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.464	.342	.070	-.011	.027	-.044
9	A	小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.155	.737	-.078	-.066	-.087	-.011
27	A	マンガをかくて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.110	.705	-.049	.083	-.025	-.118
51	A	雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	-.007	.697	.005	.119	.065	-.133
21	A	テレビドラマや映画のシナリオを書く	.152	.681	-.096	-.119	-.011	.160
45	A	洋服やアクセサリのデザインをする	-.124	.606	-.035	.009	.221	-.013
15	A	人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	-.011	.603	.064	.005	.113	.016
39	A	曲を作ったり、編曲したりする	.129	.583	-.064	.015	-.055	.082
3	A	家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	-.131	.554	-.017	.102	.057	.030
33	A	インターネットのホームページのデザインをする	-.025	.524	.176	.093	-.120	.118
29	E	世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.108	.366	.038	-.056	.113	.276
18	C	文字や数字を、書類に正確に記入する	.038	-.010	.834	-.083	-.014	-.152
36	C	ワープロやパソコンを使って、書類などを清書する	.024	.114	.791	-.049	-.068	-.105
6	C	文字や数字を、コンピュータに入力する	.013	.076	.746	.029	-.175	-.137
12	C	帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	.048	-.139	.743	.021	-.006	.012
54	C	従業員の毎月の給料を計算する	-.009	-.080	.705	.034	.115	.076
48	C	会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	-.042	-.005	.567	-.043	.231	.093
30	C	依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.088	.015	.556	-.025	.177	.044
24	C	銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	.017	-.102	.487	.071	.183	.142
42	C	コンピュータを使って、複雑な計算をする	.325	-.097	.372	.199	-.232	.175
25	R	工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.045	-.075	-.022	.785	.056	.055
37	R	自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	.147	-.027	-.020	.704	-.072	.031
31	R	トラックを運転して貨物を運ぶ	-.059	.013	-.006	.696	.114	-.034
13	R	木材を加工し、組み立てて、家を建てる	.067	.118	-.001	.627	-.021	.005
43	R	飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	.207	-.103	.005	.595	.038	.120
1	R	部品を組み立てて機械を作る	.078	.129	.180	.532	-.133	-.180
19	R	火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	.149	-.041	-.132	.464	.241	.124
49	R	船に乗って、魚や貝などの漁をする	.247	.091	-.087	.418	.144	.063
7	R	火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.276	.105	-.027	.415	.008	-.003
28	S	患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	.331	-.103	-.010	-.045	.737	-.181
34	S	家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.144	.023	-.001	.070	.649	-.132
40	S	病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	.525	-.154	-.074	-.053	.593	-.083
46	S	悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.044	.124	.044	-.119	.554	.034
4	S	保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	-.086	.076	-.087	.048	.550	-.053
52	S	飛行機の中で、乗客にサービスをする	-.094	.017	.113	.125	.509	.179
22	S	ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	-.242	.072	.151	.071	.494	.161
16	S	ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	-.282	.135	.081	.046	.418	.232
10	S	客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	.060	.117	.034	.087	.404	-.016
41	E	社長として、会社の経営の仕事にあたる	.100	-.062	-.041	.077	-.165	.791
23	E	新しい組織を作ったりリーダーになる	.138	-.061	-.086	-.022	-.048	.722
5	E	自分の店を経営する	.035	.077	-.148	.046	-.062	.600
47	E	店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	.019	.019	.056	.130	.036	.600
53	E	流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	.053	.163	.157	.003	.045	.510
11	E	テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	-.012	.376	-.013	-.110	.063	.435
17	E	客を集めるため、広告や催し物などを企画する	-.124	.345	.096	-.166	.166	.422
35	E	ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	-.012	.307	-.015	-.037	.144	.371

因子間相関

	因子1 (I)	因子2 (A)	因子3 (C)	因子4 (R)	因子5 (S)	因子6 (E)
因子1 (I)	1					
因子2 (A)	.168	1				
因子3 (C)	.209	.203	1			
因子4 (R)	.519	.279	.366	1		
因子5 (S)	.117	.307	.175	.225	1	
因子6 (E)	.172	.418	.283	.357	.358	1

※.30以上の値を太字。

(2) C検査の構造の妥当性と信頼性の検討

①「2019年調査」データによる因子構造と信頼性の検討

C検査では、職業興味を測定するA検査と同一の54項目を用いて職務遂行の自信度が測定される。C検査についてもA検査と同様に各項目への回答からC検査の因子構造が保たれているかを探索的因子分析により検討した。「2019年調査」のC検査の回答結果を用いて主因子解を求めたのち6因子を指定してPromax回転を行なった。各因子負荷量を図表3-6に示す。

想定した領域の項目がどの因子にまとまっているかをみていくと因子1には、I領域、因子2にはA領域、因子3にはC領域、因子4にはE領域、因子5にはR領域、因子6にはS領域の項目の負荷量が高かった。それぞれの因子に想定通りの9項目が集まった。なお、「2019年調査」のデータではA検査（職業興味）において、NO.29の項目がE領域ではなくA領域の因子にまとまったが、C検査（職務遂行の自信度）については本来の想定通りのE領域の因子として抽出された。

各領域に含まれる本来の9項目で信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出した結果、R領域では.90、I領域では.93、A領域では.89、S領域では.87、E領域では.90、C領域では.90となり、全体として.87～.93の高い値が得られた。

②「2020年調査」データによる因子構造と信頼性の検討

次に同じ分析を「2020年調査」のデータを用いて実施した。探索的因子分析による回転後の各項目の因子負荷量を図表3-7に示す。C検査の職務遂行の自信度に関しては、各領域とも想定通りの9項目が6つの因子に分かれた。因子1はI領域、因子2はA領域、因子3はC領域、因子4はE領域、因子5はR領域、因子6はS領域として解釈できた。この並び順は、「2019年調査」で得られた因子構造と同じである。また、NO.29の項目も本来のE領域の因子にまとまった。

6領域を測定するそれぞれの9項目ごとに信頼性係数（クロンバックの α 係数）を算出したところ、R領域では.90、I領域では.93、A領域では.88、S領域では.85、E領域では.89、C領域では.90となった。全体として.85～.93の高い値が得られ、C検査に関しても尺度としての構造および信頼性の高さが確認できた。

以上、A検査とC検査の職業志向性を調べる54項目について、「2019年調査」と「2020年調査」のデータを用いて構造を検討した。この結果、A検査（職業興味）において、E領域に該当する1項目がA領域に対しても負荷量が高かったが、C検査（職務遂行の自信度）では想定通りの領域の因子に分類された。また、本来の想定領域で算出した各領域の信頼性係数も十分に高い数値が得られた。そこで、高等教育課程在学者による2つの調査データでは、職業レディネス・テストのA検査、C検査の本来の下位検査の構造が保証される回答が得られており、これらの下位検査の6領域、各9項目の尺度構成により平均値等を算出しても差し支えないことが確認できた。

図表 3-6 C検査の因子分析の結果 (2019年調査データ)

N0	領域	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
32	I	病原体を発見するための実験や研究をする	.866	-.070	-.017	-.041	-.013	.115
20	I	海水の成分や海流について調査研究する	.850	-.037	-.001	.055	-.022	-.007
8	I	環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.843	-.033	.066	-.024	-.033	-.034
50	I	大学や研究所で、科学の研究をする	.790	-.035	.004	.017	.028	.033
14	I	農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.786	.029	-.018	-.073	.061	.022
2	I	古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.699	.249	-.005	-.108	-.046	-.072
38	I	新しい薬を開発する	.690	-.038	-.086	.054	.105	.123
26	I	新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.615	.008	.062	.204	.082	-.110
44	I	博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.518	.219	.076	.088	-.078	-.058
51	A	雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	-.032	.748	-.024	-.037	.026	.046
21	A	テレビドラマや映画のシナリオを書く	.057	.715	-.053	.104	.035	-.016
9	A	小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.073	.694	.038	-.001	.067	-.083
27	A	マンガをかくて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	-.035	.671	-.041	-.078	.155	.062
45	A	洋服やアクセサリのデザインをする	-.063	.651	-.017	.036	.030	.166
3	A	家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	.019	.650	-.070	-.056	.088	.032
15	A	人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	.036	.584	.051	.120	-.082	.052
33	A	インターネットのホームページのデザインをする	.028	.542	.161	.184	-.026	-.130
39	A	曲を作ったり、編曲したりする	.085	.525	.010	.080	.067	.043
18	C	文字や数字を、書類に正確に記入する	-.059	.061	.893	-.129	-.059	.045
6	C	文字や数字を、コンピュータに入力する	-.055	.148	.856	-.151	-.037	-.105
36	C	ワープロやパソコンを使って、書類などを清書する	-.013	.106	.813	-.162	.003	-.062
12	C	帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	.032	-.089	.793	-.059	.071	.050
54	C	従業員の毎月の給料を計算する	.118	-.163	.672	.166	.048	.004
24	C	銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	-.007	-.152	.604	.169	.077	.115
30	C	依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.017	-.002	.562	.213	-.046	.078
42	C	コンピュータを使って、複雑な計算をする	.146	-.019	.527	.060	.209	-.140
48	C	会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	.047	-.013	.458	.246	-.012	.161
41	E	社長として、会社の経営の仕事にあたる	.046	-.095	-.053	.834	.151	-.118
23	E	新しい組織を作ってリーダーになる	-.004	-.092	-.108	.825	.048	-.015
47	E	店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	.083	.046	.076	.679	.053	-.038
53	E	流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	.106	.130	.016	.650	-.046	-.015
5	E	自分の店を経営する	-.046	.158	-.068	.620	.074	-.048
17	E	客を集めるため、広告や催し物などを企画する	-.005	.280	.036	.519	-.129	.107
11	E	テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	-.038	.373	.013	.462	-.078	.041
35	E	ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	-.008	.228	-.095	.455	-.021	.167
29	E	世の中できごともいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.143	.327	.052	.391	-.021	.025
25	R	工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	-.094	-.019	-.026	.126	.831	-.026
31	R	トラックを運転して貨物を運ぶ	-.153	-.012	.077	.016	.751	.086
37	R	自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	.138	-.020	.032	.030	.749	-.087
13	R	木材を加工し、組み立てて、家を建てる	.108	.160	-.074	-.047	.690	-.066
1	R	部品を組み立てて機械を作る	.120	.142	.082	-.186	.577	-.033
43	R	飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	.212	-.026	.084	.079	.569	.032
19	R	火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	-.028	.040	-.017	.098	.483	.291
7	R	火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.270	.082	.013	.012	.480	.066
49	R	船に乗って、魚や貝などの漁をする	.184	.154	-.045	.103	.356	.103
28	S	患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	.194	.013	-.053	-.156	.024	.801
34	S	家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.000	-.055	.014	-.058	.106	.799
40	S	病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	.317	-.069	.002	-.058	.007	.639
4	S	保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	-.140	.066	-.058	-.052	.032	.612
46	S	悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	.058	.057	.043	.200	-.162	.551
10	S	客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	-.016	.136	.021	.086	.024	.515
22	S	ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	-.176	.038	.201	.361	-.052	.428
16	S	ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	-.157	.039	.041	.395	.022	.386
52	S	飛行機の中で、乗客にサービスをする	.009	.127	.017	.392	-.061	.373

因子間相関

	因子1 (I)	因子2 (A)	因子3 (C)	因子4 (E)	因子5 (R)	因子6 (S)
因子1 (I)	1					
因子2 (A)	.387	1				
因子3 (C)	.370	.176	1			
因子4 (E)	.422	.520	.406	1		
因子5 (R)	.565	.377	.261	.358	1	
因子6 (S)	.308	.384	.222	.525	.226	1

※.30以上の値を太字。

図表 3-7 C検査の因子分析の結果（2020年調査データ）

NO	領域	項目内容	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
32	I	病原体を発見するための実験や研究をする	.832	-.058	-.024	-.022	.025	.104
20	I	海水の成分や海流について調査研究する	.816	-.009	.048	.038	.004	-.012
38	I	新しい薬を開発する	.755	-.037	-.075	.016	.072	.081
50	I	大学や研究所で、科学の研究をする	.751	.009	.062	.075	-.019	-.094
14	I	農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	.725	-.014	.026	.005	.110	.011
8	I	環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	.721	-.017	.132	.020	.016	-.039
26	I	新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	.712	-.065	.026	.252	.003	-.143
2	I	古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	.633	.197	-.006	-.099	.046	-.035
44	I	博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	.596	.224	.082	.024	-.142	.019
51	A	雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	.019	.728	.037	-.172	.058	.092
45	A	洋服やアクセサリーのデザインをする	-.046	.690	-.021	-.026	-.003	.126
9	A	小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	.091	.682	-.072	.107	-.058	-.094
3	A	家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	-.112	.655	-.030	-.045	.104	.077
27	A	マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	.093	.655	-.080	-.042	.094	-.045
21	A	テレビドラマや映画のシナリオを書く	.116	.641	-.097	.212	-.112	-.065
15	A	人物や風景、物の写真を取り、雑誌やポスターに発表する	-.012	.570	.091	.042	-.024	.128
33	A	インターネットのホームページのデザインをする	-.113	.559	.222	.079	.136	-.068
39	A	曲を作ったり、編曲したりする	.074	.497	-.063	.079	.094	.007
18	C	文字や数字を、書類に正確に記入する	.017	-.028	.840	-.117	-.050	-.010
6	C	文字や数字を、コンピュータに入力する	-.032	.047	.815	-.095	.033	-.140
36	C	ワープロやパソコンを使って、書類などを消書する	.010	.111	.810	-.118	-.041	-.038
12	C	帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	.019	-.141	.767	-.010	.090	-.001
54	C	従業員の毎月の給料を計算する	.077	-.081	.648	.117	.044	.058
48	C	会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	.005	.003	.568	.166	-.075	.196
24	C	銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	.028	-.076	.518	.168	.094	.123
30	C	依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	.102	.009	.497	.064	-.029	.253
42	C	コンピュータを使って、複雑な計算をする	.222	.007	.425	.114	.200	-.170
23	E	新しい組織を作ってリーダーになる	.080	-.110	-.052	.763	.023	.016
41	E	社長として、会社の経営の仕事にあたる	.110	-.051	-.046	.726	.088	-.044
5	E	自分の店を経営する	-.013	-.011	-.078	.718	.103	-.077
47	E	店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	.048	.038	.039	.641	.103	.011
53	E	流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	.102	.122	.107	.598	-.064	.016
17	E	客を集めるため、広告や催し物などを企画する	-.063	.215	.063	.552	-.111	.150
11	E	テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	.007	.270	-.076	.500	.012	.044
35	E	ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	.028	.259	-.020	.421	.050	.100
29	E	世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	.201	.270	.050	.336	-.106	.082
37	R	自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	.111	-.045	-.034	.071	.759	-.060
25	R	工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	.034	.032	-.004	.042	.736	-.003
31	R	トラックを運転して貨物を運ぶ	-.048	-.027	.019	.020	.731	.070
13	R	木材を加工し、組み立てて、家を建てる	.011	.128	.046	-.046	.681	-.008
43	R	飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	.154	-.046	.028	.120	.587	.064
1	R	部品を組み立てて機械を作る	.046	.147	-.171	-.134	.581	-.142
7	R	火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	.305	.038	-.009	.085	.443	.027
19	R	火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	.129	-.035	-.100	.147	.429	.201
49	R	船に乗って、魚や貝などの漁をする	.298	.066	-.070	.059	.390	.141
28	S	患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	.276	-.038	.016	-.247	.024	.708
34	S	家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	.129	.025	-.021	-.066	.016	.698
4	S	保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	-.119	.016	-.113	.081	.038	.567
40	S	病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	.504	-.059	-.079	-.205	.045	.559
46	S	悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	-.011	.093	.005	.093	-.074	.536
22	S	ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	-.233	.017	.143	.301	-.034	.526
16	S	ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	-.181	.056	.033	.386	-.052	.507
52	S	飛行機の中で、乗客にサービスをする	-.079	.042	.092	.285	.063	.496
10	S	客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	.073	.086	.038	.040	.042	.427

因子間相関

	因子1 (I)	因子2 (A)	因子3 (C)	因子4 (E)	因子5 (R)	因子6 (S)
因子1 (I)	1					
因子2 (A)	.279	1				
因子3 (C)	.377	.198	1			
因子4 (E)	.351	.499	.387	1		
因子5 (R)	.604	.314	.351	.433	1	
因子6 (S)	.292	.393	.242	.452	.271	1

※.30以上の値を太字。

3. B検査の構造の妥当性・信頼性についての検討

B検査は基礎的志向性を測定する検査であり、64項目で構成され、対情報志向（D志向：24項目）、対人志向（P志向：24項目）、対物志向（T志向：16項目）が測定される。構造の妥当性、信頼性を検討するため、「2019年調査」、「2020年調査」のデータを用いて全64項目による探索的因子分析を行った。主因子解を求めた後、3因子を指定して Promax 回転を行った。「2019年調査」によって得られた結果を図表3-8に示す。

①「2019年調査」データによる因子構造と信頼性の検討

因子1に負荷量が高かった項目としては21個の項目が該当した。このうち19個の項目はP志向を測定する項目であった⁴。P志向を測定する項目の多くがまとまったことから因子1は対人志向を測定する因子として解釈できる。なお、因子1には、T志向のうちのT2「自然に親しむ」を測定する項目であるNO.46「山や海にでかけるのが好きだ」とNO.30「自然公園やアスレチックに行くのが好きだ」の負荷量が高くなった。このうちのNO.30は高校生によるデータでもT志向ではなくP志向とまとまることが確認されている。ただし中学生に関しては想定通りにT志向の因子とまとまっている（室山,2018）。これらの項目が示す活動の内容は、年齢が高くなり活動範囲が広がってくるとT2「自然に親しむ」というよりも「友人などの他者と一緒に行う活動」というニュアンスが濃くなり、対人志向の項目、とくにP2「みんなと行動する」と強く結びつく可能性が考えられる。そのため今回の高等教育課程在学者のデータにおいてはこのような構造が得られたことが推察される。

次に、因子2に負荷量が高かった項目は27項目となった。D志向を測定する項目が22項目となり、このほかP志向のうちのP3「人の役にたつ」を測定する5項目が因子2にまとまった。多くの項目がD志向を測定する項目であったことから、因子2は対情報志向を測定する因子として解釈できる。

因子2にP3の5項目が含まれた理由としては、因子1にまとまったP1「自分を表現する」およびP2「みんなと行動する」に関連する項目は外的な世界に向かう積極的な対人志向性を示しているのに対して、P3「人の役にたつ」が示す志向性は人との関わりを志向していながらもP1やP2とは別の様相を反映するもので、例えば道徳的な観念や思索的な傾向と関連することによるのではないかと推察した。そして、このような項目のまとまり方は、中学生および高校生のデータによる分析結果ではみられなかったため（室山,2018）、因子1におけるT志向項目の混入と同じように、発達のな変化を反映している可能性も考えられる。

因子3については16項目がまとまり、そのうちの14項目がT志向を測定する項目であった。多くの項目がT志向に関連する項目であったため、因子3は対物志向を測定する因子として解釈した。

⁴ 3つの志向性の表記はD志向、P志向、T志向とする。

図表 3-8 B検査の因子分析の結果（2019年調査データ）（後半は次頁）

NO	下位尺度	項目内容	因子1	因子2	因子3
61	P2	人とすぐに仲良くなれる	.747	-.123	.031
26	P1	新しい友だちをつくるのは得意だ	.728	-.122	.038
50	P1	人からよく元気な人だと思われる	.682	-.101	-.014
18	P1	場の雰囲気盛り上げるのが得意だ	.656	-.097	.029
42	P1	自分から人に話しかけることが多い	.625	-.022	-.033
2	P1	話し合いの場ではよく発言する方だ	.590	-.011	.027
37	P2	人と話をするのは楽しい	.572	.161	-.112
34	P1	人より目立つことが好きだ	.536	-.090	.041
64	P3	いろいろな人と関われるような仕事をしたい	.530	.140	-.022
10	P1	人前で発言するのが得意だ	.524	-.003	.058
5	P2	グループで行動するのが好きだ	.522	-.003	-.109
13	P2	友だちは多いほど楽しい	.488	-.006	-.023
56	P3	他の人の世話をするのが好きだ	.487	.117	-.002
45	P2	友人とおしゃべりやメールのやりとりが好きだ	.480	.171	-.094
21	P2	グループで作業するような授業は楽しい	.477	.024	.081
53	P2	休みの日に家で一人で過ごすのはつまらない	.432	-.096	.144
29	P2	たくさんの人数で遊べるゲームが好きだ	.400	.005	.069
58	P1	劇をやるなら舞台にあがって演技をしたい	.346	-.024	.182
32	P3	困っている人を見るとつい声をかけたい	.338	.222	-.019
46	T2	山や海に出かけるのが好きだ	.327	.067	.242
30	T2	自然公園やアスレチックに行くのが好きだ	.315	.077	.231
55	D3	必要な情報はいつもきちんと整理しておきたい	-.080	.579	.118
47	D3	何か失敗したらまずその原因を考える	-.131	.563	.070
9	D1	情報を集めるのが好きだ	-.003	.542	-.016
49	D1	何かを説明するときにはわかりやすく情報を整理する	.041	.524	.055
15	D3	何かを始めるときは計画を立ててから取り組む	-.092	.524	.001
7	D3	計画的に物事を進めるタイプだ	-.112	.518	-.016
41	D1	何かを調べたりまとめるような授業は楽しい	.030	.506	.162
28	D2	世の中で起きている事件や出来事に関心がある	.141	.485	.023
23	D3	慎重な性格だと思う	-.231	.476	-.014
44	D2	わからないことがあるとインターネットや本で調べる	-.049	.472	-.029
48	P3	世の中の役に立つことをしたい	.233	.460	-.105
36	D2	税金や制度など社会の仕組みについてよく理解したい	-.027	.451	.001
40	P3	人に感謝されるとうれしい	.187	.441	-.154
8	P3	友だちや家族の役に立つとうれしい	.237	.423	-.148
33	D1	将来はいろいろな情報を集める仕事をしたい	.085	.421	-.021
24	P3	立場の弱い人には親切にすべきだと思う	.098	.413	-.046
63	D3	落ち着いていると言われる	-.249	.410	.068
1	D1	短い間にたくさんの情報を集めることが得意だ	.060	.401	.046
16	P3	人が喜んでいっているのを見ると自分もうれしくなる	.310	.376	-.095
39	D3	自分の持ち物や道具の手入れはきちんとしている	.042	.359	.192
52	D2	外国の人の意見や考え方について知りたい	.210	.339	.194
31	D3	いったん始めたことは忍耐強くやりとげる方だ	.081	.326	.081
20	D2	テレビではニュースや報道番組をよく見る	.125	.321	.076
12	D2	図書館や本屋によくでかける	-.140	.305	.244
17	D1	流行に関する情報は雑誌やインターネットでチェックする	.167	.281	-.021
57	D1	新聞や雑誌にはよく目を通す	.176	.237	.182
25	D1	パソコンを使うのが得意だ	.044	.172	.155

図表 3-8 B検査の因子分析の結果（2019年調査データ）（前表続き）

NO	下位尺度	項目内容	因子1	因子2	因子3
11	T1	工作や物作りが好きだ	-.074	-.081	.758
51	T1	美術や図工の時間は楽しい	.010	-.153	.664
3	T1	指先を使って物を組み立てるのが得意だ	-.052	-.043	.596
43	T1	机や本棚を自分で作ってみたい	.014	.039	.582
35	T1	大工道具やドライバーなどの道具類はうまく使える	.089	-.098	.543
27	T1	物を作り出すような仕事をしたい	-.040	.018	.524
19	T1	手先が器用だと思う	-.006	-.039	.492
6	T2	自分で野菜や果物を栽培したい	.079	.056	.475
22	T2	牧場や農場で働いてみたい	.142	.038	.448
59	T1	こわれた物があると何とか直せないか試してみる	-.078	.249	.419
62	T2	博物館や科学館に行くのが好きだ	.010	.160	.418
38	T2	星や動植物をじっくり観察するのが好きだ	.063	.172	.403
14	T2	動物の飼育や植物の世話が好きだ	.113	.042	.360
4	D2	本を読むのが好きだ	-.057	.179	.301
60	D2	遠い国の人々の暮らしに興味がある	.244	.228	.266
54	T2	外国に旅行するなら自然の豊かな国がいい	.111	.175	.197

因子間相関			
	因子1 (P)	因子2 (D)	因子3 (T)
因子1 (P)	1		
因子2 (D)	.324	1	
因子3 (T)	.223	.325	1

※.30以上は太字

なお、因子3には、T志向の項目以外にD志向のNO.4「本を読むのが好きだ」とNO.60「遠い国の人々の暮らしに興味がある」もまとまった。これらは両方とも対情報志向の下位尺度のうちD2「好奇心をみたく」に関連する項目である。T志向にD志向の項目が混在することは中学生、高校生のデータではみられなかったため（室山,2018）、高等教育課程在学者の場合には、これらの項目が対情報志向ではなく、対物志向のT2「自然に親しむ」に関連する項目と結びついた結果と考えられる。大学生等の高等教育課程在学者の場合には、職業レディネス・テストのB検査項目で測定した時、中学生や高校生よりも対情報志向の平均値が高くなるという結果も得られており（労働政策研究・研修機構,2013）、対情報志向のD2「好奇心をみたく」に関連する項目については大学生等における情報との関わり方として適切かどうかを検討する必要性も示唆される。

なお、どの因子にも項目によっては因子負荷量の大きさが十分に高くないものもあり、それについては「2020年調査」のデータ分析の結果を見ながらあわせて検討する。

次に「2020年調査」のデータを用いてB検査の64項目に対して因子分析を行った結果を図表3-9に示す。

図表 3-9 B検査の因子分析の結果（2020年調査データ）（後半は次頁）

N0	下位尺度	項目内容	因子1	因子2	因子3
61	P2	人とすぐに仲良くなれる	.763	-.080	.013
26	P1	新しい友だちをつくるのは得意だ	.725	-.104	.036
50	P1	人からよく元気な人だと思われる	.707	-.157	.067
42	P1	自分から人に話しかけることが多い	.656	-.020	-.011
18	P1	場の雰囲気盛り上げるのが得意だ	.630	-.103	.043
37	P2	人と話をするのは楽しい	.560	.189	-.110
2	P1	話し合いの場ではよく発言する方だ	.557	-.055	.048
21	P2	グループで作業するような授業は楽しい	.553	.072	-.038
64	P3	いろいろな人と関われるような仕事をしたい	.545	.237	-.048
13	P2	友だちは多いほど楽しい	.545	.052	-.158
10	P1	人前で発言するのが得意だ	.538	-.120	.115
5	P2	グループで行動するのが好きだ	.530	.067	-.062
45	P2	友人とのおしゃべりやメールのやりとりが好きだ	.519	.171	-.111
34	P1	人より目立つことが好きだ	.516	-.117	.081
56	P3	他の人の世話をするのが好きだ	.439	.168	-.012
29	P2	たくさん的人数で遊べるゲームが好きだ	.426	.037	.056
53	P2	休みの日に家で一人で過ごすのはつまらない	.374	.026	-.006
32	P3	困っている人をみるとつい声をかけたくなる	.362	.248	.023
58	P1	劇をやるなら舞台にあがって演技をしたい	.342	-.094	.113
47	D3	何か失敗したらまずその原因を考える	.028	.595	.007
55	D3	必要な情報はいつもきちんと整理しておきたい	-.081	.585	.084
15	D3	何かを始めるときは計画を立ててから取り組む	-.082	.530	-.108
49	D1	何かを説明するときにはわかりやすく情報を整理する	.064	.517	.091
7	D3	計画的に物事を進めるタイプだ	-.091	.512	-.141
9	D1	情報を集めるのが好きだ	-.057	.495	.058
8	P3	友だちや家族の役に立つとうれしい	.186	.481	-.125
48	P3	世の中の役に立つことをしたい	.234	.467	-.036
23	D3	慎重な性格だと思う	-.304	.465	-.047
44	D2	わからないことがあるとインターネットや本で調べる	-.074	.458	.135
28	D2	世の中で起きている事件や出来事に興味がある	.126	.453	.084
40	P3	人に感謝されるとうれしい	.168	.445	-.090
16	P3	人が喜んでいるのを見ると自分もうれしくなる	.224	.434	-.062
63	D3	落ち着いていると言われる	-.246	.409	.038
33	D1	将来はいろいろな情報を集める仕事をしたい	.065	.394	.102
41	D1	何かを調べたりまとめるような授業は楽しい	.084	.388	.155
36	D2	税金や制度など社会の仕組みについてよく理解したい	-.108	.371	.193
20	D2	テレビではニュースや報道番組をよく見る	.043	.367	.121
24	P3	立場の弱い人には親切にすべきだと思う	.048	.361	.030
39	D3	自分の持ち物や道具の手入れはきちんとしている	-.025	.358	.234
1	D1	短い間にたくさんの情報を集めるのが得意だ	.052	.355	.085
17	D1	流行に関する情報は雑誌やインターネットでチェックする	.145	.353	-.034
31	D3	いったん始めたことは忍耐強くやりとげる方だ	.085	.345	.086
52	D2	外国の人の意見や考え方について知りたい	.189	.294	.223
57	D1	新聞や雑誌にはよく目を通す	.098	.254	.178
25	D1	パソコンを使うのが得意だ	-.045	.202	.171

※上記の表で本来と異なる因子に混ざっている項目はN0の部分に太字で表記した。

図表 3-9 B検査の因子分析の結果（2020年調査）（前表続き）

NO	下位尺度	項目内容	因子1	因子2	因子3
11	T1	工作や物作りが好きだ	-.069	-.091	.687
43	T1	机や本棚を自分で作ってみたい	-.035	.004	.623
3	T1	指先を使って物を組み立てるのが得意だ	-.070	.005	.592
38	T2	星や動植物をじっくり観察するのが好きだ	.057	-.014	.561
51	T1	美術や図工の時間は楽しい	.044	-.083	.555
27	T1	物を作り出すような仕事をしたい	-.045	.120	.549
19	T1	手先が器用だと思う	-.021	-.033	.494
6	T2	自分で野菜や果物を栽培したい	.025	.009	.481
35	T1	大工道具やドライバーなどの道具類はうまく使える	.010	-.016	.477
62	T2	博物館や科学館に行くのが好きだ	.049	.068	.464
22	T2	牧場や農場で働いてみたい	.050	-.013	.442
14	T2	動物の飼育や植物の世話が好きだ	.128	.004	.439
59	T1	こわれた物があると何とか直せないか試してみる	-.038	.237	.393
46	T2	山や海に出かけるのが好きだ	.238	.017	.384
12	D2	図書館や本屋によくでかける	-.068	.118	.354
4	D2	本を読むのが好きだ	-.100	.138	.330
30	T2	自然公園やアスレチックに行くのが好きだ	.256	.080	.318
54	T2	外国に旅行するなら自然の豊かな国がいい	.144	.160	.280
60	D2	遠い国の人々の暮らしに興味がある	.163	.203	.279

※上記の表で本来と異なる因子に混ざっている項目はNOの部分に太字で表記した。

	因子1 (P)	因子2 (D)	因子3 (T)
因子1 (P)	1		
因子2 (D)	.388	1	
因子3 (T)	.320	.371	1

※.30以上は太字

因子1にはP志向に該当する19項目が集まった。したがって、因子1は対人志向の因子であると解釈した。「2019年調査」ではT志向の項目が混在したが、ここではすべてP志向の項目で構成された。P1とP2の各8項目はすべて因子1にまとまったが、P3「人の役にたつ」のうち因子1に負荷量の高かったのは3項目のみだった。

因子2はD志向の項目のうちの21項目とP志向の5項目で構成された。D志向の項目が多かったため因子2は対情報志向の因子と解釈できる。「2019年調査」での分析と同じく、P3「人の役にたつ」のNO.8、48、40、16、24が因子2に含まれた。2つの調査データの分析で同様の結果が得られたため、高等教育課程在学者の場合、P3は対人志向といってもP1やP2とは異なる特徴を測定している可能性が示された。

因子3にはT1「物をつくる」とT2「自然に親しむ」を測定する全16項目がすべて集まった。そこで因子3は対物志向の因子と解釈できる。なお、D志向のうちNO.12、4、60の3項目が因子3にまとまった。これらはすべてD志向のうちのD2「好奇心をみたく」という下位尺度に該当する項目であった。「2019年調査」の分析においてもNO.4とNO.60が因子

3に分類されている点は同じであった。

以上、「2019年調査」と「2020年調査」のデータを用いて分析したが、概して示された因子構造はだいたい一致しており、因子1は対人志向、因子2は対情報志向、因子3は対物志向を示す因子となった。「2019年調査」のデータ件数は490件、「2020年調査」のデータ件数は1161件であるので、サンプルサイズの大きさからみて後者の方がデータの精度は高くなると考えられるが、後者のデータでは因子1(P志向)におけるT志向項目の混在はなかった。ただ、両方のデータにおいて、D志向にP志向の下位尺度P3に該当する5項目が混ざり、T志向にD志向の下位尺度D2に該当する項目が混ざるという結果は一致した。

このように、他の志向性との関連が強くなった項目は同じ下位尺度に属しているものであり、一定の傾向がみられたこと、一方で、職業レディネス・テストを中学生、高校生に実施したときには、B検査に関してこのような傾向は見られなかったことから、日常生活の行動傾向として回答してもらうB検査項目については、大学生等の高等教育課程の学生の反応が中高生とは異なる可能性があることが考えられる。また、例えば、「2019年調査」のNO.17、57、25や「2020年調査」のNO.52、57、25などが対情報志向の因子2に含まれている点では想定通りではあるが、因子負荷量の値は.30未満で小さくなっている。このように、情報との関わり方を示すD志向の下位尺度は中学生や高校生においては識別性があっても大学生等に対しては情報との関わり方としてあまり意味をもっていない可能性も考えられる。

なお、B検査の本来の対情報志向に関連する24項目、対人志向に関連する24項目、対物志向に関連する16項目を用いて、それぞれ信頼性係数(クロンバックの α 係数)を算出したところ、「2019年調査」ではそれぞれ.86、.89、.84、「2020年調査」では、.85、.90、.85となった。そこで、この結果からは、因子分析では本来の志向性とは別の因子と関連が強い項目もみられたが、どちらの調査データを用いても、職業レディネス・テスト第3版で設定されている項目の構成に基づいて対情報志向、対人志向、対物志向の程度を測定した場合に信頼性は損なわれていないことが確認された。

4. まとめ

本稿での研究の目的は、高等教育課程の在学者に対して現行版の職業レディネス・テストの各検査の既存尺度を適用するにあたり、高い信頼性や妥当性が保証できるかをみることであった。本稿の分析結果では、A検査やC検査に関して多少の項目のずれはあったが、一定水準の信頼性、妥当性は確認できた。他方、B検査については、これまでの項目構成で対情報、対人、対物志向という3つの志向性を測定する上での信頼性の水準に関しては特段の問題点はみられなかったが、それぞれに含まれる下位尺度の構造に関して、高等教育課程在学者を対象としたときの下位尺度の妥当性を検討する必要性が示唆された。ただ、B検査の下

位尺度の構造をどのように組み替えるのかという内容は、本稿で扱うことができる範囲を超えるものとなる。そのため、この点に関しては本稿では課題の発見として留めておき、具体的な検討や対処は、今後、様々な資料やデータを参照していく中で考えていくことになるだろう。

引用文献

- 室山晴美 (2018). 職業レディネス・テスト第3版の尺度の信頼性および換算規準の妥当性に関する検討 ディスカッションペーパー,18-06. 労働政策研究・研修機構.
- 労働政策研究・研修機構 (2006). 「職業レディネス・テスト [第3版] 手引」 雇用問題研究会.

第4章 職業レディネス・テストの3つの検査における平均値の検討

第3章において、職業レディネス・テストを構成する3つの検査の構造が高等教育課程の在学者のデータにおいても保たれているかを確認したが、第4章では2019年と2020年の2つの調査のデータを用いて、これら3つの下位検査ごとに算出した平均値の傾向を検討する。

職業レディネス・テストでは、検査毎に算出された粗点を換算するが、その際に男女別々に用意された換算表を使う。2006年に公表された第3版を開発する際に集めたデータでは、中学生、高校生および男女で各下位尺度の平均値が異なっていたためである。そこで、本章においても各下位検査の領域ごとの平均値は男女別に算出した。最初に「2019年調査」の在学者のみのデータを用いて平均値を算出し、その後、「2020年調査」で算出した平均値を「2019年調査」の平均値と比較して回答傾向が違ってくるかどうかを検討する。

1. A検査とC検査における各領域の平均値

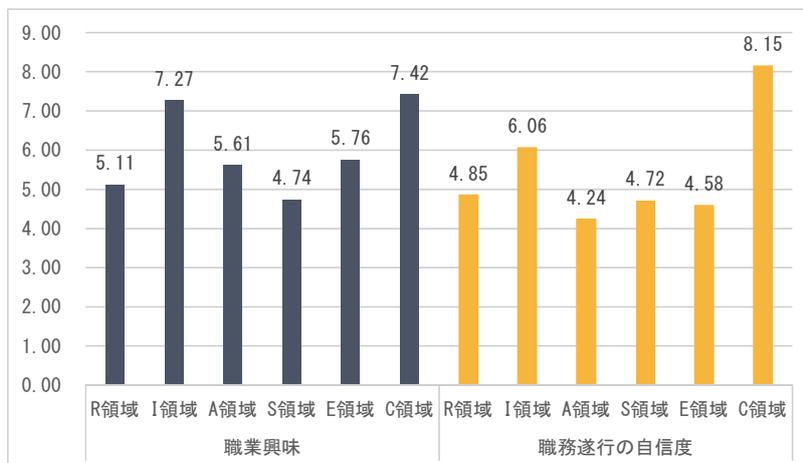
(1) 「2019年調査」のデータを用いた分析

まず、「2019年調査」の在学者のデータを用いてA検査とC検査の回答を採点した。採点にあたっては職業レディネス・テストと同じ方式を採用し、「やりたい」と「自信がある」を2点、「どちらともいえない」を1点、「やりたくない」と「自信がない」を0点として、領域ごとに合計得点を算出した。各領域には9項目があるので得点の範囲は0点から18点となる。領域別の平均値(M)と標準偏差(SD)を図表4-1に示す。この表の平均値を用いて男女別にグラフにしたものが図表4-2と図表4-3である。

図表4-1 A検査とC検査の男女別、各領域の平均値(M)と標準偏差(SD)(2019年)

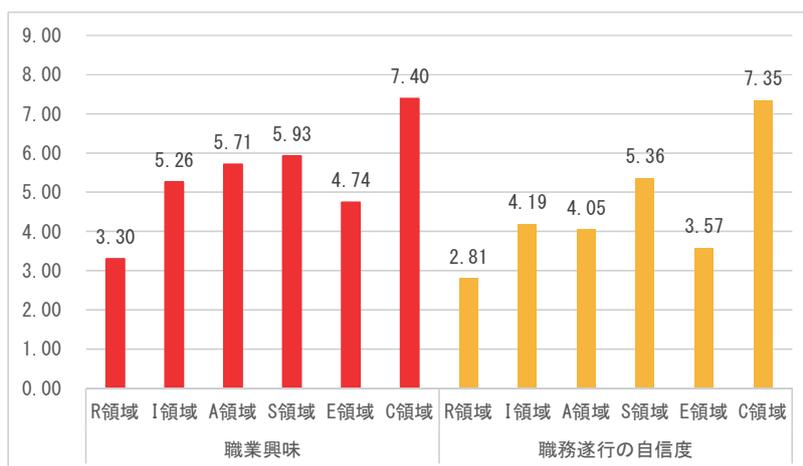
2019年調査データ		男性(n=254)		女性(n=236)		計(n=490)	
		M	SD	M	SD	M	SD
A検査(職業興味)	R領域	5.11	(4.51)	3.30	(3.84)	4.24	(4.29)
	I領域	7.27	(5.45)	5.26	(5.44)	6.30	(5.53)
	A領域	5.61	(4.69)	5.71	(5.06)	5.66	(4.87)
	S領域	4.74	(4.54)	5.93	(4.53)	5.31	(4.57)
	E領域	5.76	(4.70)	4.74	(4.54)	5.27	(4.65)
	C領域	7.42	(5.11)	7.40	(5.12)	7.41	(5.11)
C検査(職務遂行の自信度)	R領域	4.85	(4.61)	2.81	(3.64)	3.87	(4.29)
	I領域	6.06	(5.36)	4.19	(4.94)	5.16	(5.24)
	A領域	4.24	(4.57)	4.05	(4.17)	4.14	(4.38)
	S領域	4.72	(4.65)	5.36	(4.46)	5.03	(4.57)
	E領域	4.58	(4.55)	3.57	(4.10)	4.09	(4.36)
	C領域	8.15	(5.22)	7.35	(5.26)	7.76	(5.25)

図表 4-2 A 検査と C 検査別の各領域の平均値のグラフ（男性 2019 年）



男性の平均値のグラフをみると（図表 4-2）、興味では最も高い領域は C 領域で、次が、同程度で I 領域、その後、やや低くなって、E 領域、A 領域、R 領域、S 領域となる。自信では、C 領域が最も高く、2 番目に I 領域が続いた。その他の 4 つの領域ではそれほど差がなく、R 領域、S 領域、E 領域、A 領域の順となった。興味も自信も C 領域と I 領域が高い。また、C 領域と S 領域は興味と自信にそれほど差がないが、I 領域、R 領域、A 領域、E 領域は興味に比べ自信の値が低くなっていた。このような傾向は後述する「2020 年調査」のデータとおおむね一致している。

図表 4-3 A 検査と C 検査別の各領域の平均値のグラフ（女性 2019 年）



次に女性の平均値をみると（図表 4-3）、興味では最も高いのが C 領域で、S 領域、A 領域、I 領域、E 領域、R 領域となった。自信では C 領域が最も高く、S 領域、I 領域、A 領域、E 領域、R 領域となった。C 領域は興味も自信も同程度に高いが、その他は興味の方が自信よりも値が高い。ただ興味と自信における領域間の得点の順位は、I 領域と A 領域が入れ替わ

っているほかはすべて同じとなった。各領域の得点のレベルをみると「2019年調査」の得点は、「2020年調査」と多少の違いはあってもだいたいにおいて同じような形状となっている。

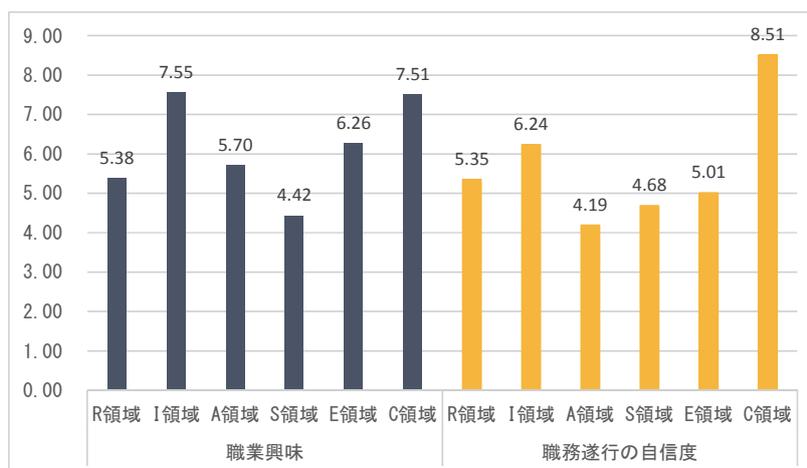
(2) 「2020年調査」のデータを用いた分析

「2020年調査」のデータを対象として、現行版（第3版）の各領域に該当する項目を用いて、A検査（職業興味）とC検査（職務遂行の自信度）の6領域ごとに、男女別および全体で平均値と標準偏差を算出した結果を図表4-4に示す。この中の平均値を男女別にグラフにしたものが図表4-5と図表4-6である。

図表4-4 A検査とC検査の男女別、各領域の平均値(M)と標準偏差(SD)(2020年)

2020年調査		男性(n=576)		女性(n=585)		計(n=1161)	
		M	SD	M	SD	M	SD
A検査(職業興味)	R領域	5.38	(4.55)	2.71	(3.63)	4.03	(4.32)
	I領域	7.55	(5.51)	5.03	(5.22)	6.28	(5.51)
	A領域	5.70	(4.76)	6.58	(5.16)	6.14	(4.98)
	S領域	4.42	(4.03)	5.86	(4.37)	5.15	(4.26)
	E領域	6.26	(4.83)	5.23	(4.45)	5.74	(4.67)
	C領域	7.51	(4.93)	6.80	(5.10)	7.15	(5.03)
C検査(職務遂行の自信度)	R領域	5.35	(4.71)	2.39	(3.44)	3.86	(4.38)
	I領域	6.24	(5.29)	3.77	(4.70)	4.99	(5.15)
	A領域	4.19	(4.20)	4.45	(4.38)	4.32	(4.29)
	S領域	4.68	(4.26)	5.57	(4.62)	5.13	(4.47)
	E領域	5.01	(4.63)	3.65	(4.17)	4.33	(4.46)
	C領域	8.51	(5.24)	7.22	(5.41)	7.86	(5.36)

図表4-5 A検査とC検査別の各領域の平均値のグラフ(男性2020年)



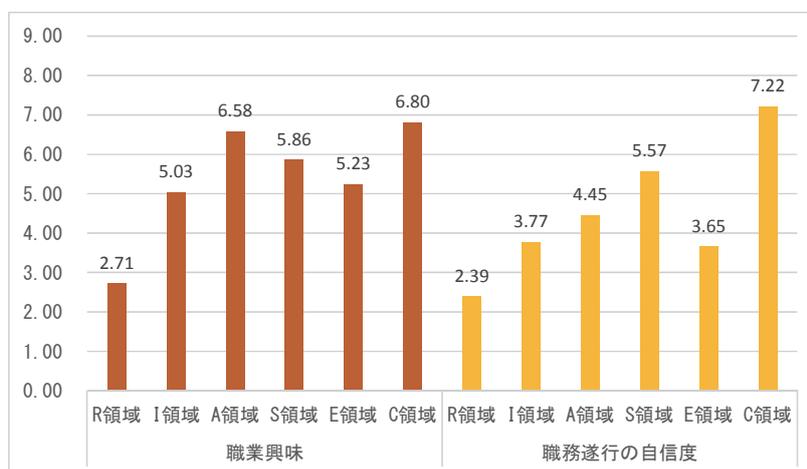
男性の場合(図表4-5)、A検査(職業興味)に関して高い順にみていくとI領域、C領域、E領域、A領域、R領域、S領域となった。C検査(職務遂行の自信度)では、高い順にC

領域、I領域、R領域、E領域、S領域、A領域となった。興味ではI領域とC領域が同程度に高い。他方、自信ではC領域が突出して高く、次がI領域で、E領域やA領域は興味に比べて自信の値が高くない。R領域とS領域は興味も自信も同程度であった。

他方、女性では(図表 4-6)、A検査(職業興味)に関して高い順にみると、C領域、A領域、S領域、E領域、I領域、R領域となった。C検査(職務遂行の自信度)については、高い方から、C領域、S領域、A領域、I領域、E領域、R領域の順であった。

興味領域ではC領域とA領域が同程度に高いが、I、S、Eも5.0以上でそれほど差がない。しかし、R領域はとて低くなっている。自信の方では、C領域が突出して高く、S領域は興味と同程度に高くなっている。その他のI、A、E領域は興味に比べて自信が低い。R領域は自信がもっとも低くなっているが、値は興味と同程度である。

図表 4-6 A検査とC検査別の各領域の平均値のグラフ(女性 2020年)



男女でそれぞれ傾向は異なるが、どちらもC領域が高く、特に興味よりは自信が高いことが共通点である。また、S領域とR領域は興味と自信が同程度であるが、その他の領域では興味に比べて自信の得点が全体として低めであることも共通してみられる特徴であった。

(3) A検査とC検査の下位尺度、各領域平均値の調査年によるデータの比較

2019年と2020年の調査におけるA検査(職業興味)とC検査(職務遂行の自信度)の得点の傾向を男女それぞれで見た結果、各領域の平均値は両年ともに同じような傾向を示すことがわかった。その点を確認するため、平均値の差の検定(t検定)を用いて男女別に各領域の平均値を調査間で比較した(図表 4-7)。t値が負の場合は2019年よりも2020年の値が大きいことを示し、正の場合は2019年の値の方が大きいことを示す。

男性では、興味に関して2020年の値の方が大きいものが6領域中5領域あったが、6領域すべてにおいて平均値間に有意差はみられなかった。自信に関しては、6領域中4領域で2020年の方の値が大きかったが、興味と同様に6領域すべての平均値間に有意差はみられな

かった。

図表 4-7 男女別にみた各領域の平均値の調査年による比較

下位検査と領域		男性				女性						
		2019年 (n=254)		2020年 (n=576)		t値	2019年 (n=236)		2020年 (n=585)		t値	
		M	SD	M	SD		M	SD	M	SD		
A検査 (職業 興味)	R領域	5.15	(4.52)	5.38	(4.55)	-.66	ns	3.30	(3.84)	2.71	(3.63)	2.07 *
	I領域	7.32	(5.47)	7.55	(5.51)	-.57	ns	5.26	(5.44)	5.03	(5.22)	.54 ns
	A領域	5.63	(4.68)	5.70	(4.76)	-.19	ns	5.71	(5.06)	6.58	(5.16)	-2.19 *
	S領域	4.79	(4.59)	4.42	(4.03)	1.16	ns	5.93	(4.53)	5.86	(4.37)	0.19 ns
	E領域	5.84	(4.78)	6.26	(4.83)	-1.17	ns	4.74	(4.54)	5.23	(4.45)	-1.41 ns
	C領域	7.47	(5.13)	7.51	(4.93)	-.10	ns	7.40	(5.12)	6.80	(5.10)	1.52 ns
C検査 (職務 遂行の自信 度)	R領域	4.83	(4.59)	5.35	(4.71)	-1.48	ns	2.81	(3.64)	2.39	(3.44)	1.54 ns
	I領域	6.08	(5.35)	6.24	(5.29)	-.40	ns	4.19	(4.94)	3.77	(4.70)	1.16 ns
	A領域	4.22	(4.56)	4.19	(4.20)	.09	ns	4.05	(4.17)	4.45	(4.38)	-1.21 ns
	S領域	4.73	(4.64)	4.68	(4.26)	.13	ns	5.36	(4.46)	5.57	(4.62)	-0.58 ns
	E領域	4.63	(4.57)	5.01	(4.63)	-1.12	ns	3.57	(4.10)	3.65	(4.17)	-0.25 ns
	C領域	8.19	(5.22)	8.51	(5.24)	-.81	ns	7.35	(5.26)	7.22	(5.41)	0.31 ns

*...p<.05、ns...有意差なし

女性では、興味に関して 2019 年の方が 4 領域において平均値が高かった。そして R 領域では有意差がみられ、2019 年の平均値が 2020 年度よりも高くなった(p<.05)。また A 領域については 2020 年の平均値が 2019 年の平均値よりも高かった(p<.05)。その他には統計的な有意差はみられなかった。自信に関しては、6 領域すべてにおいて 2019 年と 2020 年の平均値間で有意差はみられなかった。

このように、在学者だけを対象として 2 つの調査年の A 検査と C 検査の平均値を比較した結果、女性の興味の R 領域と A 領域について、調査年間で平均値に有意な差がみられたが、その他の尺度間では有意差はみられなかった。これにより全体としてみれば、「2019 年調査」と「2020 年調査」の各領域の得点水準の傾向はおおむね一致しているとみることができる。

なお、有意差がみられた女性における興味の R 領域と A 領域であるが、2020 年の対象者の A 領域の得点は興味も自信も高めであり、逆に R 領域や I 領域は興味も自信も低めとなっていた。このような結果は在学者の専門分野の影響を受けている可能性もあると考えられるため、女性データについて専門分野を調べてみたところ、2019 年では専門学校を除く在学者のうち理学、工学、農学系の専攻者の割合は 208 名中 31 名で 14.9%であった。また、芸術系の専攻者は 11 名で 5.3%であった。一方で、2020 年では専門学校を除く 543 名中、理学、工学、農学系の専攻者は 70 名で 12.9%、芸術系の専攻者は 28 名で 5.2%であった。技術系の分野の専攻者割合は 2019 年の方が 2%程度高めの傾向はあったため、興味の R 領域が 2019 年の方が高かったことはその影響の可能性も考えられるが、芸術系の専攻者割合は同程度であったため、A 領域が 2020 年の方が高くなっていることについては説明できなかった。

2. B検査の各志向性の平均値

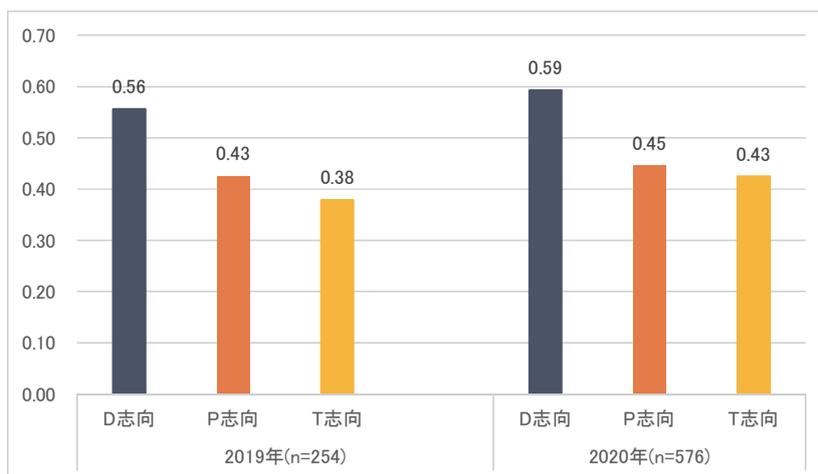
(1) 調査年別、男女別の平均値

B検査（基礎的志向性）について、各調査年別、男女別に下位検査毎の平均値(M)と標準偏差(SD)を算出した結果を図表4-8に示す。なお、D志向、P志向は24項目(0-24点の得点範囲)、T志向は16項目(0-16点の得点範囲)の合計の平均値であるため、3つの志向性間での平均値を直接比較することはできない。そこで、各志向性の合計平均値をそれぞれの項目数で割り、3志向性の得点のレベルの比較ができるようにした男女別のグラフを図表4-9と図表4-10である。値は「2019年調査」と「2020年調査」のそれぞれについて算出した。

図表4-8 B検査の各調査年のデータによる男女別、各志向性の平均値(M)と標準偏差(SD)

調査年	志向性	男性		女性		計	
		M	SD	M	SD	M	SD
2019年490名 (男性n=254, 女性n=236)	D志向	13.36	(5.55)	12.59	(5.66)	12.99	(5.61)
	P志向	10.23	(5.89)	10.97	(5.56)	10.59	(5.74)
	T志向	6.07	(4.11)	6.63	(4.22)	6.34	(4.17)
2020年1161名 (男性n=576, 女性n=585)	D志向	14.24	(5.57)	13.37	(5.38)	13.80	(5.49)
	P志向	10.70	(6.09)	11.64	(5.56)	11.17	(5.85)
	T志向	6.81	(4.33)	6.85	(4.36)	6.83	(4.34)

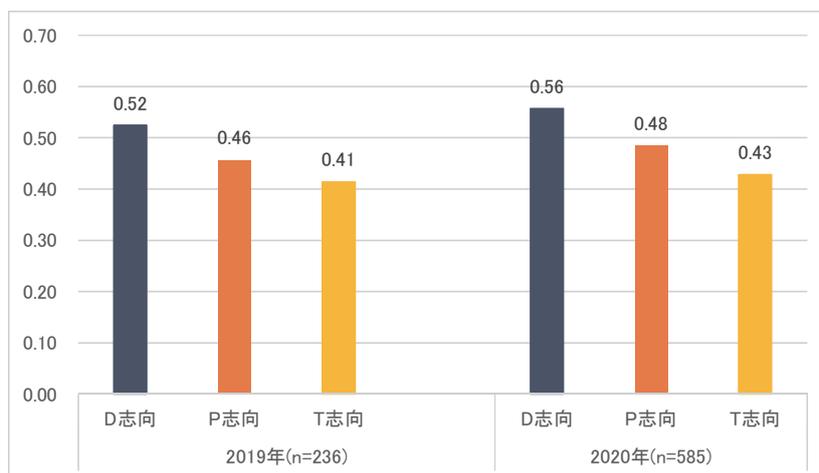
図表4-9 男性における各志向性の平均値の比較(各志向性の項目数で除した値)



男性の平均値のグラフをみると(図表4-9)、「2019年調査」(左)では、D志向が高く、P志向が次で、最も低いのがT志向となっている。「2020年調査」(右)では、D志向が最も高く、P志向とT志向は同程度である。調査年間で平均値を比べてみると、「2019年調査」より「2020年調査」の平均値がやや高めの傾向がある。

女性の平均値のグラフでは(図表 4-10)、どちらの調査年のデータでも D 志向が最も高く、次が P 志向で T 志向が最も低い。「2019 年調査」(左)のデータよりも「2020 年調査」(右)のデータの平均値の方がどの志向性でも高めとなっている。

図表 4-10 女性における各志向性の平均値の比較 (各志向性の項目数で除した値)



(2) 「2020 年調査」と「2019 年調査」の B 検査の下位尺度、各領域平均値の比較

B 検査の基礎的志向性について、各志向性の平均値の大きさが調査年間で異なるどうかを調べるため平均値の差の検定 (t 検定) を行った。結果を図表 4-11 に示す。

図表 4-11 基礎的志向性における男女別にみた調査年による平均値の比較

志向性	男性				t 値	女性				t 値
	2019年 (n=254)		2020年 (n=576)			2019年 (n=236)		2020年 (n=585)		
	M	SD	M	SD		M	SD	M	SD	
D 志向	13.36	(5.55)	14.24	(5.57)	-2.11*	12.59	(5.66)	13.37	(5.38)	-1.85†
P 志向	10.23	(5.89)	10.70	(6.09)	-1.04ns	10.97	(5.56)	11.64	(5.56)	-1.54ns
T 志向	6.07	(4.11)	6.81	(4.33)	-2.31*	6.63	(4.22)	6.85	(4.36)	-.68ns

*…p<.05, †…p<.10, ns…有意差なし

「2019 年調査」の平均値から「2020 年調査」の平均値を引いているので、負の t 値は「2020 年調査」の平均値の方が大きいことを意味する。男性ではどの志向性についても「2020 年調査」の方が「2019 年調査」よりも大きな値となり、D 志向と T 志向では有意差がみられた (p<.05)。女性では男性と同様に「2020 年調査」の値が「2019 年調査」よりも大きかったが、D 志向について有意ではないものの差の傾向 (p<.10) がみられ、それ以外は有意ではなかった。

3. 2013年公表の高等教育課程の在学者および高等学校在学生の平均値の参照

職業レディネス・テスト第3版では、20歳前後の高等教育課程の学生が実施する時、応用的な考え方として高校生用の換算基準を用いて実施することができるとしている。ただ、その場合、どの程度、検査の信頼性が保たれるのかが不明であったため、2013年に「職業レディネス・テスト第3版—大学、短期大学、専門学校等での実施のためのガイドブック—」（労働政策研究・研修機構,2013）を作成して、高等教育課程の在学者に実施した時のA検査、B検査、C検査の平均値や大学生のデータによる仮の換算基準の作成とプロフィール作成上の信頼性の検証を行った。

この分析対象となったのは、職業レディネス・テスト第3版の紙筆検査を受検した高等教育課程の在学者で、男性は大学生（四年制大学）1273名、短大生92名、専門学校生576名、女性は大学生（四年制大学）919名、短大生1565名、専門学校生349名である。このデータを用いたA検査、B検査、C検査のそれぞれの下位検査の平均値の傾向をみたところ、高等教育課程の在学者の場合、高校生よりも全般に高めとなっているが、高い領域、低い領域の形状は高校生と類似しているという結果が示された。

他方、WEBモニターによる「2019年調査」の在学者と就業者全体のサンプルを用いて算出した各検査、各下位尺度の平均値については、2013年公表の平均値に比べて慣習的領域(C)の得点が高めになっているという特徴が指摘されている（労働政策研究・研修機構,2020）。

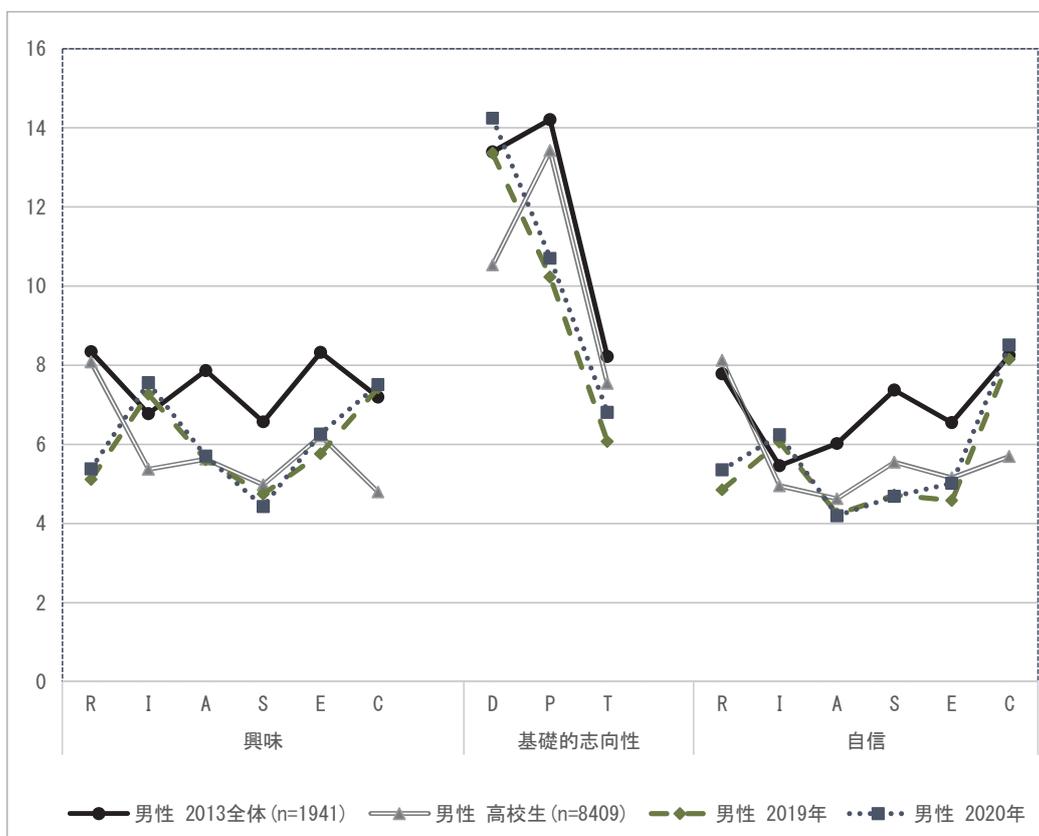
そこで、今回、本章の前節で示した2つのWEBモニター調査の各検査、各下位尺度の平均値を、2013年公表の高等教育課程の在学者の平均値および職業レディネス・テスト第3版の標準化データにおける高校生の平均値の特徴と比較してみることにした。

図表4-12には、「職業レディネス・テスト第3版—大学、短期大学、専門学校等での実施のためのガイドブック—」に掲載されている高等教育課程在学者全体のサンプルによる各検査下位尺度別の平均値、「職業レディネス・テスト[第3版]手引」に掲載されている標準化の際の高校生の平均値、今回算出した2回のWEBモニター調査の平均値を示す。図表4-13、図表4-14はこの値を男女別にグラフにしたものである。

図表 4-12 4種類のデータセットの平均値

		男性						女性			
		2013年 全体 (n=1941)	高校生 (n=8409)	2019年	2020年			2013年 全体 (n=2833)	高校生 (n=8695)	2019年	2020年
興味	R	8.34	8.08	5.11	5.38	興味	R	3.92	2.96	3.30	2.71
	I	6.77	5.37	7.27	7.55		I	4.48	3.06	5.26	5.03
	A	7.86	5.62	5.61	5.70		A	8.76	7.2	5.71	6.58
	S	6.57	4.98	4.74	4.42		S	9.17	8.16	5.93	5.86
	E	8.32	6.21	5.76	6.26		E	7.09	5.75	4.74	5.23
	C	7.19	4.79	7.42	7.51		C	7.35	5.48	7.40	6.80
基礎的 志向性	D	13.39	10.53	13.36	14.24	基礎的 志向性	D	12.58	10.54	12.59	13.37
	P	14.21	13.42	10.23	10.70		P	14.92	15.25	10.97	11.64
	T	8.22	7.54	6.07	6.81		T	8.18	6.93	6.63	6.85
自信	R	7.78	8.12	4.85	5.35	自信	R	3.48	2.95	2.81	2.39
	I	5.46	4.95	6.06	6.24		I	3.63	2.64	4.19	3.77
	A	6.02	4.62	4.24	4.19		A	6.82	5.38	4.05	4.45
	S	7.37	5.55	4.72	4.68		S	9.38	8.07	5.36	5.57
	E	6.55	5.15	4.58	5.01		E	5.2	4.36	3.57	3.65
	C	8.25	5.69	8.15	8.51		C	8.34	6.17	7.35	7.22

表 4-13 4種類のデータセットの平均値（男性）



図表 4-13 は男性の平均値のグラフであるが、実線は 2013 年の紙筆検査によるサンプル全体の平均値、二重線は第 3 版に掲載されている高校生の平均値、破線は WEB モニター調査のうち「2019 年調査」の平均値、点線は「2020 年調査」の平均値となっている。

2013 年の大学生等（実線）と高校生（二重線）の各下位尺度の得点をみると、職業興味（A 検査）の R 領域、基礎的志向性（B 検査）の P 志向と T 志向、職務遂行の自信度（C 検査）の R 領域、I 領域などについては大学生等（実線）と高校生（二重線）で得点に大きな差がないが、その他は大学生等が高めとなっている。ただ、実線の方が得点の高い領域があるものの全体として各下位尺度の高低の形状は二重線の形状と一致しているとみることができる。

一方で、WEB モニター調査の「2019 年調査（破線）」と「2020 年調査（点線）」の平均値は、これまでの分析でも示した通り、ほぼ同じように重なっており、この 2 つのデータから得られた平均値は近似していることが確認できる。しかしながら、紙筆検査による大学生等（実線）の平均値や高校生（二重線）の平均値と比べると形状が異なっている。

職業興味（A 検査）からみていくと、R 領域は 2013 年の大学生等（実線）や高校生（二重線）よりも低い。I 領域は 2013 年の大学生等（実線）より若干高めであるが、ほぼ同じ水準である。A 領域、S 領域、E 領域をみると、A 領域と E 領域に比べて S 領域が低いという凹凸の形状は同じであるが、平均値の水準は高校生（二重線）と同程度であり、2013 年の大学生等（実線）よりは低い。そして C 領域は 2013 年大学生（実線）と同じ水準である。このように全体として、「2019 年調査（破線）」と「2020 年調査（点線）」では I 領域と C 領域が高く、その他は全体として、2013 年の大学生等のデータよりも低くなっており、6 領域全体としての形状が異なっている。

基礎的志向性（B 検査）については、「2019 年調査（破線）」と「2020 年調査（点線）」のレベルは D 志向の得点については、2013 年の大学生等（実線）と同じかやや高いが、P 志向が低く、2013 年の大学生等（実線）と高校生（二重線）では D 志向に比べて P 志向の方が高いがそのようにはなっていない。T 志向は 2013 年大学生等（実線）および高校生（二重線）とあまり違いはないが、やや低めである。

職務遂行の自信度（C 検査）では、職業興味（A 検査）とほぼ同じ傾向が見られ、I 領域と C 領域が 6 領域中高くなっており、その他は低くなっている。

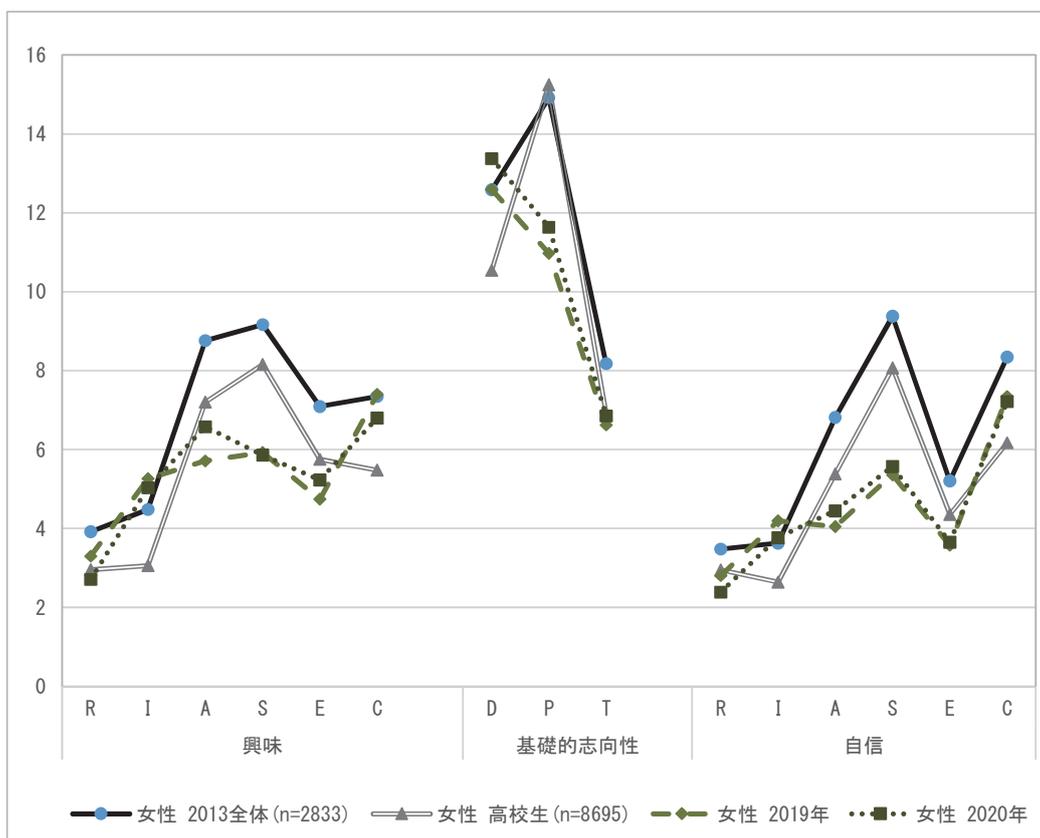
以上のようなことから、WEB モニター調査における回答者の特徴として、興味や自信における 6 領域間での相対比較において、I 領域（研究的領域）と C 領域（慣習的領域）が高いこと、基礎的志向性については D 志向（対情報志向）の高さと P 志向（対人志向）の低さが目立っていることが示された。

次に、女性の平均値を 4 つのデータセットで比較した図表 4-14 についてみていく。図表 4-13 と同じく、実線は 2013 年の紙筆検査によるサンプル全体の平均値、二重線は第 3 版に掲載されている高校生の平均値、破線は「2019 年調査」の平均値、点線は「2020 年調査」の平均値となっている。

まず、2013年大学生等（実線）と高校生（二重線）の形状をみていくと、職業興味と職務遂行の自信度について、大学生等の平均値が高校生よりも少しずつ高くなっているが、形状としてはほぼ垂直方向に高めた形となっており、6領域の相対的な得点の高低が似ていることがわかる。基礎的志向性についてもP志向は大学生等（実線）と高校生（二重線）で差がないが、D志向とT志向は大学生等（実線）が高校生（二重線）よりも高めである。ただし、3つの相対的な得点の傾向は両者でほぼ一致している。

一方、2つのWEBモニター調査の平均値は、「2019年調査（破線）」も「2020年調査（点線）」もほぼ同程度であり、前述の通り（図表4-7）、興味のR領域とA領域で差がみられた以外は2つの調査の平均値の差は小さい。ただ、男性のデータと同様に、2013年大学生等（実線）や高校生（二重線）とは形状が異なっている。

図表 4-14 4種類のデータセットの平均値（女性）



まず職業興味（A検査）からみていくと、R領域は2013年の大学生等（実線）と比べてやや低めであるが、高校生（二重線）と同程度でそれほど大きな違いはない。I領域は2013年の大学生等（実線）とほぼ同じ水準であるがやや高めである。A領域、S領域、E領域は2013年大学生等（実線）と比べて低いことがわかる。特にS領域は高校生（二重線）と比較しても2点程度低い。C領域は2013年大学生等（実線）よりやや低めであるが同じ程度である。

これをみると、女性データにおいても WEB モニター調査の平均値は、男性データと同じように、I 領域と C 領域は高いが、他は低いことが特徴であるといえる。

基礎的志向性についても男性データと同じであり、D 志向は 2013 年大学生等（実線）と同じレベルであるが、P 志向が低く高校生（二重線）よりも低い。T 志向は 2013 年大学生等（実線）のデータよりも低く、高校生（二重線）と同程度である。

職務遂行の自信度については、R 領域と C 領域は 2013 年大学生等（実線）よりも若干低めであるがほぼ同程度で、I 領域もほぼ同程度である。そして A 領域、S 領域、E 領域が 2013 年大学生等（実線）と比べて明らかに低い水準である。6 領域の相対的な高さを比較すると最も高いのが C 領域で次が S 領域、A 領域、I 領域、E 領域、R 領域であるが、2013 年大学生等では、S 領域、C 領域、A 領域、E 領域、I 領域、R 領域の順で、WEB モニター調査では I 領域と C 領域の高さが特徴であることがわかる。

このように男女ともに、紙筆検査を受検した大学生等と比べて、WEB モニター調査の対象者については、I 領域（研究的領域）と C 領域（慣習的領域）への興味、自信が高い一方でそれ以外が低めとなっていること、D 志向（対情報志向）は高いが P 志向（対人志向）が低いという結果が読み取れることがわかった。WEB モニター調査の 2 回の平均値はほぼ一致しているため、不誠実な回答があったということではなく、職業レディネス・テストで測定される特性に関して WEB モニターとなっている対象者の特徴が反映された結果とみることができる。

4. まとめ

本章では、「2019 年調査」と「2020 年調査」の在学者データを用いて、職業レディネス・テストの 3 つの下位検査、それぞれの下位尺度についての平均値を算出し、それぞれの得点の傾向と 2 つの調査データの整合性を検討した。各検査、各下位尺度の得点については、女性のデータにおいて職業興味の 2 つの領域で平均値の有意差が検出されたが、それ以外には有意差はなく、2 つの回答結果は同じような傾向を示すと解釈した。したがって、次章以降で職業レディネス・テストの平均値と他の尺度との関連をみるとき、「2019 年調査」の在学者データと同じように「2020 年調査」の在学者データを用いることができるし、「2019 年調査」のサンプルサイズの小ささ(n=490)を補う意味で、場合によっては 2 つのサンプルをあわせたデータセットを用いても大きな影響はないと考える。

他方、職業レディネス・テストを大学生等に適用することを考えたとき、標準化のための基準としては、学部や学科、男女の割合等をできるだけ母集団にあわせた集団から算出した換算点を作成することが望ましいといえるが、今回の WEB モニター調査のデータに関しては、標準化のための基準集団としての適用は難しい可能性が見いだされた。それは、職業レディネス・テストで測定している特性に関して、高等教育課程に在学する一般的な多くの大

学生等とは異なる傾向が WEB モニターのデータにおいてみられたという点による。

大学生等の高等教育課程在学者に対して紙筆検査により広くデータを集める場合は、興味や自信や志向性に関して、様々な特性をもつ学生が含まれる可能性があるが、WEB モニターとなっている対象者については、情報やデータを扱ったり、研究的な志向を持っていたり、パソコンを用いた作業など定型的な作業への志向性が高く、それらの作業に自信を持っていたりするような者が多く含まれることが考えられる。そういった特性が反映されているためか、男女ともに紙筆検査で集めた大学生等のデータとは異なった共通の傾向が見られたので、モニター調査の集団を標準化の基準とした場合には、I 領域や C 領域、D 志向の基準が高い方にずれてしまうことになる。他方で、A 領域、S 領域、E 領域や P 志向は低くなっているため、WEB モニターのデータで換算基準を作成すると、これらの基準は低い方にずれてしまう。

紙筆検査による 2013 年公表の大学生等の平均値は高校生の各領域の平均値を全体としてやや高めに垂直移動したような形状となっており、特に職業興味と職務遂行の自信度の得点にはその傾向があらわれている。発達的な観点からみるとこのような結果の方が自然であり、それとは異なる形状を示すデータを基準とすることには慎重になるべきであると考えられる。

WEB モニターではない一般の大学生等について職業レディネス・テストのデータを集めることは、今日のコロナ禍の状況ではかなり厳しい条件となるが、過去に大学等で少しずつ集めたデータの整理のほか、長期的、計画的なデータの収集方法の工夫なども検討し、職業レディネス・テストの 3 つの検査の換算基準作りの基盤となるような高等教育課程の在学者のデータの収集と検討を進めていく必要がある。

引用文献

- 労働政策研究・研修機構 (2006). 「職業レディネス・テスト[第 3 版]手引」 雇用問題研究会.
- 労働政策研究・研修機構 (2013). 「職業レディネス・テスト [第 3 版] 大学、短期大学、専門学校等での実施のためのガイドブック」 雇用問題研究会.
- 労働政策研究・研修機構 (2020). 「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 ―大学生等の就職支援のための尺度の開発―」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第5章 仕事選び基準尺度の構造に関する検討

1. はじめに

職業レディネス・テストの改訂に関する研究では、大学生等の高等教育課程の在学者や34歳以下の若年求職者に対しては、職業レディネス・テストの従来⁵の3検査に関する尺度構成や項目は特に変更することなく既存尺度を用いることにした。そして、既存尺度に追加して実施できる新しい検査の開発に取り組み⁵、その結果、働き方や仕事を選ぶときに考慮する条件や価値観・態度的側面を調べるための「仕事選び基準尺度」、職業生活への適応に関連する性格特性や生活態度を調べる「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」が作成された。その内容を図表5-1に示す。

図表5-1 新しく追加された尺度の内容

尺度名	下位尺度名	各下位尺度が示す内容
仕事選び基準尺度	自己成長	自らの能力や興味を発揮できる職業を選択し、仕事を通して自分自身を向上させることに興味をもつこと。
	社会貢献	職業を通じて国や地域社会などの多くの人々のために役立ち、貢献するような活動に関心をもつこと。
	地位	上昇志向が強く、仕事で成功して、高い地位を獲得することを志向すること。
	経済性	職業に就くことによって得られる収入、経済生活の向上といった点を重視すること。
	仕事と生活のバランス	仕事と仕事以外の生活を切り離して考え、どちらかに偏ることなく時間を使うことを志向すること。
	主体的進路選択	職業を選択するとき、周囲の人の考えや意見よりも、自分自身で積極的に選ぶとする傾向が強いこと。
基礎的性格特性尺度	気持ちの切り替え	失敗や困難な場面に際し、極端に落ち込むことなく気持ちを切り替えて前向きに対処することができること。
	外界への積極性	新しい物事や状況に積極的に関わろうとする気持ちをもっていること。
基礎的生活特性尺度	社会生活への心構え	社会生活を円滑に送るために必要な自己管理、周囲との調和に向けた意識をもっていること。

このうち第5章では、「仕事選び基準尺度」を取り上げ、この尺度に含まれる6つの下位尺度について、「2019年調査」と同じ構造が「2020年調査」のデータにおいても保たれているかどうかを検討する。

2. 「仕事選び基準尺度」について

「仕事選び基準尺度」は仕事を選んだり働くことを考えたりしたときに、働き方にかかわるどのような条件を重視するのかという価値観的側面あるいは態度的側面を測定するための

⁵ 大学生等を実施するための新しい検査の開発については、JILPT資料シリーズNo.230（労働政策研究・研修機構,2020）にまとめられている。

6つの下位尺度で構成されている。その6つとは「自己成長」、「社会貢献」、「地位」、「経済性」、「仕事と生活のバランス」、「主体的進路選択」である。初めて仕事に就く若者に対して、職業レディネス・テストの既存尺度で測定される職業興味、職務遂行の自信度、基礎的志向性とは異なる観点から、仕事を選ぶ時に自分自身がどのような条件を重視しているのか、仕事に何を求めているのかを理解する手掛かりを提供するという意図で作成された。

6つの下位尺度は各8項目で、仕事や働き方についての考え方を示す記述に対して「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」までの5段階で評価してもらう。得点化は「あてはまる（4点）」から「あてはまらない（0点）」まで1点刻みとした。そこで、全データを用いた1項目あたりの平均値は0点から4点の範囲をとり、各下位尺度全8項目の合計得点の範囲は0点から32点となる。

なお、尺度作成時の分析結果を整理して公表した「2019年調査」に関する資料（労働政策研究・研修機構,2020）では、分析対象者は在学者と在職者をあわせた合計2393名であるが、今回の「2020年調査」は在学者だけで構成されるデータなので、比較のため「2019年調査」のデータについても第3章および第4章と同じく在学者で正社員経験のない490名の回答だけを取り出して分析をやり直した。そこで、前掲の資料とは一部、結果の数値が異なっている部分がある。

3. 自己成長尺度の検討

「2019年調査」における自己成長尺度作成の際には17項目を対象として主成分分析を行い、各項目の主成分負荷量および表現や内容に関して検討して、最終的に8項目を選んだ。

「2020年調査」では各尺度ともに既に選択された項目が用いられたので、自己成長尺度についても8項目で回答が集められている。そこで「2020年調査」の在学者データによる自己成長尺度8項目の主成分分析を行った。また、「2019年調査」についても在学者490名を用いたデータセットを作り、自己成長尺度8項目を取り出して主成分分析を実施した。尺度作成時に17項目から8項目を選んだ時に行った主成分分析の結果とともに「2019年調査」および「2020年調査」の在学者のデータセットによって算出した8項目の主成分負荷量、各項目の平均値（M）と標準偏差（SD）を図表5-2に示す。

「2019年調査」の在学者のみを取り出したデータの主成分分析では、第1主成分の固有値は4.83、「2020年調査」の主成分分析では第1主成分の固有値は5.10であり、どちらも第2主成分以下は1未満の値となった。各項目の主成分負荷量も比較的高い値となっており、どちらのデータに関しても自己成長尺度を構成する項目として特に不適切なものはなかった。信頼性を確認するため、8項目を用いてクロンバックの α 係数を算出したところ、「2019年調査（在学者のみ）」では.91、「2020年調査」では.92と高い値が得られた。

なお、各項目の平均値をみると、在職者を含む「2019年調査」の平均値が最も低く、次が

「2019年調査(在学者のみ)」で、「2020年調査」が最も高かった。「2019年調査」では8項目それぞれの平均値はすべて2点台であるが、「2020年調査」の平均値をみると2点台は1項目だけで、残りの7項目は3点台である。自己成長尺度全体の8項目合計の平均値を算出したところ「2019年調査」の在学者では21.81(SD=6.21)、「2020年調査」では24.78(SD=6.01)となり、「2020年調査」の方が、全体として各項目および尺度全体の評定が高いことが示された。

図表 5-2 自己成長尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値(M)および標準偏差(SD)

採用の8項目	項目番号	想定概念の項目番号	項目内容	2019年調査在職者含む (n=2393)			2019年調査在学者のみ (n=490)			2020年調査在学者のみ (n=1161)		
				主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D
○	36	自己成長6	職業を通して、自分を向上させていきたい	.80	2.59	(1.06)	.82	2.77	(1.01)	.78	3.19	(.99)
○	21	自己成長4	自分の才能を少しでも伸ばせる仕事に就きたい	.79	2.44	(1.04)	.76	2.64	(1.02)	.80	3.15	(.92)
○	87	自己成長15	自分の将来の目標につながるような仕事をしたい	.79	2.47	(1.03)	.79	2.68	(1.02)	.83	3.04	(.97)
○	25	自己成長5	仕事を通して成長できるような働き方が理想だ	.78	2.53	(1.07)	.80	2.69	(1.00)	.88	3.07	(.97)
—	41	自己成長7	仕事を通して自分のやりたいことを追求したい	.78	2.51	(1.06)						
○	72	自己成長12	仕事を通して自己実現は自分にとって大事なことだ	.78	2.37	(1.03)	.79	2.61	(.98)	.83	2.95	(.95)
○	92	自己成長14	一生懸命に仕事をして少しでもよい成果をおさめたい	.75	2.51	(1.01)	.76	2.66	(.99)	.73	3.00	(.93)
○	30	自己成長17	人生を通してずっと夢中になれるような仕事をもちたい	.74	2.64	(1.06)	.74	2.89	(1.01)	.75	3.16	(.93)
—	46	自己成長8	自分自身が打ち込める仕事をしたい	.72	2.83	(.99)						
—	61	自己成長11	仕事を通して自分の価値を高めたい	.72	2.33	(1.16)						
—	56	自己成長10	良い仕事をすることは私にとっての生きがいだと思う	.71	2.34	(1.08)						
—	1	自己成長1	自分の能力や個性を発揮できる仕事をしたい	.71	2.72	(1.06)						
○	51	自己成長9	やりがいを感じられる仕事に就くことが理想だ	.70	2.70	(1.01)	.75	2.87	(.96)	.78	3.21	(.88)
—	82	自己成長16	仕事をする上で周りの人に頼られるような存在になりたい	.70	2.35	(1.09)						
—	16	自己成長3	自分の専門性を生かせるような仕事に就きたい	.67	2.37	(1.12)						
—	12	自己成長2	専門知識や経験を生かせる仕事に就きたい	.67	2.37	(1.06)						
—	77	自己成長13	個人の能力がみとめられる仕事環境は大切だ	.67	2.60	(.97)						

注:「採用の8項目」とは、2019年度調査において候補となる17項目を用いて分析した結果、尺度として採用された項目である。

4. 社会貢献尺度の検討

社会貢献尺度については尺度作成のための「2019年調査」において14項目を用いて主成分分析を行い、その中から8項目が選ばれた。「2019年調査」の在学者・在職者全体の主成分分析の結果とともに「2020年調査」と「2019年調査」の在学者による8項目の主成分分析による各項目の主成分負荷量、平均値(M)、標準偏差(SD)を図表5-3に示す。

「2019年調査」の在学者データについて8項目を取り出して主成分分析を行った結果、第1主成分の固有値は5.54で、第2主成分以下は1未満となった。「2020年調査」の主成分分析では第1主成分の固有値は5.79で同じく第2主成分以下の固有値は1未満であった。各項目の主成分負荷量もすべて.80以上の高い値となっている。尺度を構成する8項目による信頼性係数(クロンバックの α 係数)は、「2019年調査(在学者のみ)」では.94、「2020年調査」では.95となり、どちらも高い値が得られた。以上の結果から、「2019年調査」の在学者だけを取り出したデータおよび「2020年調査」のデータの両方に関して社会貢献尺度の8項目の信頼性は確認できた。なお、平均値をみると、個々の項目の平均値は「2019年調査」よりも

「2020年調査」の方が高くなっている。8項目合計の平均値と標準偏差を算出したところ、「2019年調査」の在学者データでは、平均値が19.25 (SD=7.28)、「2020年調査」では平均値が22.98 (SD=7.30)であり、「2020年調査」の方が各項目および社会貢献尺度全体としての合計点の平均値が高いことがわかった。これは前節の自己成長尺度の結果と同じ傾向である。

図表 5-3 社会貢献尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値 (M) および標準偏差 (SD)

採用の 8項目	項目 番号	想定概念の 項目番号	項目内容	2019年調査在職者含 む (n=2393)			2019年調査在学者の み (n=490)			2020年調査在学者の み (n=1161)		
				主成分 負荷量	M	SD	主成分 負荷量	M	SD	主成分 負荷量	M	SD
○	53	社会貢献9	世の中のためになるような職業を選びたい	.87	2.18	(1.09)	.88	2.42	(1.07)	.84	3.01	(1.09)
—	44	社会貢献12	自分のためだけでなく、人のためにもなるような仕事に就きたい	.84	2.33	(1.10)						
○	27	社会貢献5	何らかの形で人を支えたり、助けるような仕事がしたい	.84	2.31	(1.10)	.86	2.53	(1.06)	.88	2.93	(1.04)
○	37	社会貢献7	より良い社会にしていけるための仕事をしたい	.83	2.19	(1.12)	.82	2.40	(1.11)	.84	2.85	(1.08)
○	23	社会貢献2	困っている人たちのために力を尽くしたい	.83	2.20	(1.11)	.85	2.46	(1.09)	.87	2.87	(1.09)
○	3	社会貢献1	仕事を通してなにか社会貢献ができるとうよい	.82	2.30	(1.16)	.84	2.57	(1.08)	.89	2.91	(1.05)
○	18	社会貢献3	社会で必要とされていることをしたい	.81	2.22	(1.13)	.83	2.47	(1.09)	.83	3.04	(1.01)
○	32	社会貢献4	地域や社会のために自分の力を生かしたい	.80	1.97	(1.18)	.82	2.22	(1.12)	.87	2.83	(1.09)
—	73	社会貢献13	人々の幸福に直接結びつくような仕事をしたい	.79	2.20	(1.08)						
○	63	社会貢献11	公共の福祉につながるような仕事や活動をしてみたい	.77	1.92	(1.14)	.77	2.17	(1.14)	.77	2.53	(1.14)
—	89	社会貢献6	社会全体のことを考えて行動することは大事だ	.71	2.27	(1.03)						
—	93	社会貢献14	自分の仕事が人のためになるとうれい	.69	2.67	(1.05)						
—	48	社会貢献8	自分の住んでいる町や生まれ育った地域のために働きたい	.60	1.89	(1.14)						
—	84	社会貢献15 (※)	仕事を選ぶ時、社会貢献できるかどうかは考えない	-.25	1.75	(1.08)						

注1:「採用の8項目」とは、2019年度調査において候補となる14項目を用いて分析した結果、尺度として採用された項目である。

注2: ※印は逆転項目として作成され主成分負荷量も負のため、得点化を逆転させて平均値を算出している。

5. 地位尺度の検討

地位尺度については尺度作成のための「2019年調査」において14項目を用いて主成分分析を行い、その中から8項目が選ばれた。「2019年調査」の在学者・在職者全体の主成分分析の結果とともに「2020年調査」と「2019年調査」の在学者による8項目の主成分分析による各項目の主成分負荷量、平均値 (M)、標準偏差 (SD) を図表 5-4 に示す。

主成分分析の結果「2019年調査 (在学者のみ)」の第1主成分の固有値は4.58、「2020年調査」の第1主成分の固有値は4.78となり、どちらも第2主成分以下の固有値は1未満となった。各項目の主成分負荷量をみると「2020年調査」の項目番号62「世間的に知名度の高い会社で働けるとよい」だけが.67で最も低かったが、そのほかは全体として.70から.80程度と比較的高い数値となった。8項目で信頼性係数 (クロンバックの α 係数) を算出したところ「2019年調査 (在学者のみ)」では.89、「2020年調査」では.90となり、高い値が得られた。そこで、どちらのデータでも地位尺度8項目において信頼性は確保されていると解釈した。なお、自己成長尺度、社会貢献尺度と同様に「2020年調査」の各項目の平均値は「2019年調査」の平均値よりも高かった。8項目の合計の平均値を算出したところ、「2019年調査 (在学者のみ)」では16.19 (SD=6.88)、「2020年調査」では18.13 (SD=7.37) となった。

図表 5-4 地位尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値 (M) および標準偏差 (SD)

採用の 8項目	項目 番号	想定概念の 項目番号	項目内容	2019年調査在職者含 む (n=2393)			2019年調査在学者の み (n=490)			2020年調査在学者の み (n=1161)		
				主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D
○	57	地位10	仕事を選ぶ時、社会的な地位の高さは重要な条件だ	.80	1.76	(1.10)	.78	1.96	(1.06)	.72	2.29	(1.16)
○	17	地位3	世間の注目を集めるような成果をあげたい	.78	1.67	(1.15)	.74	1.81	(1.13)	.75	2.14	(1.21)
○	47	地位8	社会的地位の高い仕事にあこがれる	.78	1.90	(1.18)	.78	2.11	(1.13)	.83	2.29	(1.21)
○	67	地位11	仕事でがんばって他の人より出世したい	.77	1.90	(1.19)	.78	2.19	(1.14)	.83	2.42	(1.18)
○	62	地位12	世間的に知名度の高い会社で働けるとよい	.77	1.89	(1.15)	.72	2.06	(1.19)	.67	2.23	(1.18)
○	42	地位7	会社に入ったら高い地位をめざしたい	.77	1.91	(1.18)	.73	2.17	(1.13)	.81	2.38	(1.19)
○	22	地位4	仕事の世界で成功して有名になりたい	.76	1.58	(1.20)	.73	1.75	(1.21)	.75	1.97	(1.27)
○	26	地位5	仕事で高い評価を受けて世間に認められたい	.76	1.98	(1.15)	.78	2.16	(1.11)	.82	2.40	(1.17)
—	83	地位14	大手の企業で働けば自分の価値を高められる気がする	.72	1.79	(1.11)						
—	2	地位1	時代の最先端をいくような仕事に就いてみたい	.70	1.89	(1.17)						
—	31	地位6	雑誌や新聞で取り上げられるような仕事に就きたい	.68	1.31	(1.14)						
—	88	地位15	働くなら規模の大きい会社の方がよい	.64	2.02	(1.09)						
—	7	地位2	地味で目立たない仕事には就きたくない	.64	1.34	(1.07)						
—	78	地位13	大手有名企業に勤めれば周りからよい評価をもらえと思う	.60	1.98	(1.11)						

注: 「採用の8項目」とは、2019年度調査において候補となる14項目を用いて分析した結果、尺度として採用された項目である。

6. 経済性尺度の検討

経済性尺度については尺度作成のための「2019年調査」において12項目を用いて主成分分析を行い、その中から8項目が選択された。「2019年調査」の在学者・在職者全体の主成分分析の結果とともに「2020年調査」と「2019年調査(在学者のみ)」による8項目の主成分分析による各項目の主成分負荷量、平均値(M)、標準偏差(SD)を図表5-5に示す。

主成分分析の結果、第1主成分の固有値は「2019年調査(在学者のみ)」では4.33、「2020年調査」では4.44で、どちらも第2主成分以下は1未満となった。各項目の主成分負荷量をみると、全体として.60以上となった。「2019年調査(在学者のみ)」では、項目番号28「自分がやりたい仕事でも収入が少ない場合にはためらいを感じる」および項目番号43「経済的な成功は仕事をする上での大きな目標である」がそれぞれ.69と.67でやや低く、「2020年調査」ではNO.28の項目の値が.68で8項目中最も低かった。他方、8項目全体での信頼性係数(クロンバックの α 係数)を算出したところ、「2019年調査(在学者のみ)」と「2020年調査」の両方において.88となり、尺度としての信頼性の高さが確認された。なお、この尺度においても「2020年調査」の各項目の平均値は「2020年調査(在学者のみ)」よりも高かった。8項目合計の平均値を算出したところ、「2019年調査(在学者のみ)」では20.76(SD=5.98)、「2020年調査」では22.30(SD=6.09)であり、経済性尺度全体の得点も「2020年調査」の方が高いことがわかった。

図表 5-5 経済性尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値(M)および標準偏差(SD)

採用の 8項目	項目 番号	想定概念の 項目番号	項目内容	2019年調査在職者含む (n=2393)			2019年調査在学者の み(n=490)			2020年調査在学者のみ (n=1161)		
				主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D
○	64	経済性11	高い給料の仕事に就いて、よい生活を送りたい	.79	2.61	(1.08)	.81	2.71	(1.05)	.79	3.00	(1.02)
○	59	経済性10	給料が高いことは仕事の意欲を高めると思う	.72	2.77	(1.02)	.77	2.86	(1.00)	.70	3.24	(.89)
○	9	経済性1	仕事を選ぶ際の重要な基準は、給料の高さである	.72	2.33	(1.02)	.78	2.40	(.99)	.81	2.55	(1.10)
○	69	経済性12	自分の理想とする生活を送るためには高収入は不可欠だ	.71	2.25	(1.08)	.72	2.32	(1.10)	.78	2.57	(1.10)
○	28	経済性5	自分がやりたい仕事でも収入が少ない場合にはためらいを感じる	.69	2.42	(1.05)	.69	2.49	(.99)	.68	2.63	(1.04)
○	4	経済性2	給料が低い仕事には興味がない	.69	2.43	(1.06)	.72	2.43	(1.04)	.73	2.36	(1.08)
○	43	経済性8	経済的な成功は仕事をする上での大きな目標である	.67	2.39	(1.09)	.67	2.57	(.99)	.76	2.80	(1.04)
○	54	経済性9	お金をかせぐことや貯めることは自分にとって大切なことだ	.64	2.92	(.99)	.72	3.01	(.96)	.70	3.16	(.88)
—	79	経済性14	一生懸命働いて財産をつくることは大事なことだ	.61	2.78	(1.00)						
—	13	経済性3	仕事が多きつなくても給料が高ければまんして働く	.58	2.10	(1.10)						
—	38	経済性6(※)	給料が多少低くても仕事のやりがいの方が大事だ	-.05	1.90	(1.05)						
—	24	経済性4	収入の多い仕事なら、仕事の内容はそれほど気にしない	.52	1.81	(1.07)						

注1:「採用の8項目」とは、2019年度調査において候補となる12項目を用いて分析した結果、尺度として採用された項目である。

注2:※印は逆転項目として作成され主成分負荷量も負のため、得点化を逆転させて平均値を算出している。

7. 仕事と生活のバランス尺度の検討

仕事と生活のバランス尺度については尺度作成のための「2019年調査」において15項目を用いて主成分分析を行い、その中から8項目が選ばれた。「2019年調査」の在学者・在職者全体の主成分分析の結果とともに「2020年調査」と「2019年調査」の在学者による8項目の主成分分析による各項目の主成分負荷量、平均値(M)、標準偏差(SD)を図表5-6に示す。

主成分分析の結果、第1主成分の固有値は「2019年調査(在学者のみ)」では4.33、「2020年調査」では4.16となった。第2主成分以下は1未満であった。

「仕事と生活のバランス」尺度の項目は、尺度開発時の「2019年調査」(在職者含む)の平均値にみられるように、すべての項目に対する得点が高めで3.0以上の項目も多かったため、天井効果を考慮して主成分負荷量の高さに順に項目を選定していない。そこで「2019年調査(在学者のみ)」と「2020年調査」の各項目の第1主成分に対する主成分負荷量に関して、若干低めの項目が混ざっている結果となった。例えば「2019年調査(在学者のみ)」では項目番号5「仕事とプライベートをはっきり区別したい」の主成分負荷量は.65、項目番号19「仕事や作業が進んでいなくても家では仕事をしたくない」では.63となった。また、「2020年調査」では上記2項目の主成分負荷量がそれぞれ.68と.54であった。その他の項目の第1主成分負荷量は.70以上となった。尺度を構成する8項目で信頼性係数(クロンバックの α 係数)を算出したところ、「2019年調査(在学者のみ)」では.88、「2020年調査」では.87となり、第1主成分負荷量が若干低い項目が含まれていたとしても8項目全体での信頼性の高さは確認できた。

なお、これまでの尺度と同様に各項目の平均値は「2019年調査(在学者のみ)」よりも「2020年調査」で高めとなっていた。8項目合計の平均値を算出した結果、「2019年調査(在学者のみ)」では22.99(SD=6.09)、「2020年調査」では25.09(SD=5.47)となった。

図表 5-6 仕事と生活のバランス尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値 (M) および標準偏差 (SD)

採用の 8項目	項目 番号	想定概念の 項目番号	項目内容	2019年調査在職者含 む (n=2393)			2019年調査在学者の み (n=490)			2020年調査在学者の み (n=1161)		
				主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D
-	75	バランス13	休みがしっかりとれる働き方をしたい	.79	3.11	(.96)						
○	60	バランス10	自分の時間がとれないような働き方はしたくない	.79	3.06	(.99)	.81	3.07	(.97)	.79	3.28	(.91)
○	49	バランス9	毎日、仕事だけに追われるような人生は送りたくない	.76	3.07	(1.01)	.82	3.03	(1.03)	.74	3.32	(.91)
-	65	バランス11	仕事もプライベートも無理のない生活をするのが望ましい	.75	3.08	(.98)						
-	34	バランス6	休日や休暇は仕事を忘れてリフレッシュするべきだ	.75	3.09	(1.00)						
○	14	バランス3	働くときには仕事と私生活のバランスを大切にしたい	.74	3.05	(.92)	.77	3.06	(.94)	.74	3.46	(.77)
-	85	バランス15	休みたいときに休めるような働き方がいい	.74	3.00	(.99)						
○	80	バランス14	毎日決まった時刻に帰れるような働き方をしたい	.71	2.79	(1.05)	.75	2.78	(1.05)	.72	2.99	(1.00)
-	70	バランス12	自由で、融通のきくような働き方が望ましい	.70	2.87	(.97)						
○	94	バランス8	仕事だけの生活は味気ない	.70	3.02	(1.03)	.73	2.96	(1.05)	.77	3.27	(.91)
○	10	バランス2	どんなに忙しくても休日に仕事の予定を入れることは避けたい	.65	2.67	(1.10)	.71	2.62	(1.15)	.75	2.94	(1.07)
-	29	バランス5	成果やノルマが厳しい仕事は避けたい	.64	2.88	(1.08)						
○	5	バランス1	仕事とプライベートは、はっきり区別したい	.63	2.99	(.99)	.65	2.98	(1.00)	.68	3.21	(.92)
-	39	バランス7	締め切りや期限に追われる働き方は嫌だ	.59	2.65	(1.07)						
○	19	バランス4	仕事や作業が進んでいなくても家では仕事をしたくない	.57	2.55	(1.14)	.63	2.49	(1.11)	.54	2.61	(1.15)

注:「採用の8項目」とは、2019年度調査において候補となる15項目を用いて分析した結果、尺度として採用された項目である。

8. 主体的進路選択尺度の検討

主体的進路選択尺度については尺度作成のための「2019年調査」において11項目を用いて主成分分析を行い、その中から8項目が選ばれた。「2019年調査」の在学者・在職者全体の主成分分析の結果とともに「2020年調査」と「2019年調査」の在学者による8項目の主成分分析による各項目の主成分負荷量、平均値 (M)、標準偏差 (SD) を図表 5-7 に示す。

8項目を用いた主成分分析の結果、第1主成分の負荷量は「2019年調査 (在学者のみ)」では3.91、「2020年調査」では3.80となり、第2主成分以下は1未満となった。また各尺度の主成分負荷量については.54から.79であり、「仕事選び基準尺度」の他の下位尺度と比べて低めの項目が含まれていた。例えば、項目番号66「やりたい仕事や、やりたくない仕事ははっきりしている」の主成分負荷量は「2019年調査 (在学者のみ)」では.59、項目番号35「自分の進路は今までずっと自分の考えで決めてきた」の主成分負荷量は「2020年調査」では.54となった。他方、8項目を用いて信頼性係数を算出したところ (クロンバックの α 係数)、「2019年調査 (在学者のみ)」では.85、「2020年調査」では.84となり、尺度としての信頼性は確認された。

加えてこの尺度についても各項目についての「2020年調査」の平均値が「2019年調査 (在学者のみ)」と比べて高くなっていた。8項目の合計得点の平均値と標準偏差を算出したところ、「2019年調査 (在学者のみ)」では22.48 (SD=5.56)、「2020年調査」では24.56 (SD=5.09)となった。

図表 5-7 主体的進路選択尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値(M)および標準偏差(SD)

採用の 8項目	項目 番号	想定概念の 項目番号	項目内容	2019年調査在職者含 む(n=2393)			2019年調査在学者の み(n=490)			2020年調査在学者の み(n=1161)		
				主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D	主成分 負荷量	M	S D
○	15	主体的進路選択3	仕事を選ぶ時に大事なのは自分がやりたいと思えるかどうかだ	.72	2.86	(.95)	.77	3.04	(.97)	.68	3.44	(.78)
○	91	主体的進路選択5	職業選択のときに一番大事なのは自分の意志だ	.70	2.79	(.98)	.74	2.93	(.99)	.79	3.30	(.84)
○	11	主体的進路選択2	周りの人が何といっても自分が選んだ仕事に就きたい	.70	2.49	(1.00)	.75	2.66	(1.00)	.73	2.88	(.95)
○	6	主体的進路選択1	自分でよく考えて進路や仕事を選びたい	.70	2.90	(.96)	.75	3.10	(.94)	.79	3.33	(.82)
○	40	主体的進路選択7	人が決めた進路や仕事に進んでもつまらないと思う	.67	2.58	(1.06)	.71	2.77	(1.03)	.65	2.89	(1.04)
○	20	主体的進路選択4	仕事を選ぶ時には自分の能力が生かせるかどうかを重視する	.64	2.42	(1.01)	.65	2.68	(.97)	.68	3.07	(.93)
○	66	主体的進路選択11	やりたい仕事や、やりたくない仕事はっきりしている	.62	2.72	(1.02)	.59	2.72	(1.01)	.61	2.92	(1.02)
○	35	主体的進路選択6	自分の進路は今までずっと自分の考えで決めてきた	.59	2.54	(1.09)	.61	2.58	(1.08)	.54	2.73	(1.11)
-	81	主体的進路選択14	やりたい仕事に関して、自分で積極的に調べている	.54	2.20	(1.12)						
-	71	主体的進路選択12	自分の意志で決めたのなら就職してうまくいかなくても後悔しない	.47	2.12	(1.06)						
-	55	主体的進路選択10	自分にとって向いていない仕事ははっきりわかっている	.55	2.61	(1.11)						

注:「採用の8項目」とは、2019年度調査において候補となる11項目を用いて分析した結果、尺度として採用された項目である。

9. まとめ

以上、「仕事選び基準尺度」に含まれる6つの下位尺度について「2019年調査(在学者のみ)」と「2020年調査」のデータセットそれぞれを用いて、尺度構造や信頼性について検討した。図表 5-8 は、各尺度8項目の信頼性係数について、尺度作成時の「2019年調査(在職者含む)」と「2019年調査(在学者のみ)」と「2020年調査」のそれぞれで算出した値をまとめた表である。これをみると、尺度によっては一部の項目の主成分負荷量がやや低めであったが、8項目全体の信頼性係数としては十分に高い値が得られていることがわかる。

図表 5-8 各データセット別にみた6つの下位尺度の信頼性係数

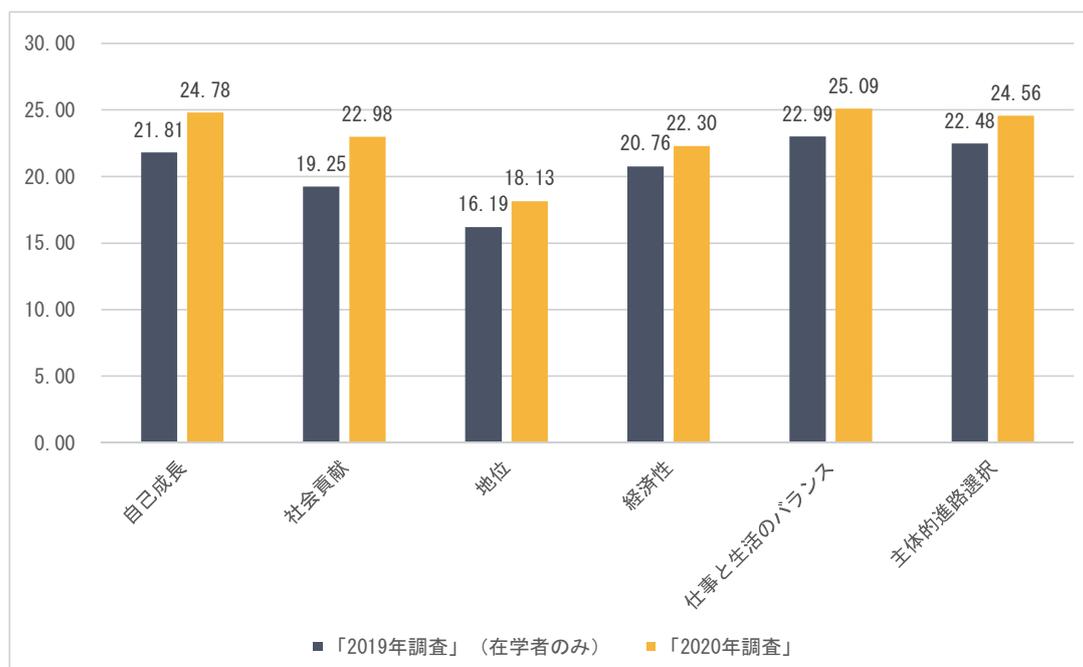
下位尺度	「2019年調査」 (在職者含む) n=2393	「2019年調査」 (在学者のみ) n=490	「2020年調査」 n=1161
自己成長	.91	.91	.92
社会貢献	.94	.94	.95
地位	.92	.89	.90
経済性	.86	.88	.88
仕事と生活のバランス	.87	.88	.87
主体的進路選択	.84	.85	.84

他方、6つのすべての下位尺度で共通にみられたことであったが、「2020年調査」の各項目の平均値が「2019年調査(在学者のみ)」よりも高くなっていた。8項目合計の平均値(M)と標準偏差(SD)を2つのデータセットについてまとめたものが図表 5-9 である。そして平均値をグラフにしたものを図表 5-10 に示す。

図表 5-9 各データセット別の 6 つの下位尺度の平均値 (M) と標準偏差 (SD)

下位尺度	「2019年調査」 (在学者のみ) n=490		「2020年調査」 n=1161	
	M	SD	M	SD
自己成長	21.81	(6.21)	24.78	(6.01)
社会貢献	19.25	(7.28)	22.98	(7.30)
地位	16.19	(6.88)	18.13	(7.37)
経済性	20.76	(5.98)	22.30	(6.09)
仕事と生活のバランス	22.99	(6.09)	25.09	(5.47)
主体的進路選択	22.48	(5.56)	24.56	(5.09)

図表 5-10 「2019年調査 (在学者のみ)」と「2020年調査」の各下位尺度の平均値



このグラフをみると、「2019年調査 (在学者のみ)」に比べて「2020年調査」の平均値はどの下位尺度でも高く、特に「自己成長」と「社会貢献」で高くなっていることがわかる。

一方で、調査年ごとにみると、まず「2019年調査 (在学者のみ)」では、高い順に「仕事と生活のバランス」、「主体的進路選択」、「自己成長」、「経済性」、「社会貢献」、「地位」であった。「2020年調査」では同じく高い順に「仕事と生活のバランス」、「自己成長」、「主体的進路選択」、「社会貢献」、「経済性」、「地位」となっていた。全体の得点の高低の傾向は似ているが、「2020年調査」で「自己成長」と「社会貢献」の得点が高くなっているために尺度の順位として入れ替わっている部分があった。

どちらのデータも高等教育課程の在学者のみで構成されており、所属学科等についてもほとんど違いはないことを属性に関して確認しているため、尺度全体の平均値が「2020年調査」において高かったことの原因は不明である。属性の違いの影響の可能性があるとすれば、「2019年調査」の在学者の方が「2020年調査」の在学者よりも18～20歳の割合が多く、高等教育課程での1年生と2年生の割合が多いことくらいであろう。ただ、学年が高くなると仕事選び基準尺度の尺度値が高くなるということの因果関係は今回のデータだけで明らかにすることはできない。

なお、2つのデータセットでの各尺度の平均値の水準に一貫した違いがみられたことにより、これらの尺度について大学生等のデータによる基準の作成を試みる時、どちらの得点水準が一般的なのかを考える必要が生じた。つまり、「2020年調査」のデータによって算出された値が高等教育課程の在学者一般の平均値の水準に近いのか、それとも高めなのかということである。

この点については、高等教育課程在学者のために新たに作成した基礎的性格特性尺度および基礎的生活特性尺度の得点傾向も踏まえた上で、本資料の後半において再度検討することにした。

引用文献

労働政策研究・研修機構（2020）。「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 ―大学生等の就職支援のための尺度の開発―」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第6章 基礎的性格特性尺度の構造に関する検討

1. 「基礎的性格特性尺度」について

本章では、前章に引き続き、「基礎的性格特性尺度」の構造が、「2019年調査」と「2020年調査」の2つのデータセットにおいて同程度に保たれているかどうかの検討を行う。

「基礎的性格特性尺度」とは、世の中に様々存在する性格特性の中でも、特に「働くこと」に影響すると考えられる性格特性に絞り込んで検討し、作成された尺度で、「気持ちの切り替え」と「外界への積極性」という2つの下位尺度から構成される。各下位尺度は、前章で検討された「仕事選び基準尺度」と同様に、それぞれ8項目から構成される。ある場面に対する個人の考え方や対処の仕方、態度に関する様々な記述に対して、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらともいえない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」までの5段階評価で回答する形式となっている。各回答値を、「あてはまる」(4点)～「あてはまらない」(0点)までの1点刻みで得点化し、単純な合計得点をその下位尺度の得点としている。したがって、各下位尺度(全8項目)の合計得点の範囲は、最低0点～最高32点となる。

次節から、各下位尺度の分析結果を具体的に検討したい。⁶

2. 気持ちの切り替え尺度の検討

気持ちの切り替え尺度の作成は、「2019年調査」の結果を使用して次のように行われた(労働政策研究・研修機構, 2020)。ストレス耐性概念に関連した16項目について、抽出する主成分数を1に固定した主成分分析を行い、主成分負荷量の高い項目を中心に8項目を選定した。図表6-1では3つのデータセット、すなわち、①「2019年調査」全データセット(在学者・在職者双方含む。n=2393)、②「2019年調査」から正社員経験のない在学者のみを抜き出したデータセット(n=490)、③「2020年調査」(在学者のみ)のデータセット(n=1161)について、各項目の主成分負荷量、平均値(M)、標準偏差(SD)を示した。

まず、主成分分析の結果から報告する。「2019年調査」全データセットでの第1主成分の固有値は5.61、第2主成分は1.88となった。一方で、「2019年調査」の在学者のみのデータセットでは第1主成分の固有値が4.49、「2020年調査(在学者のみ)」の第1主成分の固有値は4.95となった。「2019年調査」在学者のみのデータセットと、「2020年調査(在学者のみ)」のデータセットは両方とも、第2主成分以下の固有値が1未満となった。各項目の主成分負荷量についてみると、在学者のみ2つのデータセットにおいてはほぼ同様の数値であり、負

⁶ 本章の分析も前章と同一のプロセスで実施している。そのため、在学者だけで構成される「2020年調査」と厳密な比較を行うために、「2019年調査」データから在学者でかつ正社員経験のない490名を取り出して分析を行っている。したがって、労働政策研究・研修機構(2020)の結果と数値が一部異なる点にご留意いただきたい。

荷量の大きさの順序も、若干の入れ替えはあるものの大きな変動はみられなかった。

続いて、在学者に関する2つのデータセットに着目して、平均値と標準偏差について確認した。標準偏差については、両データセットとも大きな変動はみられなかったが、平均値については、全ての項目で「2020年調査」の方が高い傾向が確認された。特に、項目番号12「嫌なことがあっても、その経験を良い方向に考えることができる」と、項目番号36「人に叱られても長く落ち込むことはない」は、0.3ポイント以上高いことが示された。

図表 6-1 気持ちの切り替え尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値 (M) および標準偏差 (SD)

採用の 8項目	項目 番号	項目内容	2019年調査在職者含む (n=2393)			2019年調査在学者のみ (n=490)			2020年調査在学者のみ (n=1161)		
			主成分 負荷量	M	SD	主成分 負荷量	M	SD	主成分 負荷量	M	SD
○	22	失敗の経験をしても、気持ちの切り替えができる	.82	2.09	1.13	.80	2.16	1.15	.82	2.32	1.21
○	15	非常にながかりすることがあっても、そのうちに気分転換できる	.79	2.15	1.17	.81	2.26	1.16	.82	2.37	1.21
○	1	つらいことがあっても苦しい感情で長い間悩むことは少ない	.76	1.77	1.25	.75	1.86	1.28	.81	2.11	1.24
○	61	嫌なことを経験しても、淡々と受け流せる方だ	.74	1.79	1.10	.74	1.85	1.15	.83	2.08	1.18
○	12	嫌なことがあっても、その経験を良い方向に考えることができる	.73	2.02	1.09	.73	2.12	1.11	.78	2.45	1.15
○	36	人に叱られても長く落ち込むことはない	.72	1.61	1.21	.75	1.68	1.21	.81	1.99	1.23
○	44	日頃から気晴らしをすることがうまいと思う	.72	1.92	1.11	.70	1.97	1.09	.71	2.24	1.17
○	29	自分の過去の失敗をあとになってから悔やむことは少ない	.70	1.69	1.14	.72	1.68	1.18	.70	1.78	1.22
—	63	つらいことがあった場合、それについてあまり考えないようにする	.63	1.96	1.09						
—	26	先のことをくよくよ考えてもしかたがない	.53	2.33	1.04						
—	50	困ったときに相談できる人が身近にいる	.47	2.32	1.20						
—	39	つらい時や困ったときには誰かに相談する方だ	.31	2.04	1.18						
—	9	困難なことが重なると、どうしていいかわからなくなる	-.27	2.46	1.11						
—	33	つらいことがあった場合、自分には対処できないとあきらめる	-.18	2.04	1.01						
—	5	日ごろ、物事を難しく考えるクセがある	-.13	2.37	1.10						
—	18	誰でも多かれ少なかれ悩みはもっていると思う	.09	3.19	.96						

注) 主成分負荷量の.6以上を太字とした。

3. 外界への積極性尺度の検討

外界への積極性尺度は、「2019年調査」で当初想定されていた「柔軟性」と「こだわりのなさ」という概念が統合され、安定的に解釈可能な1因子として抽出された9項目の中の8項目が選定されたものである。図表 6-2 は、「2019年調査」全データセット (n=2393)、「2019年調査」の在学者のみのデータセット (n=490)、「2020年調査」(在学者のみ) のデータセット (n=1161) という3つのデータセットにおける、各項目の主成分負荷量、平均値 (M)、標準偏差 (SD) を示したものである。

主成分分析の結果、「2019年調査」全データセットでの第1主成分の固有値は3.81、第2主成分は1.04となった。一方で、「2019年調査」の在学者のみのデータセットでは、第1主成分の固有値が3.48、「2020年調査(在学者のみ)」の第1主成分の固有値は3.91となった。

「2019年調査」在学者のみのデータセットと、「2020年調査（在学者のみ）」のデータセットは両方とも、第2主成分以下の固有値は1未満となった。

在学者のみの2つのデータセットに着目して、各項目の主成分負荷量について比較してみると、一部の項目で、負荷量の大きさが大きく異なるものがあった。例えば、項目番号51「異なる考えの人と交流することも時には大事だ」は、「2020年調査」では.74であり全項目の中で最も高い負荷量となったが、「2019年調査」では.67であり、負荷量の高い順からみても中程度であった。項目番号32「いろいろな人と交流して、自分の考えや価値観を変えていきたい」も、「2020年調査」では.73で全8項目中上位の負荷量となったが、「2019年調査」では.66となり、8項目の中では下位に位置していた。一方で、「2020年調査」は、「2019年調査」と比較して、8項目全体についての負荷量が全般的に高くまとまる傾向がみられた。例えば、項目番号55「自分の意見や考えを他の人に積極的に伝えたい」は、「2019年調査」では最下位となり.6未満の負荷量となったが、「2020年調査」では.65となり、主成分としてのまとまりは「2019年調査」よりも良好であった。それは先に示した第1主成分の固有値が、3つのデータセットの中で最も高かったことから裏付けられている。

続いて、在学者に関する2つのデータセットに着目して、平均値と標準偏差を確認した。標準偏差については、両データセットとも大きな変動は確認されなかった。一方、平均値については、全ての項目で「2020年調査」の方が高い傾向が確認された。特に高かったのは、項目番号32「いろいろな人と交流して、自分の考えや価値観を変えていきたい」で、「2019年調査」の在学者よりも0.45ポイント高かった。他にも、項目番号55「自分の意見や考えを他の人に積極的に伝えたい」、項目番号51「異なる考えの人と交流することも時には大事だ」、項目番号57「何かを最初からやり直すことになっても受け入れられる」、項目番号7「あれこれと色々なやり方や方法を考えたりするのが好きだ」の4項目で、0.3ポイント以上高いことが示されていた。

図表 6-2 外界への積極性尺度の主成分分析の結果と各項目の平均値(M)および標準偏差(SD)

採用の 8項目	項目 番号	項目内容	2019年調査在職者含む (n=2393)			2019年調査在学者のみ (n=490)			2020年調査在学者のみ (n=1161)		
			主成分 負荷量	M	SD	主成分 負荷量	M	SD	主成分 負荷量	M	SD
○	19	いろいろなことに好奇心をもって取り組んでいける	.74	2.45	1.08	.71	2.56	1.06	.70	2.79	1.07
○	7	あれこれと色々なやり方や方法を考えたりするのが好きだ	.70	2.37	1.04	.67	2.45	1.06	.73	2.77	1.05
○	11	計画していたことがだめになっても新しく考えなおせばよい	.67	2.39	1.01	.70	2.47	.99	.70	2.74	.96
○	40	既にやり方が決まっていますが、良い方法が見つければ変更を考える	.67	2.58	.96	.68	2.68	.95	.70	2.87	.88
○	51	異なる考えの人と交流することも時には大事だ	.66	2.65	.97	.67	2.78	.97	.74	3.12	.91
○	32	いろいろな人と交流して、自分の考えや価値観を変えていきたい	.65	2.27	1.02	.66	2.41	1.04	.73	2.86	1.01
○	57	何かを最初からやり直すことになっても受け入れられる	.64	2.16	1.03	.60	2.14	1.08	.63	2.47	1.04
○	55	自分の意見や考えを他の人に積極的に伝えたい	.59	1.97	1.05	.57	2.07	1.06	.65	2.43	1.08
—	3	人が思いつかないようなアイデアを思いつくことが多い	.51	1.74	1.12						

注) 主成分負荷量の.6以上を太字とした。

4. 信頼性係数の検討と全体のまとめ

2つの下位尺度について、それぞれの信頼性係数を示したのが図表 6-3 である。これを見ると、在学者のみの「2020年調査」では、2つの尺度とも信頼性係数が向上し、気持ちの切り替え尺度では.91、外界への積極性尺度では.85 という高い値が得られた。したがって、当
下位尺度の信頼性は十分に高いことが示されたと言える。

図表 6-3 データセット別・基礎的性格特性尺度の2つの下位尺度に関する信頼性係数

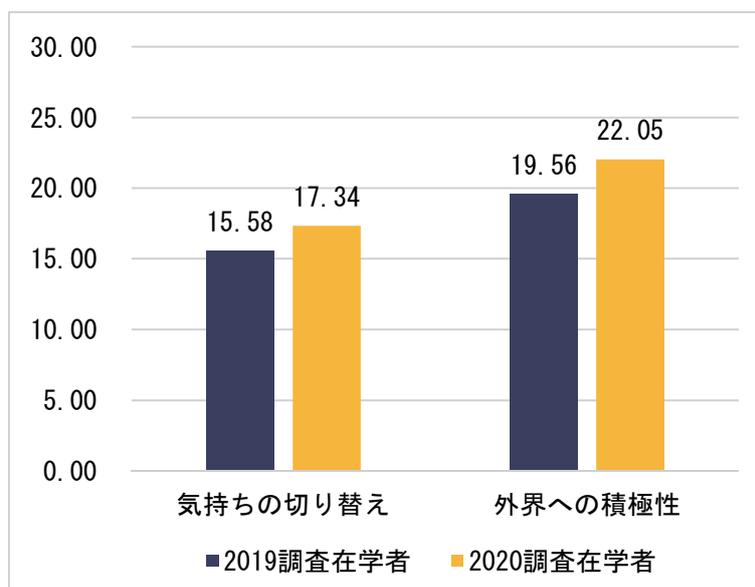
下位尺度	2019年調査 (在職者含む)	2019年調査 (在学者)	2020年調査 (在学者)
	n=2393	n=490	n=1161
気持ちの切り替え	.90	.89	.91
外界への積極性	.82	.81	.85

各下位尺度8項目の合計について、平均値(M)と標準偏差(SD)をまとめたのが図表 6-4 である。平均値についてはグラフでも示した(図表 6-5)。在学者のみのデータセットに着目して比較すると、両尺度とも「2020年調査」の平均値の方が高く、特に、外界への積極性尺度で差が大きい傾向があった。このように、「2020年調査」の平均値が高くなる傾向は、前章の仕事選び基準尺度での傾向とも共通していた。

図表 6-4 データセット別・2つの下位尺度平均値(M)と標準偏差(SD)

下位尺度	2019年調査 (在職者含む)		2019年調査 (在学者)		2020年調査 (在学者)	
	n=2393		n=490		n=1161	
	M	SD	M	SD	M	SD
気持ちの切り替え	15.05	6.99	15.58	6.99	17.34	7.55
外界への積極性	18.83	5.47	19.56	5.40	22.05	5.57

図表 6-5 「2019年調査（在学者のみ）」と「2020年調査」の各下位尺度の平均値



本章では、基礎的性格特性尺度の2つの下位尺度の構造について、在学者のみのデータを使った検討を行った。結果として、2つの下位尺度とも、「2020年調査」の平均値が全般的に高いことを除けば、主成分負荷量の構造は類似しており、尺度として一定の安定性を保っていたことが確認できた。特に信頼性係数に関しては、「2020年調査」の方が良好な値を示していた。

一方で、「2020年調査」の平均値が「2019年調査」と比べて全般的に高かった理由は不明である。現状の結果を確認すると、本章で検討した2つの下位尺度の中では、「外界への積極性」尺度において、「2020年調査」と「2019年調査」の差が顕著であった。前章の仕事選び基準尺度では、「社会貢献」尺度と「自己成長」尺度において差が顕著であったことを踏まえると、同じ在学者の中でも特に社会での活躍志向が強い層が、2020年調査のWEBモニターとして多く回答していた可能性も考えられる。

しかしながら、尺度の構造そのものについては、2つのデータセット間で特段の違いは確認されなかった。したがって、尺度の信頼性に関しては、労働政策研究・研修機構（2020）の結果を新規のデータセットで再現できたことになり、より頑健な証拠が得られたと結論づけられるだろう。

引用文献

労働政策研究・研修機構（2020）。「職業レディネス・テストの改訂に関する研究—大学生等の就職支援のための尺度の開発—」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第7章 基礎的生活特性尺度の構造に関する検討

1. 基礎的生活特性尺度

本尺度は社会生活を送る上で必要な心構えや行動の測定を目的に、職業レディネス・テストに追加する尺度として労働政策研究・研修機構（2020）にて新しく開発された尺度の1つである。大学生等の高等教育課程在学者や34歳以下の若年求職者にとって、時間管理や周囲の人々との接し方等日常生活の基礎となる信念を重視し、そして、そのような信念を日頃からよく行っていることは、就業への移行をスムーズに行うために重要であると考えられる。労働政策研究・研修機構（2020）ではこのような問題意識から本尺度の作成を行い、尺度構成の検討を行った。その結果、社会生活を送る上で必要となる心構えや信念を測定する「社会生活への心構え」尺度8項目と、日常生活において必須となる基礎的な行動がどの程度実行できているかを確認する「日常生活チェックリスト」10項目が得られた。

本章では、高等教育課程在学中の学生を対象とした本調査データ（「2020年調査」データと記す）において、2019年の調査データ（「2019年調査」データと記す）で得られた結果と比較しながら、尺度の構造や信頼性に関して報告する。

なお、「2019年調査」結果を報告した労働政策研究・研修機構（2020）では、分析対象となったデータは、「2020年調査」と異なり高等教育課程在学者だけではなく、在職者を含めた2393名であった。そこで、「2020年調査」結果との比較のため、前章までと同様に「2019年調査」データから高等教育課程在学者かつ正社員経験のない490名のデータを取り出し、再分析を行っている。労働政策研究・研修機構（2020）で示した高等教育課程在学者の分析結果とは対象者の選出が異なるため、分析結果が異なることをご了承いただきたい。

「社会生活への心構え」尺度への回答方法は5段階評価（1＝「あてはまらない」～5＝「あてはまる」）であった。一方、「日常生活チェックリスト」は「2019年調査」と異なり、チェックリスト機能をもたせるため3段階評価（1＝「できていない」、2＝「だいたいできている」、3＝「いつもできている」）で回答を求めている。労働政策研究・研修機構（2020）と同様に、職業レディネス・テストの得点範囲と揃えるため、得点を「社会生活への心構え」尺度は0～4点の5段階に、「日常生活チェックリスト」は0～2点の3段階へと変換を行った。以降の節で示す分析結果は、すべて変換後の得点を利用して分析した結果である。

2. 社会生活への心構え尺度の検討

「社会生活への心構え」尺度は2019年の尺度開発当時、因子分析の結果得られた9項目を対象に項目選定を実施した。具体的には得られた9項目に対して主成分分析を行った上で、質問項目の表現や項目文の長さ等を考慮し、8項目を選定している。そこで、「2020年調査」

データに関しても8項目を対象に主成分分析を実施した。「2019年調査」データに関しては、労働政策研究・研修機構（2020）に示した2393名データの分析結果の提示に加え、前節の通り490名の高等教育課程在学者データについても改めて分析を実施した。各調査データにおける各項目の主成分負荷量、平均値（M）および標準偏差（SD）を図表7-1に示す。

図表7-1 社会生活への心構え尺度の主成分負荷量、各項目平均値および標準偏差

採用項目	2019年度 項目番号	2020年度 項目番号	項目内容	2019年度調査						2020年度調査		
				在職者含む (n=2393)			在学者のみ (n=490)			(n=1161)		
				第1 主成分	M	SD	第1 主成分	M	SD	第1 主成分	M	SD
○	25	15	日頃の体調管理は重要だ	.75	2.91	0.98	.72	2.97	0.99	.67	3.29	0.85
○	11	3	約束の時刻には遅れないように気をつけている	.73	2.91	1.00	.69	2.93	1.04	.63	3.24	0.98
○	7	11	目上の人に対しては敬語を使うようにしている	.73	2.96	1.02	.72	3.11	0.96	.69	3.40	0.81
○	17	24	将来の生活設計を考えることは必要だ	.72	2.79	0.99	.69	2.81	1.00	.63	3.03	0.89
○	13	33	人との約束を急にキャンセルすることは少ない	.68	2.90	1.01	.68	2.98	1.03	.60	3.06	1.00
—	3	—	欲しい物があっても高額な場合は買う前によく考える	.66	2.93	1.07	.66	2.96	1.10	—	—	—
○	21	20	収入に見合った生活をするよう心がけている	.65	2.57	1.02	.63	2.62	1.07	.55	2.71	0.98
○	32	29	連絡をもらったら、すぐに返事をする方がよい	.64	2.71	0.97	.55	2.70	1.00	.59	2.88	0.98
○	27	7	日々、周りの人に挨拶をするよう心がけている	.62	2.53	1.07	.50	2.47	1.12	.53	2.80	1.04

主成分分析の結果を見ると、「2020年調査」データにおいても第1主成分のみが得られ、すべての項目で.50以上の負荷量が示された。したがって、「社会生活への心構え」を構成する項目としてこの8項目は適切であることが示唆された。

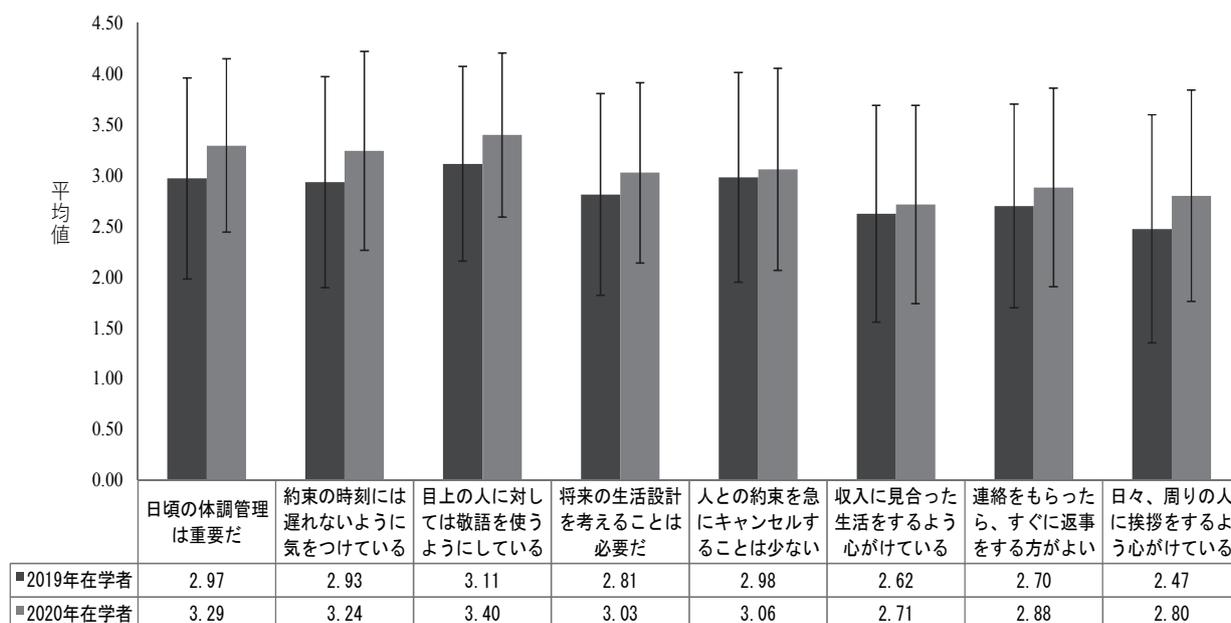
尺度の信頼性を検討するためクロンバックの α 係数を算出した。「2019年調査」データとあわせて図表7-2に示す。「2020年調査」データは $\alpha = .76$ と十分高い値であった。「2019年調査」の在学者データは $\alpha = .81$ と、「2020年調査」の結果よりもやや高い値であった。

図表7-2 社会生活への心構え尺度の信頼性係数

		α 係数
2019年	在職者含データ (n=2393)	.85
	在学者データ (n=490)	.81
2020年	(n=1161)	.76

本調査データおよび「2019年調査」の在学者データについて、各項目の平均値と標準偏差をグラフにして整理した（図表 7-3）。図表 7-3 から、「2020年調査」データの得点は「2019年調査」の在学者データよりも全体的にやや高い得点であること、しかし、各項目間の得点の高低は両データで類似していることが確認できる。

図表 7-3 「2020年調査」データと「2019年調査」在学者データの各項目平均値および標準偏差

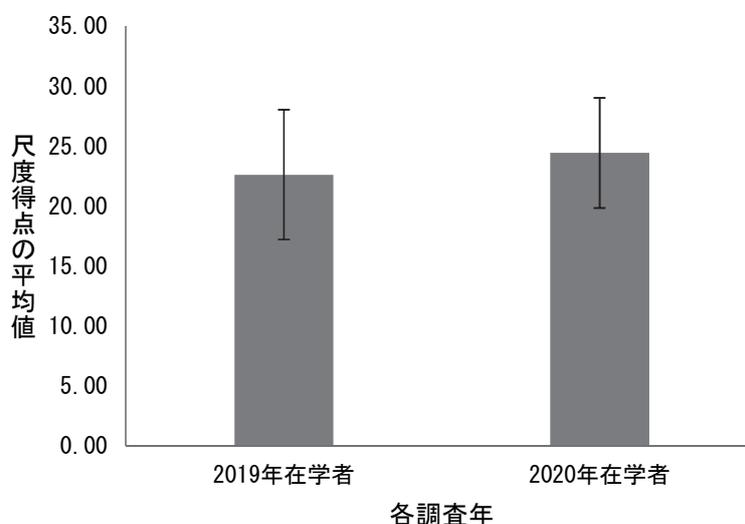


同様に両データの尺度得点の結果を示したものが図表 7-4 である。なお、尺度得点は 8 項目の合計得点（0～32 点の範囲）とした。さらに、「2020年調査」データと「2019年調査」の在学者データの尺度得点平均値と標準偏差をグラフに示した（図表 7-5）。図表 7-4、図表 7-5 を見ると、尺度得点で「2020年調査」データの結果の方が「2019年調査」の得点よりも高いことが読み取れる。

図表 7-4 社会生活への心構え尺度の尺度得点平均値および標準偏差

		M	SD
2019	在職者含データ (n=2393)	22.28	5.61
	在学者データ (n=490)	22.61	5.42
2020	(n=1161)	24.42	4.59

図表 7-5 「2020年調査」データと「2019年度調査」在学者データの尺度得点平均値(M)と標準偏差(SD)



3. 日常生活チェックリストの検討

日常生活チェックリストは、尺度として得点化するものではなく、個々の項目内容について、回答者が自らの遂行程度をチェックして生活態度を振り返るといった機能をもつものである。当初、「2019年調査」で基礎的生活特性尺度を構成する際には、前述の「社会生活への心構え」とともに2つめの因子としての尺度化を想定したため5段階評価としたが、分析の結果、因子2としてまとまった項目については、内容からみてチェックリストにした方がよいという意見もあり、「いつもできている」、「だいたいできている」、「できていない」という3段階評価でデータを集めることにした。ただ、3段階評価にした場合、この10項目についての回答の信頼性が保証できるかが不明であるため、「2020年調査」のデータにおいてその点を確認する。

日常生活チェックリストの10項目は、「2019年調査」のデータにより主成分分析の結果を踏まえて採用された(労働政策研究・研修機構,2020)。したがって、「2020年調査」のデータにおいても使用した10項目について主成分分析を実施した。「2019年調査」データに関しては、「社会生活への心構え」と同様に労働政策研究・研修機構(2020)で報告した2393名データの分析結果に加え、490名の高等教育課程在学者データを分析した。各調査データの各項目主成分負荷量、平均値(M)および標準偏差(SD)を図表7-6に示す。なお、「日常生活チェックリスト」は「2019年調査」では5段階で回答してもらっているが、「2020年調査」では評定段階を3段階としているため、得点の範囲が異なっている点に留意が必要である。

図表 7-6 日常生活チェックリストの主成分負荷量、各項目平均値および標準偏差

2019年度 項目番号	2020年度 項目番号	項目内容	2019年度調査 (5段階評価)								2020年度調査 (3段階評価)			
			在職者含む (n=2393)				在学者のみ (n=490)				(n=1161)			
			第1 主成分	第2 主成分	M	SD	第1 主成分	第2 主成分	M	SD	第1 主成分	第2 主成分	M	SD
20	2	自分の健康に気を配っている	.73	-.03	2.35	1.11	.71	-.01	2.39	1.13	.65	.43	1.09	0.71
28	1	普段から、身の回りの整理整頓をしている	.69	.08	2.24	1.13	.73	.04	2.16	1.18	.60	.14	0.83	0.72
24	9	将来の生活設計を立てている	.67	-.36	2.05	1.17	.64	-.28	2.01	1.19	.69	-.32	0.80	0.75
18	8	やるべきことを先延ばしにしない	.65	.09	2.32	1.10	.67	-.03	2.22	1.20	.67	-.26	0.78	0.74
26	7	大事なことには集中して取り組める	.65	.29	2.69	1.02	.54	.53	2.78	0.98	.60	-.39	1.27	0.70
12	4	身だしなみをきちんと整えている	.62	.35	2.68	1.03	.61	.49	2.74	1.04	.61	-.02	1.19	0.66
8	6	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	.62	-.49	1.86	1.19	.65	-.37	1.88	1.20	.70	-.25	0.71	0.74
22	10	忘れ物をしないよう外出前に確認している	.60	.43	2.64	1.03	.58	.49	2.69	1.10	.49	-.20	1.36	0.65
6	5	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	.59	-.26	1.99	1.20	.64	-.37	1.83	1.26	.63	.37	0.70	0.74
4	3	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	.59	-.35	1.94	1.17	.62	-.34	1.97	1.22	.59	.54	0.84	0.75

「2020年調査」データでも「2019年調査」データと同じく2つの主成分が得られたが、第2主成分に.60以上の負荷量を示した項目は見られなかった。ただし、「2020年調査」データでは項目3「普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う」が第1主成分、第2主成分ともに.50以上の負荷量を示している。しかし、「日常生活チェックリスト」は尺度得点の算出による解釈ではなく、各項目得点をそのまま解釈に利用することで各項目に示された行動について受検者が考えるきっかけを提供することを前提としている。したがって、当該の質問項目は除外せず、チェックリストの項目として含めることとした。

確認のため、10項目についてクロンバックの α 係数を算出したところ、「2020年調査」データでは $\alpha = .83$ と高い値が示され、信頼性も十分であると判断した。なお、「2019年調査」の在学者データについても $\alpha = .84$ と高い信頼性を示している。各データにおける「日常生活チェックリスト」の信頼性係数を図表7-7に示す。

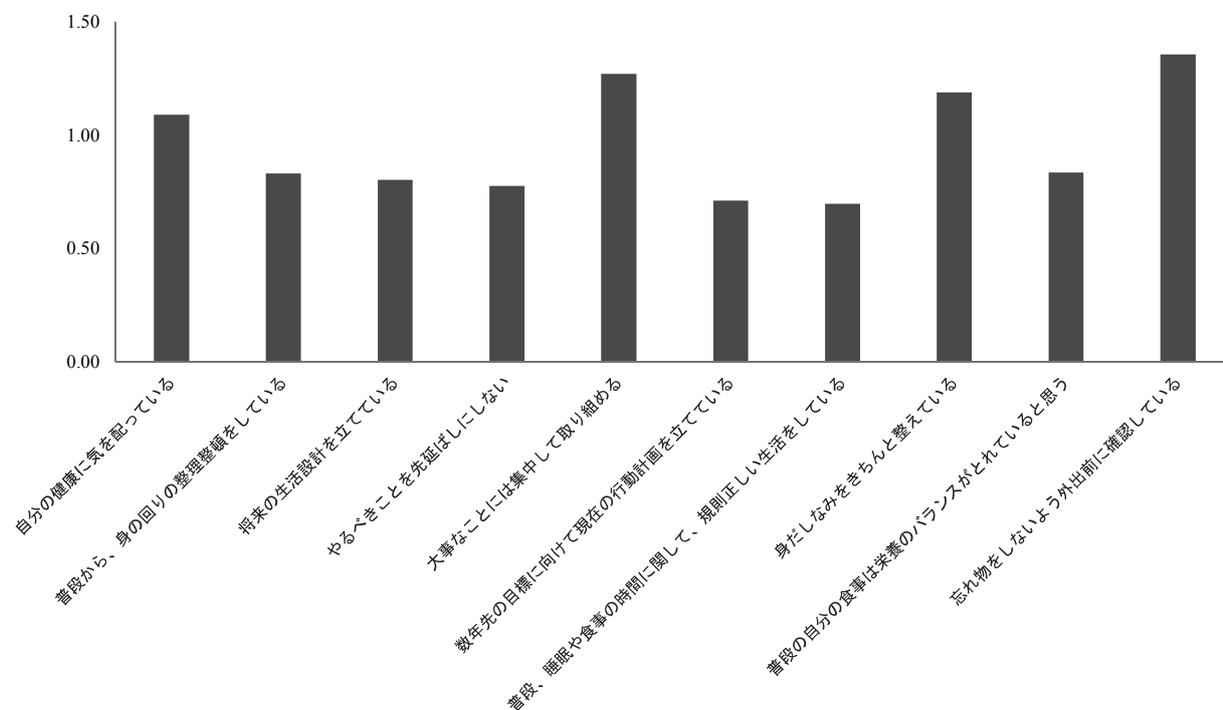
図表 7-7 各データにおける日常生活チェックリストの信頼性係数

		α 係数
2019	在職者含データ (n=2393)	.85
	在学者データ (n=490)	.84
2020	(n=1161)	.83

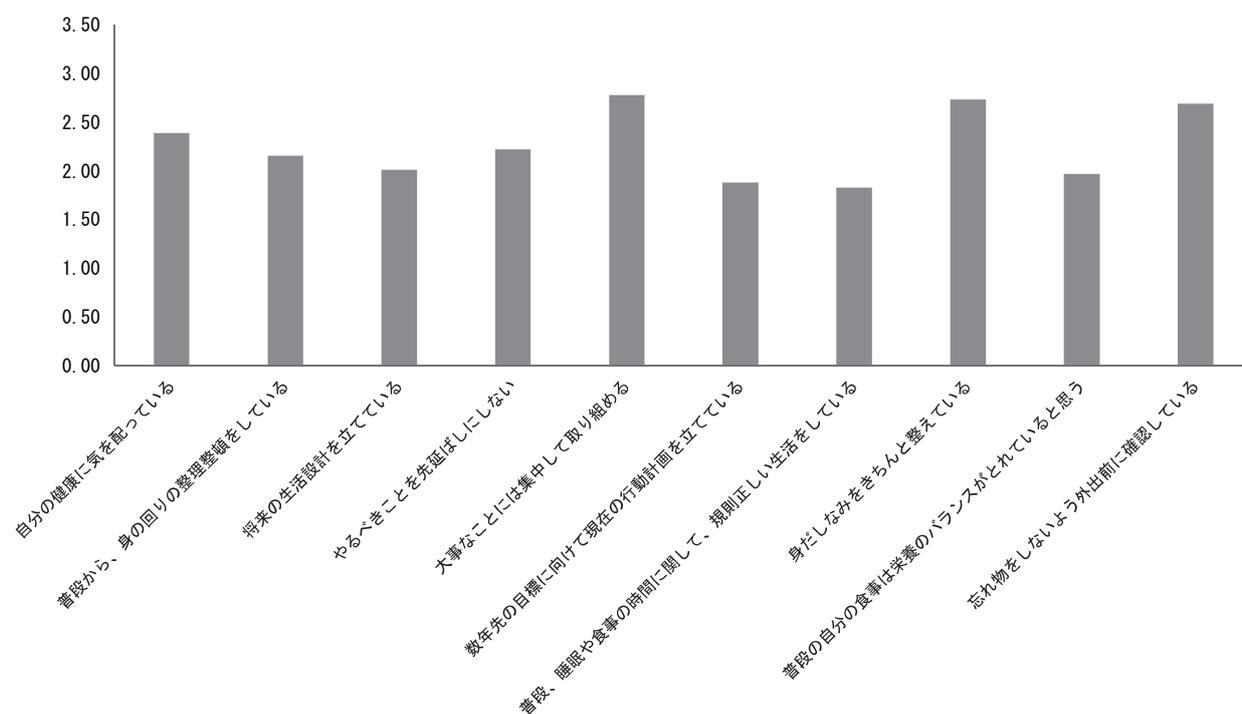
「2020年調査」データと「2019年度調査」在学者データについて、各項目の平均値 (M) を、参考までにそれぞれ整理した (図表 7-8、図表 7-9)。前述の通り、「2020年調査」と「2019年調査」では項目の評定段階が異なるため、1つのグラフ上での比較ではなく、それぞれ別

のグラフで表した。各項目の得点を直接比較することはできないが、各項目得点間の高低順を見ると、やや入れ替わっている箇所はあるものの、概ね類似していることが見て取れる。

図表 7-8 「2020年調査」データの各項目平均値(3段階評価：0-2点)



図表 7-9 「2019年調査」在学者データの各項目平均値(5段階評価：0-4点)



4. まとめ

本章は基礎的生活特性尺度に含まれている「社会生活への心構え」尺度および「日常生活チェックリスト」に関して、「2019年調査」の在学者データの結果との比較をしながら、「2020年調査」データの尺度の構造や信頼性の報告を行った。「社会生活への心構え」、「日常生活チェックリスト」ともに、「2019年調査」在学者データで得られた尺度の構造と概ね一致していること、「2020年調査」データにおいても尺度の信頼性が十分高いことが示された。

「社会生活への心構え」尺度の各項目平均値と尺度得点の平均値をみると、いずれも「2019年調査」の在学者データの得点よりも「2020年調査」データの結果の方がやや高いことがわかった。しかしながら、尺度を構成している項目間の得点の高低順には大きな違いは見られなかった。よって、高等教育課程在学者が示す得点の傾向は両データで類似していることが示唆される。

一方、「日常生活チェックリスト」は「2020年調査」において3段階評価による回答方法に変更したことから、「2019年調査」の在学者データの得点と直接的な比較はできなかった。しかし、「社会生活への心構え」尺度と同じように、両調査データ間において項目得点間の高低順に大きな違いは見られなかったため、「2020年調査」データの各項目得点の傾向は「2019年調査」の在学者データと比較的よく類似していると言えよう。

このように「日常生活チェックリスト」に関しては、5段階評価を3段階評価に変更しても測定の信頼性は特に損なわれていないことが確認されたが、5段階評価の時と同じ項目表現を使わなくてはならなかったため、回答を「できている」という表現にすると違和感が生じる項目もあった。例えば「3. 普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う」や「7. 大事なことには集中して取り組める」という項目である。「日常生活チェックリスト」は尺度ではなく、生活態度の振り返りに使う質問項目であるため、回答方法に関しては答えやすさや解釈のしやすさを考慮した上で改めて検討を加えることになるだろう。

今後は本尺度の得点と職業レディネス・テストの既存尺度や他の新規尺度の得点との関連の検討、さらに本尺度が求職者の求職活動状況や属性などの指標とどのように関連するのか、そして、本尺度の結果をどのように具体的支援に繋げていくのかなど、総合的に検討していくことが重要となるだろう。

引用文献

労働政策研究・研修機構(2020). 職業レディネス・テストの改訂に関する研究—大学生等の就職支援のための尺度の開発— JILPT 資料シリーズ, No.230.

第8章 新規尺度に対する高等教育課程の在学者と若年在職者の平均値の水準の検討

1. はじめに

第1章に示した通り、高等教育課程在学者と若年の在職者を対象として職業レディネス・テストに追加する新規尺度を作成し、それぞれの特性の平均値を算出したところ、在学者の方が在職者よりも高い値を示すという結果が得られた（労働政策研究・研修機構,2020）。ただ、この分析対象となった「2019年調査」のデータセットでは、在学者の数が在職者に比べて少なかったことから「2020年調査」を行い、18歳から34歳までの在学者のデータを収集し、新規尺度の平均値を算出することにした。

第5章から第7章では、新規尺度による平均値を算出する前段階として、新規尺度の構造と信頼性が「2020年調査」でも保たれているかの検討と確認を行った。その結果、「2019年調査」に続き「2020年調査」のデータでも新規尺度の構造の妥当性、尺度としての信頼性の高さが確認された。そこで、「2019年調査」の在学者と「2020年調査」の在学者の各尺度の平均値を算出したところ、「2020年調査」の平均値の方がどの尺度でも高い値となることがわかった。なお、第4章で示した通り、職業レディネス・テストの既存尺度に関する平均値については調査年間で有意差がみられたものは少なく、「2020年調査」の方で平均値が高いという傾向は新規尺度に関して確認された特徴である。

2020年に公表した資料では新規尺度について「2019年調査」の在職者の平均値は在学者よりも低かったため、各尺度の平均値をデータセット間で比較すると「2019年調査」の在職者が最も低く、次が「2019年調査」の在学者であり、3つの中で最も高いのが「2020年調査」の在学者となる。どのデータセットも同じ調査会社のWEBモニター調査により対象者を変えて抽出された回答であり、第2章に示した通り在学者間の属性に関しては大きな違いがないことがわかっている。

これらのことから考えると、「2019年調査」において新規尺度の各特性の平均値に関して在学者が在職者よりも高かった傾向は在学者のデータ数を増やした「2020年調査」においても裏付けられることになる。その一方で、新たな疑問として生じたことがあり、それは第5章の最後にも記述したように、「2019年調査」の平均値の水準と「2020年調査」の平均値のどちらが、一般的にみて高等教育課程の在学者の平均的な水準を反映しているのかということである。

職業レディネス・テストとあわせて実施することを想定している新規尺度の対象者は高等教育課程の在学者とおおむね30代前半の若年求職者層である。今後、新規尺度が公表されることを踏まえると、各尺度の得点の解釈の手がかりとして平均的な得点水準を示しておきたいが、「2019年調査」と「2020年調査」の平均値の水準が異なっているため、どのデータを基準として考えたらよいのかが明確ではない。そこで、本章では、「2019年調査」、「2020年

調査」のほかに、新規尺度に対する回答を集めたデータセットによる得点を算出して、どの程度の得点が新規尺度の標準的な水準として考えられるのかを検討することとした。

比較に用いたデータセットは2つあり、一つは2021年に実施した在職者を対象としたWEB調査の回答、もう一つは新規尺度を開発する過程で集めた複数の四年制大学で実施した紙筆検査による大学生の回答である。

2021年の調査は、504個の職業の在職者を対象として実施されたもので、職業興味や価値観を調べる項目として新規尺度の項目が用いられた。ただ、こちらの調査は各職業に従事する人の興味や価値観の傾向を調べるのが主目的であったため、「2019年調査」や「2020年調査」のように、対象者の年代や男女別の人数に関しては条件を揃えたデータ構成とはなっていない。そこで比較にあたってはデータの中から若年者のサンプルだけを選び出し、平均値を算出することにした。このようなことから、厳密に言えばこのデータセットから算出した平均値を「2019年調査」や「2020年調査」で得られた回答の平均値と比較することは難しい。ただ、2021年の調査では新規尺度項目に対する在職者の多くの回答が得られていることから、「2019年調査」の在職者の水準と比べてたり在学者の平均値と比べてたりすることにより、在職者は在学者よりも平均値が低いのかどうかを確認する補足的な素材として活用できるのではないかと考えた。

他方、大学生を対象として実施した紙筆検査であるが、こちらは新規尺度をA3サイズの一枚紙に印刷し、自己集計できるような教材として作成して、いくつかの大学の講義時間内に学生の協力を得て集めたデータである。実施にかかる時間や学生の反応をみるのが主な目的であったため、男女の人数や学年、学科の条件などもそろえていない。そのため、あくまでも参考値として新規尺度の平均値を算出し、WEB調査のモニターではなく実際の学生から得た反応の水準をみるものとして試みる分析となる。

以上、2つの新たなデータセットを用いて、これまでに用いたデータセットで算出した平均値と比べ、新規尺度、各特性の平均値としてどの水準が一般的なレベルと考えられるかを検討し、新規尺度の規準を作成するための手がかりを得ることが本章の目的である。

2. 在職者を対象としたWEB調査データ（2021）を用いた分析

（1）サンプルの選択について

2021年2月に就業者を対象として職業レディネス・テストの項目および新規尺度の項目等を含んだ調査を実施した。この調査は回答者に対して特に年齢制限を設けず、504個の職業⁷について、各職業に調査時点で就業している者をそれぞれ最低20名収集してもらうという条件で実施された。以下、この調査を「2021年調査」とする。

⁷ 504個の職業は厚生労働省の職業情報のデータベースのサイト (<https://shigoto.mhlw.go.jp/User/>) に掲載されている職業を中心に選定されたものである。

最終的に集められたデータ数は 11384 名となった。性別と年代を集計した表を図表 8-1 に示す。性別の内訳は男性 7864 名、女性 3502 名、その他 18 名となっており、男性が約 7 割を占める。年代別でもっとも多かったのは 50 代（3922 名）で、全体の 34.45% を占める。次が 40 代で 2995 名（26.31%）であった⁸。30 代くらいまでは男性より女性が多いが、40 代以降は女性のサンプルが少なくなっている。

図表 8-1 在職者に対する WEB 調査のデータの内訳

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	80代	90代	合計(人数)	合計(%)
男性	1	153	745	1917	3076	1632	322	17	1	7864	69.08
女性	4	428	815	1077	840	284	52	2	0	3502	30.76
その他	0	4	5	1	6	1	0	0	1	18	0.16
計(人数)	5	585	1565	2995	3922	1917	374	19	2	11384	
計(%)	0.04	5.14	13.75	26.31	34.45	16.84	3.29	0.17	0.02	100	100

「2019 年調査」と「2020 年調査」には 18 歳から 34 歳までの男女同数のデータが含まれている。データの属性を揃えることを考えると、できれば 18 歳から 34 歳までの年代とほぼ同じ年齢層の対象者を選びたいが、この調査では 30 歳から 39 歳は 30 代として一括りにまとめられているため、30 代後半のサンプルを正確に取り除くことができない。そこで、「2021 年調査」については、次のような手続きにより分析の対象とするサンプルを選び出した。

①年代は 20 代と 30 代のサンプルを選ぶ。

②最終学歴と現在の職業の就業年数をクロス集計して、就業経験年数が 10 年以上 20 年未満、20 年以上 30 年未満としているデータを削除する⁹。

以下に、上記の手続きに沿って行った集計結果を説明する。

まず、データクリーニングの後に、性別と年代別でクロス集計した表を図表 8-2 に示す。これをみると 20 代では女性の割合が多く、30 代でも女性の方が多量のものの男性の数が増えて女性との差は 20 代よりは小さくなっている。

⁸ これは収集された全データの数である。分析にあたっては、すべての回答を同値にしている等のサンプルを除くデータクリーニング作業を行った。

⁹ 調査票の就業経験年数には、「30 年以上 40 年未満」、「40 年以上」という選択肢もあったが、20 代と 30 代の回答者にはこの 2 つの選択肢を選んだものはいなかった。

図表 8-2 性別と年代のクロス集計結果

	20代	30代	合計(人数)	合計(%)
男性	142	680	822	41.81
女性	387	749	1136	57.78
その他	3	5	8	0.41
合計(人数)	532	1434	1966	
合計(%)	27.06	72.94	100	100

次に、最終学歴と現在の職業の就業年数についてのクロス集計を行った。結果を図表 8-3 に示す。35 歳以上の者が含まれる可能性がある部分は、どの最終学歴についても就業年数が 20 年以上 30 年未満のグループである。そこで、このグループに含まれるデータは分析から削除することとした。

図表 8-3 最終学歴と現在の職業の就業年数のクロス集計結果

最終学歴と現在の仕事の 経験年数	1年未満	1年以上 3年未満	3年以上 5年未満	5年以上 10年未満	10年以上 20年未満	20年以上 30年未満	合計(人数)	合計(%)
中学校	3	5	4	5	3	2	22	1.12
高等学校(高認も含む)	36	78	69	89	99	12	383	19.48
専門学校	31	54	45	98	122	0	350	17.80
短期大学・高等専門学校	12	23	22	39	32	0	128	6.51
大学	81	152	160	307	211	5	916	46.59
大学院	24	24	23	55	40	0	166	8.44
その他	0	0	0	1	0	0	1	0.05
合計(人数)	187	336	323	594	507	19	1966	
合計(%)	9.51	17.09	16.43	30.21	25.79	0.97	100	100

他方、10 年以上 20 年未満のグループについては全体の約 4 分の 1 が含まれるので数としては多くなっている。就業年数に幅があるため 35 歳未満の者を正確に絞り込むことは難しいが、10 年以上 20 年未満のグループに該当するデータを含めると、たとえば大学を卒業した者は 22 歳以上となっているので、卒業後すぐに就職した場合、就業年数は 13 年間で 35 歳となる。大学よりも若い年齢で卒業する教育課程の場合には 30 代後半に到達する時、もう少し就業年数が長いことが考えられるが、10 年以上 20 年未満のグループに該当するサンプルについては最終学歴によらず一律に分析から外して 5 年以上 10 年未満のグループまでを残すこととした。これにより 35 歳以上のデータがデータセットの中に多く含まれる可能性は減少できると考えた。

このように就業経験年数が 10 年以上の 526 名を除き、1440 名を性別と年代でクロス集計した結果が図表 8-4 である。就業年数が 10 年以上のサンプルを除いた結果、30 代の男性が

少なくなり、全体として男女比は約 4 対 6 で女性の割合が多くなっている。

図表 8-4 就業年数 10 年以上のサンプルを削除した後の性別と年代別人数の内訳

	20代	30代	合計(人数)	合計(%)
男性	140	403	543	37.71
女性	379	510	889	61.74
その他	3	5	8	0.56
合計(人数)	522	918	1440	
合計(%)	36.25	63.75	100	100

(2) 新規尺度の各特性に関する「2021 年調査」による在職者の平均値の算出

①新規尺度の信頼性の確認

新規尺度の各特性の平均値を算出するにあたっては、本来であれば、このデータセットに関して各尺度の構造や信頼性が保たれているかどうかを検討することが望ましい。ただ、本章での「2021 年調査」による平均値の算出は「2019 年調査」の在職者・在学者、「2020 年調査」の在学者の平均値の水準との比較が目的であるため、各尺度を構成する項目は「2019 年調査」と同一とした。そこで、本章で用いるデータセットについて、「2019 年調査」と同一の項目を用いたときの各尺度の信頼性係数(クロンバックの α 係数)を算出した(図表 8-5)。各尺度に含まれるすべての特性について.81 から.93 と高い値が得られたので、各尺度の測定の信頼性は、本章で分析するデータセットにおいても保たれていると判断した。

図表 8-5 各特性の信頼性係数

特性	α 係数
自己成長	.90
社会貢献	.93
地位	.92
経済性	.86
仕事と生活のバランス	.88
主体的進路選択	.84
気持ちの切り替え	.91
外界への積極性	.85
社会生活への心構え	.81

②各尺度、各特性の平均値の算出

「2019 年調査」に基づいた新規尺度の作成時には、在職者と在学者間の平均値の差および男女間での平均値の差を検討した(労働政策研究・研修機構,2020)。その結果、平均値につ

いては男女間で有意差がみられる特性はあったが、平均値そのものの差は小さかったため、換算表を作成するにしても男女別々の換算基準を作るほどの違いではないという結論に至った。また、年代に関しては「2019年調査」と「2020年調査」では、各年代のサンプルサイズは同じになるようにデータを収集している。このようなことから本書の第5章から第7章では、新規尺度の各特性の平均値は性別や年代によらず、全データをこみにして算出されている。

ただ、本章でとりあげている「2021年調査」については、サンプルを絞り込んだ結果、サンプル全体に占める女性の割合が男性よりも多く、加えて年代についても30代が20代よりも多くなっている。そこで、「2021年調査」では、性別と年代別にグループを分け、新規尺度の各特性の平均値(M)と標準偏差(SD)を算出した(図表8-6)¹⁰。なお、性別と年代で2元配置の分散分析をした結果を一番右の欄に示している。図表8-6の平均値をグラフにしたものが図表8-7である。グラフ化にあたっては、仕事選び基準尺度の6つ、基礎的性格特性の2つ、基礎的生活特性の1つの尺度は別々の要素を測定しているので折れ線でつなげるのは適切ではないが、グループによる各尺度の得点水準の傾向をわかりやすくするため、仕事選び基準尺度の6尺度および基礎的性格特性と基礎的生活特性の3尺度の平均値をつなげて作成した。

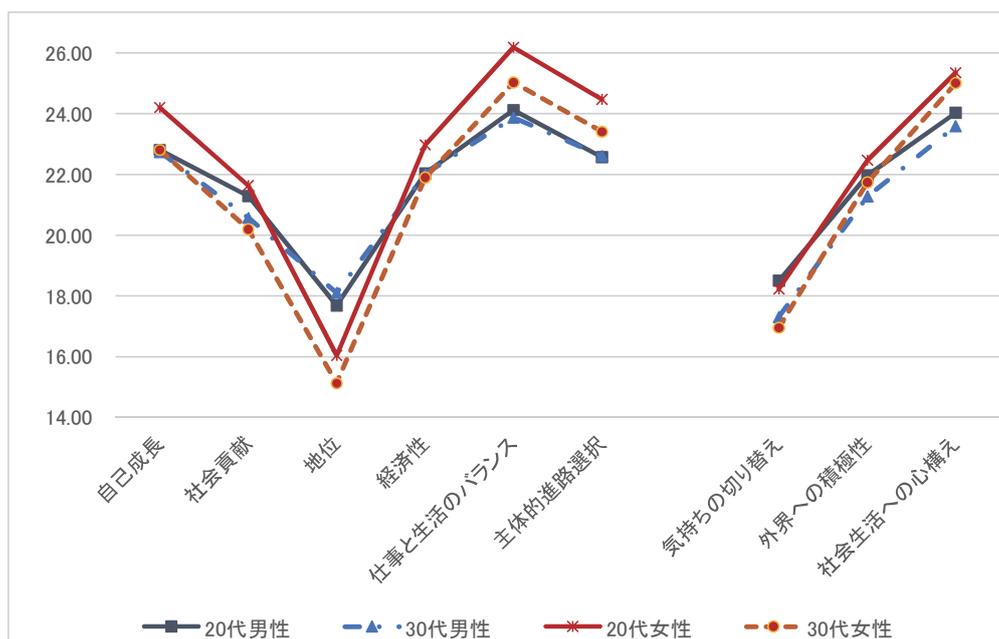
図表 8-6 新規尺度の各特性の男女・年代別の平均値(M)と標準偏差(SD)

各尺度で測定される 特性	20代男性(n=140)		30代男性(n=403)		20代女性(n=379)		30代女性(n=510)		分散分析結果	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	F値	多重比較
自己成長	22.81	(5.90)	22.74	(5.89)	24.21	(5.54)	22.80	(6.02)	5.55**	女>男(*), 20代>30代(*), 交互作用(+)
社会貢献	21.29	(6.87)	20.57	(7.06)	21.64	(6.77)	20.19	(6.80)	3.58*	20代>30代(**)
地位	17.69	(7.20)	18.11	(7.14)	16.04	(7.26)	15.12	(7.59)	14.12**	男>女(**)
経済性	22.04	(5.04)	22.01	(5.91)	22.97	(5.18)	21.89	(5.75)	3.12*	20代>30代(+)
仕事と生活のバランス	24.12	(5.78)	23.87	(5.95)	26.18	(4.99)	25.03	(5.57)	12.39**	女>男(**), 20代>30代(*)
主体的進路選択	22.57	(5.59)	22.60	(5.31)	24.47	(4.77)	23.41	(5.09)	10.03**	女>男(**), 20代>30代(+), 交互作用(+)
気持ちの切り替え	18.50	(6.84)	17.31	(7.56)	18.23	(7.41)	16.95	(7.42)	3.12*	20代>30代(**)
外界への積極性	21.97	(5.49)	21.27	(5.56)	22.47	(5.53)	21.73	(5.42)	3.20*	20代>30代(**)
社会生活への心構え	24.03	(4.80)	23.59	(5.13)	25.35	(4.42)	25.00	(4.50)	11.42**	女>男(**)

**…p<.01, *…p<.05, †…p.10

¹⁰ 性別が「その他」のサンプルは20歳代と30歳代をあわせても人数が少なく、個人差の影響を大きく受けるため、ここでは「その他」のサンプルは含めていない。

図表 8-7 「2021年調査」の各特性の男女・年代別の平均値のグラフ



最初に、「仕事選び基準尺度」を構成する「自己成長」から「主体的進路選択」までの6つの特性をみていく。

「自己成長」は「20代女性」のみが高く24点台で、その他は大体23点程度である。分散分析では性別、年代、交互作用効果が有意であったが、「20代女性」の平均値の高さの影響もあると考えられる。

「社会貢献」では「20代女性」と「20代男性」が21点台、「30代女性」と「30代男性」が20点台で、分散分析では年代の主効果がみられたが、得点としてはそれほど大きく違っていない。

「地位」は「20代男性」と「30代男性」が18点前後、「20代女性」と「30代女性」が16点前後であり、性別による主効果がみられ、男性が女性よりも平均値が高い。

「経済性」は「自己成長」と同じく「20代女性」が高くて23点に近く、それ以外の3つは同程度で22点程度である。年代の主効果が有意な傾向を示したが、「20代女性」の平均値の高さに影響されている可能性が考えられる。

「仕事と生活のバランス」はどのグループも全体として高いが、性別による主効果がみられた。男性は年代によらず24点程度であるが、女性では「20代女性」が26点程度、「30代女性」が25点程度と高く、女性の得点が男性よりも高い。また年代の主効果もみられ、20代が30代より高かった。

「主体的進路選択」も「仕事と生活のバランス」と同じ傾向で、男性の方はどちらの年代でも22点台であるが、女性は30代が23点台、20代が24点台と高くなっている。年代と性別の交互作用効果が有意な傾向を示したが、これについては「20代女性」の得点の高さが影

響していると考えられる。

次に「基礎的性格特性」に含まれる「気持ちの切り替え」については、「20代男性」と「20代女性」が同程度で17点程度、「30代男性」と「30代女性」が18点程度と20代が30代よりも高く、年代による違いが有意であった。

「外界への積極性」では「20代女性」が22点台で高めであったがその他にも21点台でそれほど大きな違いは見られなかった。ただ、年代に関して有意な主効果がみられ、20代が30代よりも高かった。

「基礎的生活特性」の「社会生活への心構え」については、性別による主効果がみられ、女性の平均値が男性よりも高かった。「20代女性」と「30代女性」が高く25点台となり、「20代男性」が24点程度、「30代男性」が最も低く23点台となった。

以上が各特性に関するグループ別の平均値の傾向であるが、本章での主目的は各特性の平均的な水準をみることであり、グループ間での平均値の差の検討ではない。ただ、分散分析の結果、特性によっては性別の影響を受けているもの、あるいは年代の影響を受けているものがあることが示唆された。例えば、「地位」の得点では男性が女性よりも高く、「仕事と生活のバランス」、「主体的進路選択」、「社会生活への心構え」は女性が男性よりも高いこと、年代については「自己成長」、「社会貢献」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」において20代が30代よりも高いなどの傾向である。なお、このデータでは「20代女性」の平均値がどの特性に関しても全体として高めなのでその影響は考慮する必要がある。

3. 「2019年調査」における在職者データを用いた新規尺度、各特性の平均値

(1) 「2019年調査」のデータの内訳

次に、「2019年調査」の在職者データを用いて、新規尺度の各特性の平均値を算出する。「2019年調査」の在職者は18歳から34歳までとしたが、「2021年調査」の在職者とそろえるため18歳と19歳のデータは分析から外した。その結果、分析に用いる対象者は1296名となった。男女別、年代別の人数の内訳を図表8-8に示す。20代が30代よりも、また男性が女性よりも10%程度多くなっているが、「2021年調査」のデータセットよりは各グループの人数構成のバランスはとれている。

図表 8-8 「2019年調査」の在職者の性別、年代別の内訳

	20代	30代	合計（人数）	合計（%）
男性	360	349	709	54.71
女性	355	232	587	45.29
合計（人数）	715	581	1296	
合計（%）	55.17	44.83	100	100

(2) 各特性の平均値の算出

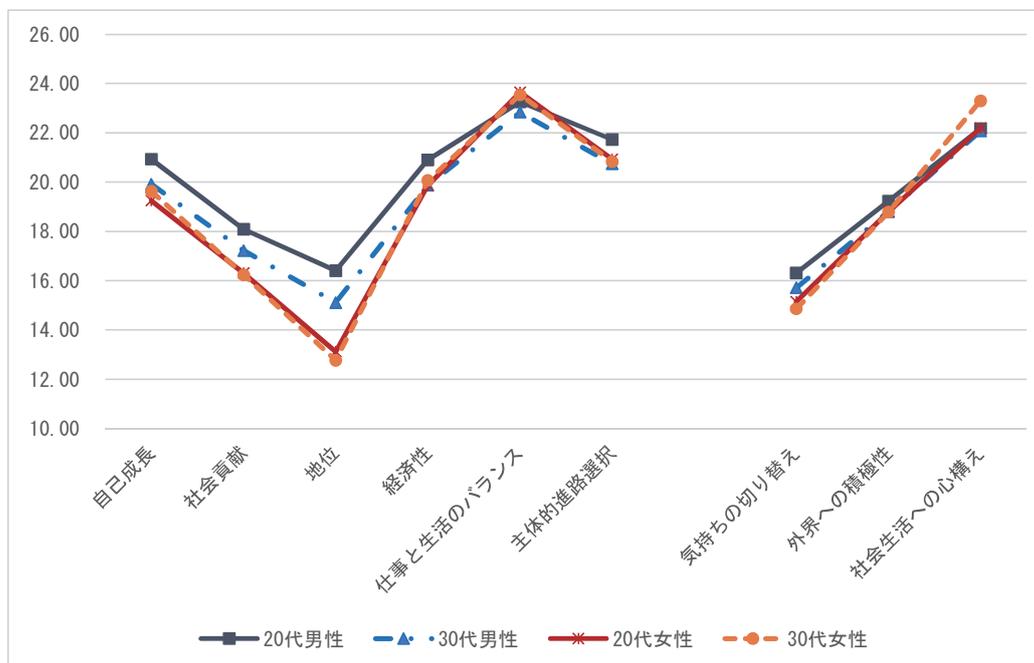
「2019年調査」の20代、30代の男女の在職者に限定して、新規尺度各特性の平均値(M)と標準偏差(SD)を算出した結果を図表8-9に示す。この平均値についても「2021年調査」と同じく、性別と年代で2元配置の分散分析をした結果を一番右の欄に示した。また、図表8-9の平均値をグラフにしたものが図表8-10である。

図表8-9 「2019年調査」の新規尺度の各特性の男女・年代別の平均値(M)と標準偏差(SD)

各尺度で測定される特性	20代男性(n=360)		30代男性(n=349)		20代女性(n=355)		30代女性(n=232)		分散分析結果	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	F値	多重比較
自己成長	20.94	(6.34)	19.92	(6.14)	19.25	(6.77)	19.63	(6.24)	4.49**	男>女(**)、交互作用(+)
社会貢献	18.09	(7.11)	17.23	(7.09)	16.30	(7.71)	16.24	(7.04)	4.72**	男>女(**)
地位	16.40	(7.09)	15.10	(6.95)	13.12	(7.45)	12.76	(7.03)	18.34**	男>女(**)、20代>30代*
経済性	20.90	(6.08)	19.87	(5.58)	19.86	(6.08)	20.07	(5.46)	2.51†	交互作用(+)
仕事と生活のバランス	23.26	(5.74)	22.83	(5.76)	23.64	(5.90)	23.54	(5.65)	1.32ns	
主体的進路選択	21.73	(5.27)	20.75	(4.99)	20.93	(5.50)	20.84	(5.33)	2.53†	20代>30代(+)
気持ちの切り替え	16.31	(7.04)	15.71	(6.21)	15.14	(6.92)	14.86	(6.67)	2.84*	男>女(**)
外界への積極性	19.23	(5.43)	18.80	(5.27)	18.80	(5.51)	18.78	(5.08)	0.58ns	
社会生活への心構え	22.18	(5.62)	22.07	(5.34)	22.20	(5.74)	23.30	(5.04)	2.83*	女>男(*), 交互作用(+)

***p<.01, **p<.05, †p<.10, ns…有意水準に達しない

図表8-10 「2019年調査」の各特性の男女・年代別の平均値のグラフ



「仕事選び基準尺度」の「自己成長」ではどのグループの平均値もだいたい20点程度で大きな違いは見られない。ただ、男性の平均値が女性よりも高いという主効果がみられたが、交互作用効果があり、これは「20代男性」が他よりも高いことによるものである。

「社会貢献」では各グループの平均値がややばらついており、「20代男性」が約18点で最も高く「30代男性」は約17点、「20代女性」と「30代女性」は16点程度であった。分散分析では性別による主効果が見られ、男性が女性よりも高いという結果になった。

「地位」については全体に平均値は低めであるが、「社会貢献」と同じくグループでのばらつきがみられた。「20代男性」が最も高く16点台で、最も低いのが「30代女性」で12点台であった。これについては性別と年代の主効果がそれぞれ有意となった。

「経済性」についてはどのグループの平均値もあまり差がなく、20点程度となった。ただし交互作用に有意な傾向がみられ、男性では20代が30代よりも、女性では30代が20代よりも平均値が高いという異なる傾向が影響しているようであった。

「仕事と生活のバランス」では全体としてどのグループの平均値も23点程度となり、違いがみられなかった。

「主体的進路選択」については「20代男性」が21.73で最も高かったが、その他のグループは20点台後半で大きな違いはなかった。ただし分散分析では、年代として20代が30代よりも高い傾向を示した。

次に「基礎的性格特性尺度」のうちの「気持ちの切り替え」をみると、グループ間で平均値にばらつきがみられ、「20代男性」が最も高く16点台となり、「30代女性」が14点台で最も低くなった。男性が女性よりも平均値が高いという結果が得られた。

「外界への積極性」では「20代男性」が19点台で最も高かったが、他のグループは18点台後半でグループ間での差は見られなかった。

「基礎的生活特性尺度」の「社会生活への心構え」では「30代女性」が最も高く23.30であるが、その他のグループは22点程度でほとんど違いがなかった。分散分析では性別の主効果が有意となり、女性が男性よりも高いということ、および交互作用効果に有意な傾向がみられた。これには「30代女性」の平均値の高さが影響している。

4. 在職者データセットと在学者データセットによる平均値の比較

(1) 新規尺度、9つの特性に関する2つの在職者データセットによる平均値について

「2021年調査」と「2019年調査」のそれぞれの若年在職者の回答傾向について性別と年代のグループに分けて平均値をみてきた。「20代男性」、「30代男性」、「20代女性」、「30代女性」など個別のグループの平均値を比較していくと、特性によっては2つのデータセット間で性差や年代差が一貫して検出されていないものがあり、一貫した解釈ができない部分が多くみられた。なお、2つのデータセットで同じ傾向がみられたのは「地位」に関して男性の方が女性の平均値よりも高いこと、「主体的進路選択」に関して20代が30代よりも高い傾向があること、「社会生活への心構え」で女性が男性よりも高いことであった。

一方で、全体的な平均値の水準をみていくと「仕事選び基準尺度」の6つの特性の平均値

の高さには2つのデータセット間で同じような傾向があり、「仕事と生活のバランス」が最も高く、「自己成長」、「経済性」、「主体的進路選択」がほぼ同じレベルで、「社会貢献」、「地位」という順になる。また「基礎的性格特性尺度」では「気持ちの切り替え」が低く、「外界への積極性」が高い。そして「基礎的生活特性」の「社会生活への心構え」の得点は「仕事選び基準尺度」の「仕事と生活のバランス」と同程度に高くなっている。また、各尺度、各特性の平均値全体として、「2021年調査」の方が「2019年調査」よりも高めであることが示されている。

(2) 「2021年調査」および「2019年調査」の在職者の平均値と「2019年調査」および「2020年調査」の在学者の平均値の比較

そこで、「2021年調査」、「2019年調査」の在職者の平均値と「2019年調査」、「2020年調査」の在学者の平均値のレベルを比較することにした。なお、在学者のデータについては5章から7章まで男女を分けずに平均値を算出しているが、「2021年調査」と「2019年調査」の在職者については性別と年代で平均値を算出しているため、在学者のデータについても男女別で平均値を算出し直した(図表8-11)。男女別にみても各特性の「2019年調査」の平均値は「2020年調査」の平均値よりも低いことがわかる。ただ、同じ年度の調査における男女の平均値の違いについては一部の特性でやや差がみられるもののそれほど大きくはないようであった。図表8-11の平均値を用いて、「2021年調査」および「2019年調査」の在職者の各特性の平均値をそれぞれ男女別にグラフに示したものが図表8-12と図表8-13である。

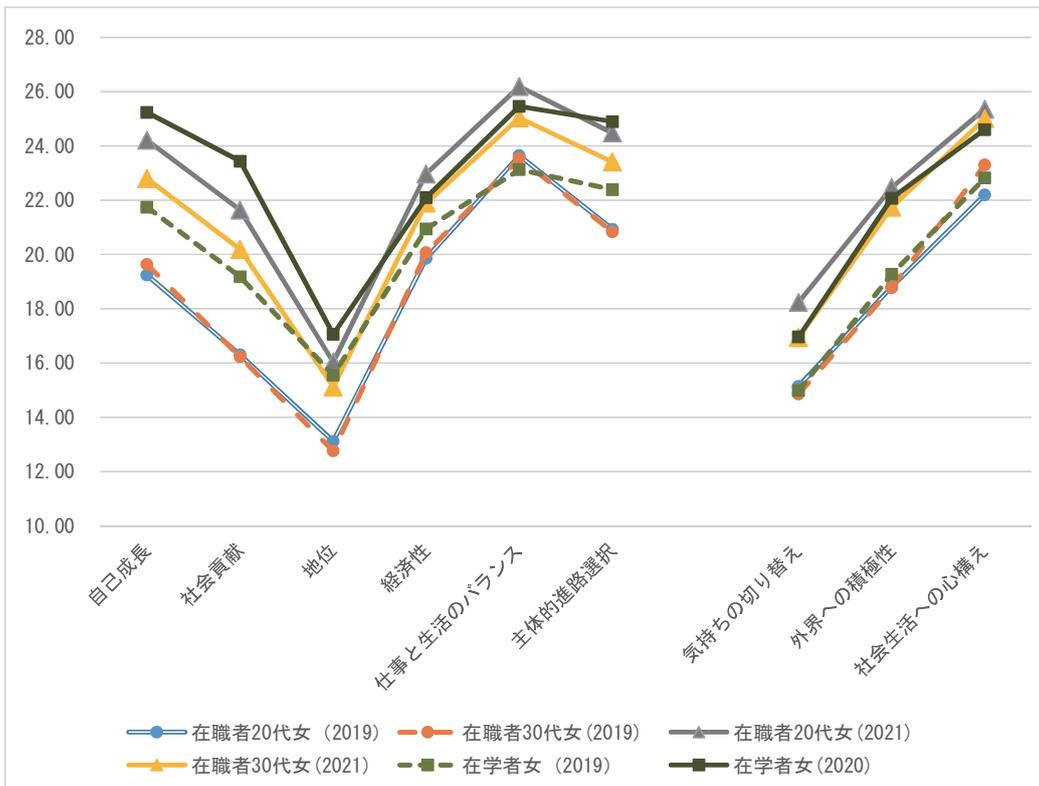
図表8-11 在学者の各特性の男女別の平均値(M)と標準偏差(SD)

特性	在学者男性				在学者女性			
	2019年度(n=254)		2020年度(n=576)		2019年度(n=236)		2020年度(n=585)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
自己成長	21.87	(5.91)	24.32	(6.20)	21.75	(6.54)	25.24	(5.79)
社会貢献	19.31	(7.14)	22.51	(7.44)	19.18	(7.44)	23.43	(7.14)
地位	16.79	(6.94)	19.21	(7.17)	15.56	(6.77)	17.06	(7.42)
経済性	20.59	(6.22)	22.51	(6.23)	20.94	(5.71)	22.09	(5.95)
仕事と生活のバランス	22.86	(6.10)	24.72	(5.55)	23.12	(6.08)	25.46	(5.37)
主体的進路選択	22.56	(5.28)	24.21	(5.36)	22.39	(5.85)	24.90	(4.79)
気持ちの切り替え	16.13	(6.70)	17.72	(7.33)	14.98	(7.25)	16.96	(7.75)
外界への積極性	19.82	(5.24)	22.03	(5.52)	19.28	(5.57)	22.07	(5.62)
社会生活への心構え	22.41	(5.17)	24.22	(4.81)	22.82	(5.67)	24.60	(4.35)

図表 8-12 男女別に見た各データセットの9特性の平均値（男性）



図表 8-13 男女別に見た各データセットの9特性の平均値（女性）



図表 8-12 および図表 8-13 のグラフで男女ともに 9 特性の数値のレベルを横に見ていくと、折れ線の形状が似ており、どのデータセットでも同じような高低の形状がみられる。ただ、個々の特性の平均値に関してはデータセット間で値の高さに幅がある。特に「自己成長」、「社会貢献」、「地位」はデータセットによるばらつきが大きく、グループの属性により評価レベルが様々に分かれる特性であることが示唆されている。

グループ別に見ると図表 8-12 の男性の平均値の場合、全体的に得点が最も高いのは「2020 年調査」の在学者であり、その次に高めなのが「2021 年調査」の 20 代在職者と 30 代在職者となっている。その次が「2019 年調査」の在学者で、さらに低いのが「2019 年調査」の 20 代在職者、最も低かったのが「2019 年調査」の 30 代在職者であった。

図表 8-13 の女性については、男性と同じく特性によって若干違いはあるが全体として高いのが「2020 年調査」の在学者で、それとほぼ同じ程度で「2021 年調査」の 20 代在職者であった。また「2021 年調査」の 30 代在職者も、特性によっては上記 2 つのデータセットのグループと同じくらいの平均値を示している。その次が「2019 年調査」の在学者であり、最も低かったのは「2019 年調査」の 20 代および 30 代の在職者であり、この 2 つの平均値はほぼ同程度であった。

以上のように、特性により若干の得点の高低はあるが、男女ともに各データセットの得点の高低は各特性に関してほぼ一致していることがわかった。全体として「2020 年調査」の在学者が最も高く、それと同じか若干低めのところに「2021 年調査」の在職者が位置している。その次が「2019 年調査」の在学者となっていて、「2019 年調査」の在職者は 20 代も 30 代も相対的に低めの水準にある。このような特徴からみると「2019 年調査」の平均値は在学者でも低めであるが特に在職者に関して低くなっていることがわかる。

5. 大学生に対する紙筆検査により得られた回答傾向に関する検討

(1) データの構成

本章の冒頭で記述した通り、紙筆検査でのデータ収集は、尺度の開発過程の 2019 年の冬に行われたものであり、新規尺度の実施時間をみたり、学生の反応をみたりするための試験的な試みとして実施されたものである¹¹。したがって、学科や男女の人数などは特に考慮されておらず、偏りがあるので、大学生等一般の傾向を反映しているとはいえないかもしれないが参考として紹介するものである。

紙筆検査を実施したのは 4 年制大学 3 校であり、自己理解に関連する講義内容の授業時間中に新しい検査の開発への協力をお願いした上で受検してもらった。集められたデータの性

¹¹ 新規尺度の構成が確定した 2020 年には新型コロナウイルスの感染拡大により、大学での対面講義が実施できない等の制限がかかり、現在に至っている。そのため、これ以降、紙筆検査による大学生等のデータ収集は難しく、現時点において対面で集められたデータはコロナ禍以前に実施された 3 校によるものだけである。

別と学年の内訳を図表 8-14 に示す。性別については必ずしも記入しなくてもよいとしたことから未記入のデータがあるが、それについては「性別未記入」として集計した。全体として男性の方が女性よりも全体に占める割合がやや大きく、学年としては2年生が9割近くを占める。

図表 8-14 紙筆検査による大学生の性別と学年別回答者の内訳

	学年		2年	3年	4年	5年	不明	計
	n	%						
男性	n		417	26	12	1	7	463
	%		57.6	57.8	52.2	0.2	17.1	55.5
女性	n		292	15	4	0	7	318
	%		40.3	33.3	17.4	0.0	17.1	38.1
性別未記入	n		15	4	7	0	27	53
	%		2.1	8.9	30.4	0.0	65.9	6.4
計	n		724	45	23	1	41	834
	%		86.8	5.4	2.8	0.1	4.9	100.0

(2) 各尺度、各特性の平均値の算出

紙筆検査による大学生のデータセットを用いて新規尺度の各特性について平均値 (M) と標準偏差 (SD) を算出した結果を図表 8-15 に示す。

図表 8-15 紙筆検査による大学生の回答の平均値 (M) と標準偏差 (SD)

特性	男性		女性		性別未記入		合計	
	(n=463)		(n=318)		(n=53)		(n=834)	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
自己成長	28.59	(4.03)	28.39	(4.50)	27.65	(4.36)	28.45	(4.24)
社会貢献	24.89	(5.98)	25.71	(5.88)	25.37	(4.77)	25.23	(5.88)
地位	23.33	(6.05)	19.74	(6.81)	20.17	(6.93)	21.76	(6.63)
経済性	25.37	(4.89)	23.04	(5.65)	23.19	(5.79)	24.35	(5.36)
仕事と生活のバランス	26.43	(5.32)	26.14	(5.43)	25.46	(5.31)	26.26	(5.36)
主体的進路選択	27.39	(3.88)	27.03	(3.95)	25.21	(5.09)	27.11	(4.02)
気持ちの切り替え	22.35	(6.07)	20.45	(7.05)	19.42	(7.00)	21.44	(6.59)
外界への積極性	25.79	(4.32)	25.08	(4.62)	24.62	(4.51)	25.45	(4.46)
社会生活への心構え	27.90	(3.56)	27.79	(3.85)	26.60	(4.29)	27.78	(3.73)

全体として各特性の平均値が 19~28 点程度となっており、各尺度の最高点が 32 点であることを考えると全体としてかなり高めとなっている。男女の合計点でみると最も得点が高かったのは「自己成長」で 28 点台、次が「社会生活への心構え」と「主体的進路選択」で 27 点台、「仕事と生活のバランス」が 26 点台となった。それに続いて「外界への積極性」、「社

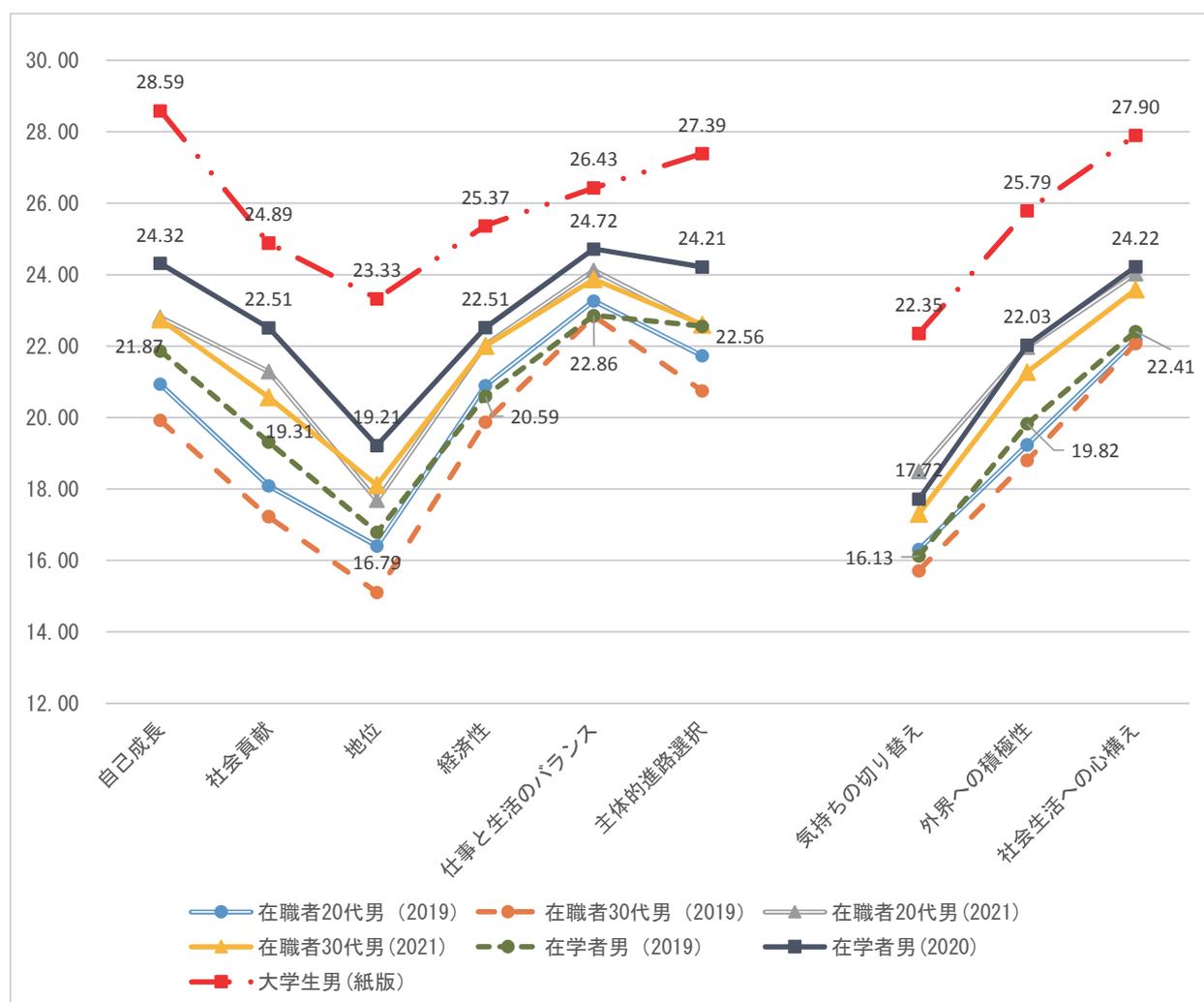
会貢献」が 25 点台、「経済性」が 24 点台、「地位」と「気持ちの切り替え」が 21 点台となった。

(3) WEB 調査による在学者、在職者データセットとの比較

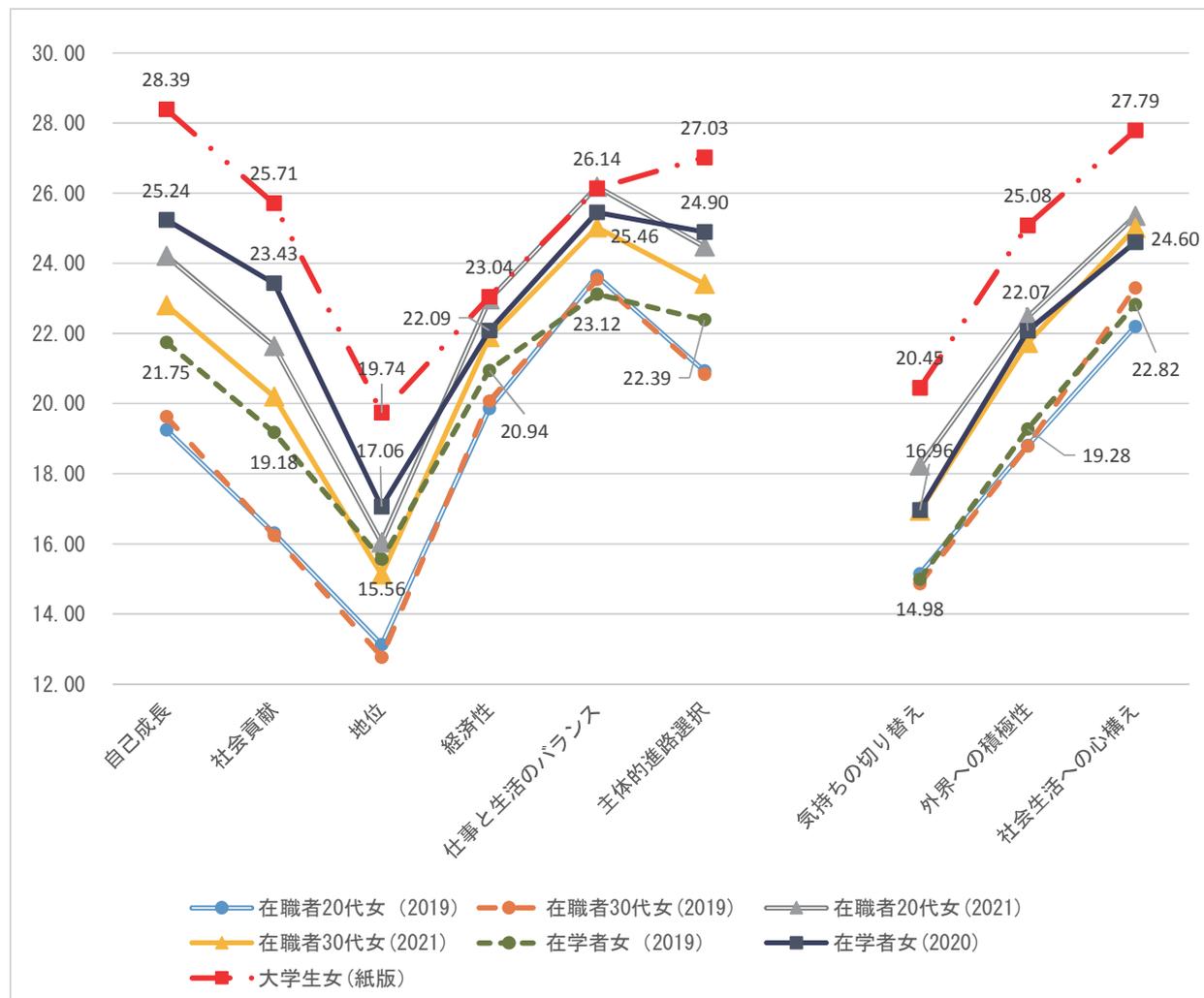
紙筆検査の大学生の平均値をこれまでに算出した各データセットの平均値のグラフに書き加えたものが図表 8-16 および図表 8-17 である。本来はデータの質が異なるので、直接比較はできないが、他のデータセットによる平均値と比べて形状やレベルがどのように異なるのかをみるために作成した。男女別に示したので「性別未記入」のサンプルは外している。

図表 8-16 と図表 8-17 では、在学者のデータの平均値を比較するために、在学者を示す 3 本の折れ線には数値ラベルを付けた。まず、一番上の破線が紙筆検査で収集した大学生データによる平均値であり、そのすぐ下の実線が「2020 年調査」の在学者の平均値である。男女ともに下から 3 番目の点線で示されているものが「2019 年調査」の在学者の平均値である。

図表 8-16 男女別に見た大学生（紙筆検査データ）を含む各データセットの 9 特性の平均値(男性)



図表 8-17 男女別に見た大学生（紙筆検査データ）を含む各データセットの9特性の平均値(女性)



紙筆検査で実施した大学生の回答の平均値をみると、男女ともに WEB 調査の回答から得られた平均値よりも高めであり、特性によっては「2020 年調査」の在学者の平均値より 4 点以上高い。特に男性ほどの特性でも WEB 調査よりも 2 点以上高くなっている。女性の場合には差が大きいところもあるが、特性によっては WEB 調査とレベルが違わないものもある。例えば、「経済性」、「仕事と生活のバランス」の得点差は小さく、「2020 年調査」の在学者の平均値との違いは 1 点以内である。

3つのデータセットについて同じ在学者であるのにこのような得点の違いがなぜ生じているのかという理由であるが、まずは WEB モニターの在学者データにおいて回答者が在籍している教育機関の内訳を調べてみた。その結果、4 年制大学は「2020 年調査」で男女合わせて 83.2%、「2019 年調査」では 81.4%で約 8 割を占めており、それ以外の短期大学、高等専門学校、専門学校、大学院に在籍する学生が占める割合は 2 割程度であった。そのため WEB モニター調査の 4 年制大学以外の在学者の回答が平均値に影響を与えているとは考えにくく、

紙筆検査を受検した大学生の回答の得点が高くなっている明確な理由はわからなかった。ただ、推測であるが、大学生の紙筆検査の結果は、実施した大学が限られていたため、各大学に所属する学生の特徴が結果に反映されること、教室の講義時間内で担当教員が検査を実施していること、その場で自己採点をして自らの得点傾向を解釈するようなワークを行ったグループもあったので、検査に取り組む動機づけが WEB モニター調査より高かった可能性があるなど、様々な条件の影響が得点の高さに反映されたと考えている。

なお、紙筆検査の大学生の平均値全体の形状をみると、WEB 調査による2つの在学者のデータセットの回答と同じく「自己成長」、「仕事と生活のバランス」、「主体的進路選択」、「社会生活への心構え」が高い一方で、「地位」や「気持ちの切り替え」が低いという特徴は似ている。ただ、WEB 調査ではどのデータセットでも特性の中で「仕事と生活のバランス」が最も高い場合が多いが、大学生ではそれにも増して「自己成長」が最も高いことが特徴である。大学生のデータでは「仕事と生活のバランス」の平均値の高さは男女ともに「自己成長」、「主体的進路選択」、「社会生活への心構え」の次となっており9特性の中での相対的な順位は4番目である。そのため、グラフの中心の部分のピークが横にずれているため、他の WEB 調査のグラフと比べて形状がやや違っているようにみえる。

以上、紙筆検査の大学生の平均値を加えて結果をみてきたが、これを踏まえて、図表 8-16 および図表 8-17 に示した在学者の3つのデータセットを含む各データセットの平均値から、新規尺度に含まれる9つの特性の平均的な水準としてどのデータセットから得られた値を平均的なものとして捉えたらよいかという点を考えてみたい。

大学生の紙筆検査の回答は他のデータセットの平均値よりもかなり高めとなっており、全体のデータからみて、これが9つの特性の平均的な水準とは考えにくい。ただ、今回作成された新規尺度が、正式に検査として完成すれば、高等教育機関や職業相談機関において対面の状況で使われることになる。そのような実施場面では検査結果が直接的にフィードバックされない WEB 調査と比べて、検査に対する受検者の動機づけも高いことが想定される。その点を考えるならば大学等の講義や就職支援のための相談場面で用いられるときの平均値の水準を低めに設定することは受検者が自分自身の回答と比較する時に不正確な情報を与えることに繋がる可能性がある。

このような点から考えてみると「2019年調査」の在学者の平均値よりも「2020年調査」の在学者の平均値は全体として中間のレベルにあり、しかも20代、30代前半の若年の在職者の平均値より若干高めであるがそれほどかけ離れた位置にあるわけでもない。そこで「2020年調査」で収集した在学者のデータによる平均値を3尺度9特性の標準的なレベルとして考えることが妥当ではないかと解釈した。

なお、図表 8-12 と図表 8-13 の通り、複数の WEB 調査間で平均値を比較した結果では、「2020年調査」の在学者の平均値はそれ以外のデータセットよりも全体に高めであったので、中間をとるという意味で「2019年調査」の在学者サンプルとあわせて平均値を算出し直すことも

検討した。ただ、今後の検査の活用方を想定すると、紙筆検査の結果にみられた大学生の平均値の高さを考慮することも重要であり、そのためには「2020年調査」の在学者の単独のデータセットから得た平均値を基準として用いる方が適切であると考えた。

6. まとめ

本章では、この資料においてとりあげてきた「2019年調査」の在学者と在職者、「2020年調査」の在学者のデータセットに加えて、「2021年調査」による在職者のデータセットおよび大学の対面授業内で実施した紙筆検査版の新規尺度項目に対する大学生の回答を用いたデータにより、3つの尺度を構成する9つの特性の平均値の水準を検討した。

本章の目的は、新しく作成された尺度を検査として受検した場合、高等教育課程の学生や30代前半の若年求職者が自らの値と比較して参考にできるような平均値の基準をどこに置くかを検討することであったが、複数のデータセットによる平均値を比較した結果、「2020年調査」の在学者のデータセットから得られた平均値が基準として適切ではないかという結論に到った。

このほか、9つの特性に対する得点の相対的な高さをみたとき、どのデータセットでも得点が高めになる特性と低めになる特性には同じような傾向があり、男女それぞれでグラフに描いた場合、個々の特性の得点の幅はあっても形状としては似た形になることが確認された。例えば、9つのうち得点が高めになるものとしては、「自己成長」、「仕事と生活のバランス」、「主体的進路選択」、「社会生活への心構え」であり、低めになるものとしては「地位」と「気持ちの切り替え」が該当する。全体として高めの得点になる特性は多くの方が仕事を選んだりするときに重視していたり、社会生活を送る時にあてはまると考えている特性であるともみることができる。一方、得点が高い特性は仕事を選ぶ時にそれほど重視されていないもの、あるいは自らの傾向として少し苦手意識をもっているものということになる。

また、データセットにより得点のばらつきの幅が大きい特性もあり、たとえば「自己成長」や「社会貢献」、「地位」については、在職・在学、20代・30代などデータセット間での得点の違いが大きかった。これらの特性はデータセットを構成するサンプルの属性によって平均値に影響が及ぼされやすいと考えられる。

なお、新規尺度については、「2019年調査」による作成時のデータ分析において、在職者と在学者の得点の違いの方が男女間の得点の違いよりも大きかったため、男女で別々の基準を作成する必要はないと考えた。今回のデータ分析では「2021年調査」のデータセットにおける男女の構成割合が異なってしまったため、年代に加えて男女別でも平均値を算出した。その中で、一貫して見られた男女差としては「地位」に関して男性の平均値が女性よりも高いこと、「社会生活への心構え」で女性の平均値が男性よりも高いことであった。ただ、前述したとおり、9つの特性に関する得点の高低の傾向は男女共に類似しており、性別によって

極端に得点が異なる特性はみられない。そこで、9つの特性ごとに平均的な基準を作成する場合には男女別の数値計算はしなくてよいのではないかと考えている。

最後に、新規尺度を完成させるにあたり、これらの特性の平均値をどのように活用するかについて現時点で想定していることを述べておきたい。今回開発した尺度は自己採点ができる形式での利用を念頭においている。具体的には、受検者には項目への回答後、それぞれの特性の得点を自分で集計し、各特性の得点が平均的な水準と比べてどの程度の位置にあるかを理解してもらおう。そして、仕事選びや性格特性、生活特性に関する特徴という点から自らの個性を捉えて、進路選択や就職先の選定のためのヒントとして活かしてもらえるようにするというのがこの検査がめざすところである。各特性の平均的な水準の示し方としてはグラフ内で平均値を示すとか、標準化得点への換算を行ってもらうなどの方法が考えられるが、今後、検査の結果を整理するためのワークシートを作成していくにあたって、できるだけ簡便であるとともに使いやすく分かりやすい方法になるよう検討していきたい。

引用文献

労働政策研究・研修機構（2020）。「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 ―大学生等の就職支援のための尺度の開発―」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第Ⅱ部 尺度得点と諸特性との関連性の検討

第9章 新規尺度の特性間および新規尺度特性と職業レディネス・テストの 下位検査との関連性

1. 目的

職業レディネス・テストに関して行ってきた一連の研究では、高等教育課程の在学者や若年求職者を対象として職業レディネス・テストの既存検査に新しく追加する新規尺度を作成したが、新規尺度は、職業レディネス・テストで測定される職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度に加えて、別の視点からの個人の特徴を明らかにするものである。そのため、両方を受検した結果を総合的に解釈するためには、尺度間の特性の関連性を検討しておくことが有効である。

新規尺度の開発過程では、新規尺度の特性間の関係や新規尺度と職業レディネス・テストの既存検査に含まれる各特性との関連性の検討を行ったが(労働政策研究・研修機構,2020)、これは「2019年調査」の在学者と在職者全体のデータを用いて行われたものであるため、本章ではこれと同じような傾向が「2020年調査」の在学者のデータでも確認できるかどうかを検討したい。

分析は2つの観点から行う。第1は、3つの新規尺度である「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」のそれぞれに含まれる特性間の関連性の検討である。第2は、「職業レディネス・テスト」の3つの下位検査と各検査を構成する領域や志向性と新規尺度の特性との関連性の検討である。

2. 方法

(1) 分析対象としたデータについて

本章では「2020年調査」の在学者のデータ、1161名を分析の対象とした。「2019年調査」の在学者490名と「2020年調査」の在学者はデータを統合しても属性という点からは問題がないことは第2章で確認されているが、平均値に関しては「2019年調査」は「2020年調査」に比べて各尺度の値が低くなっていることを考え、今回の分析ではデータセットを統合せずに、在学者に限定して収集した「2020年調査」の回答者だけを対象とした。

(2) 取り上げた変数

新規尺度については、「仕事選び基準尺度」のうち自己成長、社会貢献、地位、経済性、仕事と生活のバランス、主体的進路選択の6特性、「基礎的性格特性」のうち気持ちの切り替え、外界への積極性の2特性、「基礎的生活特性」の社会生活への心構えの1特性を取り上げ、これら全9特性に関する個人の合計得点を変数とする。各特性は8項目で構成され、5段階評

価の回答(0点から4点)なので、合計得点の範囲は0点から32点となる。

職業レディネス・テストはA検査(職業興味)の6領域、B検査(基礎的志向性)の3志向性、C検査(職務遂行の自信度)の6領域のそれぞれの合計得点を用いる。さらにB検査については、3つの志向性それぞれを構成する下位尺度の合計得点も用いる。採点方法は職業レディネス・テストの方式に準拠する。すなわち、A検査とC検査の各領域の得点の範囲は0点から18点、B検査のD志向とP志向では0点から24点、T志向では0点から16点である。

3. 結果

(1) 新規尺度の特性間の関連性の検討

①特性間の相関係数の算出

新規尺度として作成した「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」に含まれる9特性について、それぞれの合計得点を用いて特性間の相関係数を算出した結果を図表9-1に示す。表をみても明らかなように、ほとんどすべての相関係数が統計上、有意な値になっているが、これはサンプルサイズが大きいことによると考えられるので、特に値が3.0以上のものを太字で表示した。

図表 9-1 新規尺度の特性間の相関係数(Pearsonのr)

尺度	自己成長	社会貢献	地位	経済性	仕事と生活のバランス	主体的進路選択	気持ちの切り替え	外界への積極性	社会生活への心構え
自己成長	1								
社会貢献	.700 ***	1							
地位	.514 ***	.425 ***	1						
経済性	.421 ***	.275 ***	.637 ***	1					
仕事と生活のバランス	.217 ***	.156 ***	.107 **	.404 ***	1				
主体的進路選択	.727 ***	.480 ***	.332 ***	.347 ***	.369 ***	1			
気持ちの切り替え	.304 ***	.320 ***	.327 ***	.196 ***	-.015 ns	.288 ***	1		
外界への積極性	.627 ***	.515 ***	.377 ***	.285 ***	.116 ***	.572 ***	.599 ***	1	
社会生活への心構え	.560 ***	.492 ***	.293 ***	.356 ***	.306 ***	.551 ***	.346 ***	.619 ***	1

※ ****…p<.0001, ***…p.01, ns…有意ではない

※ r=3.0以上を太字

「仕事選び基準尺度」の「自己成長」では「仕事と生活のバランス」を除く8特性と.30以上の強い正の相関が示された。特に強い相関がみられたのは「主体的進路選択」、「社会貢献」、「外界への積極性」との関連であり、.70台と.60台の値となった。

「社会貢献」では「経済性」と「仕事と生活のバランス」以外の特性との間に.30以上の正の相関が示された。特に強い相関がみられたのは「自己成長」であり、次が「外界への積極性」であった。

「地位」に関しては「自己成長」、「社会貢献」、「経済性」、「主体的進路選択」、「気持ちの

切り替え」、「外界への積極性」と.30以上の正の相関がみられた。「地位」と最も強い正の相関を示したのは「経済性」であり、.60台の値となった。

「経済性」では「自己成長」、「地位」、「仕事と生活のバランス」、「主体的進路選択」、「社会生活への心構え」との間に.30以上の正の相関がみられた。

「仕事と生活のバランス」については他の特性とは異なり、多くの特性との関連で.30以上の相関係数が得られていない。.30以上の正の相関がみられたのは3つで、「経済性」、「主体的進路選択」、「社会生活への心構え」であった。

「主体的進路選択」は、「気持ちの切り替え」以外の特性と.30以上の正の相関を示した。

「基礎的性格特性尺度」の「気持ちの切り替え」に関しては、「自己成長」、「社会貢献」、「地位」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」との間に.30以上の正の相関がみられた。「仕事と生活のバランス」との間では有意な値が得られなかった。なお、「仕事選び基準尺度」の諸特性や「基礎的生活特性」に含まれる「社会生活への心構え」との相関係数は概ね.30台でそれほど強い関連性が示されたわけではなく、「気持ちの切り替え」と同じ「基礎的性格特性」に含まれる「外界への積極性」だけが.50台となった。

「外界への積極性」については「仕事選び基準尺度」の諸特性や「社会生活への心構え」などの「基礎的性格特性尺度」以外の特性とも強い相関が示された。.30の値が得られなかったのは「経済性」と「仕事と生活のバランス」の2つであった。

「基礎的生活特性尺度」に含まれる「社会生活への心構え」については「地位」以外の特性との間に.30以上の正の相関がみられた。最も値が大きかったのは「外界への積極性」であり、そのほか「自己成長」、「主体的進路選択」との間の相関係数も.50台となった。

上記をまとめると、「仕事選び基準尺度」に関しては「自己成長」、「社会貢献」、「主体的進路選択」は相互に強い正の相関があり、加えて「外界への積極性」、「社会生活への心構え」とも強い正の相関があった。他方、「経済性」と「地位」については上記とやや異なる傾向があること、「仕事と生活のバランス」は9特性全体の中でやや独立した特性であることが示されていると考えられる。「基礎的性格特性」の「気持ちの切り替え」と「外界への積極性」は相互に強い正の相関があるとともに、特に「外界への積極性」は「仕事選び基準尺度」の「自己成長」、「社会貢献」、「主体的進路選択」や「基礎的生活特性尺度」の「社会生活への心構え」とも強い正の相関を示すことがわかった。「基礎的生活特性」の「社会生活への心構え」は他の特性との間に強い正の相関を示したが、「仕事と生活のバランス」の特性との関連も.30以上となっていた点が特徴的であった。

なお、以前に分析した「2019年調査」のデータでは在学者と在職者全体を用いて尺度間の相関係数を求めており、「仕事選び基準尺度」の各特性と「基礎的性格特性尺度」の2特性および「基礎的生活特性」の1特性との関連が検討されている(労働政策研究・研修機構,2020)。

在学者のみの「2020年調査」とは異なり、「2019年調査」では在職者も含まれているのでその影響は考えられるが、全体として相関係数の関係はほぼ一致していた。今回の分析結果

と異なっていたのは、「仕事選び基準尺度」の「経済性」と「基礎的性格特性尺度」および「基礎的生活特性尺度」に含まれる特性の一部との相関関係であった。すなわち、「経済性」では、「2019年調査」では「外界への積極性」との相関が最も強く、次が「社会生活への心構え」であったが、今回の分析では「社会生活への心構え」との関係が最も強く、その他の2特性との関連は.30に達していない。それ以外の相関関係については今回の調査と一致しており、傾向としてはほぼ同じ結果が示されたと解釈した。

②特性全体を用いた因子分析

以上、9つの特性間の相関係数を見たが、その結果、9個の特性はいくつかのまとまりとして考えられるようであったため、その点を検討する目的で9特性を用いた因子分析を行った。

9つの特性の合計得点を用いて主因子解を求めた結果、第1因子の固有値は3.87で80.3%の説明率だった。第2因子以下の固有値は1未満であったので、特性が9個と少ないこともあり全体として1因子として解釈できる。ただ、相関係数の関係から示唆された9つの特性の構造を明らかにしなかったため、Promax回転を行い、4因子を抽出した。結果を図表9-2に示す。

表をみると「仕事選び基準尺度」の「自己成長」、「社会貢献」、「主体的進路選択」は因子1にまとまっている。これらの特性は自ら進路を選び、仕事を通して得られるやりがいや達成感など、内的な動機づけに関わる方向性を示していると考えられる。次の因子2には「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」の負荷量が高かった。因子2は因子1との相関も強いが、因子1と別の因子として抽出されたのは、因子1に含まれる特性が仕事を選ぶ時の考え方に関連付けられるのに対して、因子2は仕事への適応、あるいは仕事をうまくやっていたりかどうかに関連した特性であるためと考えられる。3つめの因子3は「地位」と「経済性」という2つの特性で構成される。これらは「仕事選び基準尺度」の中でも、仕事のなかみというよりは、仕事をすることによって獲得される社会的な地位であったり、収入であったりという付加的な要素を追求する態度であると解釈できる。因子4としては「仕事と生活のバランス」という1つの特性の負荷量が高くなった。仕事だけでなく個人の生活も充実させたいという特性は、自己実現や仕事を通して得られる付加価値を求める要素とは一線を画するものであることがわかる。なお、「仕事と生活のバランス」は全体として平均値が高い特性であるので、多くの人が重要であると感じる特性であることが示されている。そのようなこともあって、他の特性とは独立の因子として抽出されたと解釈できる。

図表 9-2 9 特性の因子分析の結果（4つの因子の因子負荷量）

	因子1	因子2	因子3	因子4
自己成長	.892	-.058	.107	-.009
社会貢献	.741	.025	.078	-.122
主体的進路選択	.580	.083	-.079	.321
気持ちの切り替え	-.070	.709	.108	-.132
外界への積極性	.274	.661	-.030	.004
社会生活への心構え	.296	.348	-.046	.293
地位	.169	.079	.692	-.095
経済性	-.074	.015	.659	.343
仕事と生活のバランス	-.005	-.108	.079	.622

因子間相関				
	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1	1.000			
因子2	.664	1.000		
因子3	.457	.351	1.000	
因子4	.482	.294	.302	1.000

(2) 新規尺度と職業レディネス・テストの下位検査との関係の検討

①新規尺度の特性と職業レディネス・テストの職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度との相関係数

新規に作成された尺度の9つの特性それぞれの合計得点と、職業レディネス・テストの3つの下位検査に含まれる6領域、3志向性のそれぞれの合計得点との相関係数を求めた結果を図表 9-3 に示す。表をみると、多くの特性間の関連に有意な相関が示されていることがわかる。ただ、新規尺度の特性間の相関係数を求めた場合と同様に、サンプルサイズが大きいため、相関係数の値そのものがそれほどではなくても統計的には有意となっていると解釈できる。そこで表の相関係数のうち.30以上の数値を太字で表示した。

職業レディネス・テストの3つの検査と新規尺度との関連性について表の数値をみていくと、A検査（職業興味）やC検査（職務遂行の自信度）では.30以上の値がほとんどみられず、B検査（基礎的志向性）との関連において、.30以上の正の相関係数が得られていることがわかる。A検査やC検査は職業についての興味や職務遂行の自信度などを測定する職業志向性を測る尺度であるが、それよりもむしろ、新規尺度は、日常生活の態度や考え方を測定するB検査（基礎的志向性）との関連が強いことが示されている。

図表 9-3 職業レディネス・テストの3検査と新規尺度各特性との相関係数 (Pearson の r)

尺度	A検査 (職業興味)					
	R領域	I領域	A領域	S領域	E領域	C領域
自己成長	.015 ns	.063 *	.107 **	.184 ***	.238 ***	-.017 ns
社会貢献	.063 *	.051 †	.044 ns	.349 ***	.212 ***	.022 ns
地位	.109 **	.077 **	.082 **	.097 **	.344 ***	-.031 ns
経済性	.008 ns	.000 ns	-.006 ns	.002 ns	.141 ***	.015 ns
仕事と生活のバランス	-.080 **	-.026 ns	.014 ns	-.006 ns	-.036 ns	.072 *
主体的進路選択	-.033 ns	.027 ns	.130 ***	.090 **	.166 ***	-.061 *
気持ちの切り替え	.105 **	.028 ns	.042 ns	.163 ***	.230 ***	-.024 ns
外界への積極性	.089 **	.129 ***	.181 ***	.208 ***	.301 ***	.007 ns
社会生活への心構え	.029 ns	.024 ns	.029 ns	.146 ***	.153 ***	.091 **

尺度	B検査 (基礎的志向性)		
	D志向	P志向	T志向
自己成長	.385 ***	.464 ***	.249 ***
社会貢献	.340 ***	.510 ***	.211 ***
地位	.242 ***	.355 ***	.120 ***
経済性	.188 ***	.189 ***	.047 ns
仕事と生活のバランス	.108 **	.048 †	.035 ns
主体的進路選択	.356 ***	.352 ***	.209 ***
気持ちの切り替え	.269 ***	.373 ***	.219 ***
外界への積極性	.469 ***	.521 ***	.364 ***
社会生活への心構え	.406 ***	.349 ***	.183 ***

尺度	C検査 (職務遂行の自信度)					
	R領域	I領域	A領域	S領域	E領域	C領域
自己成長	.058 *	.098 **	.134 ***	.245 ***	.230 ***	.118 ***
社会貢献	.071 *	.083 **	.072 *	.355 ***	.212 ***	.104 **
地位	.199 ***	.140 ***	.187 ***	.184 ***	.358 ***	.105 **
経済性	.090 **	.039 ns	.051 †	.050 †	.170 ***	.092 **
仕事と生活のバランス	-.094 **	-.067 *	-.027 ns	-.064 *	-.072 *	.026 ns
主体的進路選択	.040 ns	.084 **	.144 ***	.167 ***	.178 ***	.091 **
気持ちの切り替え	.224 ***	.147 ***	.195 ***	.270 ***	.345 ***	.102 **
外界への積極性	.180 ***	.194 ***	.246 ***	.302 ***	.364 ***	.147 ***
社会生活への心構え	.047 ns	.061 *	.058 *	.171 ***	.152 ***	.165 ***

※ ***…p<.0001, **…p<.01, *…p<.05, †…p<.10, ns…有意ではない

※ r=3.0以上を太字

A検査 (職業興味) からみていくと、.30以上の正の相関が見られたのは「社会貢献」とS領域 (社会的領域)、「地位」および「外界への積極性」とE領域 (企業的領域)であった。

「社会貢献」は人の役に立ちたいという価値観を示すので、それが職業興味の中の社会的領域と関連付けられる点は納得できる。また、「地位」と「外界への積極性」は上昇志向や対外的な積極的傾向を示す尺度であるが、そういった特徴と結びつくE領域（企業的領域）の職業興味と関連が高いことも納得できる結果であった。

次にA検査(職業興味)と同じく職業志向性に関連付けられるC検査（職務遂行の自信度）と新規尺度の相関係数では、A検査と同じく「社会貢献」とS領域（社会的領域）、「地位」および「外界への積極性」とE領域(企業的領域)の間に.30以上の正の相関がみられた。興味と同様に自信に関しても同じような傾向が示されている。このほか、「外界への積極性」とS領域（社会的領域）、「気持ちの切り替え」とE領域（企業的領域）との間にも.30以上の正の相関がみられた。C検査(職務遂行の自信度)はその項目内容の作業をうまくできる自信がある、という評価であるので、S領域（社会的領域）やE領域（企業的領域）のような対人的要素の強い仕事への自信の高さが「社会貢献」、「地位」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」という対人的な要素を含む特性と強く関連付けられたと考えられる。

一方で、B検査（基礎的志向性）であるが、これについてはとくにD志向（対情報志向）とP志向（対人志向）において、A検査やC検査よりも比較的多くの相関係数が.30以上となった。D志向（対情報志向）については、「自己成長」、「社会貢献」「主体的進路選択」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」との間に.30以上の正の相関がみられた。「地位」、「経済性」、「仕事と生活のバランス」、「気持ちの切り替え」との相関はそれほど強くなかった。

次にP志向（対人志向）ではD志向と同じく新規尺度の多くの特性との間に比較的強い相関関係がみられた。「自己成長」、「社会貢献」、「地位」、「主体的進路選択」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」との間に.30以上の正の相関が示された。P志向と関連がある新規尺度の特性は、どれも対人的な要素を含むものである。

3つめのT志向(対物志向)に関しては、D志向やP志向よりも新規尺度との関連が弱く、.30以上の相関を示したのは「外界への積極性」のみであった。なお、全体として、新規尺度の特性のうち「経済性」と「仕事と生活のバランス」の2つは、B検査との相関係数の値がそれほど高くなく、関連性が弱いようであった。

なお、「2019年調査」のデータで実施した新規尺度と職業レディネス・テストの各尺度との関連であるが、上記の結果とほぼ同じような傾向がみられ、職業レディネス・テストのA検査、C検査よりもB検査と新規尺度との相関係数が高めの結果となっている（労働政策研究・研修機構,2020）。A検査とC検査のS領域（社会的領域）とE領域（企業的領域）と「社会貢献」、「地位」、「外界への積極性」との関連が強いことは「2019年調査」でも同様であった。また、B検査では、D志向（対情報志向）で.30以上の相関がみられなかったのが「地位」、「仕事と生活のバランス」、「気持ちの切り替え」であること、P志向（対情報志向）で.30以上の相関がみられなかったのが「経済性」と「仕事と生活のバランス」である点も一致していた。一方、D志向（対情報志向）と「経済性」の相関は「2019年調査」では.30以上で

あったが今回は.30を下回った。加えてT志向（対物志向）では「外界への積極性」との間に.30以上の相関が見られたことは一致したが、「2019年調査」では、このほかに「自己成長」に関しても.30以上の正の相関がみられた点が異なっていた。

②新規尺度の特性とB検査の各下位尺度との相関係数

職業レディネス・テストの3つの検査のうち、新規尺度で測定される9つの特性と関連が強いのはB検査（基礎的志向性）であることが示されたため、B検査の下位尺度を構成する個々の要素別に新規尺度の特性との相関係数を算出した。結果を図表9-4に示す。なお図表の横軸のD1からT2はそれぞれ8項目で構成されている。相関係数は8項目の合計得点と9特性それぞれの合計得点を用いて算出した。

図表 9-4 B検査(基礎的志向性)の下位尺度と新規尺度との相関係数 (Pearsonのr)

尺度	D1	D2	D3	P1	P2	P3	T1	T2
	情報を集める	好奇心を満たす	情報を活用する	自分を表現する	みんなと行動する	人の役に立つ	物をつくる	自然に親しむ
自己成長	.314 ***	.331 ***	.284 ***	.295 ***	.356 ***	.515 ***	.178 ***	.244 ***
社会貢献	.251 ***	.320 ***	.251 ***	.258 ***	.384 ***	.646 ***	.096 **	.265 ***
地位	.250 ***	.165 ***	.170 ***	.324 ***	.312 ***	.241 ***	.101 **	.101 **
経済性	.200 ***	.105 **	.149 ***	.153 ***	.178 ***	.135 ***	.053 †	.026 ns
仕事と生活のバランス	.091 **	.079 **	.092 ns	-.015 ns	.049 †	.090 **	.007 ns	.053 †
主体的進路選択	.306 ***	.294 ***	.260 ***	.252 ***	.259 ***	.371 ***	.147 ***	.209 ***
気持ちの切り替え	.274 ***	.177 ***	.198 ***	.343 ***	.323 ***	.255 ***	.177 ***	.195 ***
外界への積極性	.416 ***	.391 ***	.327 ***	.429 ***	.401 ***	.468 ***	.287 ***	.332 ***
社会生活への心構え	.306 ***	.268 ***	.406 ***	.203 ***	.259 ***	.418 ***	.137 ***	.174 ***

※ ***…p<.0001, **…p.01, †…p<.10, ns…有意ではない

※ r=3.0以上を太字

D志向（対情報志向）はD1（情報を集める）、D2（好奇心を満たす）、D3（情報を活用する）という3つの要素を含む。D1（情報を集める）では「自己成長」、「主体的進路選択」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」との間に.30以上の正の相関を示した。D2（好奇心を満たす）では「自己成長」、「社会貢献」、「外界への積極性」との間の相関係数が.30以上となった。D3（情報を活用する）は、「外界への積極性」と「社会生活への心構え」との間に.30以上の正の相関を示した。

P志向（対人志向）は、P1（自分を表現する）、P2（みんなと行動する）、P3（人の役に立つ）という3つの要素で構成される。P1（自分を表現する）と.30以上の相関がみられたのは「地位」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」であった。特に「外界への積極性」との相関が強くみられた。P2（みんなと行動する）については、「自己成長」、「社会貢献」、「地

位」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」の5つと.30以上の相関係数が得られた。P3（人の役に立つ）については、「自己成長」、「社会貢献」との間に強い正の相関がみられ、そのほか、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」、「主体的進路選択」に関しても.30以上の正の相関がみられた。

T志向（対物志向）のうちT1（物をつくる）については.30以上の相関係数はどの特性に関しても得られなかった。T2（自然に親しむ）に関しては「外界への積極性」に関して.30以上の正の相関係数が示された。図表9-3におけるT志向（対物志向）全体の「外界への積極性」との関連は、T2（自然に親しむ）の要素との関連に関して得られた結果と解釈できる。

以上、職業レディネス・テストの軸を中心にみてきたが、新規尺度の特性の方からこの相関関係をみてみると、「仕事選び基準尺度」の「自己成長」や「社会貢献」はD志向（対情報志向）やP志向（対人志向）と関連があり、特に「人の役に立つ」という要素との関連が強いことがわかる。「地位」はP志向（対人志向）のうちの「自分を表現する」とか、「みんなと行動する」との関連が強く、集団活動やその中で自己表現を好む傾向と結びつく特徴であることがわかる。「経済性」と「仕事と生活のバランス」については基礎的志向性に関しても特に関連性が見られず、職業レディネス・テストの項目とは関わりの薄い、独立した別の要素を測定するものとみることができる。「主体的進路選択」は「情報を集める」と「人の役に立つ」という要素と関連を示していた。

「基礎的性格特性」の「気持ちの切り替え」は「自分を表現する」、「みんなと行動する」という要素と関連を示し、対人的な要素が強い項目であることがわかるが、人をサポートするというよりは集団の中で積極的に活動する要素との関連が強い特性であることが示唆されている。「外界への積極性」はD志向（対情報志向）とP志向（対人志向）のすべての要素と.30以上の正の相関を示し、さらにT志向（対物志向）の「自然に親しむ」との関連もみられ、どの特性とも一番関連が見られた特性であった。

「基礎的生活特性」の「社会生活への心構え」については「情報を集める」、「情報を活用する」、「人の役に立つ」という項目との相関がみられた。

なお、「2019年調査」のデータ分析の結果をみてみると、今回の分析結果とほぼ同様の結果が示されていた。すなわち、「仕事選び基準尺度」では、「自己成長」と「社会貢献」において「人の役に立つ」との相関が最も強く出ており、「地位」に関しては「自分を表現する」との相関係数が最も高かった。他方、「経済性」と「仕事と生活のバランス」に関しては.30以上の相関係数が今回と同様に得られていない。「主体的進路選択」では「人の役に立つ」との相関が最も強くなっていた。次に、「基礎的性格特性尺度」の「気持ちの切り替え」についてはP志向（対人志向）の「自分を表現する」と「みんなと行動する」との相関係数が高めであることも一致していた。また、「外界への積極性」ではD志向（対情報志向）とP志向（対人志向）のすべての特性と.30以上の相関が得られ、その中で一番高い値は「人の役に立つ」であった点も一致していた。「基礎的生活特性」の「社会生活への心構え」については、

「情報を活用する」と「人の役に立つ」の2つが.40以上の強い相関を示した点も一致していた。

4. まとめ

第9章では、高等教育課程の在学者や若年の求職者のために開発した新規尺度と職業レディネス・テストの各下位検査、下位尺度との関連を検討した。

新規尺度は「仕事選び基準尺度」と「基礎的性格特性尺度」と「基礎的生活特性尺度」で構成され、全体で9つの特性が測定されるが、「仕事選び基準尺度」は「自己成長」、「社会貢献」、「主体的進路選択」という特性が一つのまとまりであり、「経済性」と「地位」とは捉えている側面が異なること、また「仕事と生活のバランス」も独立した要素を測定するものとして考える必要があることが示唆された。他方、「基礎的性格特性尺度」の「気持ちの切り替え」と「外界への積極性」および「基礎的生活特性尺度」は「仕事選び基準尺度」とは別の要素を測っていることが確認された。

他方、職業レディネス・テストとの関連をみると、職業志向性を測定するA検査（職業興味）やC検査（職務遂行の自信度）との関連は限定的であった。新規尺度の「社会貢献」、「地位」、「外界への積極性」については、社会的領域や企業的領域など、主に対人系の興味領域との関連が示されたが、それ以外の領域との関連は弱く、新規尺度で測定されている特性は、職業レディネス・テストでは測定できていないものという観点からすれば、職業レディネス・テストに追加して補完的に実施することの意味が確認できたといえるだろう。

また、日常生活の態度や行動について回答するB検査（基礎的志向性）については、とくにD志向（対情報志向）とP志向（対人志向）において多くの特性との関連がみられたが、T志向（対物志向）との関連は限定的であった。ただ、「経済性」と「仕事と生活のバランス」という2つの特性についてはB検査のすべての下位尺度との間にほとんど関連がみられず、この2つは普段の生活における興味の方向性とも独立の要素を測定する尺度となっていることが示された。

引用文献

労働政策研究・研修機構（2020）。「職業レディネス・テストの改訂に関する研究—大学生等の就職支援のための尺度の開発—」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第10章 在学者の専攻と各特性との関連性

1. はじめに

本章では「2020年調査」のデータをもちいて、在学者の専攻・専門と、それらを文系、理系、文理融合系の3つに分類した系による違いについて検討した。詳しく述べると、「2020年調査」では、人文科学、社会科学、理学、工学、農学、保健、家政、教育、芸術、その他という11の専攻・専門に所属する学生からデータが得られた。これらを文系495名（人文科学129名・社会科学252名・教育69名・芸術45名）、理系302名（理学91名・工学181名・農学30名）、そして、文理融合系174名（保健159名・家政15名）という3つの系に分類した。このような基準で調査対象者を分類すると3つの系の間で人数に偏りがみられたが、大きな括りを用いることは大学生の専門領域と志向や特性の関わりについて全体的な傾向を把握するために役立つものと考えた。なお、専攻・専門について「その他」と回答した112名は系を用いた分析から除外し、専攻・専門について未回答の78名は本章の分析全体から除外した（図表10-1参照）。

図表 10-1 専攻・専門 と系のクロス集計

専攻・専門	系			その他/ 未回答	合計 (人数)	合計 (%)
	文系	理系	文理融合系			
人文科学	129	0	0	0	129	11.1
社会科学	252	0	0	0	252	21.7
理学	0	91	0	0	91	7.8
工学	0	181	0	0	181	15.6
農学	0	30	0	0	30	2.6
保健	0	0	159	0	159	13.7
家政	0	0	15	0	15	1.3
教育	69	0	0	0	69	5.9
芸術	45	0	0	0	45	3.9
その他	0	0	0	112	112	9.6
未回答	0	0	0	78	78	6.7
合計(人数)	495	302	174	190	1161	100
合計 (%)	42.6	26.0	15.0	16.4	100	

専攻・専門がその他と回答した112名は系による分析から除外、未回答の78名は本章の分析から除外した

本章で報告する分析の概要は以下の通りである。職業レディネス・テストのA検査（職業興味）とC検査（職務遂行の自信度）、B検査（基礎的志向性）、ならびに、新規尺度の仕事選び基準尺度、基礎的性格特性尺度、基礎的生活特性尺度それぞれについて、3つの系の平均値を算出した。まず、系の平均値を分散分析によって検定し、文系、理系、文理融合系という大きな括りでの差異を検討した（有意水準は $p < .05$ とした）。次に、11の専攻・専門に

よる平均値を算出し、大学で学ぶ専門領域による得点傾向についてより詳細な検討をくわえた。さらに、A検査、C検査、B検査と仕事選び基準尺度、基礎的性格特性尺度、基礎的生活特性尺度の相関係数を3つの系ごとに算出し、職業レディネス・テストにおける既存の尺度と新規尺度が捉える傾向がどのような関わりをもつのかについて検討をくわえた。

2. A検査とC検査における各領域の平均値

(1) A検査とC検査得点の系による比較

A検査（職業興味）の平均値を3つの系別に算出し、一要因の分散分析を行った結果を図表10-2に示す。RIASECの6領域すべてにおいてF値が有意となり、系による違いがみとめられた。R領域は理系が文系と文理融合系よりも高く、I領域は理系、文理融合系、文系という順序であった。すなわち、物を対象とした領域と研究や調査などを行う領域では理系の学生の興味が他と比較して高いことが分かる。A領域は、文系が理系と文理融合系よりも高く、文系に芸術専攻が含まれていることから納得がいく結果といえる。対人的なS領域は、文理融合系がもっとも高く、続いて文系そして理系という順序であった。E領域は、文系がもっとも高く次に理系そして文理融合系、C領域は文系と理系が文理融合系よりも高い得点を示していた。このように企画立案や運営を行う活動領域と、習慣や規則を重んじた活動領域でも文系の学生の興味が他より高めであることが分かる。

図表 10-2 職業興味 of 系別比較

興味	系	M	SD	F値	p値	多重比較 ($\alpha = 0.05$)
R領域	文系	3.53	(4.19)	36.047	.000	理系>文系・融合
	理系	5.95	(4.54)			
	文理融合系	3.25	(3.88)			
I領域	文系	5.12	(4.90)	50.215	.000	理系>融合>文系
	理系	8.93	(5.80)			
	文理融合系	7.21	(5.30)			
A領域	文系	6.94	(5.03)	13.958	.000	文系>理系・融合
	理系	5.41	(4.71)			
	文理融合系	5.08	(4.81)			
S領域	文系	5.27	(3.99)	41.277	.000	融合>文系>理系
	理系	3.68	(3.78)			
	文理融合系	7.17	(4.76)			
E領域	文系	6.53	(4.76)	14.531	.000	文系>理系>融合
	理系	5.55	(4.50)			
	文理融合系	4.39	(4.51)			
C領域	文系	7.57	(5.15)	5.667	.004	文系・理系>融合
	理系	7.54	(4.82)			
	文理融合系	6.14	(5.04)			

次に、C検査（職務遂行の自信度）の平均値を系別に算出して一要因の分散分析を行った結果を図表 10-3 に示す。6つの領域すべてにおいてF値が有意となり、系による違いがみとめられた。R領域では、理系が文理融合系と文系よりも高く、I領域では、理系、文理融合系、文系という順序であった。興味を測定するA検査の結果と同じく、職務遂行の自信においても理系の学生は現実的な活動と研究的活動の得点が高いことが分かる。その他、A領域では、文系が理系よりも高く、S領域では文理融合系が一番高く文系がそれに続き理系はもっとも低かった。E領域では、文系と理系が文理融合系よりも高く、C領域では理系が文系と文理融合系よりも高かった。A検査とC検査の系別比較の結果をあわせてみると、R領域とI領域では興味と自信いずれにおいても理系が高く、A領域とE領域は文系が、S領域については文理融合系が高いことが分かる。注目に値するのはC領域で、興味については文系と理系が文理融合より高く、文系と理系の間に差異はみられなかったが、自信については理系の学生が文系の学生よりも高い。文理融合系は、E領域とC領域に対して興味も自信も低めであることが特徴といえる。

図表 10-3 職務遂行の自信度の系別比較

自信	系	M	SD	F値	p値	多重比較($\alpha = 0.05$)
R領域	文系	3.22	(4.06)	37.134	.000	理系>融合・文系
	理系	5.86	(4.83)			
	文理融合系	3.51	(4.07)			
I領域	文系	3.79	(4.41)	54.855	.000	理系>融合>文系
	理系	7.47	(5.63)			
	文理融合系	6.15	(5.10)			
A領域	文系	4.72	(4.45)	4.579	.010	文系>理系
	理系	3.80	(4.09)			
	文理融合系	4.10	(4.21)			
S領域	文系	5.16	(4.31)	28.951	.000	融合>文系>理系
	理系	3.94	(4.05)			
	文理融合系	7.09	(4.94)			
E領域	文系	4.68	(4.59)	3.497	.031	文系・理系>融合
	理系	4.58	(4.42)			
	文理融合系	3.66	(4.26)			
C領域	文系	7.74	(5.42)	8.332	.000	理系>文系・融合
	理系	9.15	(5.12)			
	文理融合系	7.43	(5.46)			

(2) A検査とC検査得点の専攻・専門による比較

A検査（職業興味）とC検査（職務遂行の自信度）の平均値を専攻・専門ごとに算出したのが図表 10-4 である。また、ここに示すデータをもちいてRIASECの6領域ごとに職業興味と職務遂行の自信度についてグラフを作成したのが図表 10-5、図表 10-6、図表 10-7、図表 10-8、図表 10-9、図表 10-10 である。ここで示すグラフには、専攻・専門を「その他」とし

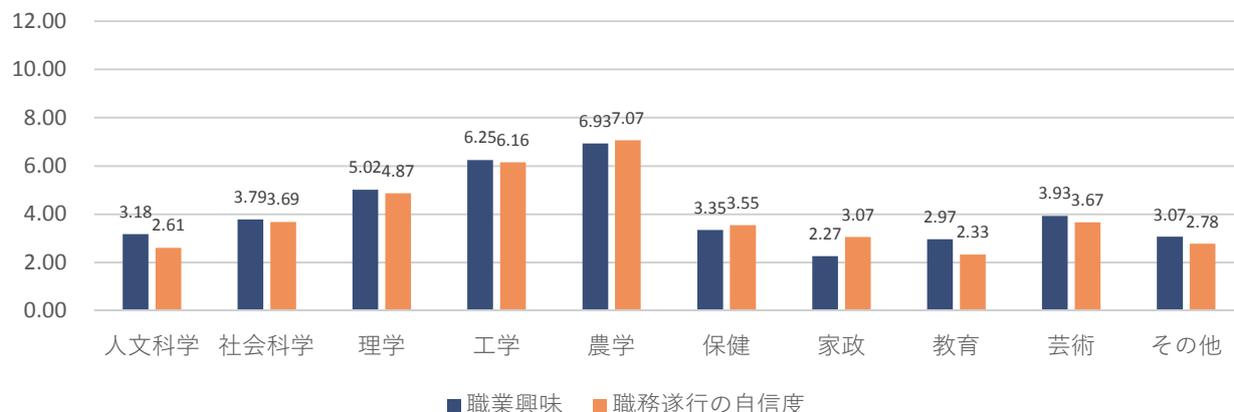
た回答者のデータも示しているが、あくまで参考データとし、「その他」をのぞく9つの専攻・専門について検討を行うこととした。

図表 10-4 職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較

領域	専攻・専門	A検査（職業興味）		C検査（職務遂行の自信度）		領域	専攻・専門	A検査（職業興味）		C検査（職務遂行の自信度）	
		M	SD	M	SD			M	SD	M	SD
R領域	人文科学	3.18	(4.00)	2.61	(3.70)	S領域	人文科学	5.05	(4.06)	4.30	(4.13)
	社会科学	3.79	(4.14)	3.69	(4.22)		社会科学	5.02	(3.75)	5.27	(4.28)
	理学	5.02	(4.54)	4.87	(4.75)		理学	3.51	(3.93)	3.63	(4.02)
	工学	6.25	(4.31)	6.16	(4.71)		工学	3.70	(3.69)	3.90	(3.97)
	農学	6.93	(5.53)	7.07	(5.39)		農学	4.03	(3.92)	5.10	(4.50)
	保健	3.35	(3.88)	3.55	(4.08)		保健	7.38	(4.69)	7.25	(4.96)
	家政	2.27	(3.88)	3.07	(4.13)		家政	4.93	(5.06)	5.33	(4.50)
	教育	2.97	(4.08)	2.33	(3.45)		教育	7.33	(4.34)	6.88	(4.17)
	芸術	3.93	(5.04)	3.67	(4.65)		芸術	4.20	(3.56)	4.42	(4.50)
	その他	3.07	(3.88)	2.78	(3.80)		その他	5.85	(4.08)	5.62	(4.38)
I領域	人文科学	5.61	(5.07)	3.81	(4.44)	E領域	人文科学	5.45	(4.34)	3.12	(3.89)
	社会科学	5.10	(4.81)	4.15	(4.56)		社会科学	7.34	(4.87)	5.75	(4.77)
	理学	10.04	(6.05)	8.32	(5.86)		理学	4.49	(4.17)	3.85	(4.28)
	工学	8.01	(5.51)	6.69	(5.42)		工学	5.96	(4.44)	4.73	(4.28)
	農学	11.13	(5.73)	9.63	(5.43)		農学	6.33	(5.38)	5.90	(5.40)
	保健	7.39	(5.21)	6.14	(5.01)		保健	4.33	(4.53)	3.59	(4.28)
	家政	5.33	(6.11)	6.27	(6.13)		家政	5.00	(4.44)	4.33	(4.03)
	教育	4.13	(4.51)	2.74	(3.99)		教育	5.74	(4.57)	3.97	(4.27)
	芸術	5.38	(5.42)	3.29	(3.88)		芸術	6.31	(4.89)	4.18	(4.45)
	その他	4.21	(4.78)	3.34	(4.34)		その他	6.21	(4.57)	4.21	(4.36)
A領域	人文科学	7.81	(5.46)	4.52	(4.46)	C領域	人文科学	7.55	(5.43)	6.67	(5.31)
	社会科学	6.41	(4.75)	4.63	(4.40)		社会科学	8.25	(4.98)	8.90	(5.24)
	理学	5.13	(5.06)	3.91	(4.65)		理学	7.33	(4.73)	8.40	(5.14)
	工学	5.57	(4.51)	3.68	(3.76)		工学	7.96	(4.88)	9.57	(5.08)
	農学	5.33	(4.96)	4.20	(4.25)		農学	5.70	(4.39)	8.87	(5.20)
	保健	5.09	(4.84)	4.09	(4.21)		保健	6.16	(4.99)	7.47	(5.49)
	家政	5.00	(4.63)	4.27	(4.25)		家政	5.93	(5.79)	7.00	(5.21)
	教育	5.61	(4.94)	4.14	(4.44)		教育	6.32	(5.15)	6.91	(5.56)
	芸術	9.42	(4.30)	6.71	(4.31)		芸術	5.78	(4.65)	5.60	(5.15)
	その他	6.60	(4.77)	4.30	(3.83)		その他	6.63	(5.10)	6.91	(5.18)

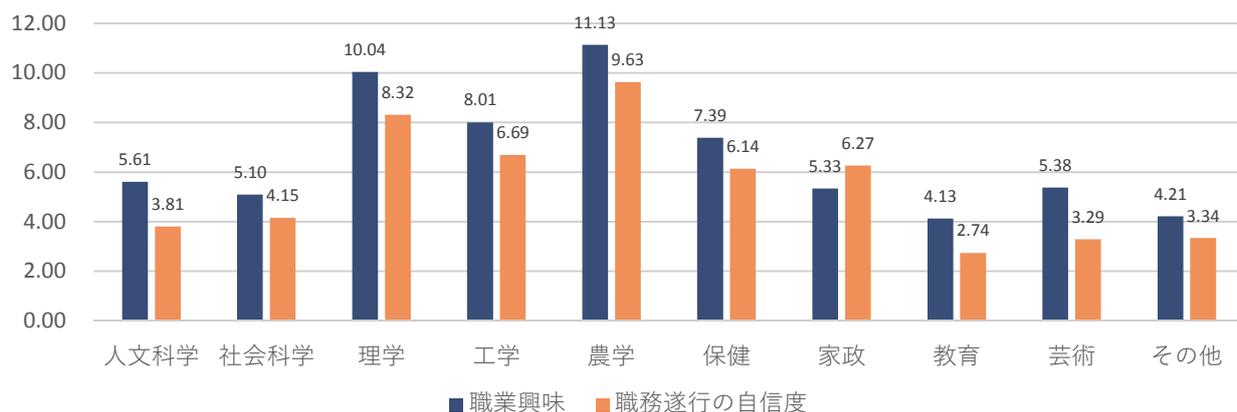
R（現実的）領域は、農学、工学、理学と、理系分野における興味と自信がともに高く、その他の専攻では低めの値が示されている。とくに、家政と教育における値が低く、家政では自信が興味よりも高いのに対して、教育では興味が自信よりも高い得点を示していた。専攻によって自信と興味いずれが高いかは異なるものの、自信と興味の得点傾向はどの専攻においてもおおそ一致していることが分かる。R領域は他の領域と比較して全体的に得点が低く、理系をのぞく大学生にとって関心をもちにくく自信も育ちにくい活動領域といえる。

図表 10-5 R 領域の職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較



I (研究的) 領域において、専攻間の順位は R 領域と同じ傾向がみられるが、得点は全体的にみて興味、自信ともに R 領域よりも高めである。R 領域と同じく農学、理学、工学と理系分野における興味と自信がともに高く、それに続くのが保健、家政などの文理融合系で、文系は低めであった。文系のなかでも教育における得点がもっとも低く、人を育てたり教えたりを専門として学ぶ学生は、研究的な活動に対する関心も自信も低いものと考えられる。また、I 領域は R 領域よりも興味と自信の差異が比較的是っきりとみとめられ、家政をのぞく全ての専攻において興味が自信よりも高い。これは、研究や調査のような探索的活動に対して関心をもっていても、その興味を現実的な職業選択に結びつけるような自信がもちにくいと解釈できる。

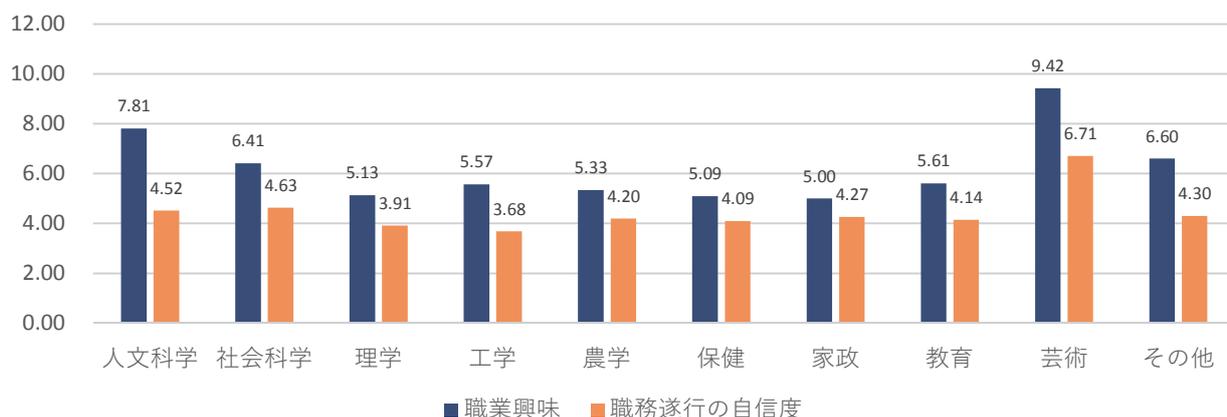
図表 10-6 I 領域の職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較



A (芸術的) 領域については、芸術を専攻する学生の興味と自信がもっとも高く、つづいて人文社会、社会科学と、文系の得点が高めである。この領域の得点は全体的に高くないが、いずれの専攻・専門においても興味が自信より高く、大学生にとって自信はもてなくても興味や関心のわく活動領域であることが分かる。とくに芸術と人文科学における興味と自信の

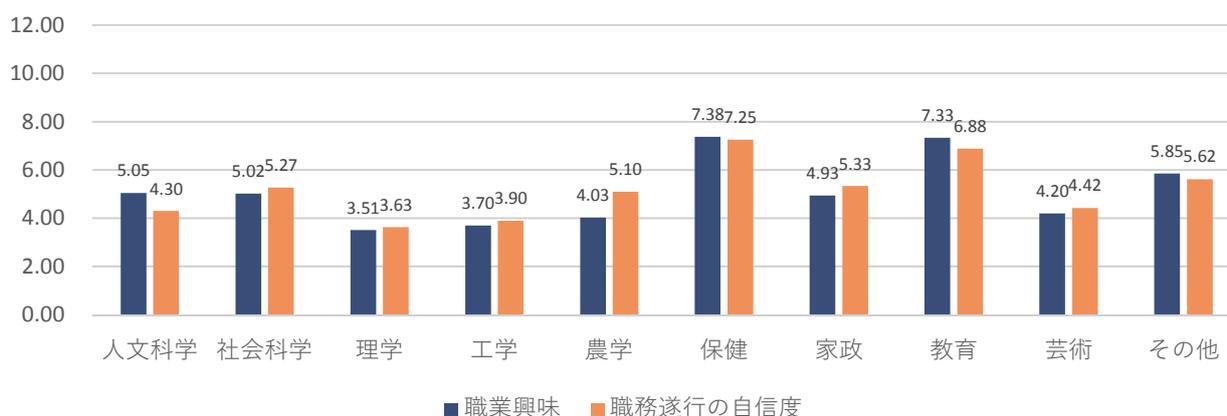
差異が明確にでている点も注目に値する。芸術と人文科学を除いた専攻における得点は高くはなく、とくに家政、保健、理学における興味と、工学、理学における自信が低い値を示していた。

図表 10-7 A 領域の職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較



S（社会的）領域においては、保健と教育における得点が興味、自信ともに高く、興味は人文科学、社会科学、家政が、自信については家政、社会科学がそれに続いている。一方、理学、工学では興味と自信いずれも低めの得点であった。S 領域は全体的にみて、興味と自信の得点に大きな差異がないことから、関心の程度と自信の程度がおおむね合致していることが特徴といえる。この点は、高めの得点を示す保健、教育においても、得点が低めの理学や工学においても同様に専攻間に共通した傾向といえる。

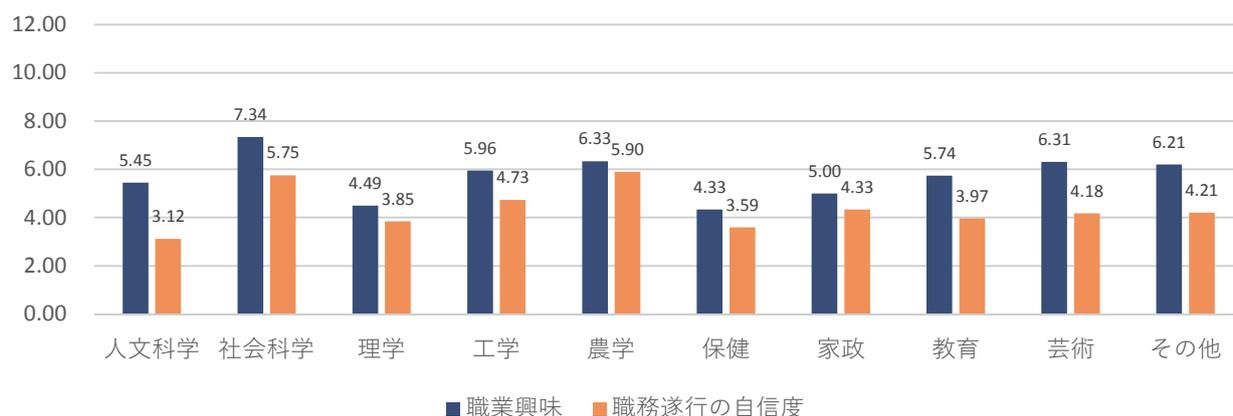
図表 10-8 S 領域の職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較



E（企業的）領域は、他に比べて専攻による差異が明確ではないが、興味は社会科学が最も高く、農学と芸術がそれに続いており、自信は農学がもっとも高く、社会科学、次に工学という順序であった。系による比較では興味が文系＞理系＞文理融合、自信は文系・理系

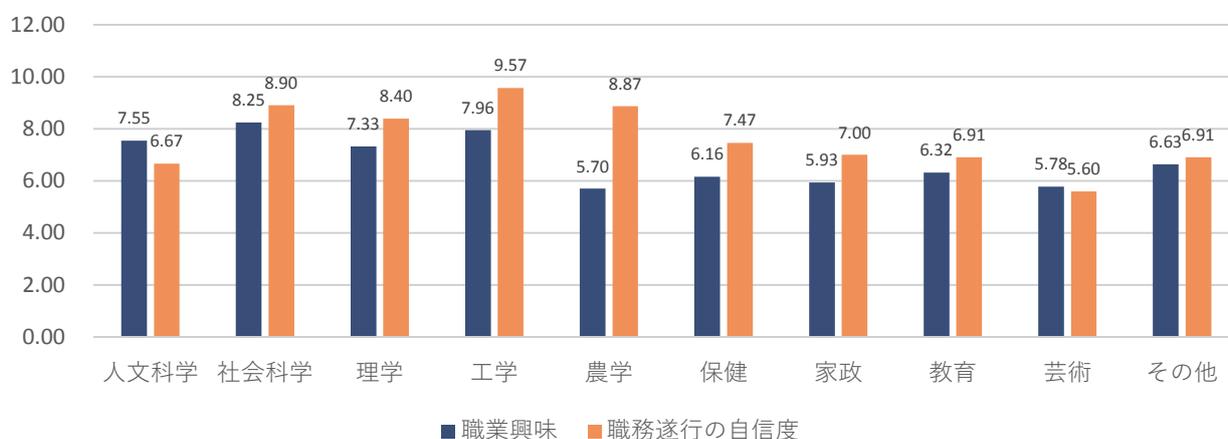
＞文理融合系という結果であったが、専攻ごとにみていくと系という大きな括りでは説明仕切れない差異があることが分かる。例えば文系のなかでも社会科学は興味と自信それぞれが高めであるが、人文科学の興味はそれほど高くはなく自信については他の専攻と比較して低い値を示している。また、E 領域ではすべての専攻において興味が自信よりも高い値を示しており、両者の差異が比較的是っきりしていることもこの領域の特徴といえる。

図表 10-9 E 領域の職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較



C（慣習的）領域は、他の領域よりも全体的に得点が高く、芸術と人文科学をのぞくすべての専攻において自信が興味よりも高い得点を示している。興味は、社会科学がもっとも高く、工学、人文科学、そして理学がそれにつづいており、自信については、工学がもっとも高く、社会科学、農学、そして理学という順序であった。理系の分野では興味と自信の差異がはっきりと現れており、規則や慣例にしたがう活動について自信はもてるが興味にはつながりにくく、とくに工学と農学においてその傾向がはっきりと見てとれる。一方、独創的な学問分野である芸術においては興味と自信ともに低くなることは理解できる。

図表 10-10 C 領域の職業興味と職務遂行の自信度の専攻・専門による比較



3. B検査の各志向性の平均値

(1) DPT 志向得点の系による比較

B検査（基礎的志向性）のDPT志向の平均値を系別に算出して一要因の分散分析を行った結果を図表10-11に示す。D（対情報関係）志向とP（対人関係）志向におけるF値は有意とはならず、T（対物関係）志向においてのみ統計的に有意なF値が得られた。多重比較の結果、理系の得点が文系よりも有意に高く、文理融合系はいずれの系との間にも有意な差異がみられなかった。すなわち、理系の学生は機械や道具、装置など、いわゆる物を扱うことへの志向が高いことが確認できた。

図表 10-11 DPT 志向の系別比較

	系	M	SD	F値	p値	多重比較(α= 0.05)
D志向	文系	14.14	(5.39)	2.610	.074	
	理系	14.06	(5.45)			
	文理融合系	13.07	(5.66)			
P志向	文系	11.50	(5.77)	2.931	.054	
	理系	10.48	(5.82)			
	文理融合系	11.22	(5.73)			
T志向	文系	6.62	(4.22)	4.502	.011	理系>文系
	理系	7.57	(4.40)			
	文理融合系	6.89	(4.52)			

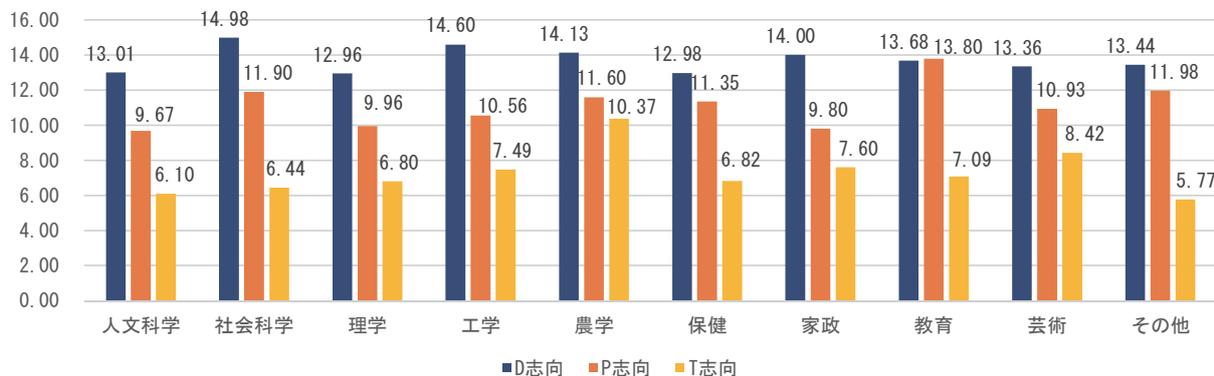
(2) DPT 志向得点の専攻・専門による比較

次に、B検査（基礎的志向性）のDPT志向の平均値を専攻・専門ごとに算出したのが図表10-12で、ここに示すデータをもちいてグラフを作成したのが図表10-13である。

図表 10-12 DPT 志向の専攻・専門による比較（表）

専攻・専門	D志向		P志向		T志向	
	M	SD	M	SD	M	SD
人文科学	13.01	(5.45)	9.67	(5.09)	6.10	(3.80)
社会科学	14.98	(5.38)	11.90	(5.94)	6.44	(4.29)
理学	12.96	(5.95)	9.96	(6.01)	6.80	(4.46)
工学	14.60	(5.15)	10.56	(5.52)	7.49	(4.21)
農学	14.13	(5.32)	11.60	(6.89)	10.37	(4.36)
保健	12.98	(5.75)	11.35	(5.86)	6.82	(4.64)
家政	14.00	(4.71)	9.80	(3.97)	7.60	(2.95)
教育	13.68	(5.28)	13.80	(5.76)	7.09	(4.85)
芸術	13.36	(4.71)	10.93	(5.14)	8.42	(3.48)
その他	13.44	(5.53)	11.98	(5.99)	5.77	(4.36)

図表 10-13 DPT 志向の専攻・専門による比較 (図)



それぞれの志向について見ていくと、D（対情報関係）志向は、社会科学、工学、農学が高く、保健、理学が低めで、系という大きな括りでは捉えきれない専攻による違いがグラフから読み取れる。P（対人関係）志向については、教育、社会科学という文系の専攻について農学、保健で高めの値がみられ、人文科学、家政、理学では低めの得点が示され、系による括りでは分からない専攻による差異がみられる。T（対物関係）志向は、農学の得点が他と比較して高い値を示しており、生産技術や加工技術等を学ぶ専攻の特徴がよく表れた結果といえる。T志向は、続いて芸術、家政、工学という順位であるが、農学をのぞくと専攻間の差異はそれほど明確ではなかった。

このように、A検査とC検査では、文系、理系、文理融合系という3つの系の差異と9つの専攻・専門による差異がおおむね同じ方向性であったのに対して、B検査で測定するデータ、人、モノへの志向は、文系、理系、文理融合系という大きな括りにくわえて、専攻というより細かな分類によって専門分野との関わりを理解することが望ましい。

4. 新規尺度における各領域の平均値

(1) 仕事選び基準尺度の系と専攻・専門による比較

新規尺度の仕事選び基準尺度の6つの下位尺度、すなわち自己成長、社会貢献、地位、経済性、仕事と生活のバランス、主体的進路選択の平均値を系別に算出して一要因の分散分析を行った結果が図表 10-14 である。ここに示すとおり社会貢献のF値が有意となり、仕事を通じて地域社会のために役立ちたいとの価値は、文理融合系と文系が理系よりも高いことが分かる。また、地位においても有意なF値が得られ、上昇志向や地位獲得への価値は理系の学生が文系と文理融合系よりも高いという結果であった。

図表 10-14 仕事選び基準尺度の系別比較

尺度	系	M	SD	F値	p値	多重比較 ($\alpha = 0.05$)
自己成長	文系	24.95	(5.75)	1.809	.164	
	理系	24.25	(6.06)			
	文理融合系	25.16	(5.95)			
社会貢献	文系	23.24	(7.10)	6.971	.001	融合・文系 > 理系
	理系	21.86	(7.56)			
	文理融合系	24.30	(6.60)			
地位	文系	17.72	(7.44)	4.851	.008	理系 > 文系・融合
	理系	19.30	(7.26)			
	文理融合系	17.72	(7.00)			
経済性	文系	21.93	(6.07)	2.148	.117	
	理系	22.77	(5.93)			
	文理融合系	22.63	(6.05)			
仕事と生活のバランス	文系	25.05	(5.56)	0.893	.410	
	理系	24.52	(5.56)			
	文理融合系	24.91	(5.34)			
主体的進路選択	文系	24.66	(5.04)	1.834	.160	
	理系	23.95	(5.26)			
	文理融合系	24.41	(5.17)			

対象学生の専門による差異をより細かくとらえるために、仕事選び基準尺度の6つの下位尺度の平均値を専攻・専門別に算出したのが図表 10-15 である。自己成長については教育がもっとも高く、保健、社会科学、農学が続いており、家政と理学では低めの値が得られた。社会貢献では、人や社会を対象とした学びを専門とする教育と保健で高めの値が得られ、理学、家政、芸術の得点は低めであった。地位については、工学が最も高く、社会科学そして農学と続いており、低めの値が得られたのは家政と人文科学であった。経済性では、工学がもっとも高く、次いで保健、社会科学という順序で、低めの得点を示すのは芸術と家政、そして人文科学であった。仕事と生活のバランスが最も高かったのは人文科学で、家政と社会科学がそれに続き、最も低い値が得られたのは芸術であった。主体的進路選択では、教育、続いて農学が高い得点を示しており、家政と理学における得点は低かった。

図表 10-15 仕事選び基準尺度の専攻・専門による比較

専攻	自己成長		社会貢献		地位		経済性		仕事と生活のバランス		主体的進路選択	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
人文科学	24.23	(5.92)	22.11	(7.15)	15.79	(7.74)	20.97	(6.08)	25.57	(5.54)	24.43	(5.29)
社会科学	25.15	(5.73)	23.77	(6.72)	18.92	(7.12)	22.68	(6.10)	25.14	(5.66)	24.58	(4.83)
理学	23.51	(6.87)	20.14	(8.50)	17.92	(7.99)	21.86	(6.52)	24.40	(6.01)	23.40	(5.93)
工学	24.47	(5.56)	22.69	(6.40)	20.07	(6.80)	23.39	(5.53)	24.61	(5.27)	24.01	(4.98)
農学	25.13	(6.29)	22.10	(10.09)	18.80	(7.21)	21.87	(6.16)	24.30	(5.95)	25.27	(4.59)
保健	25.31	(5.72)	24.70	(6.15)	17.89	(7.10)	22.81	(6.11)	24.89	(5.46)	24.53	(5.13)
家政	23.53	(8.10)	20.07	(9.50)	15.93	(5.78)	20.67	(5.12)	25.20	(3.91)	23.13	(5.60)
教育	26.01	(5.15)	25.52	(6.21)	17.14	(6.57)	21.67	(5.86)	24.83	(4.95)	25.39	(4.83)
芸術	24.24	(6.09)	20.04	(8.73)	17.44	(8.43)	20.84	(5.82)	23.40	(5.82)	24.69	(5.80)
その他	25.04	(6.65)	23.75	(7.58)	17.78	(7.81)	22.02	(6.37)	26.25	(4.81)	25.37	(4.48)

(2) 基礎的性格特性尺度と基礎的生活特性尺度の系と専攻・専門による比較

新規尺度の基礎的性格特性尺度（気持ちの切り替え・外界への積極性）と基礎的生活特性尺度（社会生活への心構え）の平均値を系別に算出して一要因の分散分析を行った結果が図表 10-16 である。ここに示すとおり、いずれの尺度についても有意な F 値は得られず、働くことに関連した基礎的性格特性、社会生活への準備状況に系による違いはないといえる。

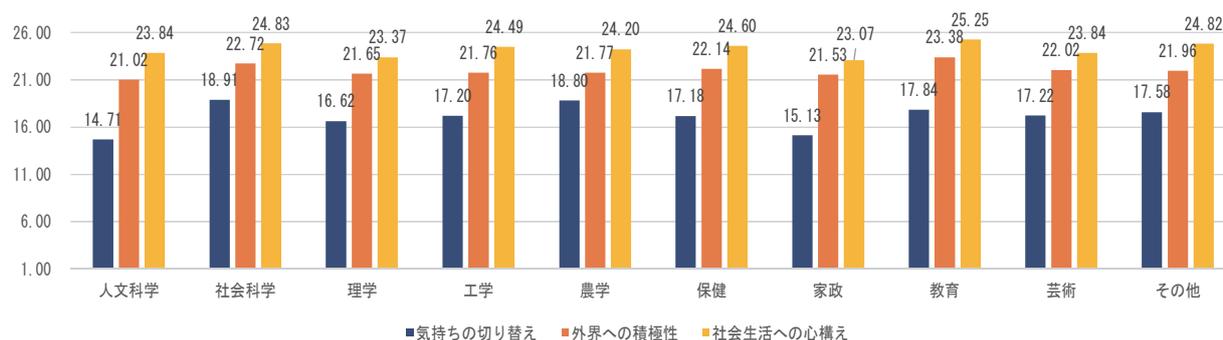
図表 10-16 基礎的性格特性・生活特性の系別比較

	系	M	SD	F値	p値
気持ちの切り替え	文系	17.51	(7.71)	0.364	.695
	理系	17.18	(7.59)		
	文理融合系	17.00	(7.32)		
外界への積極性	文系	22.31	(5.49)	1.040	.354
	理系	21.73	(5.63)		
	文理融合系	22.09	(5.35)		
社会生活への心構え	文系	24.54	(4.44)	0.793	.453
	理系	24.13	(5.00)		
	文理融合系	24.47	(4.16)		

専攻・専門による得点傾向の差異を検討するために、3つの下位尺度の平均値を専攻・専門別に示したグラフが図表 10-17 である。グラフの形状から見て分かる通り、3つの尺度いずれにおいても専攻・専門による顕著な得点差はみられない。細かな差異に着目すると、気持ちの切り替えについては社会科学がもっとも高く、農学がそれにつづいており、低いのは人文科学と家政であった。外界への積極性は教育、社会科学が高く、それに続くのが保健で

もっとも低かったのは人文社会だが、得点の開きは大きなものではなかった。社会生活への心構えは、教育が最も高く、続いて社会科学、保健で、低かったのは家政と理学だが、最も高い教育と最も低い家政の間でも得点の開きは僅かなものである。このように、基礎的性格特性尺度と基礎的生活特性尺度は、系別にみても専攻・専門別にみても系統的な差異はみられないものと判断できた。

図表 10-17 基礎的性格特性・生活特性の専攻・専門による比較



5. 新規尺度と職業レディネス・テストの下位検査との関係

新規尺度と職業レディネス・テストの関係について系別に検討するために、新規尺度とA検査、C検査、B検査の下位尺度間の相関係数を系ごとに算出した。結果として多くの特性間に低～中程度の相関係数が示されたことから、全体のデータを用いた前章と同様の基準である絶対値が.30以上の数値を表中では太字で示して解釈をくわえた（図表 10-18～図表 10-20）。なお、絶対値が.30以上となったのはすべて正の相関係数であることから、いずれの系においても新規尺度の測定内容はVRTで捉える興味や自信、志向と併存し得る価値観や性格特性であると考えられた。

(1) 新規尺度とA検査の下位検査との関係

A検査（職業興味）の6領域のなかで新規尺度との間に.30以上の正の相関が見られたのはS領域とE領域のみであった（図表 10-18）。S領域と相関関係が得られた新規尺度に着目すると、「社会貢献」は理系と文理融合系で.30以上の相関が、文系においては.30をやや下回る相関がみられる。人や社会の役に立ちたいとの価値観が対人的興味に反映されているものと解釈できる。また、文理融合系において、「自己成長」の仕事価値と「外界への積極性」もS領域（社会的領域）への関心に関わりをもつことが示された。一方、E領域（企業的領域）において、文理融合系は.30以上の相関係数は得られず、文系と理系において、「地位」と「外界への積極性」が相関を示していた。さらに理系においては「社会貢献」の価値観と「気持ちの切り替え」が企業的なE領域への興味と関わりをもつことが示された。

図表 10-18 職業レディネス・テストのA検査と新規尺度の相関係数 (Pearson の r)

系	尺度	A検査 (職業興味)											
		R領域	p値	I領域	p値	A領域	p値	S領域	p値	E領域	p値	C領域	p値
文系	自己成長	-.066	.143	-.056	.210	.081	.070	.115	.011	.234	.000	-.043	.344
	社会貢献	.044	.328	-.012	.790	-.018	.691	.281	.000	.182	.000	.027	.549
	地位	.081	.073	.003	.949	.069	.127	.066	.144	.364	.000	-.082	.067
	経済性	.006	.888	-.079	.079	.003	.945	-.019	.670	.191	.000	.012	.784
	仕事と生活のバランス	-.090	.045	-.063	.164	-.013	.777	-.034	.450	-.019	.671	.081	.073
	主体的進路選択	-.096	.032	-.057	.202	.104	.021	.036	.423	.173	.000	-.087	.052
	気持ちの切り替え	.092	.040	-.022	.621	-.026	.563	.175	.000	.197	.000	-.030	.498
	外界への積極性	.059	.187	.062	.170	.107	.017	.171	.000	.300	.000	-.005	.910
	社会生活への心構え	-.039	.382	-.031	.490	-.058	.198	.063	.163	.136	.002	.084	.062
理系	自己成長	.154	.007	.214	.000	.085	.138	.127	.028	.299	.000	.025	.661
	社会貢献	.177	.002	.141	.014	.070	.224	.316	.000	.342	.000	.085	.140
	地位	.110	.056	.081	.159	.122	.034	.182	.001	.371	.000	-.033	.564
	経済性	.044	.444	.102	.076	.038	.513	-.002	.969	.157	.006	-.016	.784
	仕事と生活のバランス	-.008	.885	.127	.027	.070	.226	-.003	.960	.031	.593	.096	.095
	主体的進路選択	.155	.007	.212	.000	.139	.016	.072	.213	.194	.001	-.046	.431
	気持ちの切り替え	.159	.006	.104	.072	.153	.008	.193	.001	.315	.000	-.075	.191
	外界への積極性	.161	.005	.265	.000	.280	.000	.166	.004	.329	.000	-.039	.501
	社会生活への心構え	.160	.005	.108	.060	.082	.156	.122	.034	.194	.001	.067	.246
文理融合系	自己成長	.029	.704	.116	.128	.167	.028	.306	.000	.177	.020	.080	.296
	社会貢献	.093	.220	.157	.039	.146	.055	.429	.000	.101	.183	.017	.826
	地位	.107	.160	.066	.384	.108	.154	.071	.354	.284	.000	.138	.069
	経済性	-.095	.213	-.150	.048	-.028	.718	-.063	.408	.046	.546	.045	.554
	仕事と生活のバランス	-.133	.081	-.140	.065	-.024	.749	.044	.564	-.112	.142	.078	.309
	主体的進路選択	-.015	.845	.050	.516	.141	.064	.226	.003	.157	.039	.087	.252
	気持ちの切り替え	.062	.413	.003	.966	.037	.632	.148	.052	.177	.019	-.003	.964
	外界への積極性	.076	.321	.110	.147	.235	.002	.304	.000	.260	.001	.119	.118
	社会生活への心構え	.044	.560	.025	.746	.123	.105	.244	.001	.106	.166	.187	.013

(2) 新規尺度とC検査の下位検査との関係

次に、C検査（職務遂行の自信度）と新規尺度の相関係数をみていく（図表 10-19）。ここでは、理系における「気持ちの切り替え」とR領域（現実的領域）の関係をのぞくと、S領域（社会的領域）とE領域（企業的領域）のみが新規尺度との間に.30以上の相関関係を示していた。それぞれ見ていくと、S領域（社会的領域）は、理系において「社会貢献」と「気持ちの切り替え」が、文理融合系では「自己成長」、「社会貢献」、「外界への積極性」が.30以上の相関を示していた。E領域（企業的領域）は、文系と理系において「地位」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」との間に相関がみられた。また、文系はE領域において、文理融合系はS領域において、理系はS領域とE領域双方において新規尺度との間に相関がみられる点は上述のA検査（職業興味）と同様である。このように新規尺度で捉える仕事への価値や性格特性は、人や社会と関わりの深いS領域とE領域への興味や自信と関わるものと解釈できる。

図表 10-19 職業レディネス・テストのC検査と新規尺度の相関係数 (Pearson の r)

系	尺度	C検査 (職務遂行の自信度)											
		R領域	p値	I領域	p値	A領域	p値	S領域	p値	E領域	p値	C領域	p値
文系	自己成長	-.021	.649	.025	.582	.128	.004	.201	.000	.227	.000	.088	.051
	社会貢献	.059	.192	.070	.118	.027	.554	.299	.000	.200	.000	.092	.040
	地位	.139	.002	.099	.027	.194	.000	.188	.000	.392	.000	.048	.290
	経済性	.047	.299	.021	.643	.073	.103	.074	.099	.243	.000	.095	.035
	仕事と生活のバランス	-.142	.001	-.080	.074	-.054	.233	-.108	.016	-.079	.078	.046	.308
	主体的進路選択	-.024	.592	.046	.305	.143	.001	.136	.002	.182	.000	.077	.088
	気持ちの切り替え	.181	.000	.101	.024	.161	.000	.289	.000	.352	.000	.107	.017
	外界への積極性	.140	.002	.168	.000	.236	.000	.293	.000	.394	.000	.155	.001
	社会生活への心構え	-.044	.332	.045	.319	.018	.683	.109	.015	.163	.000	.154	.001
理系	自己成長	.185	.001	.201	.000	.130	.024	.192	.001	.266	.000	.201	.000
	社会貢献	.163	.004	.122	.034	.124	.032	.316	.000	.295	.000	.251	.000
	地位	.204	.000	.140	.015	.220	.000	.253	.000	.363	.000	.164	.004
	経済性	.113	.050	.071	.220	.011	.849	.003	.959	.124	.031	.108	.061
	仕事と生活のバランス	.015	.789	.040	.490	-.004	.941	-.103	.074	-.017	.772	.085	.142
	主体的進路選択	.188	.001	.236	.000	.121	.036	.119	.038	.183	.001	.151	.008
	気持ちの切り替え	.337	.000	.240	.000	.297	.000	.328	.000	.415	.000	.132	.021
	外界への積極性	.266	.000	.288	.000	.253	.000	.261	.000	.349	.000	.171	.003
	社会生活への心構え	.200	.000	.138	.017	.082	.157	.142	.013	.188	.001	.230	.000
文理融合	自己成長	.015	.843	.106	.164	.069	.364	.304	.000	.165	.030	.151	.047
	社会貢献	.047	.536	.124	.104	.058	.444	.394	.000	.077	.310	.058	.445
	地位	.215	.004	.067	.378	.178	.019	.116	.126	.297	.000	.098	.197
	経済性	.034	.660	-.139	.068	.042	.586	-.024	.752	.059	.443	.015	.846
	仕事と生活のバランス	-.146	.055	-.139	.067	-.005	.945	.095	.215	-.063	.412	.003	.972
	主体的進路選択	.036	.637	.080	.295	.118	.119	.298	.000	.166	.029	.185	.015
	気持ちの切り替え	.185	.015	.137	.072	.054	.482	.217	.004	.192	.011	.065	.393
	外界への積極性	.172	.023	.176	.020	.224	.003	.351	.000	.269	.000	.201	.008
	社会生活への心構え	-.027	.719	.010	.893	-.004	.957	.241	.001	.058	.448	.164	.031

(3) 新規尺度とB検査の下位検査との関係

B検査 (基礎的志向性) と新規尺度の関係では、全体データを用いた分析と同様に、いずれの系においてもD志向 (対情報志向) とP志向 (対人志向) で比較的多くの相関係数が.30以上となった (図表 10-20)。それぞれ見ていくと、D志向 (対情報志向) については、すべての系において「自己成長」、「社会貢献」、「主体的進路選択」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」で.30以上の相関関係がみられた。さらに理系では、「地位」、「経済性」、「気持ちの切り替え」との間にも相関が得られた。P志向 (対人志向) は、すべての系において「自己成長」、「社会貢献」、「気持ちの切り替え」、「外界への積極性」、「社会生活への心構え」がみられ、さらに文系と理系では「地位」、「主体的進路選択」が.30以上の相関を示していた。T志向 (対物志向) に関しては、D志向やP志向よりも新規尺度との関連が弱めで、すべての系において「外界への積極性」が、くわえて理系では「自己成長」、「主体的進路選択」、「気持ちの切り替え」が.30以上の相関を示していた。このようにB検査との関連では、新規尺度で測定される仕事選びの基準、性格特性、生活特性が、データに対する志向と人に対

する志向の強さと関わりをもつことが確認できた。とくに、理系の学生は、上昇志向や地位の獲得、収入や生活の安定への価値づけがD志向と関わりをもつことが特徴としてみとめられた。

図表 10-20 職業レディネス・テストのB検査と新規尺度の相関係数（Pearsonのr）

系	尺度	B検査(基礎的志向性)					
		D志向		P志向		T志向	
		相関係数	p値	相関係数	p値	相関係数	p値
文系	自己成長	.351	.000	.490	.000	.238	.000
	社会貢献	.303	.000	.496	.000	.213	.000
	地位	.226	.000	.401	.000	.117	.009
	経済性	.208	.000	.241	.000	.074	.099
	仕事と生活のバランス	.112	.013	.035	.436	.000	.994
	主体的進路選択	.327	.000	.367	.000	.168	.000
	気持ちの切り替え	.236	.000	.364	.000	.188	.000
	外界への積極性	.460	.000	.524	.000	.344	.000
	社会生活への心構え	.414	.000	.335	.000	.149	.001
理系	自己成長	.467	.000	.478	.000	.326	.000
	社会貢献	.436	.000	.529	.000	.268	.000
	地位	.350	.000	.375	.000	.155	.007
	経済性	.308	.000	.194	.001	.108	.060
	仕事と生活のバランス	.150	.009	.060	.298	.133	.021
	主体的進路選択	.479	.000	.366	.000	.367	.000
	気持ちの切り替え	.337	.000	.422	.000	.327	.000
	外界への積極性	.505	.000	.523	.000	.481	.000
	社会生活への心構え	.456	.000	.351	.000	.294	.000
文理融合系	自己成長	.353	.000	.363	.000	.200	.008
	社会貢献	.325	.000	.441	.000	.198	.009
	地位	.091	.232	.233	.002	.063	.409
	経済性	-.065	.391	.047	.537	-.145	.056
	仕事と生活のバランス	.024	.748	.062	.415	-.019	.807
	主体的進路選択	.322	.000	.269	.000	.210	.005
	気持ちの切り替え	.235	.002	.324	.000	.217	.004
	外界への積極性	.449	.000	.476	.000	.332	.000
	社会生活への心構え	.343	.000	.331	.000	.116	.128

6. まとめ

本章では、回答者の所属学科による差異を検討するために、職業レディネス・テストの既存の尺度と新規尺度で測定される特性をもちいて系による分析と専攻・専門による分析を行った。既存尺度のA検査とC検査をもちいた分析において、R領域とI領域は農学、工学、理学などの理系が興味、自信ともに高く、A領域は芸術が含まれる文系が高めであった。S領域は保健を含む文理融合系と教育を含む文系が高く、E領域は社会科学と農学が、C領域は工学、社会科学、理学における自信と興味が高めとなる傾向がみられた。興味と自信のい

ずれが高いかについては、領域による違いや専攻・専門による違いがみられたが、興味と自信の方向性は一部を除けばおおむね合致していることが分かった。一方、DPT志向については、系という大きな括りでみると差異が見えにくくなるが、専攻・専門ごとに得点をみていくと、D志向は社会科学、工学、農学などの科学分野が高く、P志向は人を対象とした教育や社会科学が高く、T志向は、生産や加工などを専門に学ぶ農学が他よりも高いとの傾向がみられた。このように職業レディネス・テストの既存の尺度は、在学者が大学で学ぶ専攻や専門を反映したものであることが改めて確認された。

新規尺度に着目すると、仕事選び基準尺度において系による差異がみられたのは、社会貢献と地位の2つであった。社会貢献は保健を含む文理融合系と教育を含む文系が高く、地位については工学、社会科学、そして、農学が高いという傾向を示していた。一方、新規尺度の基礎的性格特性尺度と基礎的生活特性尺度は、系による差異はみられず、専攻・専門ごとにみた場合でも目立った違いはみとめられなかった。既存尺度が職業に対する興味、自信、志向という学業と関わりのある内容を捉えていたのに対して、新規尺度は仕事に対する価値基準や社会に出るための心構えを捉えていると考えられる。一方、既存の尺度と新規尺度の関係において、S領域とE領域が社会貢献、地位、外界への積極性等との間に相関関係を示しており、人々の役に立ちたい、社会的地位を得たいという志向や、新たな状況に対する積極的姿勢が、既存尺度で捉える人との関わりへの興味・関心に反映されている。これらの点は、より幅広い年齢層を対象とした結果（労働政策研究・研修機構, 2020）、および、調査対象者全体について得られた前掲の分析結果とも合致するところである。以上より、職業レディネス・テストの既存尺度と新規尺度は、仕事社会に出る前の若者の準備状態について、一定のまとまりをもちながらも異なる角度から重層的にアセスメントするツールと考えて良いだろう。

引用文献

労働政策研究・研修機構（2020）.「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 ―大学生等の就職支援のための尺度の開発―」 JILPT 資料シリーズ No.230.

第11章 職業選択の考え方と各特性との関連性

1. 目的

今回の改訂での新規尺度は、現行の職業興味を中心とする内容に加え、働き方に関する価値観や、職場適応・定着に貢献する性格特性や生活態度の測定を目的に組み込まれたものである。本章で扱うのは職業選択の考え方であるので、職業選択の考え方によって、職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査で測定される得点に違いがみられるかを検討することが本章の目的となる。

具体的には、本章では回答者自身に関する設問として用意した項目のうち、職業選択の考え方についての集計結果のみを示す。分析としては、職業選択の考え方と、職業興味、基礎的志向性、職務遂行の自信度、仕事選び基準尺度、基礎的性格特性尺度、基礎的生活特性尺度のそれぞれに含まれる特性間の関連性についての検討を行った。

2. 方法

(1) 分析対象としたデータについて

第9章、第10章と同様に、本章では「2020年調査」の在学者のデータ、1161名を分析の対象とした。

(2) 取り上げた変数

図表2-1の調査項目のうち、「回答者のフェイスシート1-II」箇所の「仕事や働き方についての設問」を取り上げた。

職業レディネス・テストはA検査(職業興味)の6領域、B検査(基礎的志向性)の3志向性、C検査(職務遂行の自信度)の6領域のそれぞれの合計得点を用いる。さらにB検査については、3つの志向性それぞれを構成する下位尺度の合計得点も用いる。採点方法は職業レディネス・テストの方式に準拠する。すなわち、A検査とC検査の各領域の得点の範囲は0点から18点、B検査のD志向とP志向では0点から24点、T志向では0点から16点である。

新規尺度については、「仕事選び基準尺度」のうち自己成長、社会貢献、地位、経済性、仕事と生活のバランス、主体的進路選択の6特性、「基礎的性格特性」のうち気持ちの切り替え、外界への積極性の2特性、「基礎的生活特性」の社会生活への心構えの1特性を取り上げ、これら全9特性に関する個人の合計得点を変数とする。各特性は8項目で構成され、5段階評価の回答(0点から4点)なので、合計得点の範囲は0点から32点となる。

3. 回答者の属性についての基礎集計

(1) 本章で扱う設問の内容

図表 2-1 の調査項目のうち、「回答者のフェイスシート 1-Ⅱ」箇所の「仕事や働き方についての設問」の内容について以下に述べる。「希望職業タイプ」、「希望業種」、「希望職種」、「あなたは今後どのような働き方をしようと思いますか。以下のうち、一つを選んでください。」、「就職活動や仕事探し（アルバイトなどを含む）の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか?」、「あなたのこれまでの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか?」、「あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか?」を尋ねた（図表 11-1）。

図表 11-1 調査項目の内訳

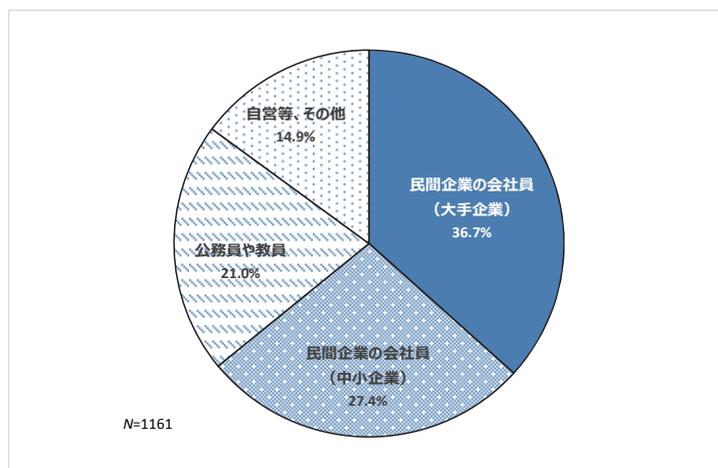
回答者のフェイスシート1-Ⅱ 仕事や働き方についての設問	
No	内容
1	希望職業タイプ
2	希望業種
3	希望職種
4	あなたは今後どのような働き方をしようと思いますか。以下のうち、一つを選んでください。
5	就職活動や仕事探し（アルバイトなどを含む）の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか?
6	あなたのこれまでの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか?
7	あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか?

(2) 回答者自身の属性に関する集計結果

①希望職業タイプ

結果を図表 11-2 に示す。男女の合計で見ると、最も多かったのが民間企業の会社員（大手企業）で 36.7%であった。次に民間企業の会社員（中小企業）で 27.4%、公務員や教員で 21.0%、自営等、その他で 14.9%であった。

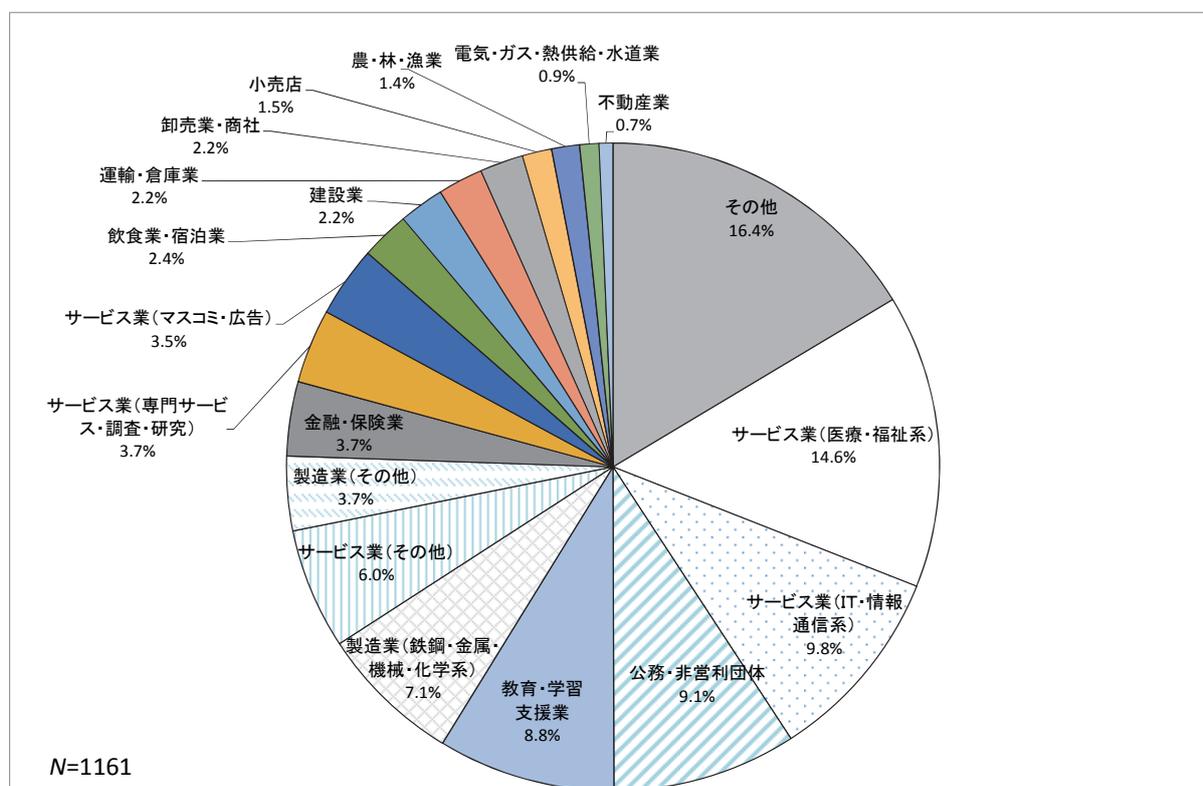
図表 11-2 希望職業タイプの内訳



②希望業種

結果を図表 11-3 に示す。男女の合計で多い順からみると、その他で 16.4%、次いでサービス業（医療・福祉系）で 14.6%、サービス業（IT・情報通信系）で 9.8%、公務・非営利団体で 9.1%、教育・学習支援業で 8.8%、製造業（鉄鋼・金属・機械・化学系）で 7.1%、サービス業（その他）で 6.0%、製造業（その他）で 3.7%、金融・保険業で 3.7%、サービス業（専門サービス・調査・研究）で 3.7%、サービス業（マスコミ・広告）で 3.5%、飲食業・宿泊業で 2.4%、建設業で 2.2%、運輸・倉庫業で 2.2%、卸売業・商社で 2.2%、小売店で 1.5%、農・林・漁業で 1.4%、電気・ガス・熱供給・水道業で 0.9%、不動産業 0.7%であった。サービス業が全体で 38%と、約 4 割を占めた。

図表 11-3 希望業種の内訳

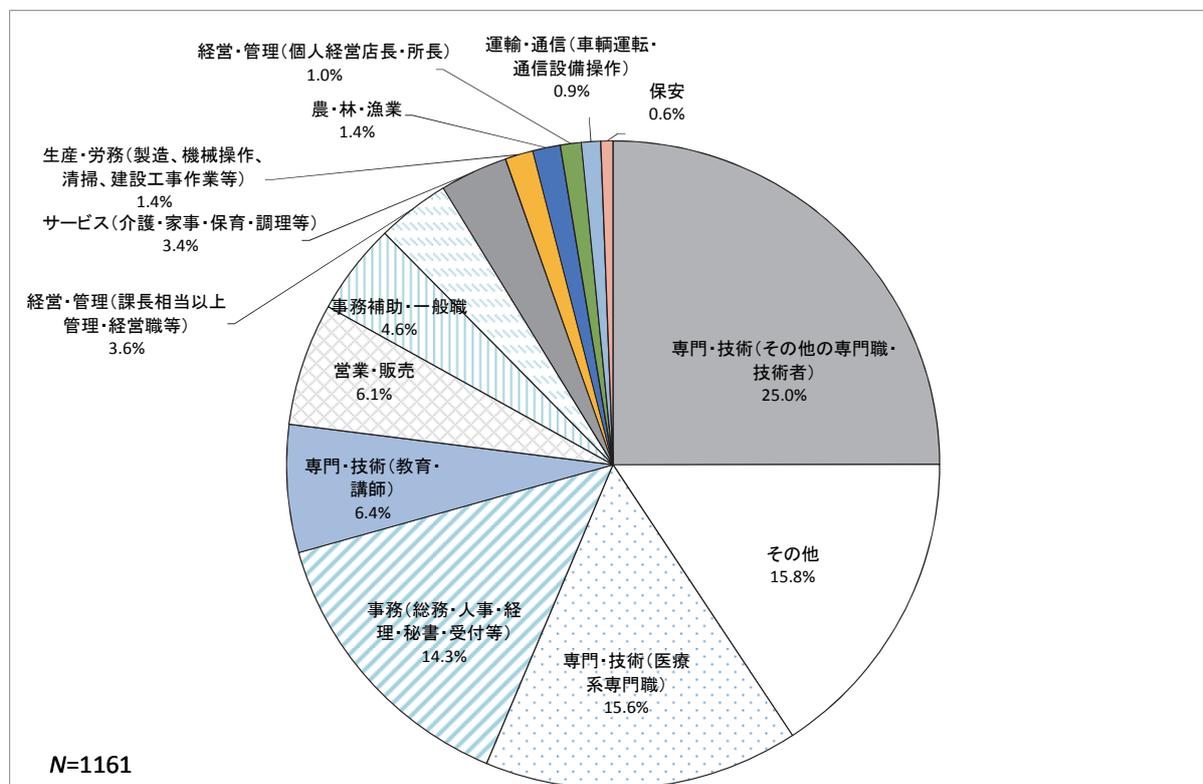


③希望職種

結果を図表 11-4 に示す。男女の合計で多い順からみると、専門・技術（その他の専門職・技術者）で 25.0%、その他で 15.8%、専門・技術（医療系専門職）で 15.6%、事務（総務・人事・経理・秘書・受付等）で 14.3%、専門・技術（教育・講師）で 6.4%、営業・販売 6.1%、事務補助・一般職で 4.6%、経営・管理（課長相当以上管理・経営職等）で 3.6%、サービス（介護・家事・保育・調理等）で 3.4%、生産・労務（製造、機械操作、清掃、建設工事作業等）で 1.4%、農・林・漁業で 1.4%、経営・管理（個人経営店長・所長）で 1.0%、運輸・

通信（車輛運転・通信設備操作）で0.9%、保安0.6%であった。概して、専門・技術が全体で約5割（47%）、事務関連が約2割（19%）を占めた。

図表 11-4 希望職種の内訳



④あなたは今後どのような働き方をしようと思いますか（単一回答）。

結果を図表 11-5 に示す。男女の合計で多い順からみると、一つの会社でできるだけ長く働く（47.9%）、状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する（33.8%）、自営で働くか独立する（6.9%）、働く必要がなくなったら仕事をやめる（6.8%）、特に働きたいとは思わない（3.2%）、正社員・正規職員として就職しないで、アルバイトやパート等で働く（1.3%）であった。約8割は会社への所属を希望していた。

図表 11-5 働き方の希望の内訳

		回答数	%
全体		1200	100.0
1	一つの会社でできるだけ長く働く	575	47.9
2	状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する	406	33.8
3	自営で働くか独立する	83	6.9
4	正社員・正規職員として就職しないで、アルバイトやパート等で働く	16	1.3
5	働く必要がなくなったら仕事をやめる	82	6.8
6	特に働きたいとは思わない	38	3.2

⑤就職活動や仕事探し（アルバイトなどを含む）の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか？（単一回答）

結果を図表 11-6 に示す。男女の合計で多い順からみると、やや困難を感じた（28.8%）、あまり困難を感じなかった（25.2%）、就職活動や仕事探しをしたことがないのでわからない（19.5%）、困難を感じた（18.6%）、困難を感じなかった（8.0%）であった。約 5 割は困難を感じ、約 3 割は困難を感じていなかった。

図表 11-6 職業選択時の困難さの内訳

		回答数	%
全体		1200	100.0
1	困難を感じなかった	96	8.0
2	あまり困難を感じなかった	302	25.2
3	やや困難を感じた	345	28.8
4	困難を感じた	223	18.6
5	就職活動や仕事探しをしたことがないのでわからない	234	19.5

⑥あなたの今までの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか？（単一回答）

結果を図表 11-7 に示す。男女の合計で多い順からみると、まあ適切だった（59.9%）、適切だった（20.8%）、あまり適切ではなかった（15.2%）、適切ではなかった（4.1%）であった。約 8 割は適切だと感じ、約 2 割は適切とは感じていなかった。

図表 11-7 職業選択の適切さの認識の内訳

		回答数	%
全体		1200	100.0
1	適切だった	250	20.8
2	まあ適切だった	719	59.9
3	あまり適切ではなかった	182	15.2
4	適切ではなかった	49	4.1

⑦あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか？（単一回答）

結果を図表 11-8 に示す。男女の合計で多い順からみると、まあ満足（54.4%）、満足（22.1%）、あまり満足していない（18.8%）、満足していない（4.7%）であった。約 7 割半は満足し、約 2 割半は満足していなかった。

図表 11-8 職業選択時の満足度の内訳

		回答数	%
全体		1200	100.0
1	満足	265	22.1
2	まあ満足	653	54.4
3	あまり満足していない	226	18.8
4	満足していない	56	4.7

4. 結果

(1) 職業選択の考え方や職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の基礎統計量の検討

①希望職業タイプ

希望職業タイプ別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の平均値(M)と標準偏差(SD)について、結果を図表 11-9 に示す。各項目を希望職業タイプで横断的にみた際に最も得点の高いものに網掛けをし、以下、中心的にみていくこととした。

図表 11-9 希望職業タイプ別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の平均値(M)と標準偏差(SD)

項目内容/希望職業タイプ	民間企業の会社員 (大手企業)		民間企業の会社員 (中小企業)		公務員や教員		自営等、その他		合計	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
A検査(職業興味)	R領域	4.54 (4.37)	3.91 (4.23)	3.75 (4.29)	3.45 (4.29)	4.03 (4.32)				
	I領域	6.81 (5.69)	5.61 (5.33)	6.25 (5.53)	6.29 (5.25)	6.28 (5.51)				
	A領域	6.04 (4.76)	6.27 (5.19)	5.59 (4.87)	6.95 (5.20)	6.14 (4.98)				
	S領域	4.88 (4.03)	4.58 (4.18)	5.72 (4.32)	6.07 (4.65)	5.15 (4.26)				
	E領域	7.14 (4.76)	4.74 (4.35)	4.66 (4.17)	5.66 (4.81)	5.74 (4.67)				
	C領域	7.40 (5.03)	7.37 (4.97)	7.65 (5.21)	5.42 (4.51)	7.15 (5.03)				
B検査(基礎的志向性)	情報を集める(D1)	4.74 (2.23)	4.09 (2.29)	4.05 (2.23)	3.93 (2.21)	4.30 (2.27)				
	好奇心を満たす(D2)	4.85 (2.20)	4.38 (2.25)	4.68 (2.21)	4.59 (2.43)	4.65 (2.25)				
	情報を活用する(D3)	5.19 (2.34)	4.59 (2.23)	4.90 (2.18)	4.50 (2.33)	4.86 (2.29)				
	対情報志向(D)合計	14.78 (5.41)	13.06 (5.42)	13.63 (5.33)	13.02 (5.69)	13.80 (5.49)				
	自分を表現する(P1)	2.61 (2.51)	1.70 (2.17)	1.95 (2.31)	2.40 (2.48)	2.19 (2.40)				
	みんなと行動する(P2)	3.76 (2.52)	2.81 (2.28)	3.36 (2.48)	3.05 (2.51)	3.31 (2.47)				
C検査(職務遂行の自信度)	人の役に立つ(P3)	5.78 (2.16)	5.27 (2.26)	6.00 (1.99)	5.69 (2.32)	5.67 (2.19)				
	対人志向(P)合計	12.14 (6.04)	9.78 (5.31)	11.32 (5.60)	11.14 (6.18)	11.17 (5.85)				
	物をつくる(T1)	3.53 (2.53)	3.42 (2.63)	3.27 (2.64)	3.12 (2.57)	3.39 (2.59)				
	自然に親しむ(T2)	3.57 (2.53)	3.03 (2.51)	3.52 (2.53)	3.82 (2.52)	3.45 (2.53)				
	対物志向(T)合計	7.10 (4.30)	6.45 (4.37)	6.80 (4.44)	6.94 (4.25)	6.83 (4.34)				
	R領域	4.64 (4.53)	3.50 (4.26)	3.41 (4.29)	3.23 (4.08)	3.86 (4.38)				
新規尺度	I領域	5.78 (5.37)	4.26 (4.95)	4.69 (4.98)	4.83 (4.97)	4.99 (5.15)				
	A領域	4.56 (4.24)	4.03 (4.40)	3.78 (4.12)	5.03 (4.37)	4.32 (4.29)				
	S領域	5.38 (4.38)	4.31 (4.40)	5.18 (4.24)	5.94 (4.91)	5.13 (4.47)				
	E領域	5.84 (4.80)	3.09 (3.77)	3.40 (3.95)	4.17 (4.39)	4.33 (4.46)				
	C領域	8.88 (5.23)	7.32 (5.26)	7.95 (5.54)	6.20 (5.07)	7.86 (5.36)				
	自己成長	25.26 (5.78)	23.51 (6.28)	25.19 (5.76)	25.38 (6.13)	24.78 (6.01)				
社会貢献	23.25 (6.78)	21.67 (7.23)	24.39 (7.24)	22.70 (8.32)	22.98 (7.30)					
地位	20.92 (6.59)	15.63 (7.05)	17.05 (7.27)	17.36 (7.75)	18.13 (7.37)					
経済性	24.07 (5.17)	20.92 (6.15)	21.75 (6.59)	21.24 (6.33)	22.30 (6.09)					
仕事と生活のバランス	24.90 (5.32)	25.21 (5.79)	25.38 (5.35)	24.92 (5.41)	25.09 (5.47)					
主体的進路選択	24.40 (4.92)	23.86 (5.18)	24.67 (5.00)	26.08 (5.18)	24.56 (5.09)					
気持ちの切り替え	18.19 (7.35)	16.08 (7.55)	17.02 (7.77)	17.99 (7.45)	17.34 (7.55)					
外界への積極性	22.52 (5.36)	21.16 (5.66)	22.21 (5.45)	22.32 (5.91)	22.05 (5.57)					
社会生活への心構え	24.68 (4.66)	23.75 (4.73)	25.13 (4.27)	23.97 (4.42)	24.42 (4.59)					

A検査の職業興味をみると、民間企業の会社員(大手企業)を希望する者では、現実的(R)、研究的(I)、企業的(E)領域が、他のタイプを希望する者に比べ最も高かった。民間企業の会社員(中小企業)を希望する者では、芸術的領域(A)と慣習的領域(C)を除いた興味領域で、いずれも全体平均より低い値を示した。公務員や教員を希望する者では、慣習的領域(C)が他のタイプを希望する者に比べ最も高かった。自営等、その他を希望する者では、芸術的(A)と社会的(S)領域が他のタイプを希望する者に比べ最も高かった。

B検査(基礎的志向性)については、民間企業の会社員(大手企業)を希望する者が、他のタイプを希望する者より総じて高い値を示した。「人の役に立つ(P3)」については、公務員や教員で最も高い値が示された。

C検査の職務遂行の自信度では、民間企業の会社員(大手企業)を希望する者において、現実的(R)、研究的(I)、企業的(E)、慣習的(C)領域が、他のタイプを希望する者に比べ最も高かった。民間企業の会社員(中小企業)を希望する者では、いずれの興味領域でも全体平均より低い値を示した。公務員や教員を希望する者では、社会的(S)と慣習的(C)領域を除いた興味領域で、いずれも全体平均より低い値を示した。自営等、その他を希望する者では、芸術的(A)と社会的(S)領域が他のタイプを希望する者に比べ最も高かった。概して、A検査で興味が高く示された内容については、自信度も高く回答されていた。

新規尺度については、民間企業の会社員(大手企業)を希望する者で、地位、経済性、気持ちの切り替えや外界への積極性が高かった。民間企業の会社員(中小企業)を希望する者は、仕事と生活のバランスを除き、いずれも全体平均より低い値を示した。公務員や教員では社会貢献や仕事と生活のバランス、社会生活への心構えが高かった。自営等、その他では、自己成長や主体的進路選択が高かった。これらの結果は、民間企業の会社員(大手企業)を希望する者はより上位志向が強く、公務員や教員では社会貢献志向が強く、自営等、その他では自己向上志向が強い一方、民間企業の会社員(中小企業)では他よりもこれらの意識が低い傾向にあることが伺える。

②希望業種

希望業種別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の平均値(M)と標準偏差(SD)について、結果を図表 11-10 に示す。各項目を希望業種で横断的にみた際に最も得点が高いものに網掛けをし、以下、中心的にみていくこととした。

A検査の職業興味をみると、現実的(R)と研究的(I)領域は農・林・漁業希望者で、芸術的(A)と企業的(E)領域は不動産業希望者で、社会的領域(S)はサービス業(医療・福祉系)希望者で、慣習的領域(C)は電気・ガス・熱供給・水道業希望者で、それぞれ高かった。

B検査(基礎的志向性)をみると、対情報志向(D)では卸売業・商社、不動産業、サービス業(専門サービス・調査・研究)で高い値が示された。対人志向(P)では、卸売業・

商社、不動産業、教育・学習支援業希望者で高い値が示された。対物志向 (T) では、建設業、農・林・漁業希望者で高い値が示された。

C検査の職務遂行の自信度では、概して、A検査で高く興味を示された内容について、自信度も高く回答されていた。

新規尺度をみると、建設業希望者ではいずれの得点も全体平均より高く、かつ他の業種を希望する者よりも高い得点が示された。運輸・倉庫業の希望者では仕事と生活のバランス、不動産業の希望者では気持ちの切り替えや外界への積極性が高かった。

以上より、希望業種については職業レディネス・テストの下位尺度で測定された数値との間に解釈可能な関連傾向が見られたが、新規尺度の数値との関連は明確ではなかった。

図表 11-10 希望業種別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の
 平均値 (M) と標準偏差 (SD) (3 分割で表示)

項目内容/希望業種	建設業		製造業 (鉄鋼・ 金属・機械 ・化学系)		製造業 (その他)		電気・ガス ・熱供給 ・水道業		運輸・倉庫業		卸売業・商社		小売店		飲食業・ 宿泊業		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
A検査(職業興味)	R領域	7.27	4.19	6.50	4.27	4.60	4.54	7.00	4.15	5.81	4.70	3.88	4.25	3.12	3.72	2.79	4.09
	I領域	6.08	5.97	9.48	5.78	7.21	5.61	8.64	4.11	6.00	5.80	6.48	5.15	3.82	3.70	4.64	5.16
	A領域	7.12	5.42	4.30	3.98	6.09	5.14	6.09	4.48	6.12	4.50	6.84	4.58	8.00	6.20	6.00	5.34
	S領域	4.15	4.25	3.21	3.35	3.81	4.15	6.00	4.43	5.96	4.18	5.80	3.40	5.35	4.31	6.43	4.05
	E領域	6.31	3.92	4.71	4.32	6.14	4.66	6.55	6.36	7.73	5.27	9.68	4.14	6.24	3.91	5.54	4.67
	C領域	7.92	4.94	7.11	4.84	7.79	5.08	11.18	3.87	9.35	5.48	9.56	4.78	6.35	4.81	7.79	6.07
B検査(基礎的志向性)	情報を集める (D1)	4.46	2.12	4.17	2.13	4.47	2.32	4.55	2.50	5.31	2.19	5.44	2.29	4.18	2.04	4.18	2.06
	好奇心を満たす (D2)	4.69	2.02	4.39	2.34	4.77	2.27	5.36	2.29	4.77	2.50	5.52	1.98	4.12	2.20	4.64	1.59
	情報を活用する (D3)	5.69	2.43	4.91	2.45	4.95	2.54	4.73	2.45	5.69	2.35	5.12	2.49	4.53	2.48	5.04	2.20
	対情報志向 (D) 合計	14.85	5.63	13.48	5.53	14.19	5.56	14.64	6.14	15.77	6.15	16.08	5.45	12.82	5.27	13.86	4.41
	自分を表現する (P1)	2.12	2.14	1.77	2.04	2.02	2.45	1.91	3.24	2.62	2.73	3.64	2.60	2.29	2.14	2.75	2.65
	みんなと行動する (P2)	3.88	2.70	2.56	2.28	3.14	2.61	2.91	2.66	3.27	2.34	4.56	2.40	3.24	2.31	4.14	2.46
	人の役に立つ (P3)	5.92	1.85	4.93	2.11	5.00	2.58	5.27	2.20	5.73	2.43	6.56	1.45	5.06	2.33	6.46	1.71
	対人志向 (P) 合計	11.92	5.51	9.26	5.16	10.16	6.59	10.09	6.43	11.62	6.35	14.76	5.33	10.59	5.51	13.36	5.75
	物をつくる (T1)	4.88	2.76	3.94	2.53	3.91	2.61	3.45	2.34	3.35	2.48	3.08	2.16	2.94	2.38	2.79	2.30
	自然に親しむ (T2)	3.58	2.67	3.06	2.47	3.42	2.75	4.91	2.12	3.65	2.78	3.92	2.16	2.94	2.41	4.32	2.36
対物志向 (T) 合計	8.46	4.41	7.00	4.22	7.33	4.53	8.36	4.11	7.00	4.47	7.00	3.49	5.88	4.40	7.11	3.77	
C検査(職務遂行の自信度)	R領域	6.85	5.21	5.85	4.91	4.86	4.78	7.36	4.99	5.04	3.85	4.64	4.74	3.00	3.61	2.86	4.55
	I領域	4.73	5.83	7.22	5.60	6.00	5.94	7.45	5.07	5.65	5.15	5.00	5.12	3.06	3.99	4.71	5.86
	A領域	5.12	5.10	2.38	2.93	3.77	4.45	3.64	4.20	4.88	4.63	5.80	4.41	4.53	4.24	4.36	5.18
	S領域	3.92	3.63	3.82	4.44	4.56	4.66	4.18	3.03	6.15	4.95	6.88	3.69	5.06	4.28	6.96	4.79
	E領域	4.38	3.87	3.82	3.93	4.86	4.78	4.91	5.17	6.08	5.53	7.48	5.07	4.06	4.04	4.18	5.03
	C領域	7.77	4.55	8.50	5.72	9.33	5.10	11.73	3.85	9.73	5.23	10.88	5.45	6.29	4.19	7.32	5.84
新規尺度	自己成長	28.42	4.57	23.91	5.86	23.33	7.38	23.27	4.24	25.31	5.21	26.00	4.40	19.65	6.40	25.39	5.98
	社会貢献	26.31	5.45	21.70	6.96	21.00	7.90	22.45	5.47	24.62	5.81	25.00	5.59	19.82	7.76	24.00	7.80
	地位	22.23	6.21	19.39	6.61	18.37	8.20	18.36	7.31	21.42	6.89	21.44	6.50	15.71	7.56	18.64	6.21
	経済性	26.81	3.72	23.10	6.02	21.86	6.90	21.91	4.11	24.08	5.31	24.40	5.42	19.59	5.17	24.11	5.15
	仕事と生活のバランス	25.85	5.84	23.91	5.08	26.07	5.47	24.91	5.39	26.54	4.92	26.08	4.22	26.41	5.08	25.57	5.47
	主体的進路選択	26.96	4.25	22.96	5.18	24.05	4.81	23.18	5.12	26.46	4.35	25.20	3.48	22.53	5.09	25.64	5.13
	気持ちの切り替え	19.85	7.20	16.09	7.48	18.30	7.05	15.64	6.86	17.46	7.66	20.44	8.07	14.24	8.54	17.50	9.02
	外界への積極性	23.46	5.65	20.88	5.75	22.60	4.67	20.27	5.82	23.42	5.23	23.72	5.41	17.76	5.57	22.82	5.64
	社会生活への心構え	27.23	3.93	23.54	5.29	24.33	4.23	24.73	4.78	25.38	4.13	25.52	3.96	23.24	4.52	25.29	4.38

項目内容／希望業種	金融・保険業		不動産業		サービス業 (医療・福祉系)		サービス業 (IT・情報・通信系)		サービス業 (マスコミ・広告)		サービス業 (専門サービス・調査・研究)		サービス業 (その他)		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
A検査(職業興味)	R領域	2.81	3.13	5.00	5.90	3.43	3.91	4.75	4.58	2.12	2.62	3.53	3.67	2.91	4.02
	I領域	5.47	5.17	4.00	5.73	6.74	5.48	6.90	5.61	3.12	3.19	8.05	5.73	3.36	4.37
	A領域	5.88	5.06	9.38	6.99	5.18	4.82	6.71	4.82	9.22	4.09	6.60	4.99	6.79	5.02
	S領域	4.33	3.66	5.88	5.59	8.00	4.38	3.23	3.60	4.41	2.83	4.51	4.17	5.16	4.27
	E領域	7.33	5.22	11.75	5.60	4.29	4.39	6.38	4.47	9.32	4.34	6.21	4.30	5.93	4.60
	C領域	8.98	4.47	4.88	4.85	5.91	4.96	9.19	4.43	4.20	4.50	7.09	4.76	5.43	4.41
B検査(基礎的志向性)	情報を集める(D1)	4.95	2.47	4.88	2.59	3.61	2.31	5.26	2.04	5.24	2.19	4.81	1.94	4.07	2.14
	好奇心を満たす(D2)	5.19	2.22	4.75	2.71	4.36	2.44	4.72	2.30	5.07	1.94	5.60	1.87	4.44	2.16
	情報を活用する(D3)	5.12	2.36	5.75	2.55	4.86	2.33	5.26	2.14	4.54	2.30	4.93	2.29	4.54	2.01
	対情報志向(D)合計	15.26	5.69	15.38	6.86	12.82	5.82	15.25	5.21	14.85	4.91	15.35	4.44	13.06	4.84
	自分を表現する(P1)	2.47	2.40	4.13	2.70	2.08	2.29	1.98	2.40	3.68	2.71	2.19	2.44	2.40	2.56
	みんなと行動する(P2)	3.77	2.46	5.38	3.11	3.39	2.42	3.12	2.45	3.80	2.41	3.26	2.53	3.69	2.46
	人の役に立つ(P3)	5.51	2.51	6.00	2.62	6.31	1.94	5.21	2.14	6.12	1.90	6.05	1.79	6.07	1.98
	対人志向(P)合計	11.74	5.75	15.50	7.76	11.78	5.51	10.32	5.95	13.61	5.61	11.49	5.51	12.16	5.85
	物をつくる(T1)	3.33	2.60	3.75	3.37	3.10	2.66	3.84	2.56	3.59	2.54	3.98	2.44	2.91	2.39
	自然に親しむ(T2)	3.60	2.77	3.25	2.38	3.64	2.61	3.11	2.42	3.02	2.27	3.77	2.68	3.37	2.57
対物志向(T)合計	6.93	4.74	7.00	5.32	6.74	4.61	6.96	4.16	6.61	3.91	7.74	4.34	6.29	4.14	
C検査(職務遂行の自信度)	R領域	4.49	4.91	4.63	5.60	3.33	3.87	4.59	4.50	3.22	4.10	3.79	3.80	2.34	3.53
	I領域	5.21	5.35	2.75	4.86	5.39	4.97	5.65	5.16	2.88	4.08	6.00	5.67	2.31	3.76
	A領域	4.72	3.94	7.13	6.13	4.04	4.20	4.33	3.84	6.59	4.59	5.02	4.50	4.83	4.38
	S領域	5.56	4.14	6.00	5.86	7.58	4.58	3.24	3.53	5.71	4.29	4.98	4.68	4.87	4.41
	E領域	6.84	5.02	8.50	6.28	3.38	3.92	4.54	4.13	7.46	5.19	4.88	4.48	3.83	4.33
	C領域	9.88	5.05	5.88	5.62	6.75	5.49	10.39	4.37	6.59	5.16	8.56	5.34	5.71	5.24
新規尺度	自己成長	26.14	5.14	25.38	5.97	26.05	5.30	23.79	5.73	26.78	4.72	26.53	4.47	24.97	6.45
	社会貢献	23.56	6.67	24.50	6.91	25.69	5.85	20.70	7.24	22.88	5.54	23.74	6.30	22.90	7.46
	地位	21.16	7.26	22.13	6.13	17.81	7.18	17.71	7.43	21.15	6.60	16.74	7.31	17.77	7.11
	経済性	24.67	5.17	24.50	5.10	22.55	6.04	22.52	5.61	23.66	4.83	21.37	6.90	21.80	5.29
	仕事と生活のバランス	25.88	4.54	24.00	5.29	25.61	4.70	25.54	5.09	24.02	5.23	25.21	6.45	24.83	5.91
	主体的進路選択	25.33	4.09	23.63	5.68	25.07	4.85	23.75	4.90	25.59	4.01	26.09	4.41	24.63	5.11
	気持ちの切り替え	18.37	7.27	21.50	7.48	18.01	7.14	16.57	7.90	19.59	7.04	16.79	8.24	18.39	7.13
	外界への積極性	23.21	5.52	24.00	6.07	22.71	5.40	21.86	4.98	23.83	4.83	23.91	4.15	22.00	5.69
	社会生活への心構え	25.28	4.60	26.63	5.55	24.87	4.11	23.95	4.63	25.20	3.83	24.49	3.96	24.13	4.72

項目内容／希望業種	教育・学習支援業		公務・非営利団体		農・林・漁業		その他		合計		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
A検査(職業興味)	R領域	3.28	4.33	3.56	3.97	8.06	6.24	3.89	4.32	4.03	4.3
	I領域	5.30	5.33	6.07	5.37	12.06	4.92	6.08	5.28	6.28	5.5
	A領域	5.96	5.46	5.14	4.30	5.44	4.49	6.74	5.22	6.14	5.0
	S領域	6.75	4.17	4.19	3.48	4.06	3.17	4.79	4.36	5.15	4.3
	E領域	5.14	4.58	4.75	4.06	6.31	5.86	5.36	4.46	5.74	4.7
	C領域	6.60	5.16	8.98	5.33	5.88	5.20	6.28	4.47	7.15	5.0
B検査(基礎的志向性)	情報を集める(D1)	4.26	2.06	4.12	2.20	3.38	2.50	3.83	2.32	4.30	2.3
	好奇心を満たす(D2)	4.72	2.24	5.03	1.93	4.69	2.09	4.21	2.38	4.65	2.3
	情報を活用する(D3)	4.76	1.98	5.16	2.12	4.63	2.09	4.30	2.41	4.86	2.3
	対情報志向(D)合計	13.75	5.06	14.31	4.89	12.69	5.55	12.34	5.83	13.80	5.5
	自分を表現する(P1)	2.45	2.51	1.48	2.00	1.38	1.86	2.09	2.34	2.19	2.4
	みんなと行動する(P2)	3.77	2.40	2.96	2.23	2.44	2.31	2.97	2.58	3.31	2.5
	人の役に立つ(P3)	6.57	1.66	5.73	2.07	5.69	1.66	4.85	2.51	5.67	2.2
	対人志向(P)合計	12.79	5.38	10.17	4.99	9.50	5.02	9.92	6.29	11.17	5.8
	物をつくる(T1)	3.34	2.67	2.95	2.50	4.19	2.74	3.17	2.62	3.39	2.6
	自然に親しむ(T2)	3.80	2.40	3.26	2.40	6.06	2.14	3.07	2.54	3.45	2.5
対物志向(T)合計	7.15	4.30	6.22	4.21	10.25	4.07	6.24	4.42	6.83	4.3	
C検査(職務遂行の自信度)	R領域	2.75	3.88	3.11	3.86	7.25	5.31	3.42	4.28	3.86	4.4
	I領域	4.04	4.74	4.22	4.52	10.31	4.69	4.83	5.05	4.99	5.2
	A領域	4.33	4.46	3.12	3.41	3.88	4.26	4.82	4.60	4.32	4.3
	S領域	6.45	4.04	3.80	3.76	4.31	3.63	4.33	4.48	5.13	4.5
	E領域	3.55	3.74	3.58	3.95	5.25	5.76	3.89	4.43	4.33	4.5
	C領域	7.29	5.38	9.08	5.32	7.00	5.38	6.30	4.82	7.86	5.4
新規尺度	自己成長	25.37	5.32	24.40	6.30	25.38	4.76	23.28	7.03	24.78	6.0
	社会貢献	24.73	6.16	24.68	7.36	22.75	8.36	19.93	8.47	22.98	7.3
	地位	16.30	6.64	16.83	8.17	18.81	5.72	17.33	7.73	18.13	7.4
	経済性	20.33	6.41	22.25	6.64	20.25	4.86	21.28	6.45	22.30	6.1
	仕事と生活のバランス	24.51	5.56	25.98	5.20	22.94	5.85	24.19	6.38	25.09	5.5
	主体的進路選択	25.23	5.21	24.09	4.91	23.19	4.37	24.10	6.01	24.56	5.1
	気持ちの切り替え	15.77	7.33	17.08	7.64	16.31	6.16	17.01	7.61	17.34	7.6
	外界への積極性	22.12	4.83	22.02	5.67	21.50	4.27	20.63	6.44	22.05	5.6
	社会生活への心構え	24.61	4.25	25.25	4.28	23.69	3.36	23.11	5.20	24.42	4.6

③希望職種

希望職種別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の平均値(M)と標準偏差(SD)について、結果を図表 11-11 に示す。各項目を希望業種で横断的にみた際に最も得点が高いものに網掛けをし、以下に中心的にみていくこととした。

A検査の職業興味をみると、現実的 (R) と研究的 (I) 領域は農・林・漁業希望者で、芸術的領域(A)は経営・管理 (課長相当以上管理・経営職等) 希望者で、社会的領域 (S) は専門・技術 (医療系専門職) 希望者で、企業的領域 (E) は経営・管理 (個人経営店長・所長) 希望者で、慣習的領域 (C) は事務 (総務・人事・経理・秘書・受付等) 希望者で、それぞれ高かった。

B検査 (基礎的志向性) をみると、対情報志向 (D) では経営・管理 (課長相当以上管理・経営職等) と経営・管理 (個人経営店長・所長) 希望者で高い値が示された。対人志向 (P) では、経営・管理 (個人経営店長・所長)、営業・販売、サービス (介護・家事・保育・調理等) 希望者で高い値が示された。対物志向 (T) では、農・林・漁業希望者で高い値が示された。

図表 11-11 希望職種別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の平均値 (M) と標準偏差 (SD) (3 分割で表示)

項目内容／希望職種	事務 (総務・人事・経理・秘書・受付等)		事務補助・一般職		経営・管理 (課長相当以上管理・経営職等)		経営・管理 (個人経営店長・所長)		営業・販売		
	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	mean	SD	
A検査 (職業興味)	R領域	3.46	4.00	2.94	3.36	2.71	3.10	5.42	4.50	2.86	3.99
	I領域	5.35	5.30	4.77	4.41	4.64	3.74	4.42	3.55	3.52	4.65
	A領域	6.42	5.31	5.77	4.67	7.74	4.13	7.67	4.91	7.00	5.50
	S領域	5.22	3.98	4.34	3.39	4.52	3.29	6.33	3.73	5.24	4.02
	E領域	6.14	4.63	4.32	3.97	10.62	3.75	11.42	4.14	8.01	4.77
	C領域	10.36	4.74	8.23	4.99	7.26	5.56	3.92	3.15	5.69	5.10
B検査 (基礎的志向性)	情報を集める (D1)	4.37	2.06	3.85	2.03	5.57	2.18	5.67	2.15	5.13	2.21
	好奇心を満たす (D2)	4.86	2.14	4.51	2.30	5.31	1.98	5.92	1.62	5.00	2.27
	情報を活用する (D3)	4.93	2.27	3.94	2.18	5.50	1.99	4.25	2.09	5.13	2.17
	対情報志向 (D) 合計	14.16	5.05	12.30	4.97	16.38	4.39	15.83	4.28	15.25	5.40
	自分を表現する (P1)	1.71	2.11	1.51	1.58	3.45	2.80	4.08	2.39	3.62	2.82
	みんなと行動する (P2)	3.10	2.38	2.77	2.22	3.83	2.33	4.25	2.67	4.54	2.43
	人の役に立つ (P3)	5.58	2.14	5.34	2.15	6.00	1.85	6.33	1.87	6.07	2.09
	対人志向 (P) 合計	10.39	5.46	9.62	4.86	13.29	5.46	14.67	5.23	14.23	6.06
	物をつくる (T1)	2.91	2.40	2.53	2.21	2.95	2.49	3.58	2.54	3.11	2.68
自然に親しむ (T2)	3.19	2.39	2.96	2.50	3.52	2.36	5.08	1.78	3.25	2.66	
対物志向 (T) 合計	6.10	4.10	5.49	4.02	6.48	3.69	8.67	3.85	6.37	4.62	
C検査 (職務遂行の自信度)	R領域	2.95	3.82	2.57	3.31	4.21	4.39	5.92	5.40	2.51	3.55
	I領域	3.76	4.34	2.74	3.20	5.43	4.78	6.17	5.75	2.48	4.07
	A領域	4.30	4.58	3.00	3.81	5.90	3.91	6.67	4.89	4.65	4.46
	S領域	4.54	4.03	4.09	3.36	5.95	4.14	8.17	5.15	6.01	4.53
	E領域	4.17	4.22	2.66	3.06	8.86	4.48	9.33	5.16	6.06	4.96
	C領域	9.51	5.21	7.02	4.95	10.36	4.87	8.00	5.49	6.86	5.64
新規尺度	自己成長	23.66	5.69	24.92	6.40	25.93	5.58	26.92	6.47	25.08	5.39
	社会貢献	22.81	6.72	22.81	8.04	23.76	6.92	27.50	5.13	22.46	6.31
	地位	16.80	7.53	16.89	6.83	23.69	6.03	25.17	5.98	18.85	6.85
	経済性	21.78	5.74	21.72	6.13	26.29	4.80	26.50	5.44	22.73	5.35
	仕事と生活のバランス	26.63	4.60	26.04	5.29	25.31	5.77	26.17	7.12	24.83	4.89
	主体的進路選択	23.31	4.81	23.70	4.58	25.67	4.36	26.42	4.58	24.61	4.46
	気持ちの切り替え	16.82	7.44	13.49	7.37	19.83	8.27	22.83	8.36	18.96	7.66
	外界への積極性	21.28	5.56	20.57	4.33	24.12	5.27	24.00	7.77	22.76	5.66
	社会生活への心構え	24.17	4.62	24.55	4.16	26.00	4.52	26.17	5.11	24.94	3.76

項目内容／希望職種		サービス（介護・家事・保育・調理等）		専門・技術（医療系専門職）		専門・技術（教育・講師）		専門・技術（その他の専門職・技術者）		運輸・通信（車両運転・通信設備操作）	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
A検査（職業興味）	R領域	2.18	3.24	3.51	4.00	3.42	4.43	5.36	4.45	6.55	4.82
	I領域	3.74	4.44	7.34	5.46	5.45	5.33	8.40	5.70	4.82	5.71
	A領域	4.69	4.14	5.24	4.83	5.88	5.13	6.07	4.97	4.27	5.04
	S領域	6.18	3.66	7.85	4.59	6.15	4.20	3.38	3.64	4.91	4.61
	E領域	4.44	3.69	4.34	4.44	4.82	4.17	5.53	4.49	6.73	5.18
	C領域	3.95	4.15	5.91	4.92	6.08	4.81	7.73	4.63	6.82	5.29
B検査（基礎的志向性）	情報を集める（D1）	3.23	1.78	3.83	2.34	4.46	2.04	4.63	2.27	4.45	2.70
	好奇心を満たす（D2）	4.33	2.20	4.36	2.34	4.57	2.31	4.84	2.14	4.00	3.35
	情報を活用する（D3）	4.90	2.00	4.92	2.31	4.77	2.29	5.31	2.22	5.09	2.77
	対情報志向（D）合計	12.46	4.45	13.12	5.70	13.80	5.55	14.78	5.21	13.55	8.50
	自分を表現する（P1）	1.95	2.25	2.12	2.31	2.41	2.39	1.93	2.31	2.27	2.94
	みんなと行動する（P2）	3.67	2.33	3.43	2.45	3.80	2.52	3.06	2.53	3.18	2.32
	人の役に立つ（P3）	6.62	1.62	6.24	1.95	6.34	1.91	5.38	2.19	4.55	3.08
	対人志向（P）合計	12.23	4.94	11.80	5.58	12.54	5.46	10.37	5.85	10.00	7.47
	物をつくる（T1）	2.82	2.34	3.20	2.62	3.49	2.62	4.17	2.55	3.73	3.04
	自然に親しむ（T2）	3.64	2.38	3.67	2.61	3.54	2.46	3.52	2.50	3.73	3.52
対物志向（T）合計	6.46	3.99	6.87	4.56	7.03	4.31	7.70	4.18	7.45	6.12	
C検査（職務遂行の自信度）	R領域	2.05	3.04	3.64	4.22	3.26	4.05	5.40	4.80	7.18	4.09
	I領域	3.05	3.68	6.18	5.33	4.50	4.82	6.73	5.59	5.09	4.87
	A領域	3.77	3.94	4.11	4.19	4.66	4.50	4.09	4.17	4.73	4.63
	S領域	6.46	3.87	7.52	4.78	6.20	4.14	3.58	3.96	5.36	4.23
	E領域	3.05	3.41	3.65	4.29	3.77	3.99	4.36	4.41	5.27	4.82
	C領域	4.82	4.50	7.02	5.56	7.09	5.23	8.98	5.18	8.82	4.75
新規尺度	自己成長	25.97	5.48	26.03	5.42	25.46	5.30	24.57	5.93	23.27	6.00
	社会貢献	26.36	5.28	25.54	5.96	24.20	6.46	21.84	7.35	22.82	5.83
	地位	17.31	6.68	17.97	7.25	17.12	6.47	18.70	7.45	20.09	5.63
	経済性	20.85	5.56	22.91	6.05	21.03	6.76	22.72	6.11	23.18	5.31
	仕事と生活のバランス	24.77	5.03	25.33	5.22	23.95	5.91	24.87	5.45	24.18	5.58
	主体的進路選択	25.03	4.67	25.18	4.88	25.73	5.06	24.45	5.10	23.45	5.13
	気持ちの切り替え	17.90	5.55	17.49	7.46	17.01	7.47	17.03	7.48	19.27	4.50
	外界への積極性	21.67	3.90	22.63	5.51	22.82	5.15	22.28	5.46	22.00	5.40
	社会生活への心構え	24.18	4.01	24.91	4.33	24.69	4.26	24.35	4.86	24.36	5.01

項目内容／希望職種		保安		生産・労務（製造、機械操作、清掃、建設工事作業等）		農・林・漁業		その他		合計	
		M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
A検査（職業興味）	R領域	5.43	5.59	7.69	4.64	7.94	6.07	3.74	4.29	4.03	4.3
	I領域	9.00	7.05	8.00	6.09	11.25	5.29	5.02	5.00	6.28	5.5
	A領域	5.29	3.35	4.25	4.36	5.88	4.35	6.97	4.95	6.14	5.0
	S領域	4.00	2.65	3.94	4.71	4.44	3.29	5.08	4.40	5.15	4.3
	E領域	3.29	3.09	3.94	3.91	6.88	5.60	5.88	4.61	5.74	4.7
	C領域	7.71	5.53	8.63	5.55	5.75	4.27	6.09	4.58	7.15	5.0
B検査（基礎的志向性）	情報を集める（D1）	4.14	2.48	4.50	2.07	3.38	2.66	3.80	2.30	4.30	2.3
	好奇心を満たす（D2）	5.57	2.37	4.00	2.16	4.69	2.44	4.26	2.33	4.65	2.3
	情報を活用する（D3）	4.29	2.36	4.75	2.08	4.56	2.56	4.14	2.37	4.86	2.3
	対情報志向（D）合計	14.00	6.53	13.25	4.97	12.63	6.74	12.20	5.79	13.80	5.5
	自分を表現する（P1）	2.86	2.48	0.81	1.22	1.56	1.97	2.44	2.54	2.19	2.4
	みんなと行動する（P2）	3.43	2.57	2.94	2.74	2.19	2.34	3.14	2.43	3.31	2.5
	人の役に立つ（P3）	6.43	1.72	5.31	1.66	5.56	2.28	5.10	2.51	5.67	2.2
	対人志向（P）合計	12.71	5.47	9.06	4.81	9.31	5.67	10.67	6.37	11.17	5.8
	物をつくる（T1）	3.71	2.81	4.00	2.48	4.19	2.93	3.11	2.59	3.39	2.6
	自然に親しむ（T2）	4.57	2.70	2.88	2.13	5.63	2.58	3.15	2.59	3.45	2.5
対物志向（T）合計	8.29	5.15	6.88	3.74	9.81	4.89	6.26	4.40	6.83	4.3	
C検査（職務遂行の自信度）	R領域	1.86	1.68	6.50	4.43	7.13	5.34	3.14	4.14	3.86	4.4
	I領域	5.43	5.47	5.50	5.19	9.81	5.15	3.77	4.78	4.99	5.2
	A領域	1.43	1.81	3.75	4.11	3.94	4.15	4.80	4.37	4.32	4.3
	S領域	2.43	1.90	4.13	4.88	4.69	3.72	4.82	4.67	5.13	4.5
	E領域	0.86	1.07	3.50	3.46	5.69	5.59	4.06	4.41	4.33	4.5
	C領域	5.86	5.08	8.56	5.67	7.44	5.24	6.41	4.99	7.86	5.4
新規尺度	自己成長	26.86	4.45	24.56	7.94	25.31	5.61	23.79	7.10	24.78	6.0
	社会貢献	28.00	5.42	22.94	4.64	23.13	8.79	20.75	8.87	22.98	7.3
	地位	20.29	6.82	18.75	5.74	19.75	5.70	17.11	7.95	18.13	7.4
	経済性	23.14	6.74	22.69	6.29	21.00	5.07	21.13	6.34	22.30	6.1
	仕事と生活のバランス	22.43	6.19	25.69	5.13	22.94	6.29	24.32	6.10	25.09	5.5
	主体的進路選択	26.14	5.34	23.69	5.91	23.19	5.15	24.73	5.86	24.56	5.1
	気持ちの切り替え	19.14	10.87	18.19	7.16	16.50	5.90	17.50	7.81	17.34	7.6
	外界への積極性	22.71	8.65	21.31	5.65	21.25	4.67	21.26	6.19	22.05	5.6
	社会生活への心構え	24.71	6.97	24.25	4.45	23.69	4.21	23.54	4.85	24.42	4.6

C検査の職務遂行の自信度では、現実的領域（R）は運輸・通信（車輛運転・通信設備操作）職の希望者で、研究的領域（I）は農・林・漁業職の希望者で、芸術的領域（A）、社会的領域（S）、企業的領域（E）は経営・管理（個人経営店長・所長）職希望者で、慣習的領域（C）は経営・管理（課長相当以上管理・経営職等）職希望者で、それぞれ高かった。職種においては、C検査の職務遂行の自信度とA検査で高く興味が示された内容が一致しない傾向が示された。

新規尺度をみると、経営・管理（個人経営店長・所長）職希望者ではいずれの得点も全体平均より高く、かつ他の職種を希望する者よりも高い得点が示された。経営・管理（課長相当以上管理・経営職等）職希望者では外界への積極性が高く、保安職希望者では社会貢献が高かった。

以上より、希望職種については職業レディネス・テストの下位尺度で測定された数値との間に解釈可能な関連傾向が見られたが、新規尺度の数値との関連は概ね明確ではなかった。

④希望する働き方

希望する働き方別の職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の平均値(M)と標準偏差(SD)について、結果を図表 11-12 に示す。各項目別に希望する働き方間で横断的にみた際に最も得点が高いものに網掛けをし、以下に中心的にみていくこととした。

A検査の職業興味をみると、現実的領域（R）については「特に働きたいとは思わない」を希望する者の得点が他より高かった。研究的領域（I）では「状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する」を希望する者の得点が高かった。芸術的（A）、社会的（S）、慣習的（C）領域では「正社員・正規職員として就職しないで、アルバイトやパート等で働く」を希望する者の得点が高かった。企業的領域（E）では「自営で働くか独立する」を希望する者の得点が高かった。

B検査（基礎的志向性）をみると、対情報志向（D）では「状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する」を希望する者で高い値が示された。対人志向（P）と対物志向（T）では、「自営で働くか独立する」を希望する者で高かった。

C検査の職務遂行の自信度では、概して、A検査で高く興味が示された内容について、自信度も高く回答されていた。

新規尺度をみると、全ての特性が全体平均より高かったのは「状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する」を希望する者であった。「自営で働くか独立する」を希望する者が、社会貢献と仕事と生活のバランスを除く全ての特性で全体平均より高く、かつ他の業種を希望する者よりも高い得点が示された。「一つの会社でできるだけ長く働く」を希望する者は社会貢献が高く、同項目は「状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する」を希望する者で次いで高かった。一方で「正社員・正規職員として就職しないで、アルバイトやパート等で働く」を希望する者は、主体的進路選択が高かった。「働く必要がなくなったら仕事をやめ

る」では、仕事と生活のバランス以外の全ての特性が全体平均より低かった。「特に働きたいとは思わない」では、全ての特性が全体平均より低かった。

これらの新規尺度との関連から、会社への所属を希望する者は社会貢献を重んじる一方で、自営・独立や非正規雇用といった組織への所属を希望しない者は主体性を重んじていることが示された。また、働くことを希望しない者はいずれの特性も低いことが示された。このことから新規尺度は、組織への関わり方や本人の働き方の希望を反映しうる項目として機能することが示唆された。

図表 11-12 希望する働き方別における職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の
 平均値 (M) と標準偏差 (SD) (2 分割で表示)

項目内容／希望する働き方	一つの会社でできるだけ長く働く		状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する		自営で働くか独立する		正社員・正規職員として就職しないで、アルバイトやパート等で働く		
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD	
A検査(職業興味)	R領域	3.77	4.04	4.47	4.71	4.47	4.51	3.47	3.80
	I領域	5.77	5.32	7.21	5.74	5.89	5.13	4.47	4.69
	A領域	5.25	4.54	6.55	5.14	8.13	5.23	11.13	4.52
	S領域	5.03	4.28	5.66	4.37	4.78	3.88	6.67	5.41
	E領域	5.06	4.44	6.31	4.74	8.30	4.93	7.73	4.37
	C領域	7.68	5.12	6.69	5.01	6.57	4.75	9.13	5.71
B検査(基礎的志向性)	情報を集める (D1)	4.11	2.23	4.63	2.25	4.66	2.16	4.87	2.00
	好奇心を満たす (D2)	4.32	2.25	5.25	2.18	4.78	2.02	4.07	2.19
	情報を活用する (D3)	5.02	2.25	4.97	2.21	4.67	2.26	5.00	2.70
	対情報志向 (D) 合計	13.46	5.44	14.85	5.37	14.11	5.01	13.93	6.04
	自分を表現する (P1)	2.17	2.39	2.26	2.39	2.78	2.60	2.60	2.38
	みんなと行動する (P2)	3.45	2.48	3.39	2.42	3.78	2.49	2.60	2.44
	人の役に立つ (P3)	5.70	2.15	6.02	2.01	5.78	2.13	5.20	2.51
	対人志向 (P) 合計	11.31	5.82	11.67	5.60	12.35	5.80	10.40	6.28
	物をつくる (T1)	3.26	2.59	3.47	2.59	4.08	2.41	2.40	2.29
	自然に親しむ (T2)	3.18	2.50	3.82	2.54	3.73	2.40	3.53	2.39
	対物志向 (T) 合計	6.44	4.33	7.29	4.40	7.81	4.05	5.93	4.25
	C検査(職務遂行の自信度)	R領域	3.72	4.20	4.12	4.54	4.62	5.13	2.47
I領域		4.68	4.95	5.60	5.43	4.84	5.32	3.87	4.67
A領域		3.86	4.10	4.41	4.30	6.08	4.90	6.53	5.50
S領域		4.98	4.43	5.67	4.53	5.35	4.83	5.07	5.20
E領域		4.02	4.32	4.61	4.55	6.43	5.35	3.80	3.41
C領域		8.18	5.37	7.92	5.49	7.54	5.48	8.20	5.24
新規尺度	自己成長	24.78	5.67	25.75	5.35	26.39	5.80	25.33	6.55
	社会貢献	23.69	6.68	23.65	6.69	22.91	8.25	18.60	9.52
	地位	18.29	7.21	18.65	7.22	19.76	6.84	17.87	8.59
	経済性	22.43	5.79	22.48	5.99	22.89	6.06	22.00	6.57
	仕事と生活のバランス	24.87	5.25	25.27	5.61	24.14	5.98	25.20	4.63
	主体的進路選択	24.11	4.85	25.15	4.80	26.73	5.09	26.73	4.13
	気持ちの切り替え	17.35	7.41	17.48	7.40	20.68	7.31	15.60	8.33
	外界への積極性	21.78	5.35	22.90	5.16	24.01	5.35	20.93	6.26
	社会生活への心構え	24.81	4.33	24.43	4.39	25.44	4.90	25.00	3.72

項目内容／希望する働き方	働く必要がなくなったら仕事をやめる		特に働きたいとは思わない		合計		
	M	SD	M	SD	M	SD	
A検査(職業興味)	R領域	3.18	3.64	4.51	4.78	4.03	4.3
	I領域	5.68	5.73	7.03	5.19	6.28	5.5
	A領域	6.90	5.47	7.43	4.95	6.14	5.0
	S領域	4.10	3.66	3.84	3.66	5.15	4.3
	E領域	5.05	4.25	5.16	4.98	5.74	4.7
	C領域	6.34	4.53	6.27	4.27	7.15	5.0
B検査(基礎的志向性)	情報を集める (D1)	4.04	2.45	3.03	2.18	4.30	2.3
	好奇心を満たす (D2)	4.32	2.15	3.95	2.40	4.65	2.3
	情報を活用する (D3)	4.06	2.41	3.22	2.51	4.86	2.3
	対情報志向 (D) 合計	12.42	5.38	10.19	5.92	13.80	5.5
	自分を表現する (P1)	1.73	2.37	1.32	1.96	2.19	2.4
	みんなと行動する (P2)	2.47	2.38	1.49	2.02	3.31	2.5
	人の役に立つ (P3)	4.73	2.54	3.62	2.33	5.67	2.2
	対人志向 (P) 合計	8.94	6.07	6.43	5.32	11.17	5.8
	物をつくる (T1)	3.70	2.59	2.59	2.61	3.39	2.6
	自然に親しむ (T2)	3.70	2.64	2.35	2.46	3.45	2.5
	対物志向 (T) 合計	7.39	4.13	4.95	4.06	6.83	4.3
C検査(職務遂行の自信度)	R領域	3.34	3.97	3.27	4.45	3.86	4.4
	I領域	4.70	5.11	4.65	4.69	4.99	5.2
	A領域	5.04	4.37	4.05	3.88	4.32	4.3
	S領域	4.42	3.97	2.76	3.28	5.13	4.5
	E領域	3.75	3.78	2.97	3.80	4.33	4.5
	C領域	6.66	4.47	5.35	4.55	7.86	5.4
新規尺度	自己成長	21.38	7.73	18.16	7.06	24.78	6.0
	社会貢献	18.54	8.87	16.49	8.79	22.98	7.3
	地位	14.94	8.12	13.57	7.36	18.13	7.4
	経済性	21.62	7.60	18.65	6.93	22.30	6.1
	仕事と生活のバランス	27.18	5.13	23.97	6.11	25.09	5.5
	主体的進路選択	23.81	6.03	21.19	6.68	24.56	5.1
	気持ちの切り替え	15.52	8.02	13.03	7.54	17.34	7.6
	外界への積極性	20.41	6.47	16.95	6.96	22.05	5.6
	社会生活への心構え	22.47	5.43	20.08	5.03	24.42	4.6

(2) これまでの進路選択や仕事選択についての自己評価と職業レディネス・テストのA検査および新規尺度の下位検査の関連性の検討

これまでの進路選択や仕事選択についての評価を問う3項目(以下、3項目)と、職業レディネス・テストのA検査および新規尺度として作成した「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」に含まれる9特性について、それぞれの合計得点を用いて相関係数を算出した結果を図表11-13に示す。

3項目の回答について、「⑤就職活動や仕事探し(アルバイトなどを含む)の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか?(単一回答)」は得点が高い方が困難さの程度が高く(困難を感じなかった:1点~困難を感じた:4点)、「⑥あなたの今までの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか?(単一回答)」は得点が高い方が不適切の程度が高く(適切だった:1点~適切ではなかった:4点)、「⑦あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか?(単一回答)」は得点が高い方が不満足の高くなるように得点化している(満足:1点~満足していない:4点)。すなわち、この3項目は得点が高い程、進路選択や仕事選択経験の自己評価がよくないことを示す。

図表 11-13 これまでの進路選択や仕事選択についての自己評価と職業レディネス・テストの
A 検査および新規尺度の下位検査の相関係数 (Pearson の r)

	sc2.5 就職活動や仕事探し(アルバイトなどを含む)の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか？	sc2.6 あなたの今までの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか？	sc2.7 あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか？
sc2.5 就職活動や仕事探し(アルバイトなどを含む)の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか？	1		
sc2.6 あなたの今までの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか？	.253**	1	
sc2.7 あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか？	.202**	.733**	1
A検査(興味)合計点	R領域 -.034	.023	-.044
同上	I領域 -.001	.046	.014
同上	A領域 -.015	.003	.001
同上	S領域 -.131**	-.051	-.050
同上	E領域 -.107**	-.046	-.036
同上	C領域 -.004	.027	.003
自己成長	-.129**	-.188**	-.223**
社会貢献	-.131**	-.152**	-.200**
主体的進路選択	-.090**	-.224**	-.249**
地位	-.129**	-.088**	-.106**
経済性	-.148**	-.081**	-.078**
仕事と生活のバランス	-.046	.004	-.019
外界への積極性	-.184**	-.262**	-.280**
気持ちの切り替え	-.190**	-.281**	-.276**
社会生活への心構え	-.144**	-.221**	-.268**

※ **…p<.01, ns…有意ではない

まず、3項目と職業レディネス・テストのA検査に着目すると、S領域とE領域と困難さの程度との関連が示されたことを除き、3項目との関連はみられなかった。そのため、職業レディネス・テストで測定される興味内容と、進路選択や仕事選択についての自己評価はほとんど関連がないといえる。

3項目と新規尺度の相関係数に着目すると、表をみても明らかなように、ほとんどすべての相関係数が統計上、有意な値になっている。これについてはサンプルサイズが大きいことによる点に留意しつつ、以下に見ていきたい。新規尺度は「仕事選び基準尺度」と「基礎的性格特性尺度」と「基礎的生活特性尺度」で構成され、全体で9つの特性が測定されるが、「仕事と生活のバランス」を除く全ての新規尺度で負の相関が示された。このことは、新規尺度で高い評定をした者は、3項目を低く評定するという関係性となっていることを示唆している。換言すれば、新規尺度で測定される要素の得点が高いほど、進路選択や仕事選択についての自己評価は高い傾向があるということである。

新規尺度を詳細にみると、「仕事選び基準尺度」内では「自己成長」、「社会貢献」、「主体的進路選択」という3特性と、「経済性」と「地位」の2特性が3項目とそれぞれ類似したやや弱い相関を示し、また「仕事と生活のバランス」においては無相関であった。このことは第9章で示された、同尺度内の要素のまとまりともおおむね一致することが示唆された。他方、「基礎的性格特性尺度」の「気持ちの切り替え」と「外界への積極性」は、「仕事選び基準尺度」および「基礎的生活特性尺度」に比べて3項目とやや強めの関連を示すことが確認された。このことは、そもそもの個人のもつ特性が、進路や仕事選択の過程や結果に関連するこ

とを示唆するものである。今回の検討で因果までは言及できないものの、新規尺度はある時点での選択のみならず、進路や仕事選択の過程と結果に結びつく可能性が示唆された。

以上から、進路や仕事選択の過程と結果に関連する自己評価と、新規尺度は関連することが示され、職業レディネス・テストの既存尺度では測定されていない側面を新規尺度が測定していることが示唆された。

5. まとめ

第11章では、職業選択の考え方と、職業レディネス・テストの各下位検査、下位尺度および高等教育課程の在学者や若年の求職者のために新規に作成した尺度との関連を検討した。

(1) 職業選択の考え方と職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の基礎統計量との関連について

職業選択の考え方と職業レディネス・テストおよび新規尺度の下位検査の基礎統計量での①～④の検討をふまえば、まず、②希望業種と③希望職種については、職業レディネス・テストの下位尺度で測定された数値との間に解釈可能な関連傾向が見られたが、新規尺度の数値との関連は明確ではなかった。他方、①希望職業タイプと④希望する働き方については、これらの設問に対してどのような回答をしているかにより、職業レディネス・テストの下位尺度に加えて新規尺度の各特性の数値にも違いがみられた。②と③は職業のより具体的な内容に着目するのに対し、①と④は職業内容を考える以前の、働くうえでより大きな枠組み（例えば会社への所属か自営か、正規か非正規かなど）を提供しうる内容と捉えられる。このことは、職業レディネス・テストと合わせて新規尺度を用いることで、同じ職業領域に興味をもつ者の中でも、異なる働き方を希望する個人を捉えることができることを意味している。

一方で、働くことを希望しない者はいずれの特性も低かったことから、新規尺度は働き方だけでなく、働くことそのものへの志向をみるのにも有用な測度であると考えられた。そこで、例えば職業レディネス・テストでいずれの興味領域も低い者に対して、「働くことに対して希望はあるが、希望する職業内容が不明瞭である」のか、それとも「そもそも働くこと自体に対して意識が低く、いずれの職業内容にも興味をもてない」のか、などの状態像を知るために新規尺度を用いるといった活用法が考えられるだろう。

(2) これまでの進路選択や仕事選択についての自己評価と職業レディネス・テストのA検査および新規尺度の下位検査の関連性の検討について

これまでの進路選択や仕事選択についての自己評価と職業レディネス・テストのA検査および新規尺度の下位検査の関連性の検討からは、「仕事選び基準尺度」や「基礎的性格特性尺度」および「基礎的生活特性尺度」が、職業レディネス・テストとは異なる側面を測定する

ことが示唆された。具体的には、「仕事選び基準尺度」や「基礎的性格特性尺度」および「基礎的生活特性尺度」がこれまでの進路選択や仕事選択についての自己評価（困難さ、適切さ、満足度）と関連していたのに対し、職業レディネス・テストではその関連がほとんどみられなかった。中でも、新規尺度の「基礎的性格特性尺度」である「気持ちの切り替え」と「外界への積極性」は、新規尺度内の他の尺度に比べてもこれらの自己評価とやや強く関連したことから、新規尺度の中では特に進路や仕事探しの過程と結果に影響する特性である可能性が考えられた。今回は因果の検討には至れていないものの、これらの特性が低いことで、職業決定に至る過程が困難である可能性や、決定後の満足度が低くなる可能性が考えられる。このように、職業レディネス・テストの既存尺度では分からない、進路や仕事選択の過程と結果に関連しうる内容を測定できることは、それを実行する本人にとっても、その過程を支援する支援者にとっても有意義であろうと考えられる。

以上の検討から、総じて新規尺度は希望する働き方のみならず、これまでの進路選択や仕事選択に関する過程や進路の決定に対する評価に至る特性を反映している可能性が示された。このことは、職業レディネス・テストに追加して、新規尺度を実施することの意義といえるだろう。

引用文献

労働政策研究・研修機構（2020）. 「職業レディネス・テストの改訂に関する研究 —大学生等の就職支援のための尺度の開発—」 JILPT 資料シリーズ No.230.

終章

1. 本研究で確認できたこと

「職業レディネス・テストの改訂に関する研究」として実施されてきた本研究では、これまで中学生、高校生を中心として活用されてきた職業レディネス・テストの3つの検査に加えて、高等教育課程の在学者や若年求職者の就職支援に向けて役立てられる特性の把握ができるような新たな尺度の開発が目指された。その結果、2020年公刊の資料シリーズで示した通り、「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」という3つの尺度が開発されるに至った。

本書では、2019年の尺度開発時に収集されたデータに続き、2020年に高等教育課程在学者を対象として新たに収集されたデータに基づいた、新規尺度による特性の測定に関する分析結果が報告されている。本書の締めくくりにあたり、まずは第1章で述べた本研究の目的に照らして調査結果から示された知見をまとめておく。その上で、今回の研究として行った様々な分析結果全体を通して得られた主な知見を3つあげておきたい。

(1) 目的との関連から見て

第1章では今回の調査データの分析の目的として以下の3点をあげた。まず1つ目の目的は、「2019年調査」で不足していた高等教育課程の在学者データを「2020年調査」で収集し、特に在職者との関連で平均値に対するサンプルサイズの影響をみるということである。この点を検証するにあたっては、「2019年調査」の在学者のデータセットと「2020年調査」のデータセットを構成する回答者の属性の違いの検討、尺度の構造に関する妥当性の検討、尺度の信頼性に関する検討を行い、その上で平均値を算出した。結果として第4章に示したように職業レディネス・テストの尺度得点に関しては「2019年調査」と「2020年調査」間で大きな違いは見られなかったが、新規尺度については「2019年調査」に比べて「2020年調査」の平均値が高いことがわかった（第5章から第7章）。なお、各尺度の得点の高低は調査年によらず同じ傾向がみられたため、特定の尺度において調査年間で差がみられたというよりはどの尺度でも全体として「2020年調査」の方で高かったということになる。したがって、「2019年調査」データによる新規尺度の得点が在職者に比べて在学者の方で高かったことに関するサンプルサイズの影響については、在学者のサンプルサイズを多くしても「2019年調査」の在職者よりも高かったので否定されたことになる。

ただ、第8章において2021年に実施した別の調査で集めた新規尺度に対する在職者の平均値についても取り上げて検討したところ、この値は「2020年調査」の在学者よりも低めだったものの「2019年調査」の在職者や在学者よりは高かった。したがって、「2019年調査」の平均値が在職者も在学者も低めだったということかもしれず、新規尺度に対して在職者よ

りも在学者の回答が常に高めになる傾向があるかという点についてはまだ明確に結論づけることはできないと考えている。

次に2つめの目的は、職業レディネス・テストと新規尺度を用いた時の高等教育課程の在学者の回答傾向を明らかにし、結果を解釈するための基準を作成するということであった。まず、職業レディネス・テストの既存尺度における平均的な水準は、今回分析した2つのWEB調査による在学者のデータから作成するのは適切ではないという結論に至った。その理由については本章の最後の「本研究で明らかになった問題点」のところで触れている。他方、新規尺度については様々なデータセットによる平均値の比較により「2020年調査」の在学者データによる平均値を高等教育課程在学者の一般的な水準としてみなしてよいのではないかという結論に至った。

最後に3つめの目的は、新規尺度と職業レディネス・テストの既存尺度やその他の特性間との関連についての検討であるが、第9章でも示したとおり「2020年調査」のデータでも「2019年調査」で確認された結果と同様の傾向が確認されている。新規尺度は職業レディネス・テストの職業興味や職務遂行の自信度よりは基礎的志向性との関連を強く示すものであった。また、第10章と第11章における回答者の他の変数との関連の検討においては、新規尺度は職業レディネス・テストの職業興味や職務遂行の自信度とは別の側面を測定するものであることが示唆されている。

(2) 分析結果全体を通して得られた知見

以上、第1章で述べた研究目的に照らして結果を整理したが、ここからは分析結果全体を通して得られた知見について3つの観点からまとめてみたい。

第1は、「2019年調査」を踏まえて開発された新規尺度は本研究で扱った「2020年調査」のデータにおいても高い信頼性を示すことが確認できた点である（主に第5章、第6章、第7章）。2019年の尺度開発の際には、学生だけではなく30代前半の若年就業者のデータも含めて尺度構成を行ったが、「2020年調査」は在学者だけを対象とした。このようにデータセットを構成する対象者の質は異なっていたが、各尺度の信頼性に関してはどちらのデータセットでも高い値が得られたので、尺度構成の適切さは実証されたとみることができるだろう。

第2は、新規尺度は職業レディネス・テストで測定される特性を補完することをめざして開発されたが、職業レディネス・テストの本検査で捉えられている各要素とは別の側面を把握できる内容となっていることが今回の高等教育課程在学者の調査結果においても確認できた点である（主に第9章、第10章、第11章）。

前節の3つめの目的との関連でも述べたが、新規に開発した「仕事選び基準尺度」、「基礎的性格特性尺度」、「基礎的生活特性尺度」の3尺度と職業レディネス・テストの3つの既存検査との関連を見た結果、とくに職業志向性に関するA検査の「職業興味」とC検査の「職務遂行の自信度」との関連が、一部の領域を除いてほとんどみられなかった。これは新規尺

度が、職業興味や自信からみた職業領域を特徴づける情報とは別の要素を測定していることを意味する。新規尺度を作成するにあたり、「仕事選び基準尺度」は働く上での価値観のような概念をとらえるもの、「基礎的性格特性」と「基礎的生活特性」は仕事や職場での適応可能性を示唆するような概念として作成した。そこで、これらの特性を職業レディネス・テストで測定される職業志向性や基礎的志向性とあわせて捉えることができれば、就職を考える際の若者の個性をより多面的に捉えることができるという点で、資料としての有用性も高まるものと考えられる。

第3は、複数の調査結果により、各尺度の測定データが集められたことで、これらの尺度で測られている高等教育課程在学者の特性に関する傾向が把握できたという点である（主に第8章）。2つの調査結果を比較した時、在学者のデータのみでみた場合、「2019年調査」のデータセットによる平均値に比べ「2020年調査」のデータセットの平均値は全体に高くなっていた。しかし、調査年別に各尺度を横並びに比較してみると、全体のなかでも平均値が高めの尺度と低めの尺度は調査年が異なっても同じ傾向がみられた。このことは新規尺度だけでなく職業レディネス・テストの本検査の方でも確認されたので、検査を構成する下位尺度に対する若者の回答傾向が反映されたものと解釈できる。そこで、この結果については、今後、テストを利用した学生が自分の得点を多くの若者の平均的な回答傾向と比較するとき用いるための資料として役立てられると考えている。

2. 本研究で明らかになった問題点

他方、本研究で明らかになった問題点もあった。今回の分析結果の中でとくに重要だと考えた問題点は、WEB モニター調査という対象者を用いた場合の職業レディネス・テストの既存尺度に含まれる職業興味や職務遂行の自信度、基礎的志向性に対する回答傾向である。これは第4章で指摘されている。

WEB モニターに対する調査では不誠実な回答が多く含まれていないかなどデータの信憑性が問題となることがあるが、上記事項はその点についての指摘ではない。本研究で実施した「2019年調査」、「2020年調査」のデータでは、各テストについて全項目を用いた尺度の構造に関する分析を行っており、その点からみると各領域を構成する項目はほぼ想定通りであり、信頼性係数も高かった。各項目に対する評価に不誠実な回答が多く含まれた場合にはこのような結果は得られないので、本研究で扱ったデータの信憑性に関する問題点は小さいと推察する。

問題点として認識したのは、職業興味、職務遂行の自信度、基礎的志向性に関する平均値にあらわれた特徴についてである。その特徴は、従来、紙筆検査で大学生や高校生に対して集めてきたデータと比べて、WEB モニターのデータでは慣習的領域（C 領域）や研究的領域（I 領域）、対情報志向（D 志向）の平均値が相対的に高く、芸術的領域（A 領域）、社会的領

域（S領域）、企業的領域（E領域）、対人志向（P志向）が低めになっているという点に表れている。

「2019年調査」、「2020年調査」の両方共にWEBモニターによる平均値はテストに含まれる各領域に関して同じ傾向を示しているので、上記のような各領域にみられた平均値の特徴は、特定の調査年に含まれる対象モニターの特徴ではなく、モニター登録している回答者の興味がそのまま反映された結果であるとみるべきであろう。

このようなことから、本研究では職業レディネス・テストの既存尺度については、「2019年調査」と「2020年調査」で収集された高等教育課程在学者のデータによって標準的な基準を作成することは難しいという判断に至った。回答者の所属する学部学科のバランスは偏っていないとしても、大学生一般の回答傾向と違った特徴を示すデータセットで基準を作るとは、テスト利用者が参照する基準そのものを歪めてしまう可能性がある。この点を踏まえて職業レディネス・テストの基準作りを行うためには、WEBモニター調査ではなく、学校の授業などの様々な学生が参加する機会や集団を通して集められた回答を蓄積していくことが必要であると考えている。

3. 今後の課題

本書では、職業レディネス・テストの改訂を機に作成された高等教育課程在学者や若年求職者のための新規尺度に関するデータの分析に関する資料をまとめたが、これからの重要な課題は、新しく作られた尺度を教育や就職支援の場で活用してもらうための具体的なテストとして形作っていくことである。

本書の冒頭で本研究の背景を述べた際にテスト・スタンダードについて言及したが、テスト・スタンダードの中では、利用者がテストを正しく使えるようにするために、当該テストについて解説した適切な手引を準備することについても言及されている。加えて、テストの結果を進路相談や就職支援で有効活用してもらうためには、結果のわかりやすい整理の仕方を検討した上で、解釈のためのワークシートのような副教材の準備も進める必要があるだろう。

このように、今後は新規尺度を現場で利用できるような実用的なテストの形に作りこんでいく作業に取り組んでいくことになる。新規尺度が職業レディネス・テストの内容を補完し、強化するものとして信頼できるテストになりそうだという点は確認できたが、それだけではなく、親しみやすさ、使いやすさなどの面も十分に検討して、実際の進路相談や就職支援の場で役立てられるテストになるよう完成させることを目標としたい。

参 考 資 料

「働くことに関する調査」(高等教育課程在学者調査) 調査票

「働くことの特性に関する調査（高等教育課程在学者調査）」調査票

以下に掲載する内容は調査実施にあたって用意された設問内容である。なお、調査はWEB調査として実施されたため、前問への回答により次に提示される質問や選択肢の内容が変更となる場合もある。

<調査導入の説明>

この調査は仕事をする上での個人の適性、仕事や働き方の選択・考え方を調べることを目的とするものです。最初に回答者ご自身に関してお答えいただき、続く設問はそれぞれの回答方式に従って、回答をお願いします。回答結果はすべて統計的に処理され、研究以外の目的で利用されることはありませんので、安心してお答えください。

なお、この調査は以前にもほぼ同じ内容のものを実施しております。もし、回答している途中で、以前、同じ調査を受けたことがあると気がつかれた場合には、途中で中止していただいても結構です。どうぞよろしくお願い致します。

<調査項目>

I 回答者についての設問

- 1-1 年齢
- 1-2 性別
- 1-3 お住まいの都道府県
- 1-4 現在の状況

現在、教育機関に学生として在学中ですか？ （はい・いいえ）

※上記の1-4で、「はい」の場合に以下の質問を提示。「いいえ」の場合は対象外なので、終了。

- 1-5 あなたは今までに正社員・正規職員として働いたことがありますか？

- ①全くない
- ②ある（6か月未満）
- ③ある（6か月以上1年未満）
- ④ある（1年以上3年未満）
- ⑤ある（3年以上5年未満）
- ⑥ある（5年以上）

1-6 現在の所属先：あなたが現在、在学している教育機関を選んでください。

該当するもの1つに○

- ①短期大学
- ②専門学校
- ③高等専門学校
- ④大学
- ⑤大学院（博士前期）
- ⑥大学院（博士後期）

1-7 学年をお答えください。→学年（1,2,3,4,5,6,1~6以外）年

1-8 あなたの現在の専攻、専門分野について、該当すると思われるもの一つを選んでください。

※上記1-6で①短大、③高専、④大学、⑤大学院博士前期、⑥大学院博士後期を選んだ場合に以下を提示

- ①人文科学（文学、哲学、史学、その他の人文科学）
- ②社会科学（法学、政治学、商学、経済学、社会学、社会福祉、その他の社会科学）
- ③理学（数学、物理学、化学、生物、地学、その他の理学）
- ④工学（工業、機械工学、電気通信工学、土木建築工学、応用科学、応用理学、原子力工学、鉱山学、金属工学、繊維工学、船舶工学、航空工学、経営工学、工芸学、その他の工学）
- ⑤農学（農業、農学、農芸化学、農業工学、農業経済学、林学、林産学、獣医学畜産学、水産学、その他の農学）
- ⑥保健（医学、薬学、歯学、看護学、医療、衛生、その他の保健）
- ⑦家政（家政学、食物学、被服学、住居学、児童学）
- ⑧商船（商船学）
- ⑨教育（教育、教育学、体育学、体育専門学、その他）
- ⑩芸術（美術、デザイン、音楽、芸術専門学、その他）
- ⑪その他（教養学、総合科学、国際関係学、人間関係科学、その他）

※上記1-6で②専門学校と回答した場合に提示

- ①工業関係（測量、土木・建築、電気・電子、無線・通信、自動車整備、機械、電子計算機、情報処理、その他）
- ②農業関係（農業、園芸、その他）

- ③医療関係（看護、歯科衛生、歯科技工、臨床検査、診療放射線、はり・きゅう・あんま、柔道整復、理学・作業療法、その他）
- ④衛生関係（栄養、調理、理容、美容、製菓・製パン、その他）
- ⑤教育・社会福祉関係（保育士養成、教員養成、介護福祉、社会福祉、その他）
- ⑥商業実務関係（商業、経理・簿記、タイピスト、秘書、経営、旅行、情報、ビジネス、その他）
- ⑦服飾・家政関係（家政、家庭、和洋裁、料理、編物・手芸、ファッションビジネス、その他）
- ⑧文化・教養関係（音楽、美術、デザイン、茶華道、外国語、演劇・映画、写真、通訳・ガイド、受験・補習、動物、法律行政、スポーツ、その他）
- ⑨各種学校のみにある課程（予備校、学習・補習、自動車操縦、外国人学校、その他）

II 仕事や働き方についての設問

あなたは将来、どのような仕事、働き方をしたいですか。

今後、働くとなれば、どのような仕事を希望するかを考えて回答してください。

2-1 希望する職業タイプについて、以下のうち1つを選んでください。

- () ①民間企業の会社員（大手企業）
- () ②民間企業の会社員（中小企業）
- () ③公務員や教員
- () ④自営等、その他

2-2 希望する業種について、以下のうち1つを選んでください。

- () ① 建設業
- () ② 製造業（鉄鋼・金属・機械・化学系）
- () ③ 製造業（その他）
- () ④ 電気・ガス・熱供給・水道業
- () ⑤ 運輸・倉庫業
- () ⑥ 卸売業・商社
- () ⑦ 小売店
- () ⑧ 飲食業・宿泊業
- () ⑨ 金融・保険業
- () ⑩ 不動産業
- () ⑪ サービス業（医療・福祉系）

- ⑫ サービス業 (IT・情報通信系)
- ⑬ サービス業 (マスコミ・広告)
- ⑭ サービス業 (専門サービス・調査・研究)
- ⑮ サービス業 (その他)
- ⑯ 教育・学習支援業
- ⑰ 公務・非営利団体
- ⑱ 農・林・漁業
- ⑲ その他

2-3 希望する主な職種について、以下のうち1つを選んでください。

- ① 事務(総務・人事・経理・秘書・受付等)
- ② 事務補助・一般職
- ③ 経営・管理(課長相当以上管理・経営職等)
- ④ 経営・管理(個人経営店長・所長)
- ⑤ 営業・販売
- ⑥ サービス(介護・家事・保育・調理等)
- ⑦ 専門・技術(医療系専門職)
- ⑧ 専門・技術(教育・講師)
- ⑨ 専門・技術(その他の専門職・技術者)
- ⑩ 運輸・通信(車輛運転・通信設備操作)
- ⑪ 保安
- ⑫ 生産・労務(製造、機械操作、清掃、建設工事作業等)
- ⑬ 農・林・漁業
- ⑭ その他

2-4 あなたは今後どのような働き方をしようと思いますか。以下のうち、一つを選んでください。

- 一つの会社でできるだけ長く働く
- 状況に応じて転職するなど複数の会社を経験する
- 自営で働くか独立する
- 正社員・正規職員として就職しないで、アルバイトやパート等で働く
- 働く必要がなくなったら仕事をやめる
- 特に働きたいとは思わない

2-5 就職活動や仕事探し（アルバイトなどを含む）の場面で、あなたはどの程度困難さを感じましたか？

- 困難を感じなかった
- あまり困難を感じなかった
- やや困難を感じた
- 困難を感じた
- 就職活動や仕事探しをしたことがないのでわからない

2-6 あなたの今までの進路選択や仕事選択はあなたの個性や考え方からみて適切だったと思いますか？

- 適切だった
- まあ適切だった
- あまり適切ではなかった
- 適切ではなかった

2-7 あなたはこれまでの進路選択や仕事選択に満足していますか？

- 満足
- まあ満足
- あまり満足していない
- 満足していない

Ⅲ 働くことの特性に関する設問

<尺度項目>（この枠内は調査時には非表示である）

- 1 職業興味 2 基礎的志向性 3 職務遂行の自信度→職業レディネス・テスト尺度項目
- 4 働くことに関する考え方、基本的態度 →仕事選び基準尺度
- 5 基本的性格特性・生活特性 →基礎的性格特性尺度・基礎的生活特性尺度
- 6 基本的生活態度 →日常生活チェックリスト
- 7 価値観評価 8 能力評価 →キャリア・インサイト尺度項目

1 職業興味（54 項目）

次に、いろいろな「仕事の内容」について書かれた文章があります。それぞれの仕事について、あなたはやってみたいと思いますか？「やりたい」、「どちらともいえない」、「やりたくない」のどれかで答えてください。

番号	項目	やりたい		どちらとも いえない		やりたく ない
1	部品を組み立てて機械を作る	3	・	2	・	1
2	古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	3	・	2	・	1
3	家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	3	・	2	・	1
4	保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	3	・	2	・	1
5	自分の店を経営する	3	・	2	・	1
6	文字や数字を、コンピュータに入力する	3	・	2	・	1
7	火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	3	・	2	・	1
8	環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	3	・	2	・	1
9	小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	3	・	2	・	1
10	客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	3	・	2	・	1
11	テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	3	・	2	・	1
12	帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	3	・	2	・	1
13	木材を加工し、組み立てて、家を建てる	3	・	2	・	1
14	農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	3	・	2	・	1
15	人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	3	・	2	・	1
16	ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	3	・	2	・	1
17	客を集めるため、広告や催し物などを企画する	3	・	2	・	1
18	文字や数字を、書類に正確に記入する	3	・	2	・	1
19	火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	3	・	2	・	1
20	海水の成分や海流について調査研究する	3	・	2	・	1
21	テレビドラマや映画のシナリオを書く	3	・	2	・	1
22	ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	3	・	2	・	1
23	新しい組織を作ってリーダーになる	3	・	2	・	1
24	銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	3	・	2	・	1

25	工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	3	・	2	・	1
26	新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	3	・	2	・	1
27	マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	3	・	2	・	1
28	患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	3	・	2	・	1
29	世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	3	・	2	・	1
30	依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	3	・	2	・	1
31	トラックを運転して貨物を運ぶ	3	・	2	・	1
32	病原体を発見するための実験や研究をする	3	・	2	・	1
33	インターネットのホームページのデザインをする	3	・	2	・	1
34	家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	3	・	2	・	1
35	ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	3	・	2	・	1
36	ワープロやパソコンを使って、書類などを清書する	3	・	2	・	1
37	自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	3	・	2	・	1
38	新しい薬を開発する	3	・	2	・	1
39	曲を作ったり、編曲したりする	3	・	2	・	1
40	病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	3	・	2	・	1
41	社長として、会社の経営の仕事にあたる	3	・	2	・	1
42	コンピュータを使って、複雑な計算をする	3	・	2	・	1
43	飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	3	・	2	・	1
44	博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	3	・	2	・	1
45	洋服やアクセサリーのデザインをする	3	・	2	・	1
46	悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	3	・	2	・	1
47	店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	3	・	2	・	1
48	会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	3	・	2	・	1
49	船に乗って、魚や貝などの漁をする	3	・	2	・	1
50	大学や研究所で、科学の研究をする	3	・	2	・	1
51	雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	3	・	2	・	1
52	飛行機の中で、乗客にサービスをする	3	・	2	・	1
53	流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	3	・	2	・	1
54	従業員の毎月の給料を計算する	3	・	2	・	1

2 基礎的志向性 (64 項目)

次にあなたの普段の「生活」や「興味」に関係したいろいろな事柄について書かれた文章があります。この文章の内容が、あなたの普段の興味や行動に「あてはまる」、「あてはまらない」のどちらかで答えてください。

	あてはまる		あてはまらない
1 短い間にたくさんの情報を集めるのが得意だ	2	・	1
2 話し合いの場ではよく発言する方だ	2	・	1
3 指先を使って物を組み立てるのが得意だ	2	・	1
4 本を読むのが好きだ	2	・	1
5 グループで行動するのが好きだ	2	・	1
6 自分で野菜や果物を栽培したい	2	・	1
7 計画的に物事を進めるタイプだ	2	・	1
8 友だちや家族の役に立つとうれしい	2	・	1
9 情報を集めるのが好きだ	2	・	1
10 人前で発言するのが得意だ	2	・	1
11 工作や物作りが好きだ	2	・	1
12 図書館や本屋によくでかける	2	・	1
13 友だちは多いほど楽しい	2	・	1
14 動物の飼育や植物の世話が好きだ	2	・	1
15 何かを始めるときは計画を立ててから取り組む	2	・	1
16 人が喜んでいるのを見ると自分もうれしくなる	2	・	1
17 流行に関する情報は雑誌やインターネットでチェックする	2	・	1
18 場の雰囲気盛り上げるのが得意だ	2	・	1
19 手先が器用だと思う	2	・	1
20 テレビではニュースや報道番組をよく見る	2	・	1
21 グループで作業するような授業は楽しい	2	・	1
22 牧場や農場で働いてみたい	2	・	1
23 慎重な性格だと思う	2	・	1
24 立場の弱い人には親切にすべきだと思う	2	・	1
25 パソコンを使うのが得意だ	2	・	1
26 新しい友だちをつくるのは得意だ	2	・	1
27 物を作り出すような仕事をしたい	2	・	1
28 世の中で起きている事件や出来事に関心がある	2	・	1
29 たくさんの人数で遊べるゲームが好きだ	2	・	1

30	自然公園やアスレチックに行くのが好きだ	2	・	1
31	いったん始めたことは忍耐強くやりとげる方だ	2	・	1
32	困っている人をみるとつい声をかけたくなる	2	・	1
33	将来はいろいろな情報を集める仕事をしたい	2	・	1
34	人より目立つことが好きだ	2	・	1
35	大工道具やドライバーなどの道具類はうまく使える	2	・	1
36	税金や制度など社会の仕組みについてよく理解したい	2	・	1
37	人と話をするのは楽しい	2	・	1
38	星や動植物をじっくり観察するのが好きだ	2	・	1
39	自分の持ち物や道具の手入れはきちんとしている	2	・	1
40	人に感謝されるとうれしい	2	・	1
41	何かを調べたりまとめるような授業は楽しい	2	・	1
42	自分から人に話しかけることが多い	2	・	1
43	机や本棚を自分で作ってみたい	2	・	1
44	わからないことがあるとインターネットや本で調べる	2	・	1
45	友人とのおしゃべりやメールのやりとりが好きだ	2	・	1
46	山や海に出かけるのが好きだ	2	・	1
47	何か失敗したらまずその原因を考える	2	・	1
48	世の中の役に立つことをしたい	2	・	1
49	何かを説明するときにはわかりやすく情報を整理する	2	・	1
50	人からよく元気な人だと思われる	2	・	1
51	美術や図工の時間は楽しい	2	・	1
52	外国の人の意見や考え方について知りたい	2	・	1
53	休みの日に家で一人で過ごすのはつまらない	2	・	1
54	外国に旅行するなら自然の豊かな国がいい	2	・	1
55	必要な情報はいつもきちんと整理しておきたい	2	・	1
56	他の人の世話をするのが好きだ	2	・	1
57	新聞や雑誌にはよく目を通す	2	・	1
58	劇をやるなら舞台にあがって演技をしたい	2	・	1
59	こわれた物があると何とか直せないか試してみる	2	・	1
60	遠い国の人々の暮らしに興味がある	2	・	1
61	人とすぐに仲良くなれる	2	・	1
62	博物館や科学館に行くのが好きだ	2	・	1
63	落ち着いていると言われる	2	・	1
64	いろいろな人と関わられるような仕事をしたい	2	・	1

3 職務遂行の自信度(54項目)

次に、いろいろな「仕事の内容」について書かれた文章があります。あなたはその仕事を将来やるとしたら、うまくできる自信がありますか？「自信がある」、「どちらともいえない」、「自信がない」のどれかで答えてください。

	自信が ある		どちら ともい えない		自信が ない
1 部品を組み立てて機械を作る	3	・	2	・	1
2 古い地層から化石や骨を集め、恐竜や昔の生き物の生活を調べる	3	・	2	・	1
3 家具や照明など、部屋のインテリアのデザインをする	3	・	2	・	1
4 保育園で乳幼児の世話をしたり、いっしょに遊んだりする	3	・	2	・	1
5 自分の店を経営する	3	・	2	・	1
6 文字や数字を、コンピュータに入力する	3	・	2	・	1
7 火薬を使って花火を作り、安全に打ち上げる	3	・	2	・	1
8 環境をよくするために大気や水の汚れを測定し、分析する	3	・	2	・	1
9 小説を書き、出版したり、雑誌に載せたりする	3	・	2	・	1
10 客の状態に合わせて、指圧やマッサージなどを行う	3	・	2	・	1
11 テレビやラジオの番組を企画し、番組づくりを取り仕切る	3	・	2	・	1
12 帳簿や伝票に書かれた金額の計算をする	3	・	2	・	1
13 木材を加工し、組み立てて、家を建てる	3	・	2	・	1
14 農業試験場で、農作物の品種改良の研究をする	3	・	2	・	1
15 人物や風景、物の写真をとり、雑誌やポスターに発表する	3	・	2	・	1
16 ツアー旅行に同行し、宿や観光の手配など参加者の世話をする	3	・	2	・	1
17 客を集めるため、広告や催し物などを企画する	3	・	2	・	1
18 文字や数字を、書類に正確に記入する	3	・	2	・	1
19 火事の現場に駆けつけ、逃げ遅れた人を助けたり、消火活動を行う	3	・	2	・	1
20 海水の成分や海流について調査研究する	3	・	2	・	1
21 テレビドラマや映画のシナリオを書く	3	・	2	・	1
22 ホテルで、宿泊客の受付や、案内などのサービスをする	3	・	2	・	1
23 新しい組織を作ってリーダーになる	3	・	2	・	1
24 銀行で現金を支払ったり、受け取ったりする	3	・	2	・	1

25	工事現場で、ブルドーザーやクレーンを運転する	3	・	2	・	1
26	新しい理論を考えて、調査や実験でそれを確かめる	3	・	2	・	1
27	マンガをかいて雑誌にのせたり、コミック本を出版する	3	・	2	・	1
28	患者の体温や血圧を測ったり、入院患者の世話をする	3	・	2	・	1
29	世の中のできごとをいち早く取材し、新聞にその記事を書く	3	・	2	・	1
30	依頼に来た客に代わって、役所へ出す書類を作成する	3	・	2	・	1
31	トラックを運転して貨物を運ぶ	3	・	2	・	1
32	病原体を発見するための実験や研究をする	3	・	2	・	1
33	インターネットのホームページのデザインをする	3	・	2	・	1
34	家庭を訪問して、お年寄りや身体の不自由な人の世話をする	3	・	2	・	1
35	ニュースを読んだり、テレビやラジオの番組の司会をする	3	・	2	・	1
36	ワープロやパソコンを使って、書類などを清書する	3	・	2	・	1
37	自動車のエンジンやブレーキを調べて、修理する	3	・	2	・	1
38	新しい薬を開発する	3	・	2	・	1
39	曲を作ったり、編曲したりする	3	・	2	・	1
40	病院で、患者の治療や病気の予防の仕事をする	3	・	2	・	1
41	社長として、会社の経営の仕事にあたる	3	・	2	・	1
42	コンピュータを使って、複雑な計算をする	3	・	2	・	1
43	飛行機が安全に飛べるように、点検や整備をする	3	・	2	・	1
44	博物館などで、歴史・民俗などの資料を集め、研究する	3	・	2	・	1
45	洋服やアクセサリーのデザインをする	3	・	2	・	1
46	悩みをもつ子どもやその家族からの相談にのり、援助する	3	・	2	・	1
47	店長として、商品の仕入れや販売方法を工夫し、売上げを伸ばす	3	・	2	・	1
48	会社で書類のコピーをとったり、電話の取次ぎをする	3	・	2	・	1
49	船に乗って、魚や貝などの漁をする	3	・	2	・	1
50	大学や研究所で、科学の研究をする	3	・	2	・	1
51	雑誌やパンフレットなどにイラストをかく	3	・	2	・	1
52	飛行機の中で、乗客にサービスをする	3	・	2	・	1
53	流行しそうな商品を仕入れ、売出しの方法を考える	3	・	2	・	1
54	従業員の毎月の給料を計算する	3	・	2	・	1

4 働くことに関する考え方、基本的態度(48項目)

次の項目にあなたはどの程度あてはまりますか。「あてはまる」～「あてはまらない」のうち、いずれか1つを選んでください。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1 職業を通して、自分を向上させていきたい	5	4	3	2	1
2 世の中のためになるような職業を選びたい	5	4	3	2	1
3 仕事を選ぶ時に大事なのは自分がやりたいと思えるかどうかだ	5	4	3	2	1
4 仕事を選ぶ時、社会的な地位の高さは重要な条件だ	5	4	3	2	1
5 高い給料の仕事に就いて、よい生活を送りたい	5	4	3	2	1
6 毎日、仕事だけに追われるような人生は送りたい	5	4	3	2	1
7 一生懸命に仕事をして少しでもよい成果をおさめたい	5	4	3	2	1
8 社会で必要とされていることをしたい	5	4	3	2	1
9 人が決めた進路や仕事に進んでもつまらないと思う	5	4	3	2	1
10 世間的に知名度の高い会社で働けるとよい	5	4	3	2	1
11 給料が低い仕事には興味がない	5	4	3	2	1
12 仕事とプライベートは、はっきり区別したい	5	4	3	2	1
13 自分の才能を少しでも伸ばせる仕事に就きたい	5	4	3	2	1
14 困っている人たちのために力を尽くしたい	5	4	3	2	1
15 自分でよく考えて進路や仕事を選びたい	5	4	3	2	1
16 世間の注目を集めるような成果をあげたい	5	4	3	2	1
17 給料が高いことは仕事の意欲を高めると思う	5	4	3	2	1
18 働くときには仕事と私生活のバランスを大切にしたい	5	4	3	2	1
19 人生を通してずっと夢中になれるような仕事を持ちたい	5	4	3	2	1
20 地域や社会のために自分の力を生かしたい	5	4	3	2	1
21 仕事を選ぶ時には自分の能力が生かせるかどうかを重視する	5	4	3	2	1
22 会社に入ったら高い地位をめざしたい	5	4	3	2	1
23 経済的な成功は仕事をする上での大きな目標である	5	4	3	2	1
24 仕事や作業が進んでいなくても家では仕事をしたくない	5	4	3	2	1

25	自分の将来の目標につながるような仕事がしたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
26	より良い社会にしていくための仕事をしたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
27	職業選択のときに一番大事なのは自分の意志だ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
28	社会的地位の高い仕事にあこがれる	5	・	4	・	3	・	2	・	1
29	仕事を選ぶ際の重要な基準は、給料の高さである	5	・	4	・	3	・	2	・	1
30	毎日決まった時刻に帰れるような働き方をしたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
31	仕事を通じた自己実現は自分にとって大事なことだ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
32	何らかの形で人を支えたり、助けるような仕事がしたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
33	自分の進路は今までずっと自分の考えで決めてきた	5	・	4	・	3	・	2	・	1
34	仕事の世界で成功して有名になりたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
35	自分の理想とする生活を送るためには高収入は不可欠だ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
36	自分の時間がとれないような働き方はしたくない	5	・	4	・	3	・	2	・	1
37	仕事を通して成長できるような働き方が理想だ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
38	仕事を通してなにか社会貢献ができるとよい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
39	周りの人が何とんでも自分が選んだ仕事に就きたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
40	仕事でがんばって他の人より出世したい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
41	自分がやりたい仕事でも収入が少ない場合にはためらいを感じる	5	・	4	・	3	・	2	・	1
42	どんなに忙しくても休日に仕事の予定を入れることは避けたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
43	やりがいを感じられる仕事に就くことが理想だ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
44	公共の福祉につながるような仕事や活動をしてみたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
45	やりたい仕事や、やりたくない仕事ははっきりしている	5	・	4	・	3	・	2	・	1
46	仕事で高い評価を受けて世間に認められたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
47	お金をかせぐことや貯めることは自分にとって大切なことだ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
48	仕事だけの生活は味気ない	5	・	4	・	3	・	2	・	1

5 基礎的性格特性・生活特性（24項目）・自尊感情尺度（10項目）

次の項目にあなたはどの程度あてはまりますか。「あてはまる」～「あてはまらない」のうち、いずれか1つを選んでください。

	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	あてはまらない
1	5	4	3	2	1
2	5	4	3	2	1
3	5	4	3	2	1
4	5	4	3	2	1
5	5	4	3	2	1
6	5	4	3	2	1
7	5	4	3	2	1
8	5	4	3	2	1
9	5	4	3	2	1
10	5	4	3	2	1
11	5	4	3	2	1
12	5	4	3	2	1
13	5	4	3	2	1
14	5	4	3	2	1
15	5	4	3	2	1
16	5	4	3	2	1
17	5	4	3	2	1
18	5	4	3	2	1
19	5	4	3	2	1
20	5	4	3	2	1
21	5	4	3	2	1
22	5	4	3	2	1
23	5	4	3	2	1
24	5	4	3	2	1

25	自分に対して肯定的である	5	・	4	・	3	・	2	・	1
26	何かにつけて、自分は役に立たない人間だと思う	5	・	4	・	3	・	2	・	1
27	既にやり方が決まっても、良い方法が見つければ変更を考える	5	・	4	・	3	・	2	・	1
28	嫌なことを経験しても、淡々と受け流せる方だ	5	・	4	・	3	・	2	・	1
29	連絡をもらったら、すぐに返事をする方がよい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
30	だいたいにおいて、自分に満足している	5	・	4	・	3	・	2	・	1
31	自分の意見や考えを他の人に積極的に伝えたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1
32	自分の過去の失敗をあとになってから悔やむことは少ない	5	・	4	・	3	・	2	・	1
33	人との約束を急にキャンセルすることは少ない	5	・	4	・	3	・	2	・	1
34	もっと自分自身を尊敬できるようになりたい	5	・	4	・	3	・	2	・	1

6 基礎的生活態度（10項目）

以下の1～10のことがらについて、あなたは普段どのくらいできていると思いますか？「いつもできている」「だいたいできている」「できていない」のうち、いずれか1つを選んでください。

		い つ も で き て い る	・	だ い た い で き て い る	・	で き て い な い
1	普段から、身の回りの整理整頓をしている	3	・	2	・	1
2	自分の健康に気を配っている	3	・	2	・	1
3	普段の自分の食事は栄養のバランスがとれていると思う	3	・	2	・	1
4	身だしなみをきちんと整えている	3	・	2	・	1
5	普段、睡眠や食事の時間に関して、規則正しい生活をしている	3	・	2	・	1
6	数年先の目標に向けて現在の行動計画を立てている	3	・	2	・	1
7	大事なことには集中して取り組める	3	・	2	・	1
8	やるべきことを先延ばしにしない	3	・	2	・	1
9	将来の生活設計を立てている	3	・	2	・	1
10	忘れ物をしないよう外出前に確認している	3	・	2	・	1

7 価値観評価 (25項目)

仕事を選ぶときに考える条件として、あなたは各項目の内容をどの程度重視しますか。「非常に重視する」～「全く重視しない」のうち、いずれか一つを選んでください。

	非常に重視する	重視する	どちらともいえない	重視しない	全く重視しない
1 達成感 (ある一定の仕事をやり返げたときに充実感がある)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
2 仕事の内容 (仕事の内容は自分がやりたいことであり、興味をもって取り組めるものである)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
3 社会への奉仕や貢献 (自己の営利を目的とはせず、社会へ奉仕し、また貢献することができる)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
4 勤務地の限定 (転居をとまなう転勤が少ない)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
5 昼間勤務かつ交替制のない勤務 (昼間の勤務で、交替制がない)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
6 休日や休暇のとりやすさ (週休二日制で、年次有給休暇がとりやすい)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
7 介護休暇や育児休暇制度の充実 (手厚い介護休暇や育児休暇が制度化されていて、それぞれの制度をとりやすい環境である)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
8 職場の物理的・化学的環境 (職場において、温熱湿度、におい、空間など快適な環境が整っている)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
9 仕事の成果や実績を反映した処遇の決め方 (年功序列ではなく、個人の成果・実績に応じて処遇を決める(給料やポストなど))	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
10 取り扱いや処遇の公平さ (取り扱いや処遇において、学歴、性別、年齢等で差がない)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1
11 職場の人間関係 (職場において、上役や同僚、部下とよい関係を保つ)	5	・ 4	・ 3	・ 2	・ 1

12	免許や資格取得の必要性・可能性 (仕事を遂行するにあたり、取得した資格や今までの経験が重視され、また仕事を通じて資格を取得することができる)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
13	学問と仕事の関連 (学校で学んだことが仕事に直接結びつく)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
14	現在までの職歴との関連 (今までの経歴やキャリアが活かせる)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
15	趣味・特技との関連 (趣味や特技が活かせる)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
16	独立や自営の可能性 (取得した資格を駆使してスペシャリストとなり、また独立して事業を始めることができる)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
17	仕事の継続性 (仕事が会社の都合で変わるのではなく、一つの仕事に長期にわたり携わる)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
18	企業ブランド (企業の知名度が高く、そこに所属していることにより高い社会的地位を得ることができる)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
19	企業規模 (企業の規模が大きく、関連会社が複数ある)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
20	賃金 (賃金が高い)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
21	福利厚生等の充実 (住宅補助、健康管理等の福利厚生関係の制度が充実している)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
22	社会保障制度の充実 (公的年金・企業年金等の制度が充実している)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
23	企業の将来性 (技術力があり、環境問題に取り組むなど将来的に発展性の高い企業である)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
24	雇用の安定性 (長期に雇用が保証されている)	5	・	4	・	3	・	2	・	1
25	産業・業界の発展性 (将来の発展性が見込まれる業界である)	5	・	4	・	3	・	2	・	1

8 能力評価 (54 項目)

次の各項目について、あなたはどの程度自信がありますか？「自信がある」～「自信がない」のうち、いずれか一つを選んでください。

	自信がある	まあ自信がある	どちらともいえない	あまり自信がない	自信がない
1 自分の意見や考えを説明する	5	4	3	2	1
2 人に品物を売る	5	4	3	2	1
3 グループのリーダーになる	5	4	3	2	1
4 人に説明する	5	4	3	2	1
5 指図する	5	4	3	2	1
6 人を指導する	5	4	3	2	1
7 大勢の人の前で話したり演説する	5	4	3	2	1
8 交渉する	5	4	3	2	1
9 人を説得する	5	4	3	2	1
10 監督する	5	4	3	2	1
11 人の世話をする	5	4	3	2	1
12 人を援助する	5	4	3	2	1
13 共同作業をする	5	4	3	2	1
14 相手の話を理解する	5	4	3	2	1
15 相手の気持を理解する	5	4	3	2	1
16 計画を立てる	5	4	3	2	1
17 計画を行動に移す	5	4	3	2	1
18 イベントを企画する	5	4	3	2	1
19 旅行のプランを立てる	5	4	3	2	1
20 旅行の手配をする	5	4	3	2	1
21 パーティや宴会の幹事をする	5	4	3	2	1
22 素早く反応する	5	4	3	2	1
23 戸外で作業をする	5	4	3	2	1
24 スポーツをする	5	4	3	2	1

25	力仕事をする	5	・	4	・	3	・	2	・	1
26	健康	5	・	4	・	3	・	2	・	1
27	体力	5	・	4	・	3	・	2	・	1
28	持久力	5	・	4	・	3	・	2	・	1
29	文章を書く	5	・	4	・	3	・	2	・	1
30	文章を読む	5	・	4	・	3	・	2	・	1
31	文章を理解する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
32	長い文章の要約を作る	5	・	4	・	3	・	2	・	1
33	情報を集める	5	・	4	・	3	・	2	・	1
34	情報を分析する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
35	調査する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
36	観察する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
37	算数や数学の応用問題を解く	5	・	4	・	3	・	2	・	1
38	計算する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
39	家計簿や帳簿をつける	5	・	4	・	3	・	2	・	1
40	簡単な暗算を行う	5	・	4	・	3	・	2	・	1
41	数字を記憶する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
42	機械や道具、工具を操作したり扱う	5	・	4	・	3	・	2	・	1
43	ものを分解したり組み立てる	5	・	4	・	3	・	2	・	1
44	理科や科学の実験を行う	5	・	4	・	3	・	2	・	1
45	プラモデルを作る	5	・	4	・	3	・	2	・	1
46	道具を使ってものを作る	5	・	4	・	3	・	2	・	1
47	ものを修理、修繕する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
48	イラストやマンガをかく	5	・	4	・	3	・	2	・	1
49	作曲する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
50	詩を書く	5	・	4	・	3	・	2	・	1
51	美術品を鑑賞したり評価する	5	・	4	・	3	・	2	・	1
52	小説やお話を書く	5	・	4	・	3	・	2	・	1
53	絵をかく	5	・	4	・	3	・	2	・	1
54	ものをデザインする	5	・	4	・	3	・	2	・	1

以上で質問は終わりです。ありがとうございました。

JILPT 資料シリーズ No.251

職業レディネス・テストの改訂に関する研究Ⅱ

—高等教育課程在学者の進路選択に関連した特性の理解—

発行年月日 2022年3月31日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2022 JILPT Printed in Japan

* 資料シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<https://www.jil.go.jp/>)